

的 場 遺 跡

1993

岐 阜 県

萩 原 町 教 育 委 員 会

的 場 遺 跡

1993

岐 阜 縣

萩 原 町 教 育 委 員 会

序　　言

ひだ萩原町は、清流飛驒川（益田川）に沿って開けた町で、四季を色どる美しい山々に囲まれた、南飛驒の中心的な地域である。

この町の歴史は古く先史時代より展開されていたことが、町内各所の遺跡によって知られる。

近年における、情報化、国際化、技術革新の余波は例外なくこの町にも波及している現状にあって、先人が遺した文化遺産である埋蔵文化財もその中で保護と調和の接点に対処しなければならない。

今回、岐阜県が行う県営中山間地域農村活性化総合整備事業（羽根地区は場整備工事）のためやむなく的場遺跡の現状変更をせざるを得なくなった。萩原町教育委員会も、県文化課、その他関係方面と協議を重ね、事前調査を実施することに決定した。

調査に当って大江　傘氏を調査主任として、発掘調査団を設けて、平成3年10月より平成5年9月にかけて発掘を実施したのである。

調査によって縄文時代の住居址をはじめ、多くの遺構と出土遺物約5万点を得たのである。

今回報告書には、諸般の制約もあり、その資料を網羅することは出来ないが、遺跡の性格を知り得るもののが述べられている。刊行に当って、大江　傘・竹原　淑美・二村　有紀の諸氏をはじめ、調査を通じ本報告書発行に至るまでの多くの関係諸氏に対して深くお礼を申し上げます。

最後に、この成果が研究者・町民各位の文化財の理解と研究の興隆に役立つことを念じ上げます。

平成5年3月

萩原町教育委員会

例　　言

1. 本報告書は岐阜県が行なう県當中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う、羽根地区は場整備工事にかかわる、岐阜県益田郡萩原町羽根の場地内に所在する的場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、萩原町教育委員会が主体となり、平成3年10月より平成5年10月まで実施した。
3. 発掘調査の実施にあたって下記のような調査団を編成した。別表のとおりである。
4. 本報告書の遺物整理基礎作業は、竹原淑美を中心として桂川富美恵、二村洋子、桂川美津恵、二村みよ、二村有紀によって行った。土器復元、遺物写真是大江幸が行なった。
5. 本報告書の執筆は、第2章1「発掘調査に至るまでの経過」を教育委員会、その他は主として大江幸が行なった。
実測図中、石器については二村有紀、土器については大江幸が主として行った。
6. 本書に掲載した図版の縮尺については、住居址1/80、炉1/40、土器実測図・拓本1/3、小形石器1/2、大型石器については1/3、石製品1/3にそれぞれ統一した、各図にスケールが添付してある。写真については縮尺不同である。
7. 本調査に当たって、三重大学教授、八賀晋先生に現場指導を賜った。その他に飛騨考古学会の諸氏に種々お教を賜った。また、その他多くの諸氏にご協力を賜ったことを記して感謝申し上げる。
8. 本報告書では紙面の都合で細部に亘ってすることが出来なかった分については後日報告する。

調査団

团长 教育長 桂川 孟始（～平成3年）、田口 恒司（平成4年～）
主任調査員 日本考古学協会員 大江 命
調査員 飛驒考古学会員 竹原 淑美
補助調査員 白川 良治
〃 熊崎欽之助
〃 青木 森一
事務局 教育委員会職員 榎原慶彦 二村守雄 小林 茂 青木進一
中川直哉
農務課職員 二村誠治 今井勝弘 中島義彦 都竹 卓

発掘調査に直接、間接に関係のあった委員、および関係者

教育委員長 熊崎英男 関崎伸一郎
文化財審議会委員 大附建司 大前久八郎 桂川純次 桂川敬造 橋 宣忠
町議会議員 桂川権衛 農事改良組合長 熊崎淳一 桂川修三
地権者 都築千尋 熊崎享一郎 熊崎幸夫 大前 均 二村巳明 二村 強 桂川忠敷
二村 強 桂川忠敬 二村 姦 桂川幾郎 桂川順夫 二村米次 二村公雄
発掘作業協力者
大前保太郎 熊崎藤一 熊崎茂雄 桂川順史 今井 清 井戸惣一 谷本重徳
森 時一 烏田一男 守永和人 伊藤 隆 二村みよ 熊崎しづへ 二村真由美
桂川富美恵 都竹たね 中川きよ 桂川澄江 二村ぬい 桂川美津江 二村洋子
山本きみ 桂川裕紀子 桂川豊子 二村和美 二村くに 熊崎みどり 桂川いまよ
南中学教諭及び生徒 高校生18名

目 次

序 言

例 言

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 1

　　第1節 遺跡の位置と地形 1

　　第2節 遺跡周辺の考古学的環境 2

第2章 発掘調査経過 7

　　第1節 発掘に至るまでの経過 7

　　第2節 発掘調査経過 7

第3章 層 序 10

　　第1節 基本的層序 10

第4章 発見された遺構と出土遺物 17

　　第1節 縄文時代の住居址（第1地点・第2地点） 17

　　第2節 縄文時代の遺構と遺物（中間地点） 120

　　第3節 縄文時代の遺物（第3地点） 135

　　第4節 縄文時代の堅穴状遺構 151

　　第5節 土坑・ビット 168

第5章 占墳時代より歴史時代にかける遺構と遺物 178

　　第1節 古代の遺構 178

　　第2節 その他の地点出土遺物 186

　　第3節 中世以降の遺構及び遺物 189

結 語

図 版

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置と地形

今回の発掘調査した的場遺跡は、岐阜県益田郡萩原町羽根上段1451番地の1他、通称「的場」に所在し、岐阜県益田総合庁舎の北西約1kmの地点に位置する。

萩原町は、岐阜県の北部に当たる飛騨高地の中では南飛騨に位置する。萩原町の中心を二分する様に飛騨川が北から南に流れ、東部には御前山を主峰とした連峰が走り、西部には川上岳を主峰とした山々が連なり、二つの稜線に挟まれた細長い町である。

遺跡の所在する地点は御嶽(3,063m)の西部に水源を持つ飛騨川上流の(益田川)右岸の羽根段丘にある。この羽根段丘は、高位と低位となり、低位段丘は現在の河床から5m、高位段丘は15mほどの高さにあり、遺跡は高位段丘の東南の地域に所在する。

高位段丘の微地形についてみると、川上岳を主峰とする連峰の中に森ヶ洞谷があり、この南東の段丘上(高位段丘)に所在している。この段丘は山麓部に向かって僅かに低くなっている。

この低地の部分は、現在、水田としての土地利用がなされており、段丘の東部は微高し、その部分は一部を除いて畑地として利用されている。この微高する部分が遺跡と推定される。この段丘の東面は段丘崖をなしてて、この部分で高位と低位との比高差は約10mである。

遺跡の西部に当たる山麓部には涌水が各所に見られる。同じ山麓部に宮谷神明宮神社があり、神社境内の参道の両側に樹齢千年と推定される夫婦杉がたち並ぶほか古木の杉が多く見られる。また本遺跡の存在する高位段丘の西南部の地点には古刹の薬師堂がある。遺跡からは対岸の市街をはじめ、北部、南部を一望することが出来る。



插図1 位置図



挿図2 遺跡の位置

第2節 遺跡周辺の考古学的環境

萩原町を中心とした周辺の考古学的環境について見ると、町内すでに発掘調査が実施された遺跡としては、桜洞神田遺跡、横倉遺跡、沖田遺跡、宮田遺跡などが挙げられる。これらの遺跡は全て縄文時代の遺物が主体である。また今回調査した対岸上の筒井平遺跡では、銅鐸が2個出土している。これ以外に多くの遺跡が周知されている。それらの遺跡は次のとおりである。

遺跡名	種別	所在地	時代
のじやら遺跡	散布地	益田郡萩原町 山の口字上之田	弥生
中切遺跡	散布地	益田郡萩原町 山の口字中切	縄文
平洞遺跡	散布地	益田郡萩原町 山の口字平畠	縄文
馬頭遺跡	散布地	益田郡萩原町 尾崎字漆生馬頭	縄文
小瀬横平遺跡	散布地	益田郡萩原町 尾崎字小瀬	弥生
杉谷平遺跡	散布地	益田郡萩原町 尾崎字杉谷平	縄文
四美辻平遺跡	散布地	益田郡萩原町 尾崎字四美辻平	縄文・弥生

遺跡名	種別	所在地	時代
四美江平遺跡	散布地	益田郡萩原町 尾崎字四美江平	縄文
湯屋遺跡	散布地	益田郡萩原町 四美字湯屋	弥生
西高遺跡	散布地	益田郡萩原町 四美字西高	縄文
くるみ沢遺跡	古墓	益田郡萩原町 四美字くるみ沢	室町
笹平遺跡	祭祀遺跡	益田郡萩原町 四美字笹平	室町
王門遺跡	寺院跡	益田郡萩原町 宮田	室町
宮田遺跡	散布地	益田郡萩原町 宮田	縄文
井戸城跡	城跡	益田郡萩原町 宮田	室町
王御堂寺跡	寺院跡	益田郡萩原町 宮田	室町
フギリ遺跡	散布地	益田郡萩原町 大ヶ洞	縄文・弥生
今井城跡	城跡	益田郡萩原町 奥田洞	鎌倉
御座田遺跡	散布地	益田郡萩原町 奥田洞字御座田	弥生
弾正塚	古墓	益田郡萩原町 奥田洞	室町
柄ノ木平遺跡	散布地	益田郡萩原町 奥田洞字柄ノ木平	弥生
洞田遺跡	散布地	益田郡萩原町 奥田洞字洞田	弥生
長洞遺跡	散布地	益田郡萩原町 奥田洞長洞	弥生
森畑遺跡	散布地	益田郡萩原町 野上字森畑	縄文・弥生
林垣内遺跡	散布地	益田郡萩原町 野上字林垣内	弥生
竹の上遺跡	散布地	益田郡萩原町 野上字竹の上	弥生
八幡平遺跡	散布地	益田郡萩原町 野上字牛首	縄文
白王神社経塚	経塚	益田郡萩原町 野上	平安
上呂遺跡	散布地	益田郡萩原町 上呂	縄文
筒井平遺跡	銅鐸出土地	益田郡萩原町 上呂字中ノ畑	弥生
正福寺跡	寺院跡	益田郡萩原町 羽根	室町
桜洞城跡	城跡	益田郡萩原町 桜洞	室町
桜谷城跡	城跡	益田郡萩原町 桜洞	室町
向洞遺跡	散布地	益田郡萩原町 桜洞字向洞	縄文・弥生
為坪城跡	城跡	益田郡萩原町 桜洞	室町
下垣内田代遺跡	散布地	益田郡萩原町 古閑字下垣内	縄文

4 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

遺 跡 名	種 別	所 在 地	時 代
宮垣内遺跡	散 布 地	益田郡萩原町 古関字宮垣内	縄文
檜尾山城跡	城 跡	益田郡萩原町 古関	室町
諏訪城跡	城 跡	益田郡萩原町 萩原	室町
石原遺跡	散 布 地	益田郡萩原町 上林	縄文
竹ノ上遺跡	散 布 地	益田郡萩原町 上村字竹ノ上	縄文
三木良頼墓	古 墓	益田郡萩原町 上村	江戸
花池遺跡	散 布 地	益田郡萩原町 花池	縄文
えの垣内遺跡	散 布 地	益田郡萩原町 跡津字えの垣内	縄文
禪昌寺平遺跡	散 布 地	益田郡萩原町 中呂	縄文
禪昌寺遺跡	住 居 地	益田郡萩原町 中呂	縄文
大木之下遺跡	散 布 地	益田郡萩原町 西上田字木下の下	縄文
久米遺跡	散 布 地	益田郡萩原町 西上田字久未	縄文
神屋垣内遺跡	散 布 地	益田郡萩原町 西上田字神屋垣内	縄文
定清遺跡	散 布 地	益田郡萩原町 西上田字定清	縄文
釜ヶ野遺跡	散 布 地	益田郡萩原町 西上田字釜ヶ野	縄文

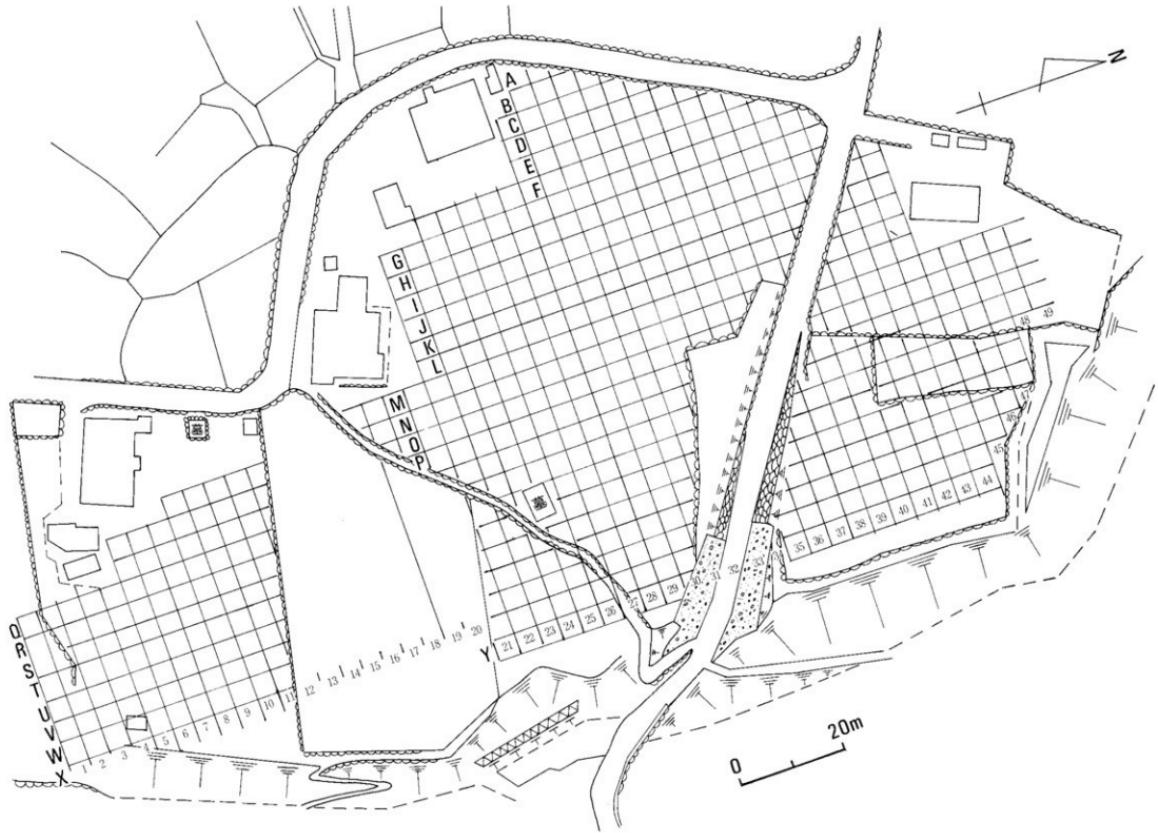


図3 調査地点及び周辺の地形

第2章 発掘調査経過

第1節 発掘に至るまでの経過

的場遺跡の所在する地域で岐阜県が行う県営中山間地域農村活性化総合整備事業（羽根地区圃場整備工事）が計画された。それに伴い、教育委員会では埋蔵文化財の有無の件での協議があり、それによって事前発掘調査に当たる前に、遺跡の範囲の確認の調査を実施した。

平成2年11月6日・7日 県文化課・町川、地元地権者代表・都榮、萩原町教育委員会・教育長、教育課長・青木・中川、地元大江命（日本考古学協会員）、その他作業員を含めて3地点の一部を試掘調査を行った。

平成2年12月25日 圃場整備計画の経過と、この計画事業実施の事前に発掘調査を行う必要について地元の確認を得るために協議。農務課長・中島、教育長・青木、地元地権者11名

平成3年6月5日 発掘調査に係わる県農政部との協議。飛驒土地改良事業所・加藤係長・村山、益田県事務所・吉村課長補佐、農務課・中島、教育課長・小林。

平成3年8月12日 町農務課と教育委員会と地元地権者によって、圃場整備地区的遺跡調査に係わる協議。

平成3年8月28日 遺跡調査に係わる県農政部との協議、飛驒土地改良事業所・県文化課農務課・教育委員会。

平成3年9月11日 大江命氏に調査主任を依頼、調査についての協議を大江宅で行なう。

平成3年10月2日 調査開始時期の確認、調査員・補助調査員その他調査体制について確認。

平成3年10月12日 発掘調査日程と調査について調査員の協議を行なう。大江主任調査員、

竹原・白川調査員、熊崎・青木補助調査員、教育長・青木、協議する。

平成3年10月15日より発掘調査を実施することに決定。

第2節 発掘調査経過

発掘調査は、当初は第1地点・第2地点・第3地点としたが、発掘の都合上、第1地点と第2地点との間を通る黒道によって第2地点と隔てられ、かつ第1地点とは水田によって離されている低地を中間地点として4地区に分けて実施した。

調査の方法はクリッド方式とし、調査区全面に $4 \times 4\text{ m}$ を 1 区とする方眼区画を設定した。主軸は南北方向と東西方向として、東西軸を西側より「A B C ……」、南北の軸を南側より「1, 2, 3 ……」と表記した。(第3図参照)

発掘調査は、平成3年度から平成5年度に亘って実施した。

第1年度の調査

初年度の調査は、地権者（耕作者）との話し合いにより第1地点と第2地点の一部から順次行なうことで開始した。

平成3年10月15日調査を実施する。当日は仮事務所前で、起工式を行なう。教育課長挨拶をはじめ、大江主任調査員の発掘調査についての説明、調査員および関係者の紹介を行った。

第1地点の東部にある竹林の竹根が畠地への進入するのを防ぐために掘られている部分を土捨て場とした。

表土除去作業は、第1地点と、第2地点の桑根の除去作業を併行して開始した。第1地点の S 軸より東部の比較的表土の浅い地点で、表土を除去した段階で住居址（第1号住居）らしき部分が見られた。第2地点の除根作業は小型の重機を使用した。

第2地点より一段と低地となっている部分を中間地点として、表土除去作業を実施した。発掘調査以前に 20m 間隔で打たれた基本杭を中心として、 $4 \times 4\text{ m}$ のグリッド杭を打つ作業を開始する。11月に入り日足が短くなり作業が進まぬが前記の表土除去と除根を行なった。遺構と推定される部分についてマーキングを始めた。第1地点遺構の一部堀下げを始めた。12月に入り遺構の堀下げを行なう実測等の作業を進めた。1～2月は降雪と寒気が激しく発掘が不可能のため、室内作業を行ない、3月2日現場の状況により発掘を開始した。

初年度に確認および検出された住居址は 5 軒で竪穴遺構は 9 基であった。その他土坑10基、ピット等が確認・検出された。

第2年度の調査

第2年度の調査は、平成4年4月から開始した。前年度の調査を継続して実施したのである。第2地点の西側半分は、この年度から表土除去作業を始めた。

表土除去作業と並行して、第1地点の未調査の部分の発掘、平面図および覆土土層、その他の土層図の実測を行った。前年度冬期のため遺構の写真が撮れなかったものを含めて、清掃の上写真撮影を行なった。

5月20日第1地点の A 区に、縄文早期の竪穴状遺構が確認された。この遺構は、広義の竪穴住居址に含まれるものかも知れないが、形状がやや異なりここでは、竪穴状遺構として取扱うこととした。

第1号住居址の南東、南西の部分から多数のチップの検出が見られた。第1地点の他に7月から中間地点の発掘を始めた。除去した上の置き場の確保に囲り、中間地点の東部の一部を土置き場とすることにした。第1号住居址の覆土から、復元可能な土器が数点出土した。

7月・8月は、第1地点の前年度確認された住居址の精査を始め、その他の遺構の実測作業と並行して、中間地点の表土除去、第2地点の未除去部分の表土除去作業を重点として行った。9月は、前述の作業に引き続き、第2地点のカ区・キ区・ク区・ケ区・コ区の遺構確認と実測作業に移った。

10月～12月は、第2地点を中心として遺構の検出及び確認作業を実施した。12月26日より越冬のため、遺構の保存作業を行なった。

平成5年1月より室内作業を実施した。図面整理、置物整理、遺物水洗いなどの作業を行なった。

1月12日より、天候もよいので室内作業と平行し第3地点の表土除去作業を実施した。3月に入り、第2地点の調査も再開した。

この年度の検出は住居址26基、また竪穴遺構は6基、その他土坑は30基とピット等である。

第3年度の調査

この年度の調査は、前年度に継続して4月1日より開始した。キ区で検出された配石遺構の撮影より着手した。第2地点のカ区、キ区の遺構の確認作業を実施した。プランの確認されたものについて発掘を始めた。また同地点サ区のプラン確認作業も実施した。第3地点の表土除去作業を、第2地点の上記の作業と並行して実施した。5月も引き続き第2地点・第3地点の調査を実施した。6月は主として第2地点の遺構検出と実測を中心に実施したほか、第3地点の一部の表土除去を行った。

6月22日八賀先生が来訪され、近世墓を始め、その他について御指導とご協力を賜った。6月～7月にかけて雨の日が多く作業の進行状態が悪かった。7月31日午後1時から現場説明会を実施した。

7～9月にかけて第2地点の確認されながら未検出であった遺構の検出、その他実測作業などを主として行なうとともに、中間地点の堀下げも行なった。また第3地点の西方の畑地に大正の頃まで使用されていた井戸の実測を行った。底部は上部からの捨石によって基底までは調査できなかった。現場の調査は9月末まで一応終了したが、一部中間地点などは11月初旬まで必要に応じて現場調査を行った。10月以降は、遺物、図面などの整理作業を実施した。

第3章 層序

第1節 基本的層序

的場遺跡が立地する段丘は、飛驒川（益田川）の右岸に発達した高位段丘、低位段丘よりなる羽根段丘と呼ばれる上位段丘に位置する。

下位段丘は、現在の飛驒川の河床から約5m程高位であり、また上位段丘は約15m程高位である。上位段丘と下位段丘の接続部は約10mの段丘崖が見られる。

遺跡の立地する段丘は、畠地、水田その他によって古くから現在に至るまで削平、機具による抜堀などによって層序も変遷を来たしている。

本遺跡の立地する段丘は、飛驒川の堆積による円礫・砂礫層による沖積世堆積層によって形成されている。従って地山は、円礫を含む黄色砂礫層と、堆積性ローム層が見られる。

微地形として中洲的な地点もあり、従って堆積物が砂礫層のみの処、また黄色砂質土が厚く覆う地形の部分が見られる。これ等堆積の状態によって層序の土質の度合も異なりその土色も微妙な変化を示し測一的でなく、従ってその上層堆積の厚さも同一ではない。

地山上部は基本的には、3つの層位に分けることができる。上部から、第I層：表土、耕作土、第II層：腐植に富む土壤で全般的に黒味が強い、第III層：腐植に富む土壤で全般的に砂質土である。

以上のように基本的には三層に大別される。以下、菱田量（パレオ、ラボ）によって、本遺跡の堆積物の記載を基にして各地点の土質について記述する。

〔第1地点覆土〕

第I層：表土層

第II層：シルト以下の粒子が主体で極細粒砂を含む腐植に富む土壤である。中期及び前期の遺物が出土した。

第III層：砂質、粘土質を含む黒褐色土層である。早期の遺物。

〔第2地点覆土〕

- 第I層：黒褐色、腐植にやや富む土壤で、現生植物根がわずかに見られる。
- 第II層：黒色（10YR2/1～10YR1.7/1）を呈する。
- 第III層：黒色（10YR2/1～1.7/1）を呈する腐植に富む土壤で、ややねばり気がある。
塊状になっている部分がみられる。径約7mmの礫が含まれる。

〔中間地点覆土〕

- 第I層：黒色（10YR2/1）を呈し、腐植に富む土壤で、ややねばり気があり塊状になっている部分がある。現生植物根が少量含まれる。
- 第IIa層：黒色（7.5YR1.7/1）を呈し、腐植に富む土壤で、I層よりも黒味が強く暗色である。ややねばり気がある。ボソボソして粒状から團粒状の部分も見られる。
- 第IIb層：黒色（7.5YR1.7/1）を呈し、腐植に富む土壤である。IIa層よりさらに黒みが強く、ややねばり気がある。粒径0.2mm前後の鉱物や風化粒子が目立つ。
- 第IIc層：黒色（10YR1.7/1）で腐植に富むが、褐色がかった色調を呈する土壤で、ややねばり気がある。IIb層より鉱物や風化粒子が多く見られる。
- 第III層：黒色（10YR2/1）を呈し、腐植に富む土壤である。全体に砂質であり、粒径約0.2～0.5mmの鉱物、岩片や風化粒子がやや多く見られる。砂粒分以外の粘土質の部分はややはねばり気がある。
- 第III層の下位層：にふい黄褐色（10YR5/3）を呈する砂層である。比較的淘汰は良く、中粒砂が主体であり、粗粒砂の部分も見られる。主として石英、長石類および岩片類からなる。

〔第3地点断面〕

- 第I層：黒色（10YR2/2）から（10YR2/1）を呈し、腐植に富む土壤で、ねばり気はわずかである。バサバサして粒状および塊状の部分が見られる。現生植物根が含まれる。
- 第II層：黒色（7.5YR1.7/1～10YR1.7/1）を呈する腐植に富む土壤である。ねばり気はやや少なく、粒径約0.2～0.5mmの鉱物や岩片粒子がやや目立つ。現生植物根が少量含まれる。
- 第III層：黒褐色（10YR2/3）から暗褐色（10YR3/3）を呈し、やや腐植に富む土壤である。全体に砂質で粒径約0.2～0.5mmの鉱物、岩片粒子および風化粒子が多く含まれる。

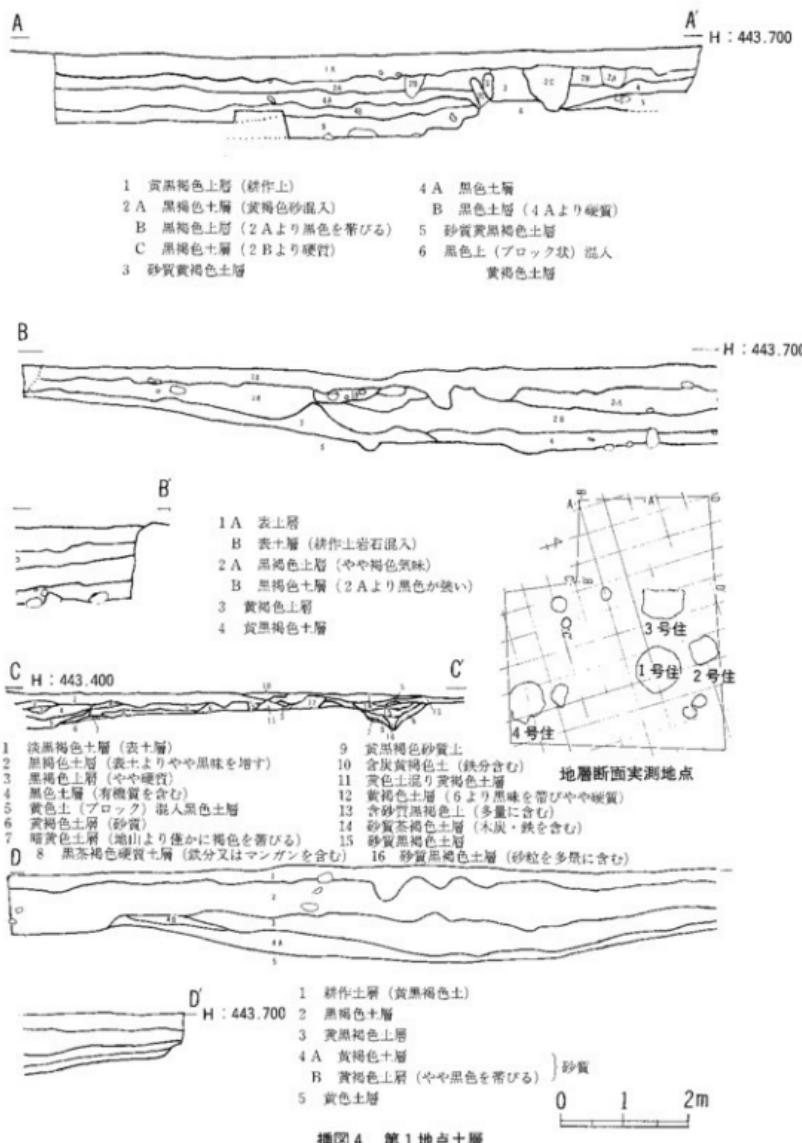
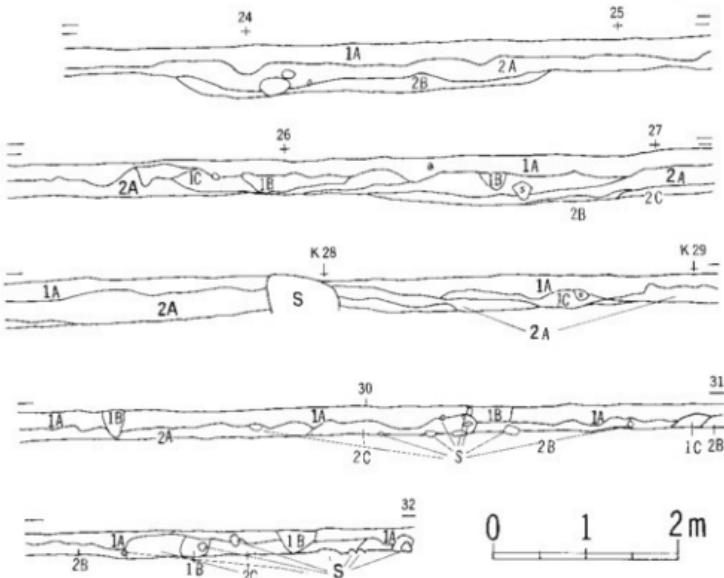
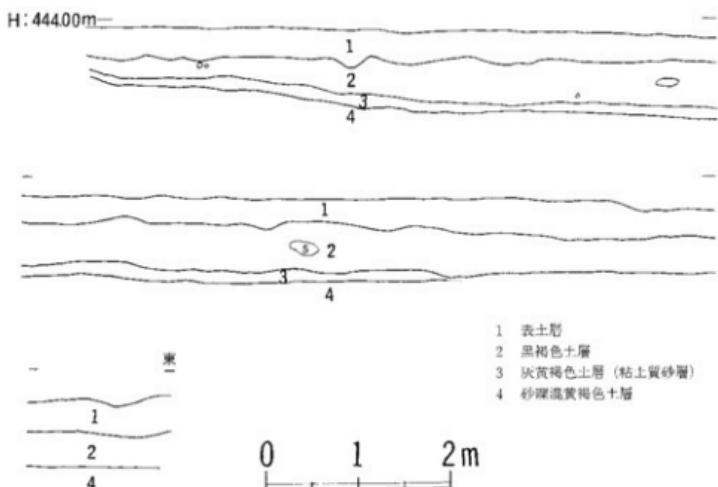


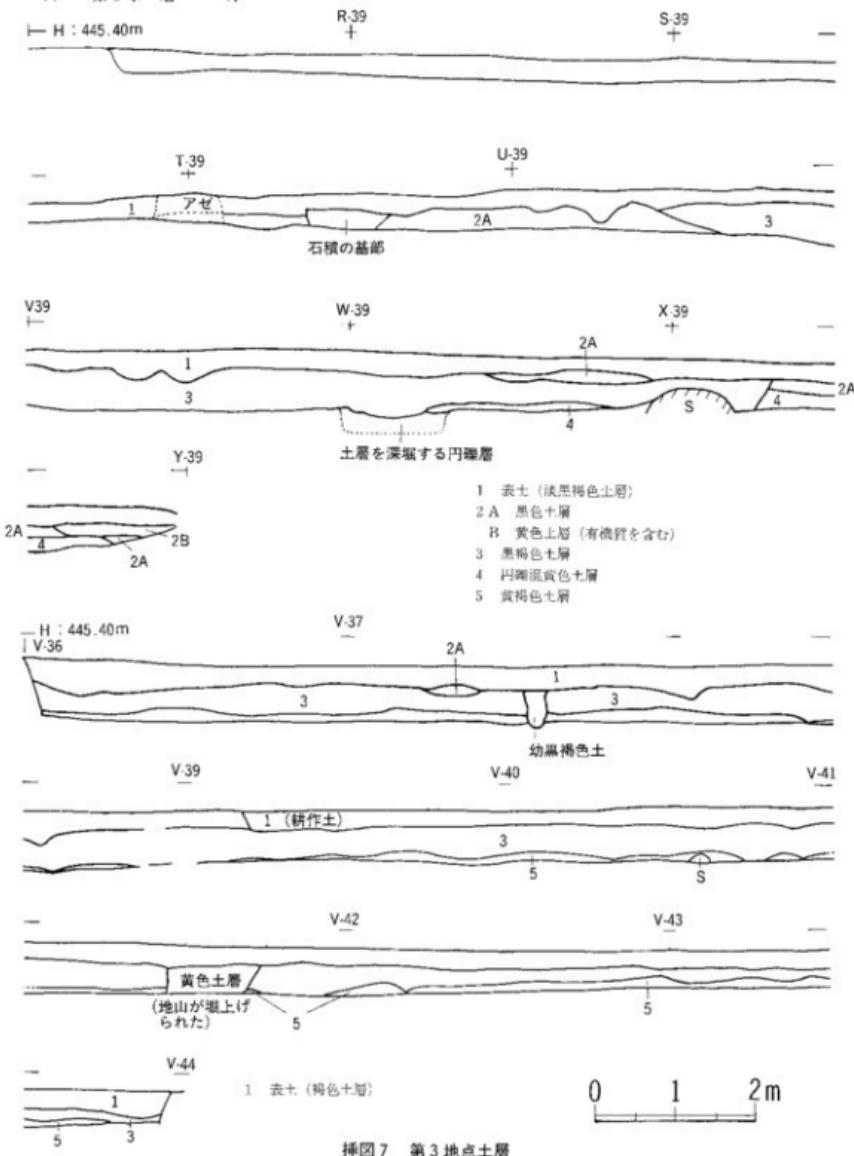
図4 第1地点土層



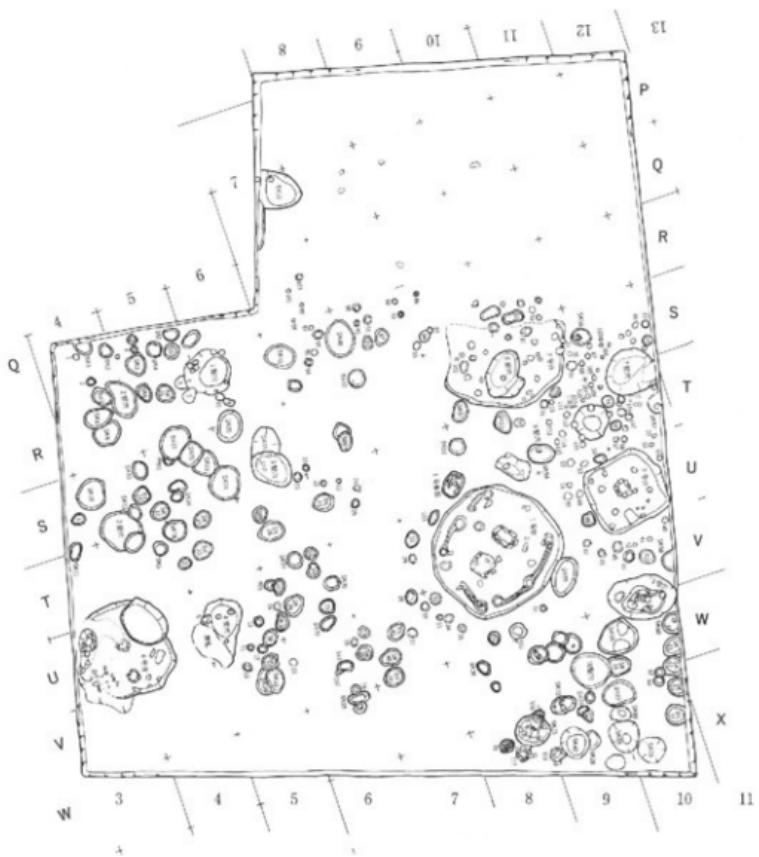
挿図5 第2地点土層（中央部南北）



挿図6 中間地点土層



挿図7 第3地点土層



挿図 8-1 第1地点遺構全測図



図8-2 第2地点及び中間地点構造全測図

第4章 発見された遺構と出土遺物

第1節 繩文時代の住居址（第1地点・第2地点）

今回の発掘調査によって発見された縄文時代に属する遺構は、住居址24軒、竪穴遺構15基、その他に土坑、ピットなどである。また伴出した遺物は、土器類・石器類・自然遺物（炭化物）である。遺物の時期は、早期・前期・中期である。

第1地点調査地・第2地点調査地区・中間地点調査地区・第3地点調査地区の順で記述する。縄文中期の時期に伴う住居址は、第1地点調査地区に於いて第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址の四軒である。第2地点調査地区では、歴史時代の住居址四軒を除いて十九軒の住居址が検出された。時期については二・三の住居址を除いては積極的に時期を決定する資料を欠く住居址もあるが、大部分は縄文時代前期の住居址である。中間地点調査地区で早期の住居址が一軒検出された。

第1号住居址（挿図9～10）

本住居址は、第1地点調査地区的U8・V8・V9の方区に位置している。遺構の基盤となる黄色砂質粘土質層を堀込んだ竪穴住居址である。住居址の平面形は、ほぼ円形を呈して規模は長軸683cm、短軸676cmを測る。

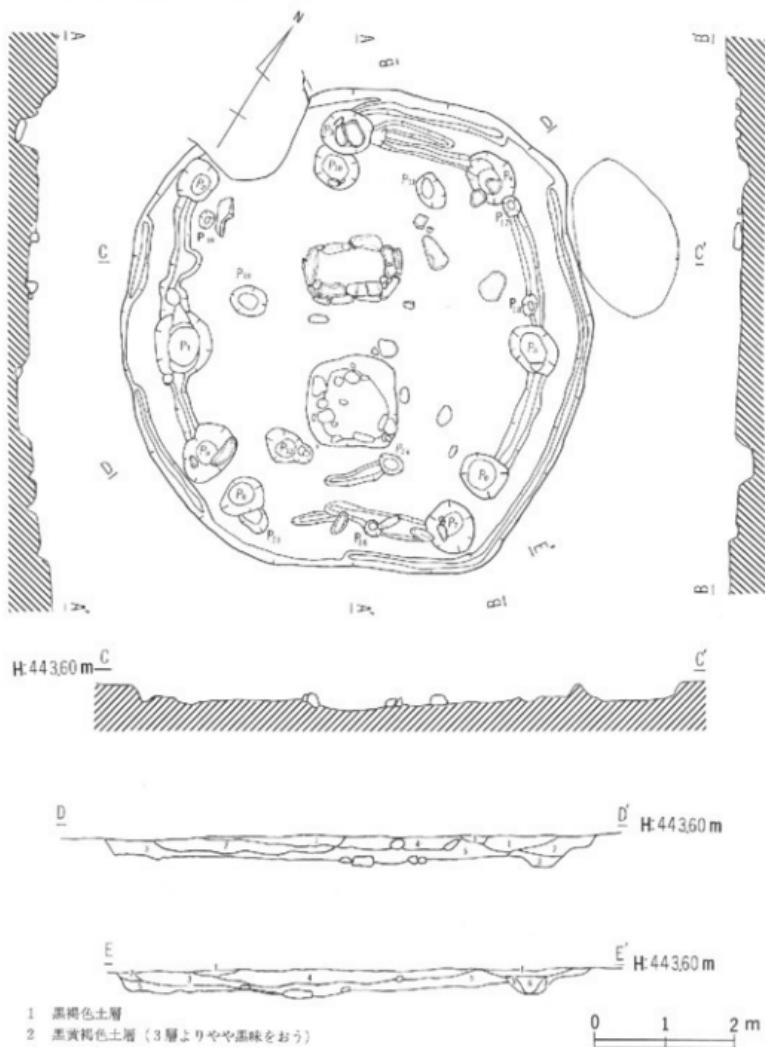
住居址の周壁は西北部の一部を除き、ほぼ大部分が確認された。壁高は、地点によって差はあるが、平均して20cm前後である。

壁溝は東壁より南壁にかけて、また西壁・北壁の一部分に検出された。壁溝の幅は12cm、深さ8cm前後の浅いU字形状を呈している。

床面は、西方に向ってやや傾斜しているがほぼ平坦である。床面に柱穴は19本検出され、その中のP₁～P₉は、周壁に沿ってP₃以外は左右対象に配置している。これらは主柱と考えられる。P₁₀・P₁₁を切ったP₂、P₈は建て替え時のものと考えられる。また主柱を結ぶように溝が確認され、その溝の中にP₁₇・P₁₈の小柱痕が見られる。

柱穴の深さは、P₁—27cm、P₂—33cm、P₃—33cm、P₄—30cm、P₅—30cm、P₆—29cm、P₇—22.5cm、P₈—26.5cm、P₉—29cm、P₁₀—26cm、P₁₁—13.5cm、P₁₂—20cm、P₁₃—18.5cm、P₁₄—24cm、P₁₅—8cm、P₁₆—10cm、P₁₇—16.5cm、P₁₈—2.5cm、P₁₉—9cmである。

炉址は、住居址の中央部よりやや西北よりに、23個の川原石を使用した、長軸110cm 短軸94



挿図9 第1号住居址

cmの長方形を呈する石匂い炉が検出された。

この石匂い炉に使用された石は、長さ40~50cm、幅18cm前後の長方形状の川原石6個を中心として、長方形状に組み、その隙間に小石を詰めている。また石匂の東南の部分は二重に石を並べている。この外側の石は内側の石より細目の長石を使用している（挿図10）。

また、住居址の中央部よりやや東南の部分に石組の一部分が検出された。この部分の貼床は確認出来ず、黄土混りの黒褐色土で、攪乱された状態であった。またこの部分の南面のP₇・P₁₈の部分の床面に長方形の石が散在している。これは炉址に使用されたものと考えられる。住居廃棄後に石匂いを除去してその部分が掘り返されていた。炉址の可能性が充分考えられる。

本住居の覆土は3層に分層される。1層は、砂質黄褐色混入土層である。2層は、淡黒褐色土層であり、黄褐色土を僅かに含んでいる。この層中に大量の上器群が検出された。

3層は、炉址より東南部に亘って、木炭・葉の炭化物を含む黒褐色土層である。遺物の出土状態は、炉址の西北部より炉址上層にかけて短時間に廃棄した状態で多量の土器片が出土した。

また、石器類の中で石皿は床面上より検出された。石鏃などの小石器は、主に、炉址の東南の部分よりの出土が多く見られた。

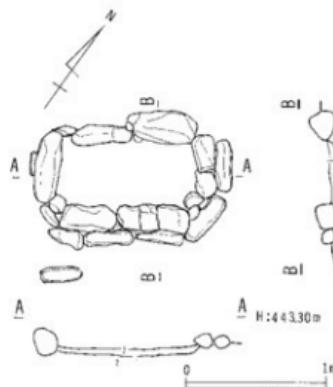
土器類（挿図11~16）

覆土中より出土した土器は、縄文早期・前期の小破片の土器が小量混在していた。これは、覆土堆積の過程で混入したものである。

本住居址に属する土器は、中期の土器群であり、器形の推定される比較的まとまった資料が出土している。以下、中期の土器について記述する。

船元・里木系の土器（挿図11~12）

器形は胴上部が内の方にややくびれ、頭部より外反しながら開き、口縁部が内湾するもので、器厚は0.6cm前後である。口縁端面はやや細くとがらすものが多い。口縁は平縁または小波状を呈するものがある。文様は地文に撚糸文を施し、沈線による文様が口縁部より胴部上部に見られる。この他に挿図12の19のように地文に撚糸文を施し、口縁部に貼付隆帯による文様を



挿図10 第1号住居址炉址

持つものがある。

挿図11の1～8・11～17、挿図12の18・24は、地文に撚糸文を持ち、口縁部に平行文、蛇行する小波状の沈線による文様、また口縁部に区画を持ち、その部分に渦巻状の文様を持ち、区画帯を形成している。また、挿図11の1～10・12、挿図12の18・25・26は胴部上部頸部に連弧文、工具による小波状文などが施されている。同図23は連弧状でなく直線である。

咲烟・醍醐式系土器（挿図12～14）

本群の土器は船元・里木系の土器に見られる様な地文に撚糸文を持たなく無文である。口縁部の文様は、隆帶・沈線を用いて渦巻文とそれをつなぐ弧状文で、区画文をなす土器である。

挿図12の28は、口縁部の文様が隆線による区画文をなす。その区画文の連結部に渦巻文と懸垂文が交互に見られる。挿図13の29は、沈線により口縁部に渦巻文を中心とした、区画文様を形成するものであり、その渦巻文より頸部にかけて懸垂文が垂下している。同図30～40は、多少文様は異なるが一群の土器である。胎土に扁平な撒砂を含む。

挿図14の41は、口縁部に隆帶による渦巻を中心とした弧状文の区画をなすものである。口縁部のみで下部は不明であるが、器形はキャリバ状の深鉢と推定される。

北陸系の土器（挿図14～42～46）

挿図14の42は、北陸系の中期の古い様相を残すものである。挿図14の44は、口縁部の隆帶上胴部の地文に横角状刺突文が見られる。また胴部に半隆起線状の工字状文が施されている。同図45は浅鉢である。同図44～46は串田新式土器の範疇の時期である。

曾利式土器様式（挿図15～51・55・56・58・59・61～63）

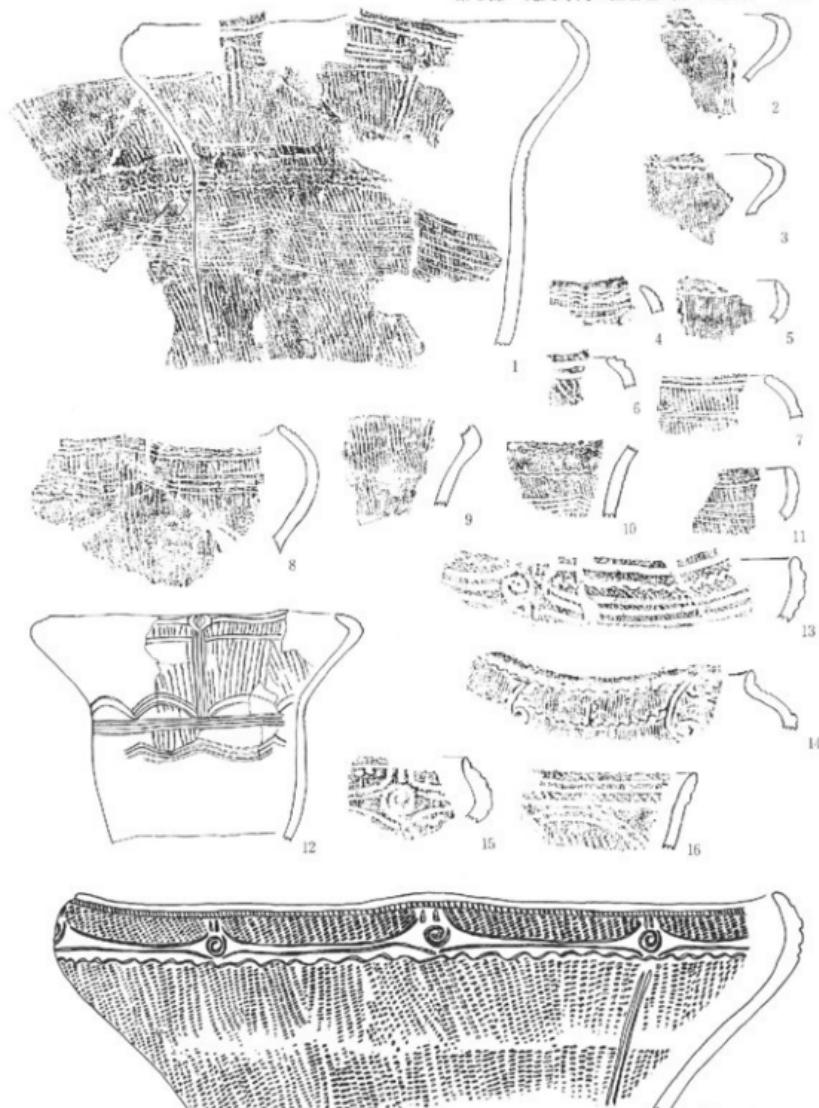
挿図15の55・56は、小型土器であるが、曾利式土器様式の流れを持つ土器である。口縁部に文様が集約され、隆縫間には横に細い粘土縫による小波状文が施されている。地文はいずれも縄文であり、56の胸部には刺突文による懸垂文が一本見られる。

挿図15の51・55・56・58・59・61・62は曾利I式の土器である。同図63は、平出III類Aタイプの流れの中にある押圧凸縫のみが見られる土器である。

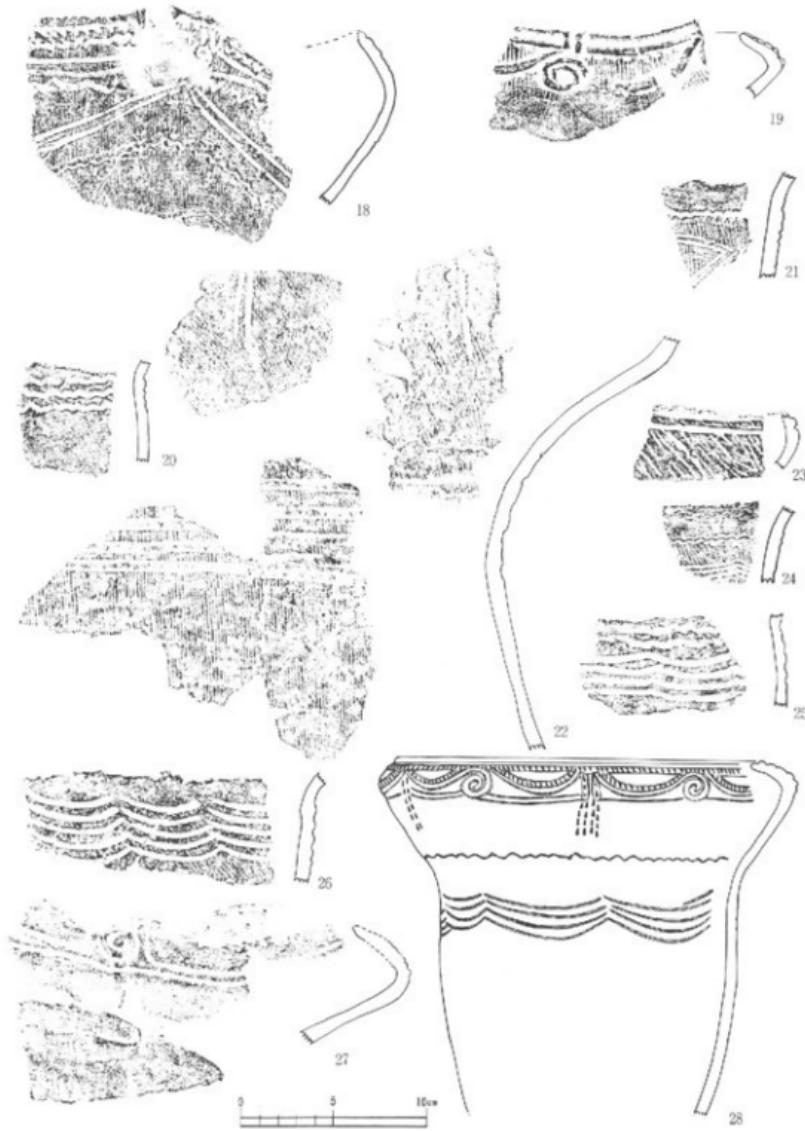
唐草文系土器（挿図15～50・52・53・57・60）

挿図15の50は隆縫と沈線文による文様構成が見られ、梅状の器形をなすものである。同図53は、頸部より外反する器形を呈するが、文様は沈線によるものである。同図52・57・60も同類である。

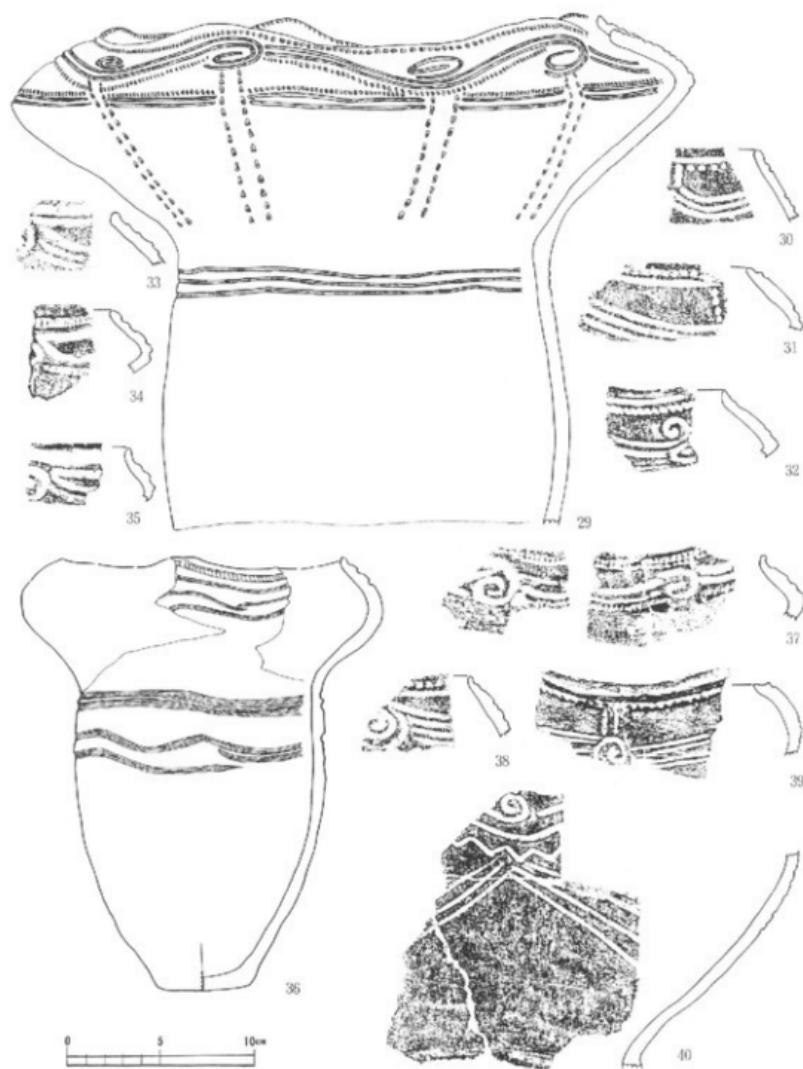
他の中期の土器として、加曾利E式土器、その他の土器様式の影響を受けたと思われる土器が見られる。挿図14の47は頸部に隆縫で連弧状の区画を持ち、その区画内に刺突列点文が施されている。胴部は2条の沈線による連弧が見られる。その区画中に二条の波状懸垂文が見



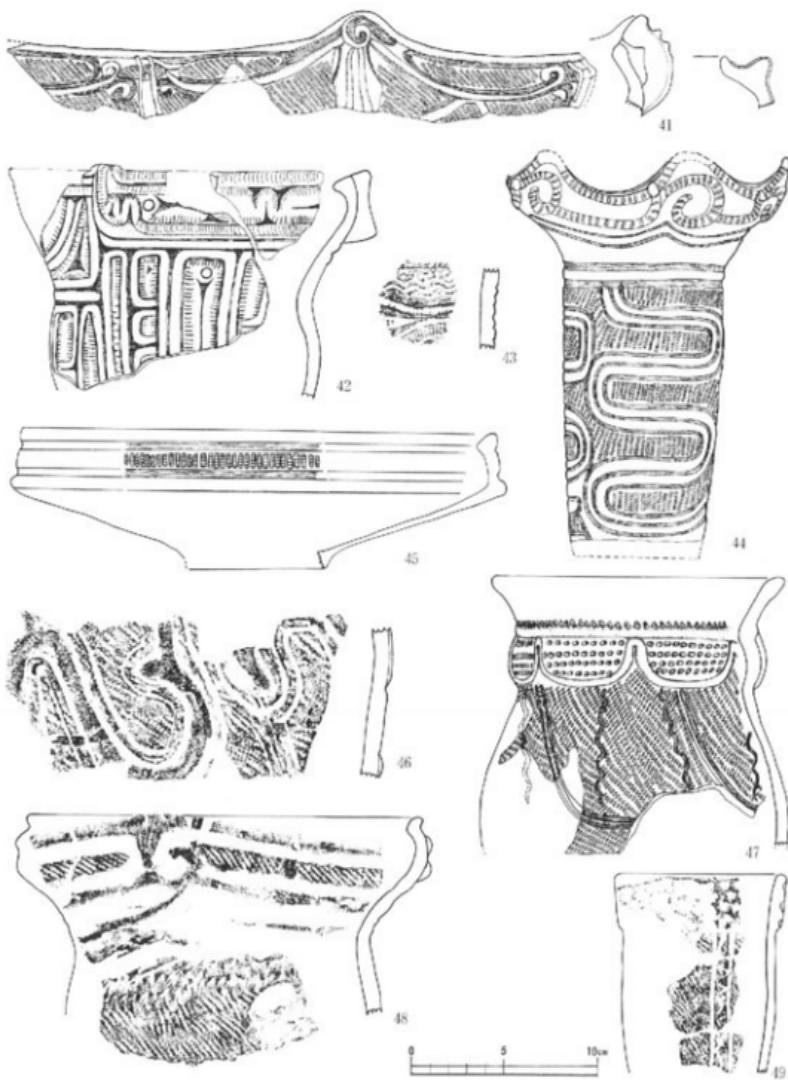
挿図11 第1号住居址出土土器



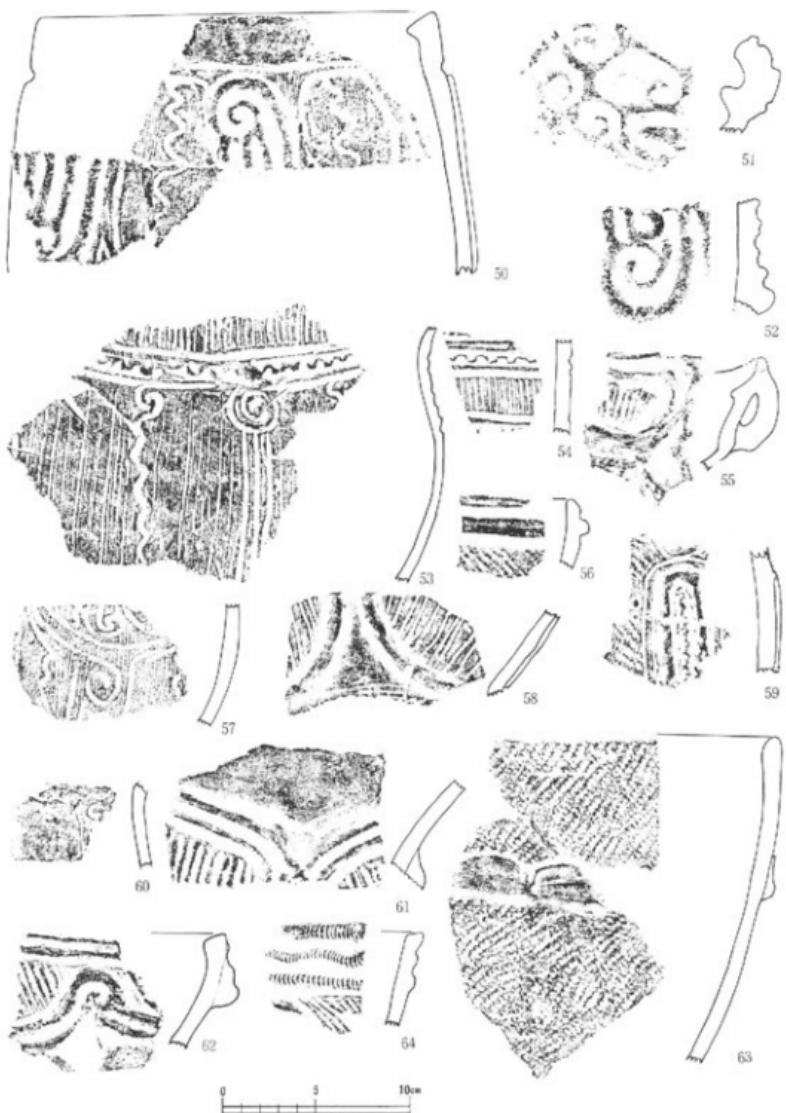
挿図12 第1号住居址出土土器



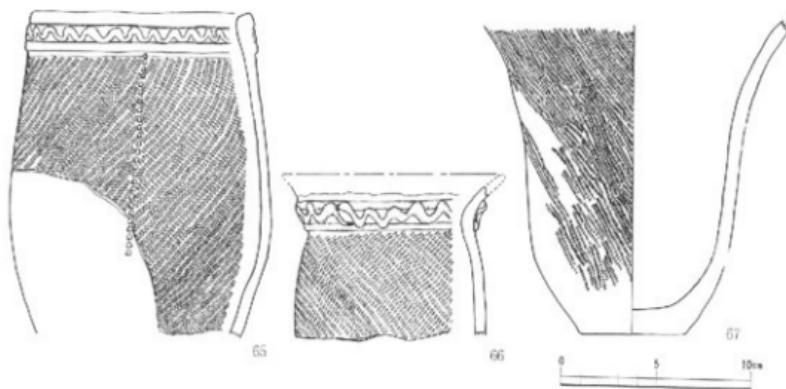
挿図13 第1号住居址出土土器



挿図14 第1号住居址出土土器



挿図15 第1号住居址出土土器



挿図16 第1号住居址出土土器

られる。

同図49は口縁部が肥厚して口縁帯を持ち、区画は欠損して不明である。口縁部の文様は、刺突による列点文が施され、胴部は二条沈間に蛇行する沈線の見られる懸垂文が施されている。同図48は加曾利E式土器である。挿図15の64は中期の古い時代の土器である。

挿図16の65・66は、口頭部に細紐によって蛇行する隆帶を貼付したものである。

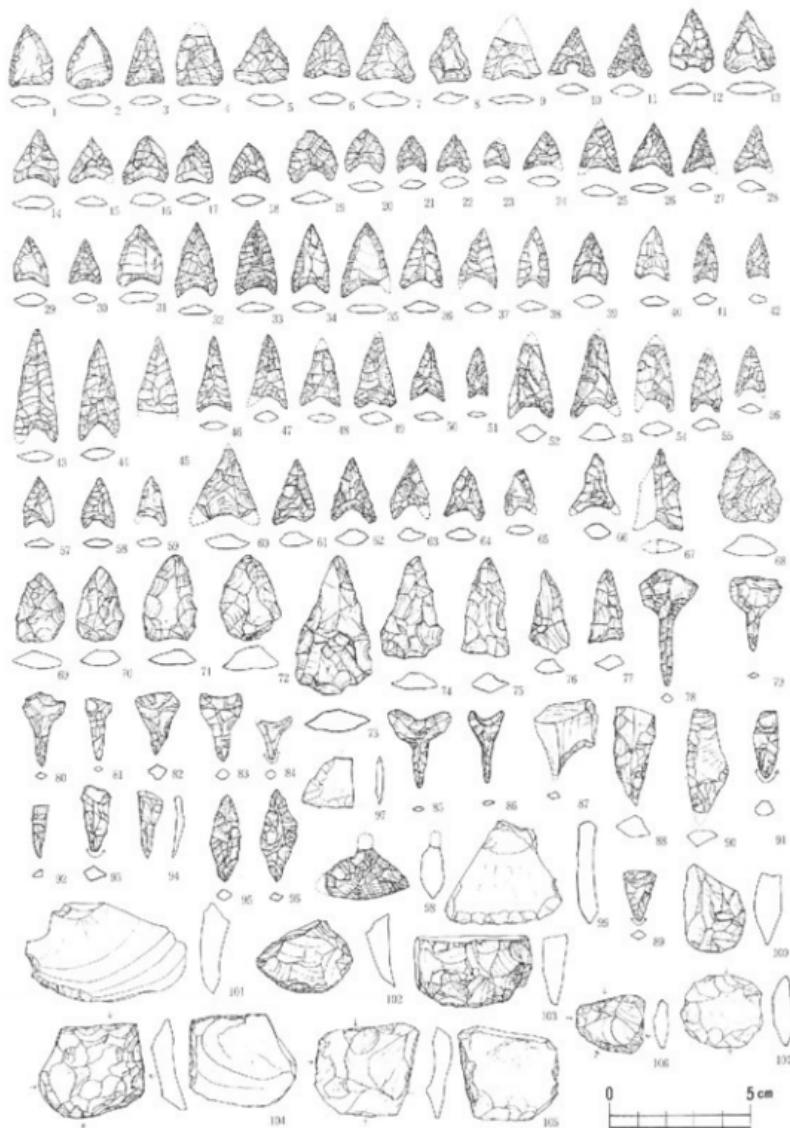
同図65は樽状、挿図15の60は外反する器形をなす。地文は繩文が施文されている。中期の曾利式系の土器である。

同図67は、口縁部が欠損しているが中期の土器である。

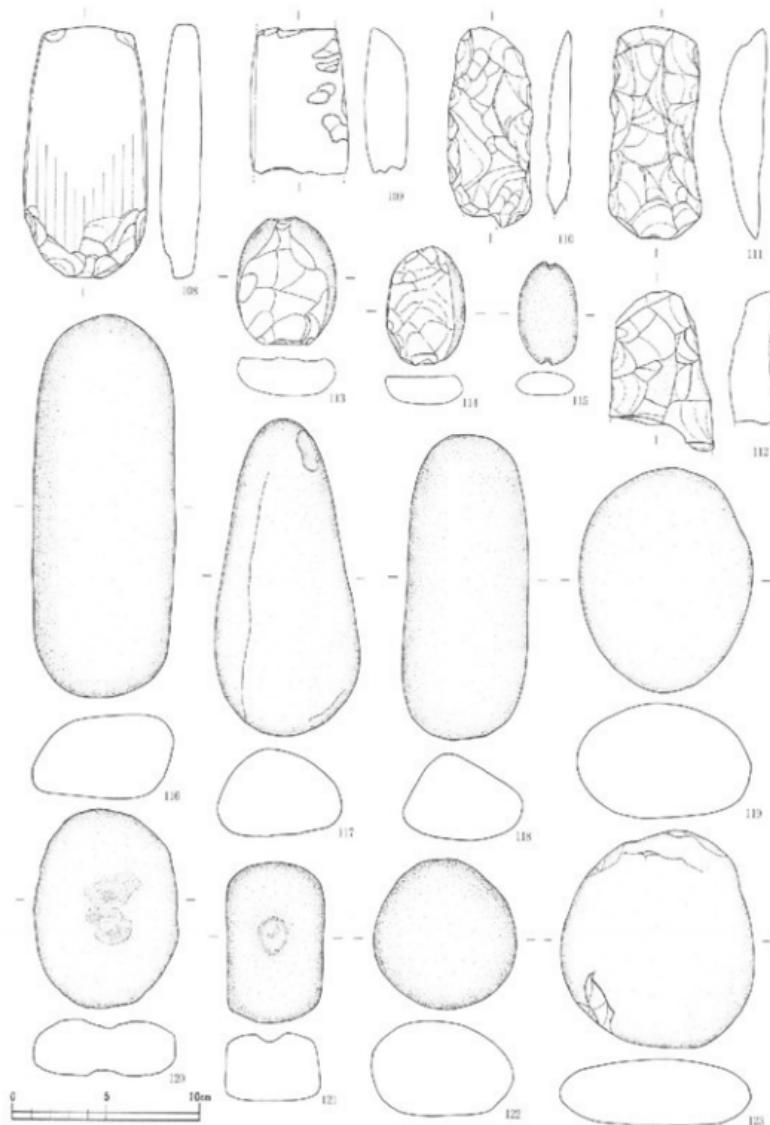
石器類（挿図17～20）

第1号住居址覆土中より出土した石器の器種は次の様である。各種について述べる。挿図17の1～77は打製石鏃である。同図1～8・77は基部が直線的で三角形状をなす平基無茎鏃で、同図9～67は基部に抉入のある凹基無茎鏃に細分される。同図68～74は、尖円基鏃である。従って、同図68～74・76は基部が丸味を持つもの、また僅かに凸出しているものである。これらの石鏃の石質は下呂石が主体でチャート・黒曜石がわずかに見られる。基部が尖るもので、従来、柳葉鏃とされたものに類似するものは、同図95・96に形態の上では見られるが、錐部の磨耗の状態より石鏃の中に含めた。

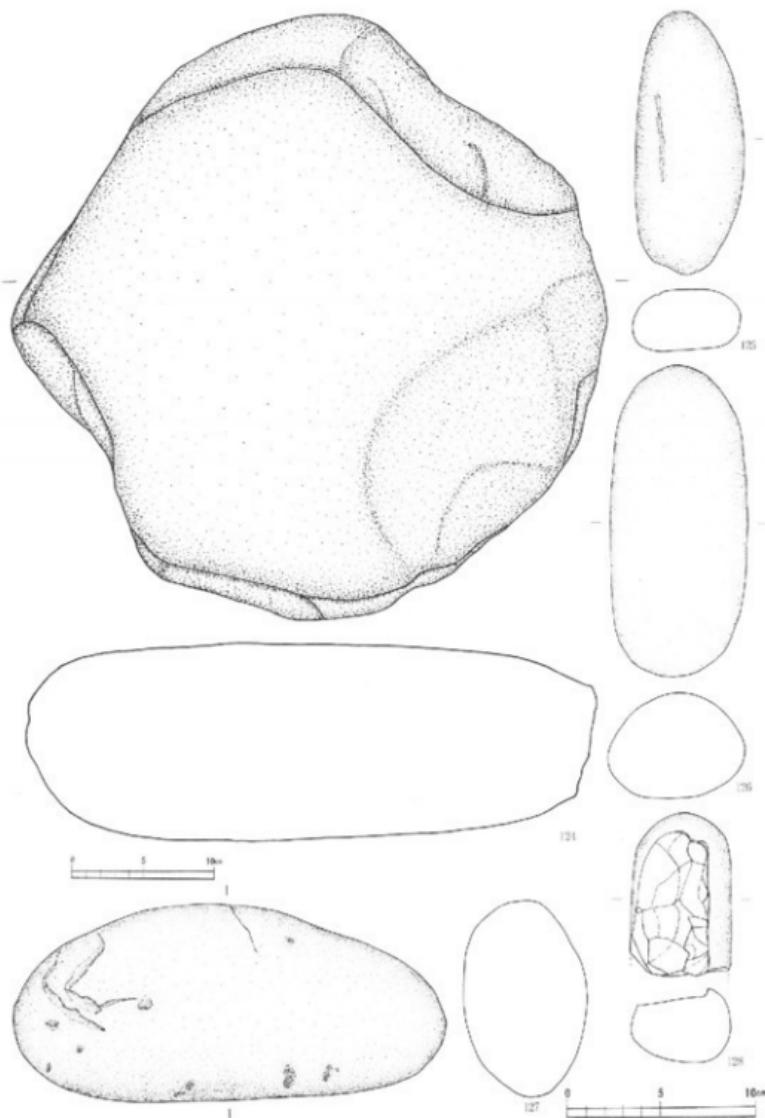
挿図17の78～96は石錐である。これらはつまみの錐部の形態から3種に分類出来る。同図78～81に見られる錐部が細長く精巧に出来ているもの。同図83～86に見られるつまみ部が逆凹



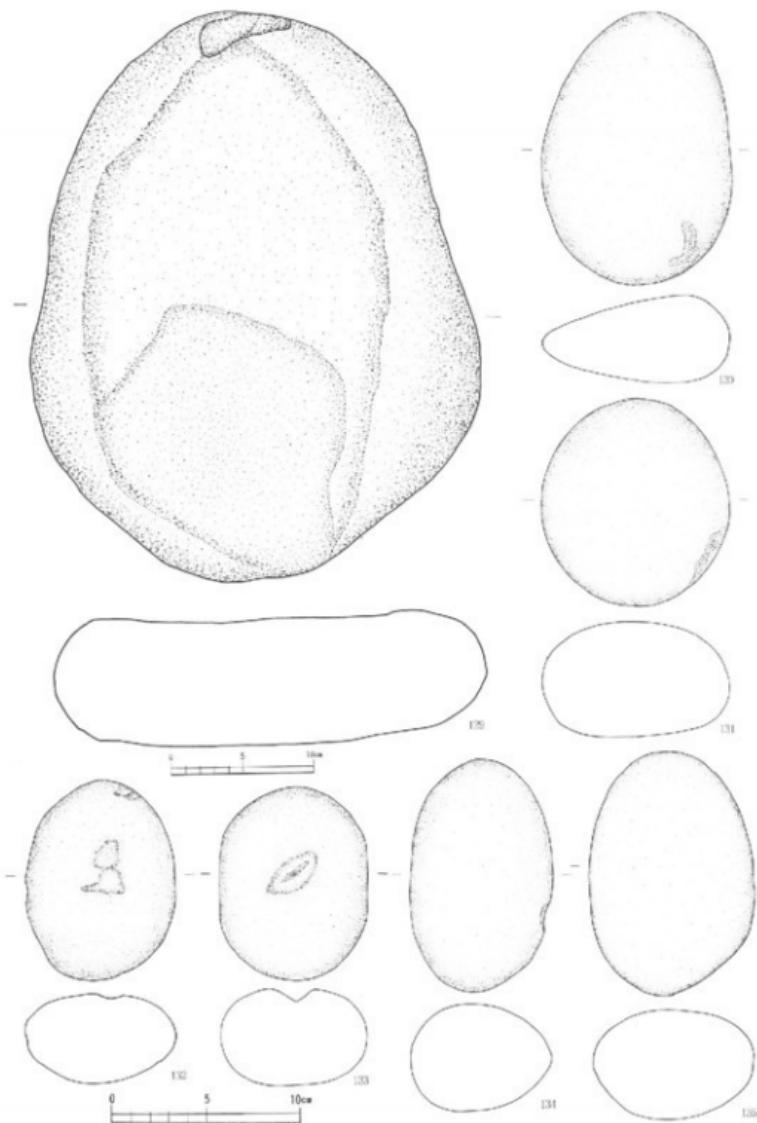
挿図17 第1号住居址出土土器



插図18 第1号住居址出土土器



挿図19 第1号住居址出土土器



挿図20 第1号住居址出土土器

状をなすもの。同図82も同類に近いものである。そして、剥片の一部を錐状に造出したものである。同図88～94・95・96は、細身の棒状のものを使用したものであるが、先述した様に打製石の柳葉鎌との区別が困難なものがある。

挿図17の97は、つまみ部を欠損している横形の石匙と思われる。同図106、107はビエス・エスキューである。

挿図18の108・109は定角式の磨製石斧である。同図108は刃部の一部を欠損しているが両刃と推察される。また同図109は頭部と刃部を欠損している。石質はいずれも蛇紋岩である。

挿図18の110～112は打製石斧で、112は刃部を欠損しているが、いずれも短冊形である。

挿図18の113～115は石錘である。113・114は、扁平な橢円状の川原石の両端を敲打した砾石錘で、115は切目石錘である。

敲石・磨石・凹石は、使用用途によって両面を兼ねているものなどがある。形態によって分けると、挿図18の116～118、挿図18の125～128は棒状をなす敲石で、長軸の端面に僅かに敲打痕が見られる。

挿図18の119・122・123、挿図19の130・131・134・135は扁平な橢円状の石を磨石として使用している。

挿図18の120・121・挿図19の132・133は凹石であり、断面を長方形状に加工した橢円状の石を用い、その面に凹部が見られる。120は両面凹面が見られる。

石皿は、挿図19の124、挿図20の129の二個出土している。124は平盤状石皿であり、住居床面上より検出した。129は、凹部は浅いが流れ口を持つものに入る。いずれも、安山岩である。

自然遺物

本住居址の覆土中央部南部の下層中より木炭鱗片と栗の炭化物が検出された。

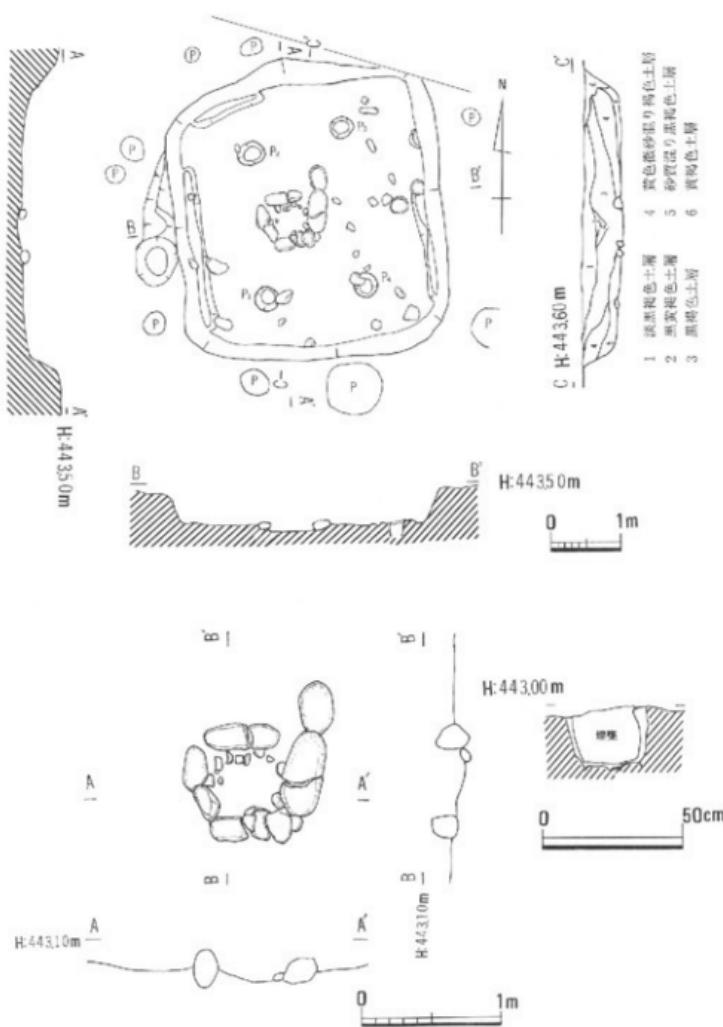
第2号住居址（挿図21）

本住居址は、第1号住居址の北部に当る。U10・11、V10・11方区に位置している。遺構の基盤は黄色粘土質屑を埋込んだ堅穴住居址がある。

住居址の平面形は、隅丸方形状を呈している。長軸は4.2m、短軸は3.7mで、壁高は、約40～50cmであり、やや開きながら立上っている。床面はほぼ水平に近く、柱穴は6本検出されたが、主柱は4本かほほ床面上に等間隔に配置されている。その他の2本は補助柱と考えられる。

炉址は床面中央部よりやや西よりに、10個の川原石を使用した石組炉である。また東壁の中央ぞいの床面に埋瓶が一個検出された。

覆土の層位は、三層確認された。その状態より自然堆積と考えられる。遺物の出土は、第3



挿図21 第2号住居址

層より床面にかけて出土した。本住居址の時期を推定する資料として埋甕と、覆土の中の土器を総括して見ると曾利式の時期に推定される。

土器類（挿図22～24）

挿図22の1は埋甕で、口縁部の一部は欠損しているが、口縁部に圧痕を持つ隆帯が見られ、その下部は縄文が施されている。曾利式様式の土器である。同図2～4、7～11は唐草文系の土器である。

挿図22の5、6は曾利式様式の土器である。挿図23の13～16は北陸系の上山田式土器である。

挿図23の17～25は、呪煙式土器である。挿図23の27～29は唐草文系の土器、挿図23の30～37は同時期の中期の土器である。挿図23の38・39はメンコである。

混入土器として、早期の貝殻沈縫文土器（挿図24の40・41）、撚糸文土器（挿図24の43）、条痕文土器（挿図24の44～46）、東海条痕文系土器の石山式、天神山式の中に含まれるものとして（挿図24の47～54、66・67）が見られる。同図49は尖底部である。同図55は1点のみの出土であるが早期の貝殻沈縫文系の土器と考えられる。

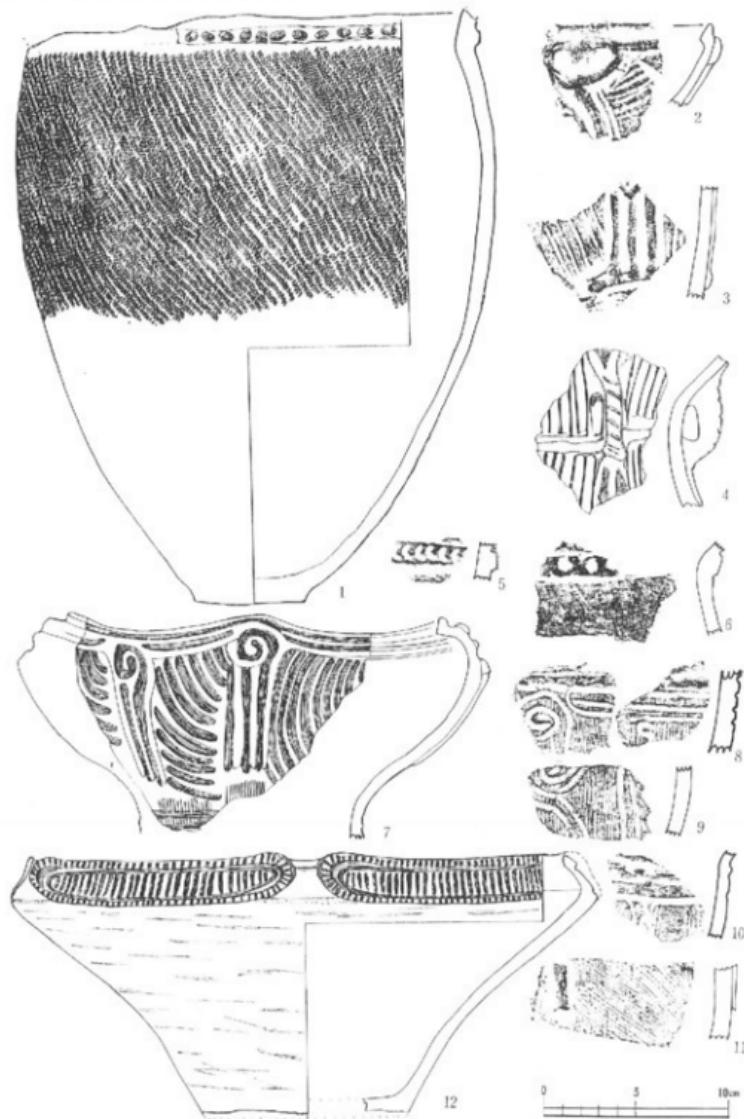
前期の土器も少量はあるが混入している。挿図24の56～59・61・63は、北白川下層II・III式土器である。同図62・68は同時期の縄文の土器である。同図69は前期未葉の土器と考えられる。

中期の土器で先述した土器より古い時期のものは挿図24の64・65の五領ヶ台式に類似するものである。同図70～75は船元・里木の5・6様式の土器である。同図76～83は勝坂様式である。同図84・86は中期中葉の土器である。

石器類（挿図25）

石鎌は、挿図25の1～19が全て打製石鎌である。無基鎌で、同図1～18は円基無基鎌に分類される。同図19は円基鎌である。同図20は搔器である。

打製石斧は、同図21～23であり、短冊形をなす。同図24は礫石鎌であり、同図25は円石である。同図26～28は磨石である。



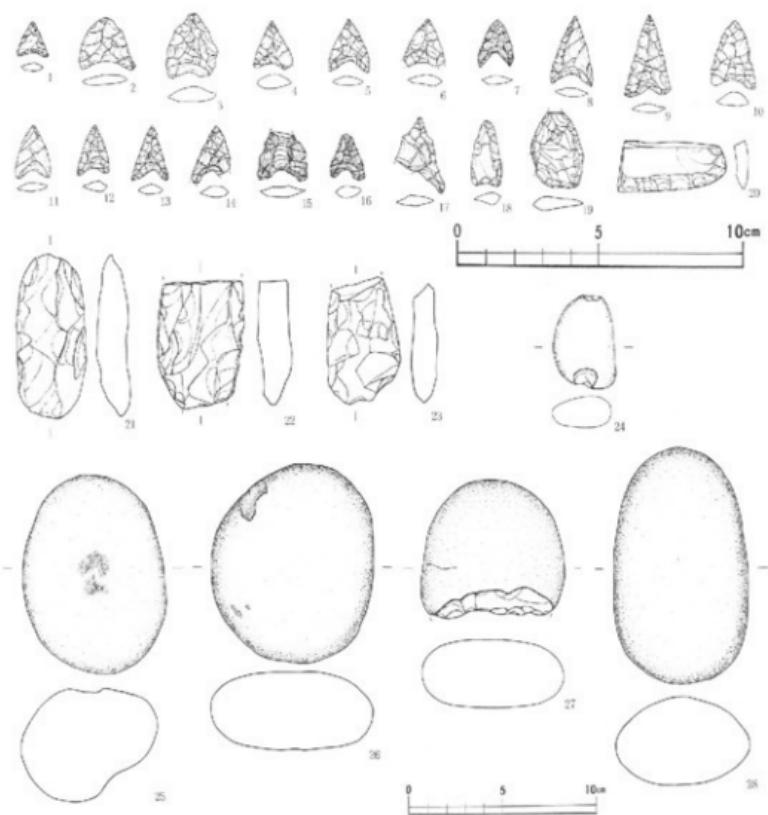
挿図22 第2号住居址出土土器



挿図23 第2号住居址出土土器



挿図24 第2号住居址出土土器



挿図25 第2号住居址出土石器

第3号住居址（挿図26）

第3号住居址は、第1地点調査区の第1・第2住居址の西方の地点に当るS9・S10の方区に位置している。本住居址は、耕作土直下に検出されたもので、発掘の所見によると竪穴の部分が住居廃棄以降の長い時間に亘って削平され、保存状態も悪くプランの全貌を明瞭にすることが出来なかった。然し住居址の平面形は、部分的に残存する壁の部分と、僅かに黒色を帶びている床面の残存部、更に柱穴または小ピットなどから不定形橢円形状をなす竪穴住居址と推定される。

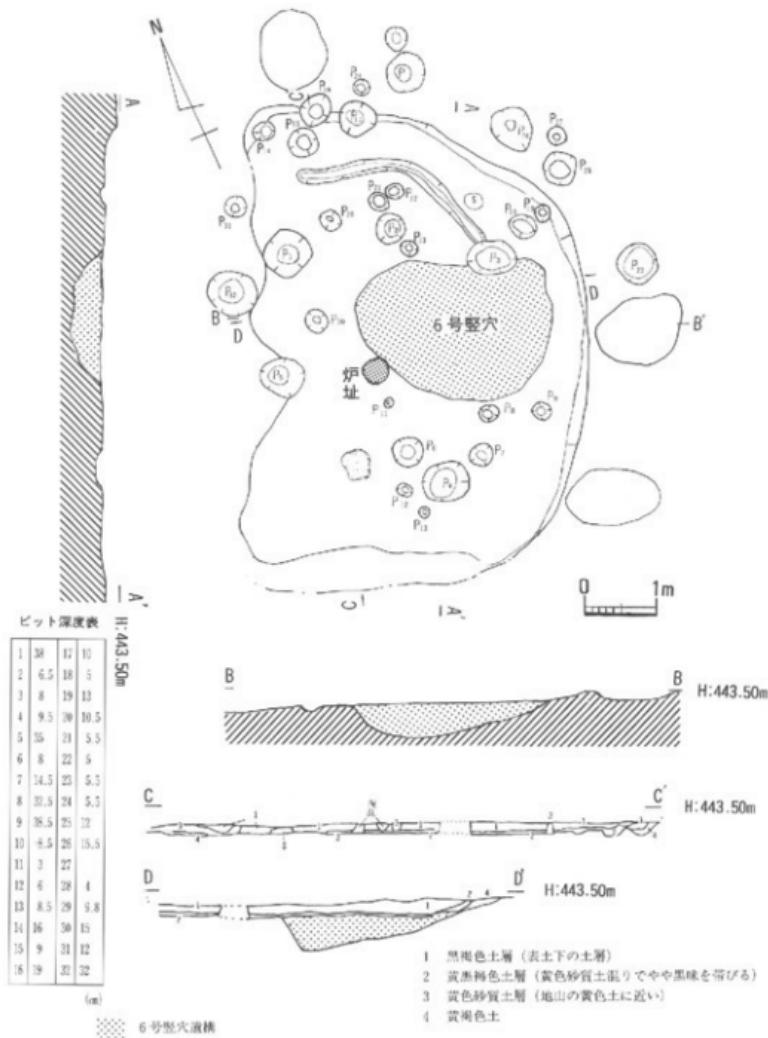


図26 第3住居址実測図

壁は北部と頭部に遺存し、なだらかに立ち上がり、壁高は北壁の部分で13cm前後、東壁の部分で7cm前後である。残存する床面はやや西に傾斜を示す。北壁の手前に幅20cm×深さ3cmの溝が見られる。残存する床面の中央部よりやや西側に焼上が検出された。この部分が、地焼かと推定される。

この地焼炉と推定される部分の東北部分に竪穴遺構が検出された。これは早期に属する遺構である。別項において詳述する（6号竪穴遺構）。

柱穴とビットは20個確認されているが、主柱と思われるものと、上部より搅乱されたビットが見られる。

覆土は2層に分層される。第1層は上部耕作土よりの搅乱が深く、第2層は黒褐色の層が僅かに見られた。遺構の時期は、中期前葉と推定される。

土器類（挿図27）

覆土中より出土した土器は少量であり、時期の古いものが混入している。早期の撲糸文土器・押型文土器（挿図27の1～12）や、前期の北白川下層II式土器（挿図27の13～31）が混入している。いずれも、摩耗度の高いものが多い。

本住居址に伴なう土器として、挿図27の33の船元式土器がある。同図35の文様は横帯構成を主とし、口縁部の横帯文を降線により縦に区切っている。器形は深鉢であり九兵衛尾根式期に類例が見られる。

挿図27の43～47は北陸系の新崎・新保系の土器である。同図32・34・36・37・39・40は中期の前葉の時期である。これらの中前期前葉の土器の他に同図38・41・42などの後葉の土器が混入している。

石器類（挿図28）

石錐（挿図28の1～16）は全て打製石錐で、1～6は平基無茎錐、7～16は凹基無茎錐の2種類である。石錐（挿図28の17・18）は不定形な剥片を両端から調整加工を施し、錐部を作り出している。錐部以外の部分はつまみ状に僅かに調整を加えている。挿図28の19は、ピエス・エスキーユであり、全面加工しているが、上下の両端に打痕が見られる。

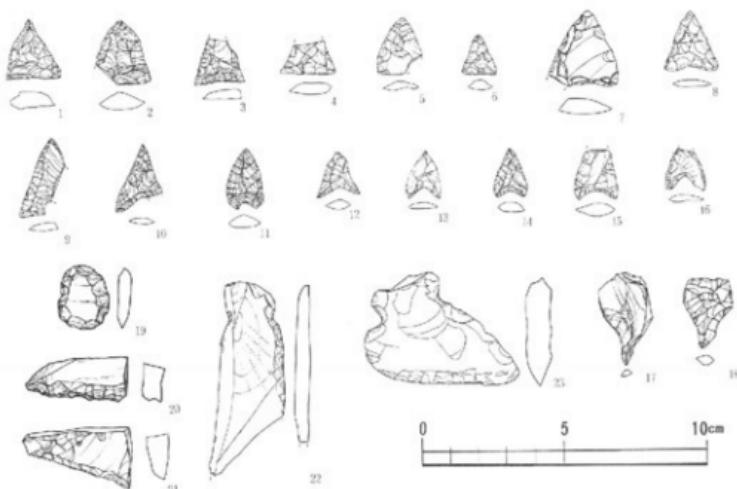
挿図28の20は、削器であり、同図19に形態の上で共通性があり、同質の石材を使用しているが、刃部の加工を異にするものである。

挿図28の21は、搔器であり、剥片の一部に刃部を作り出したものである。

挿図28の22・23は石匙である。22は縦長の剥片の上部に両端から調整加工により、つまみを作り出している。刃部は剥片の片面を利用している縦形の石匙である。23は横形のつまみをもつものである。この石匙は型態より早期未と考えられる。



挿図27 第3号住居址出土土器



挿図28 第3号住居址出土石器

第4号住居址（挿図29）

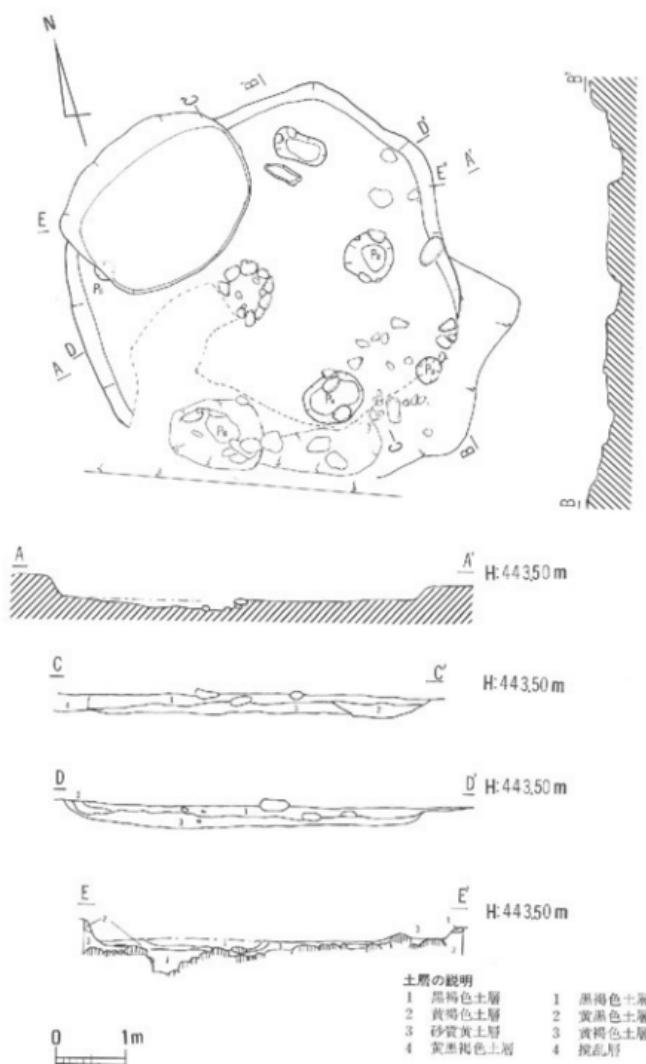
本住居址は、第1地点調査地区の東南地点V3・V4の方区に位置している。この住居址の検出された東部は、段丘崖に近い端部であり、その部分は樹木混りの竹林であるため、耕作地帯に竹根の繁茂を防ぐために溝などが掘られたり、家畜用の小屋などにより、近年まで種々の擾乱が推定される地点であった。表土除去の段階ではプランの確認は出来なかった。トレント堀によって遺構の可能性が推定されたので、それを拡張して検出した。

住居址は、一部搅乱されているが、平面形は残存壁面よりはは隅丸方形の竪穴住居址と推定され、長軸は東西方向で約520cm、短軸は南北方向で約500cmを測る。

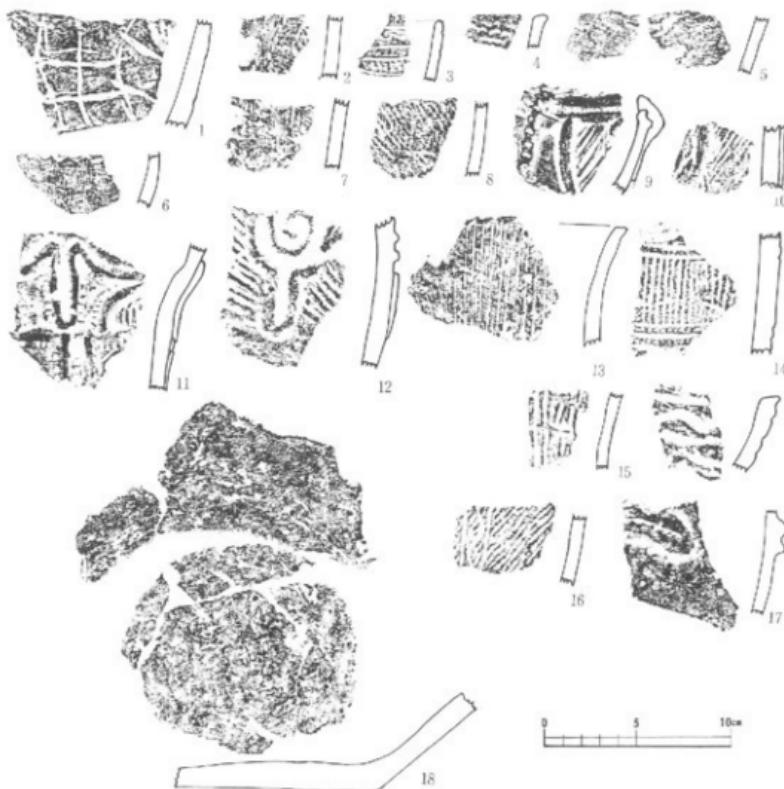
壁高は、東壁・西壁・北壁が遺存している。遺存部分の壁高は、東壁で約30cm、西壁で約20cm、北壁で約20cmである。住居址の時期は中期と推定される。

床面は、破壊以降の搅乱などが見られ、良好ではない。炉址は、住居址の中央部よりやや両側に一部は欠損しているが石組炉が検出された。平面形は円形状を呈している。ピットは7個検出された。西北部分の床面に楕円状の堀込みが検出された。この堀込みによって床面が切られれている点より住居址との先後関係は、住居址が先行するものである。またこの堀込みの時期を推定する資料を欠いている。

住居址の覆土は、三層に区別される。第一層は淡黒褐色土層で、第二層は黒褐色土層である。



挿図29 第4号住居址



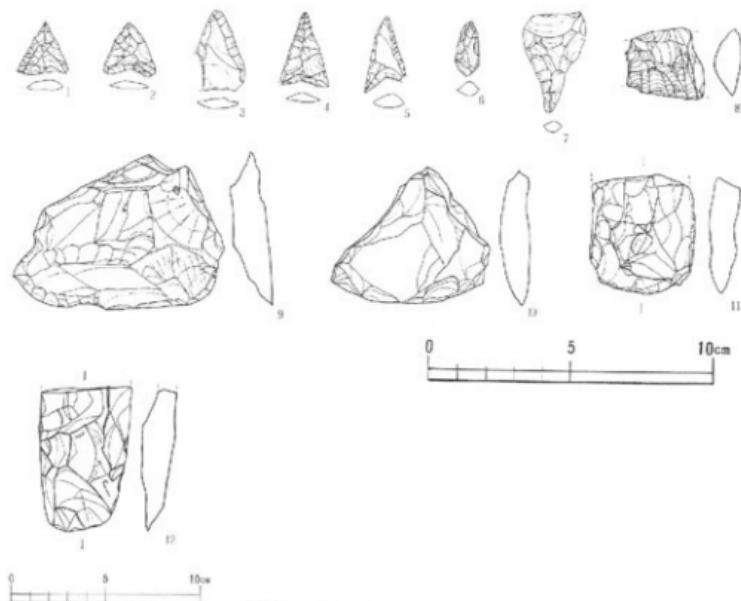
挿図30 第4号住居址出土土器

第3層は黄褐色土層であり、この層中の壁よりの部分より中期の土器片が出土したのである。

土器類（挿図30）

覆土中の土器の中で時期の異なる混入土器は、挿図30の1～5である。同図1は撚糸文土器、同図3は貝殻沈線文土器、同図4・5は条痕に刺突文の見られるもので、いずれも早期の土器片の混入である。

挿図30の6～8は、船元・里木系の土器の胴部に見られる撚糸文が施されている。同図9～12は唐草文系の土器である。同図13～15は櫛歯状の工具で施文する曾利式土器の一部である。その他、同図16、17の土器も中期中葉の土器である。同図18は底部である。



挿図31 第4号住居址出土石器

石器類（挿図31）

挿図31の1～5は全て打製石錐である。同図1は平基無茎錐、同図2～5は凹基無茎錐に属する。

挿図31の6・7は石錐で、6は石錐の柳葉錐と区別しがたいが、石錐に分類されるものと考えられる。7は錐部を調整加工によって作り出している。

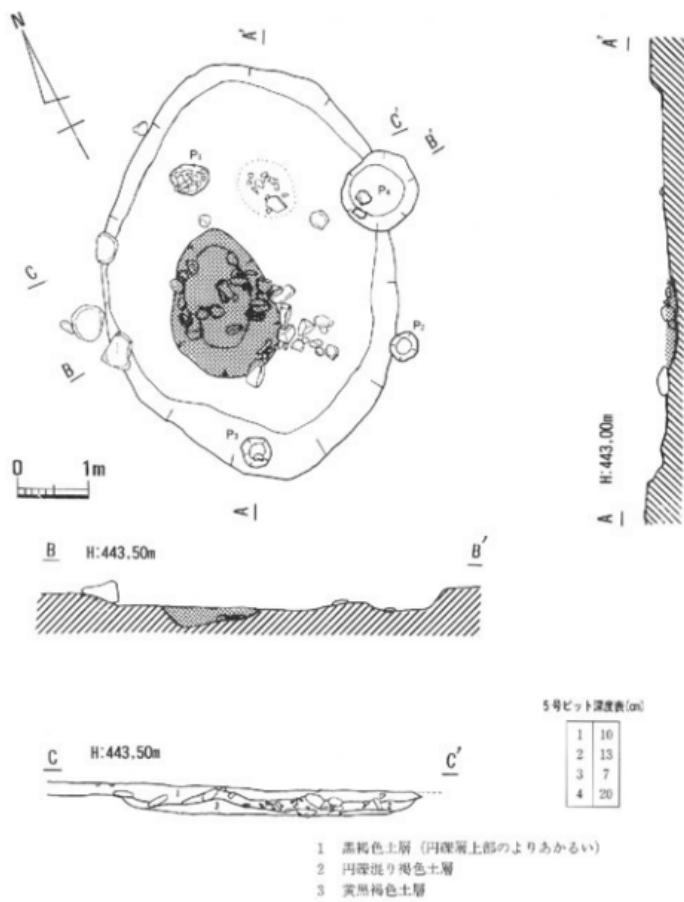
挿図31の8は両端を欠損しているが、搔器に含まれるものである。同図9～11も搔器である。同図12は欠損しているが打製石斧である。

第5号住居址（挿図32）

本住居址は、第2地点調査区のH24方区を中心に位置している。住居址の平面形は、不定形な橢円状を呈する。規模は長軸が572cm、短軸が407cmを測る。前期の住居址である。

周壁は、緩やかに立上っている。壁高は北壁部で17cm前後、南壁で20cm前後である。

床面の西南部に遺構の保存状態は良くないが、近世墓と考えられる壙込みが見られる。この



挿図32 第5号住居址実測図

部分より近世遺物が出土している。従って本住居址の遺存状態は良好とは言いがたい。床面中央部の北側に小石と焼土と木炭が見られ、この部分が炉とも考えられる。ピットは床面上に1個と壁面および壁面沿いに2個検出された。床面上のものは基定部となる礫層部を埋込んだ柱と考えられる。他の2個は浅いピットであるが、いずれも住居址に伴うものである。また土坑1基が東壁部に見られるが新しい時期のものである。

覆土は4層に大別される。第1層は淡黒褐色である。第2層は、第1層より黒色を帯びた黒褐色土層である。第3層は円礫混入の黒褐色土層である。第4層は、遺構の基盤となる黄色土を含む砂質黄色土層である。

土器類（挿図33～37）

本住居址の覆土中より多量の土器が出土した。大部分は、北白川下層式土器、諸磯式土器に比定・類似するものである。混入土器として縄文早期より前期初頭の土器が見られる。

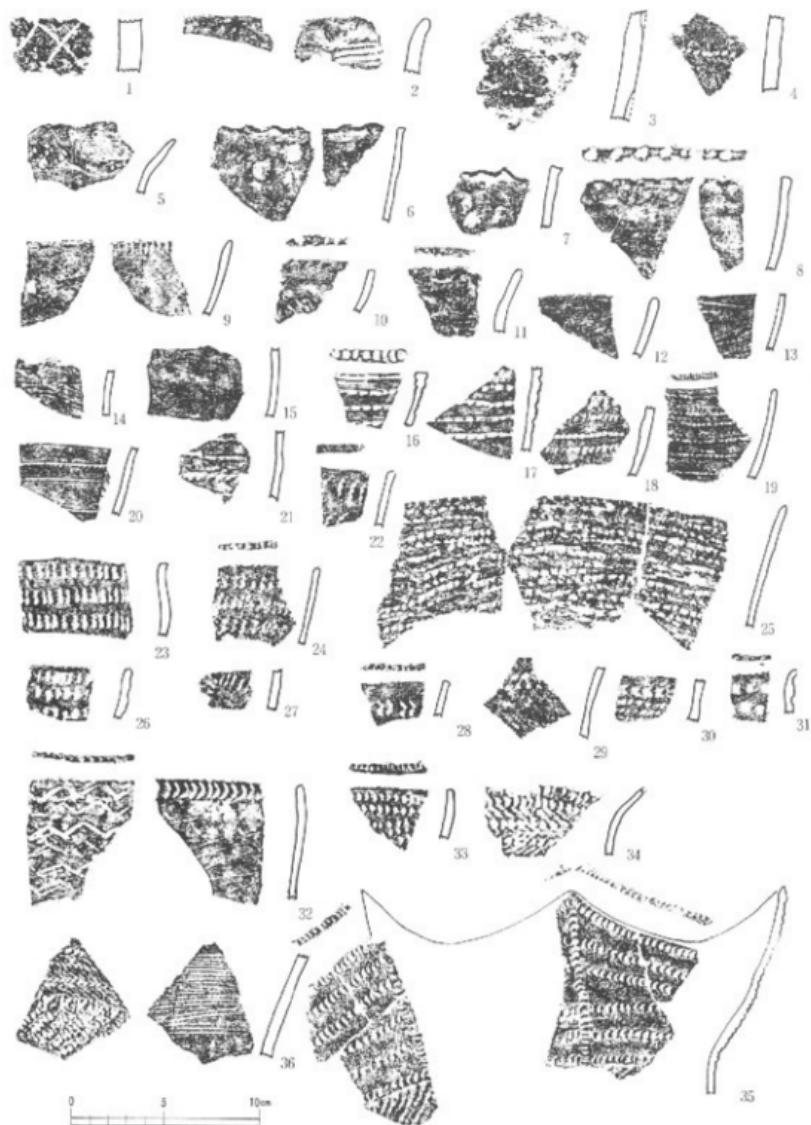
挿図33の1は早期の撚糸文系土器、同図2・3・4は早中期の条痕文系の土器で、胎土に纖維を含み色調は黒褐色を呈する。

挿図33の5～15は東海条痕形土器の天神山式土器。器壁は薄手で、焼成は堅緻である。指頭圧痕の跡跡がかすかにみられる（同図6～8・14）。同図6・7の口唇部は指頭で上部より押圧し波状をなし、その口唇部が内外面に張出している。同図8は、工具で押圧しているが口唇は波状で内外面に前者よりは僅かであるが張出し、脣部に縄文が施文されている。同図10・11は口唇部に刻目が施されている。同図5は頸部で僅かに外反する器形で、口縁部は僅かに肥厚し、その部分に撚糸文が施文される。同図9は口唇内面に短く細かい刻目が施されている。同図14は条痕が表面に見られる。

挿図33の16・17は同一個体である。器壁は薄手で、焼成は堅緻で、文様は口縁部に竹管による押引沈線が口縁に平行して数條引かれ、口唇上に刻目が、また口縁内面上部に2條の條痕が口縁に沿って施されている。

挿図33の19～21は、数條の押引沈線が口縁部に見られるもので、うち19は櫛齒状の工具によって施文されたと考えられる。同図18・20・21は竹管の管脚の部分を押引状に施文して、口縁に平行な文様を構成している。同図16・17に技術的に近いものと考えられる。然し、同図17・20・21は連続爪形文の両側のみを強調して文様構成をなしたものと考えられる。後述する連続爪形文に見られるものとは意識的に表現主体を異にする。同図22は貝殻腹縁を使って施文される前期前葉の土器である。

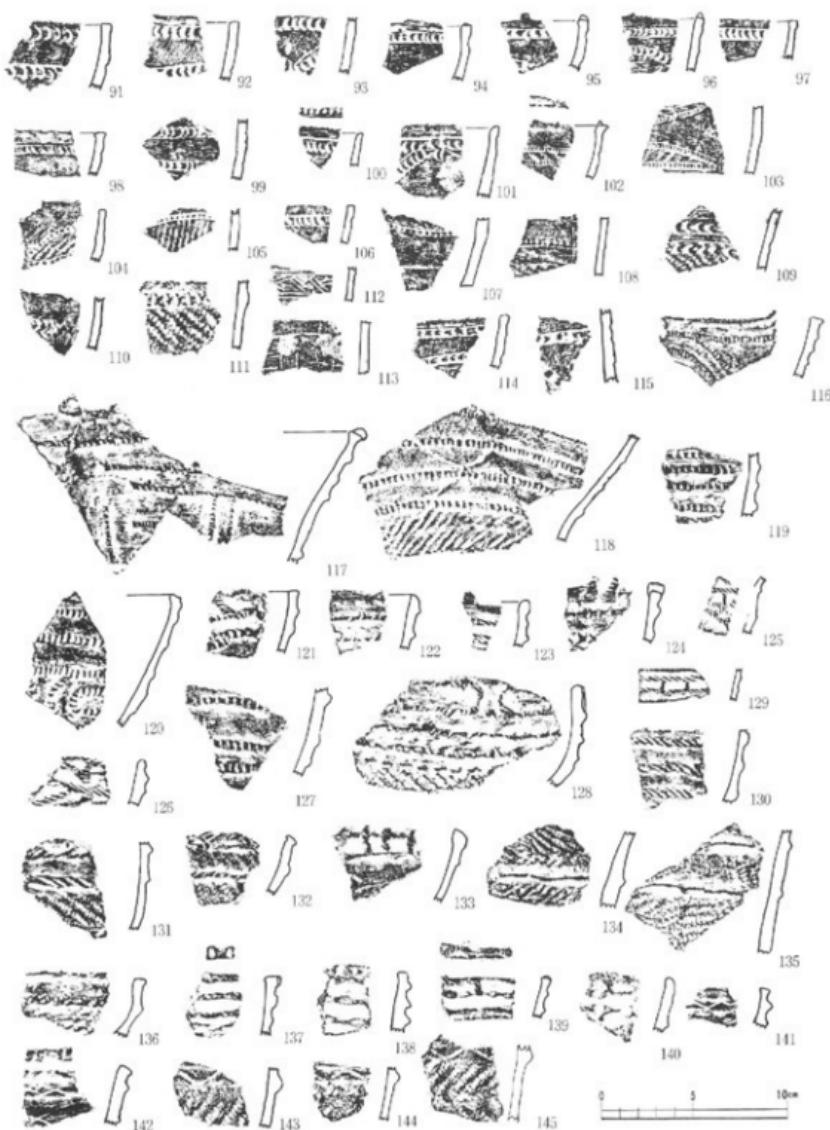
挿図33の23～30は、「3」字状の刺突文土器であり、羽島下層II式に並行する。「3」字状刺突文の二連結施文が見られるものに、同図23・24・26・27・28がある。又、挿図33の25・29・



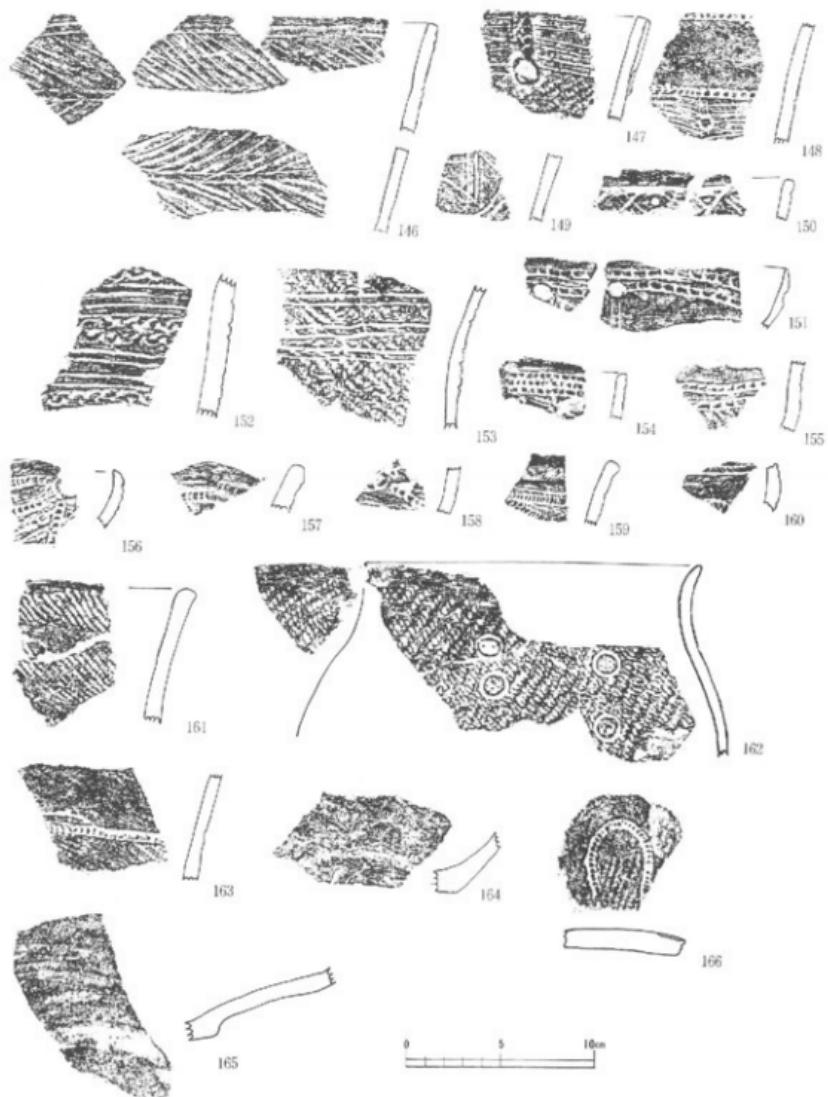
挿図33 第5号住居址出土土器



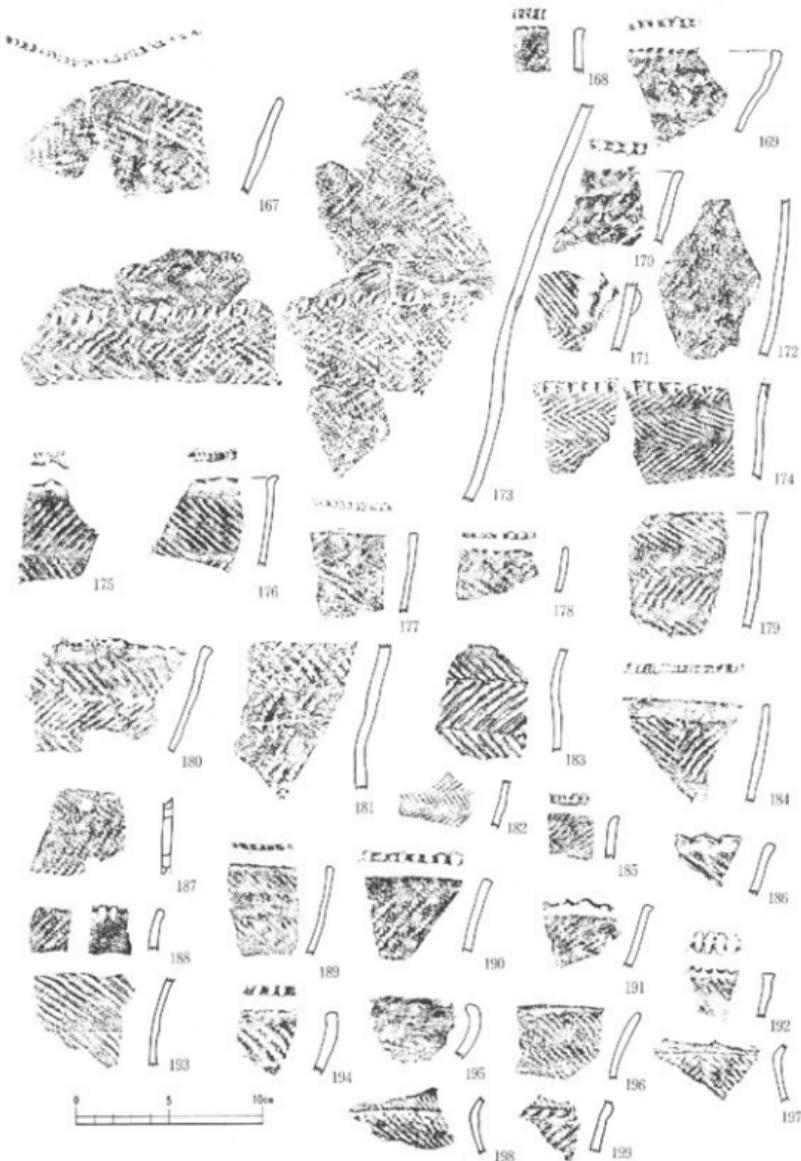
挿図34 第5号住居址出土土器



挿図35 第5号住居址出土土器



挿図36 第5号住居址出土土器



挿図37 第5号住居址出土土器

30は二連結施文の連結部が明瞭でなく、その部分が直線的になる。同図30はくずれた二連結施文と角ばった单一施文を混用している。同図31は角ばった单一施文具である。同図18の文様の一部にも单一施文具による刺突文が見られる。

挿図33の33・34はD字形爪形文が施される。同図34は地文に縄文が施されている。また両者共に、赤色顔料の痕跡が見られる。挿図33の35～挿図34の52までは、爪形刺突文土器である。挿図34の37～62までは、爪形刺突文を意識的に浮き出させるために文様外の部分を僅かに削っている。それによって微隆帯を示している。後述する粘付け凸帯とは区別される。北白川下層II式の土器である。挿図34の53～挿図35の92までは、連続爪形文土器であり、口唇部に刻目を施すもの、口縁が波状口縁となるもの、隆帯をもつもの、刺突文をもつものなどがある。内面に絞瓶が見られるものとして挿図34の54が見られる。いずれも北白川下層式並行のものである。

挿図34の52～90は、口縁部に連続爪形文帯を持ち、胴部に縄文が施文される土器群であり、北白川下層IIaに内面は無文で調整される。刺突文を行するもの（同図60・65・66・70・71・79・80・84）、ヘラ状工具を横に破線状に引くもの（同図61～64）がある。

口唇上に山形の小凸起を持つもの（挿図34の74・87）。うち74は口縁部に工具による刺突が見られ、その下部に連続爪形文が施されている。87は口縁にそって連続爪形文の施文具の両側のみが施文されている様に見られるが、竹管の痕跡は残されている。

挿図34の60・64・89は、口縁部が大きな波状をなす器形であり、文様は波状口縁に沿って垂下するものである。これらは北白川下層IIaに比定・類似するものである。

北白川下層IIb式に比定されるもの（挿図35の91～115）。

口縁部に連続爪形文が数條施されるもの（挿図34の39・40）。また、挿図32の35は、波状口縁をなす器形の口縁部に沿って6條と波状の頂点より垂下する1條の連続爪形文が施文される胴部、以下は斜縄文が施されている。

挿図34の37～52は、連続爪形文の施文の部分が微隆帯状になるものが見られる。これはその部分が刺突により微隆するのと連続爪形文間の無文部を調整することにより、文様を浮出すものである。突帶は貼付するものの前段階と考えられる。

挿図35の91～111・114・115は、連続爪形文が並行洗線または単線など沈線による規制を持つものである。文様構成は、資料が小破片のため断片的にしか窺えないが、直線的・弧状で木の葉状の文様を持つものである。同図103～105は、木の葉状の文様の中に縄文が見られる磨消縄文がある。平裁竹管による平行洗線文で文様を構成するもの、同図112・113が見られる。

口縁部を主として突帶文を貼付する土器群（116～145）は、北白川下層IIcに比定あるいは類似するものである。突帶状に施された文様より、下記の6類に細別される。

その1 突帯上に爪形文を施すもの	116~122
その2 突帯の上に斜めまたは垂直に刻目を持つもの	124~132
その3 突帯のみのもの	133~135
その4 突帯上に縄文が施されたもの	136・137
その5 構状の工具によって突帯上に押圧するもの	138~140
その6 突帯上に波状に刻目が接続して刻まれるもの	141~145

挿図36の146~166は、諸磯式土器に比定、類似するものである。うち、146~148は半裁竹管を用い平行沈線で菱形、円形刺突文、縄文が地文となる。

同図152は、平行沈線文とコンバス状の沈線文が見られ胎土には僅かに纖維を含んでいる。諸磯古式によるものである。

諸磯a式に比定される土器のうち、同図162は縄文地継位に円形刺突文を施すもので色調は橙褐色を呈する。

半裁竹管による連続爪形文様をなすもののうち、連続爪形文はC字状になっているもの（同図153・156・157）、円形刺突文が見られるもの（同図159・160・163）、また押引文があるもの（154, 155, 158）がある。同図158は、平行沈線による区画文を持つものである。

また、平行沈線で菱形状の区画に円形刺突文が見られるものがある諸磯C式に比定、類似するもののうち、同図146~150は集合沈線による文様を構成するものであり、146は口縁部の破片であるが、羽状に集合沈線が施される、147は浮線文が貼付され、その部分に円形ボタン状の貼付が見られる。148は、平行沈線による肋骨文状に施文が見られその中心となる垂線上に円形刺突文が見られる。

同図164、165は浅鉢の底部である。同図166はメンコである。

挿図37の167~199は、器壁は薄手で地文が斜縄文、羽状縄文が主体となる土器である。

器形は口縁部が開くものが大部分である。口縁部は口唇上に刻目、工具による压痕による刻目も見られる斜縄文と羽状縄文がある。いずれも内面は平滑に調整されている。

石器類（挿図38~40）

挿図38の1~23は全て打製石鎌である。うち1~4は平基無茎鎌、5~23は凹基無茎鎌、25、26は凹基鎌に分類される。同図24は未製品とも考えられる。

挿図38の27~29は石錐である。うち、27・28は錐部をやや長めにし、つまみ部と錐部の区別が明確になっている。29は断面が菱形をなし、棒状のものである。

挿図38の30~38は、石匙で全てつまみをもっている。うち、31・36は台形状でつまみの両側が肩をなすものである。32~35は三角形状をなし、北白川下層式に伴なうものに類似している。



挿図38 第5号住居址出土石器

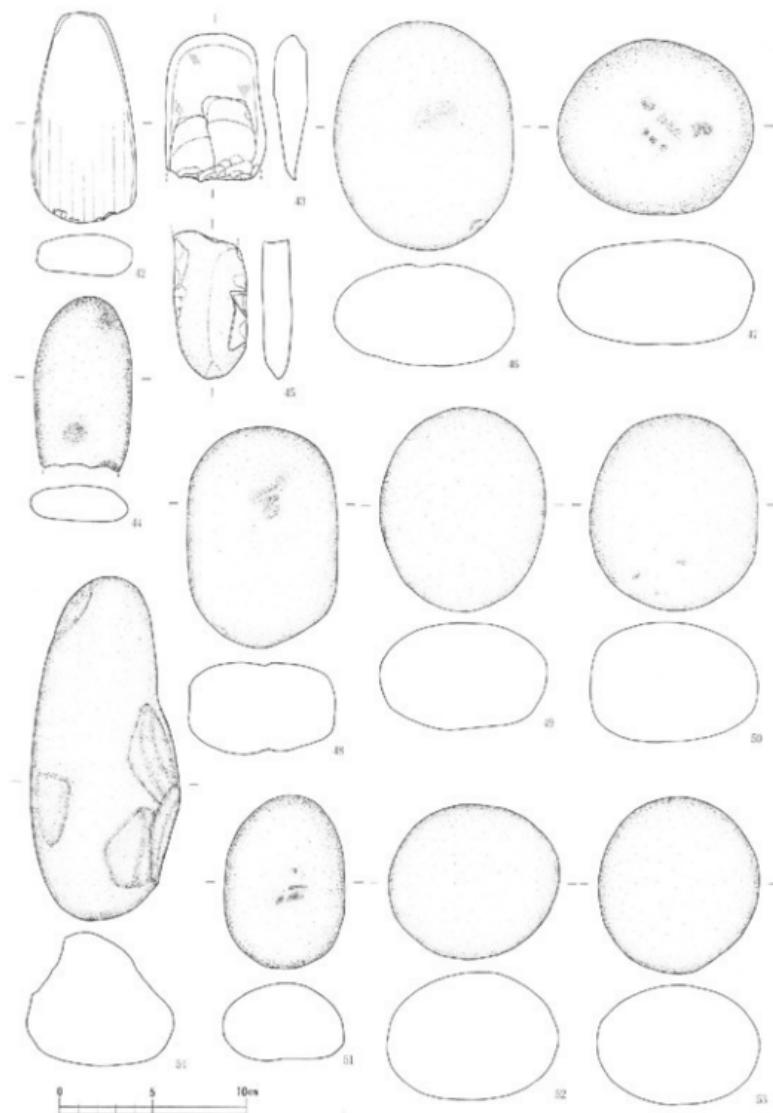
37・38は横形である。

挿図38の39～41は撲器である。

挿図39の42は、定角式磨製石斧で、刃部は両刃で石質は蛇紋岩である。

挿図39の43は、扁平な橢円形状の礫の一端を加熱して刃部をつけたものである。

挿図39の44・47・48・53は、磨石の一部を敲石として使用したもので、同図45・54は、棒状



挿図39 第5号住居址出土石器



挿図40 第5号住居址出土石器

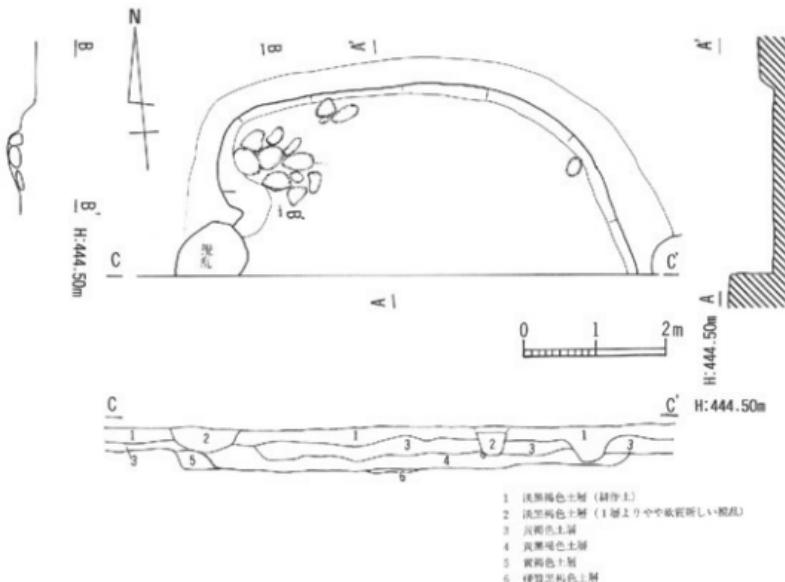
をなし、両用に使用されたと考えられる。同図46・49～52は、磨石である。

挿図40の55～78は、全て梢円形状の扁平な礫の両端を敲打した鍛石錘である。同図79は扁平な粘板岩の両端に切込みを入れた石錘である。

第6号住居址（挿図41）

本住居址は第2地点調査地区の第5号住居址の南西のG23・H23の方区に位置する。本住居址は発掘区域外の部分に亘っているため、約4割程検出されたのみである。住居址の平面形は検出部分より推定すると、隅丸方形状を呈する竪穴住居址と考えられる。

住居址の遺存部の長軸は東西方向で約590cmを測る。壁は僅かに開いて立ち上がり、壁高は約20cm前後である。床面はほぼ水平である。柱穴、ピットは検出されなかった。住居址の西北部分の壁が内面に僅かに張り出している。その部分の北側に、ほうり込まれた状態で散石が見られた。この石の上部及び下部より同一個体の土器（挿図42の27）が出土した。その出土状態よ



挿図41 第6号住居址

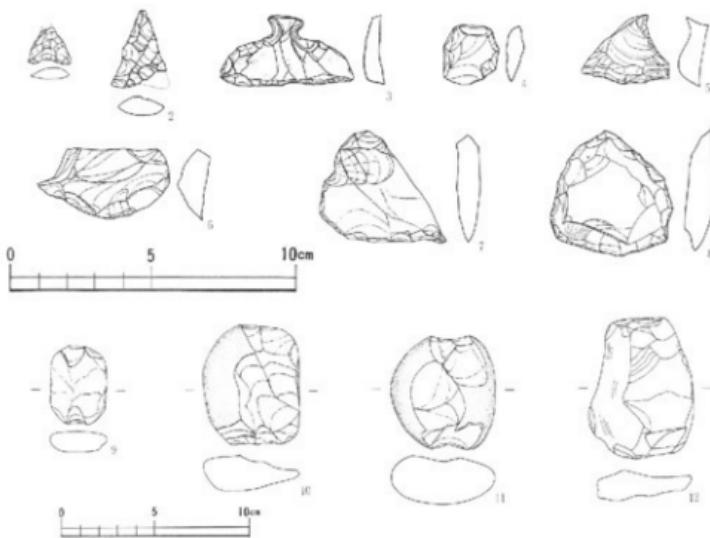


挿図42 第6号住居址出土土器

り一時的に掘り込まれたものと考えられる。

住居址の壁面立上の外周に添う様に幅50cm、厚さ約1cm程の砂質黄褐色土が見られた。

覆土は2層であり、出土遺物も少量であり、発掘時の所見によると、あまり長期に亘って使用されたものとは考えられない。



挿図43 第6号住居址出土石器

土器類（挿図42）

第6号住居址は覆土中の土器が少量であった。挿図42の1は短かい刺突文が見られる。器厚は薄い。同図2・3・4は縄文の見られる縄文前半の土器である。同図5～8は連続爪形文が施文される。器厚は薄く、焼成は堅緻である。北白川下層IIa式に比定される。平行沈線による規制を持つものと持たないものが見られる。同図9・10は爪形文を連続的に押圧することにより、その部分が僅か隆帯状になっている。うち10は、その下部に別の工具によって幅広い連続爪形文が見られた。北白川下層II式の特徴が見られる。又、同図11・23・24は爪形の両端部を点列状に押圧し中隔部分を無文化する様に施文されている。同図12～22は突帶文を貼付する土器群であり、12～20は突帶上に刻目が付き、21・22は工具によって押え目が僅かに見られる。北白川下層IIc式に類似するものである。

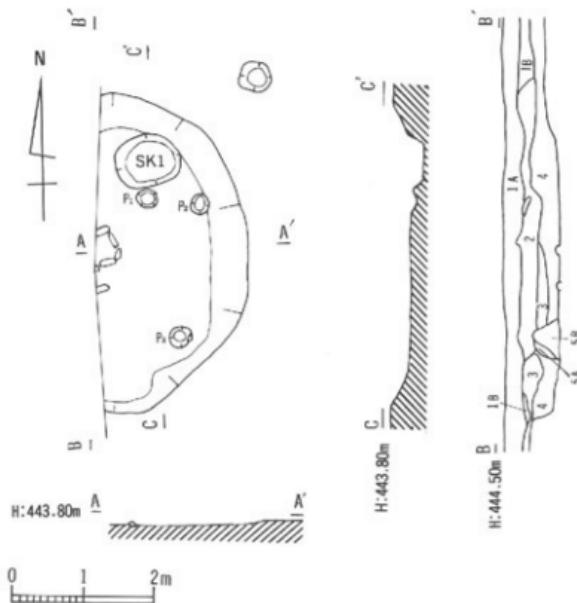
同図26は櫛状工具によって横に直線や波状文、また罐部を渦巻状をなす斜めの文様が見られる。胴部以下に斜縄文が施されている。胎土には纖維は混入しない。色調は橙褐色である。有尾式の系統をひくものである。

同図25・27は諸磯式b式土器である。同図28・29は十三菩提式である。同図30・31は前後

葉の羽状縄文である。

石器類（挿図43）

石鎚（挿図43の1・2）は打製石器であり、四基無茎鎚である。同図3は石匙でつまみを持つ横型である。同図4～8は不定形搔器である。同図9～12は礫石錐である。同図12は粘板岩の扁平な礫の両端を打欠いたものである。



土層の説明

第7号住ビット深度表(cm)

P 1	8
P 2	4
P 3	8
SK1	25

1 A	淡黒褐色土層（現在の耕作土）
1 B	淡黒褐色土層（1 Aよりやや古い耕作土と考えられる）
2	黒褐色土層
3	黄黒褐色土層（黄色砂質土を含む）
4	黄褐色土層
5 A	黄色砂質土層（黄褐色土中にブロック状に混入）
5 B	黄色砂質土層（地山の土に近い）

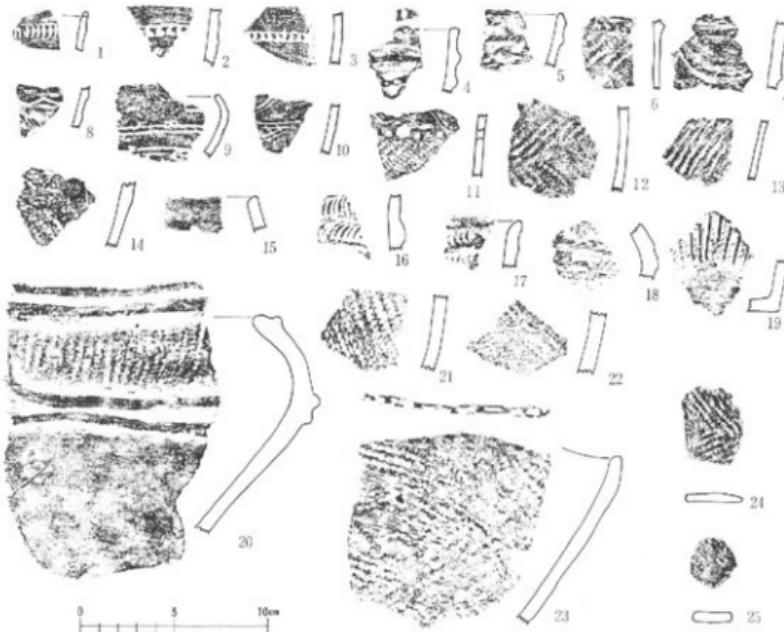
挿図44 第7号住居址実測図

第7号住居址（挿図44）

第7号住居址は、第2地点調査区第6号住居址の西に当るG23・G24方区に位置する。本住居址の約半分は調査区域外であり、住居址の全貌を把握することができなかった。遺構は、基盤となる黄褐色土層を掘り込んだ竪穴住居址である。住居址の平面形は、検出された部分より、楕円形を呈するものと推定される。規模は、南壁から北壁に向って長軸は約450cmを測る。壁は、北面では緩やかに立上り、壁高は17cm前後、東壁は20cm前後、西壁は23cm前後である。床面はほぼ水平で、良好な硬化面が確認された。

炉址は、ほぼ中央の部分と思われる位置に、石閉炉が検出された。炉の平面形は方形と推定される。

床面上にピットは3基と土坑1基が確認された。 P_1 ・ P_2 ・ P_3 は深さ8cm前後の浅いものである。 P_1 ・ P_2 は駆柱と考えられる。土坑は床面の北東隅に検出され、その平面形は楕円状を呈している、規模は長軸95cm×短軸65cm×深さ25cmである。



挿図44 第7号住居址出土土器

本住居址上の土層は表土より5層察される。覆第5A層の黄色砂質土は黄土がブロック状に混入したもので、住居址の確認された覆土上部より、床面の硬化面上部まで堆積していた。この黄土混入土は住居破棄後に振り込まれたと考えられる。覆土中の遺物は、小量出土したのみである。

土器類（挿図45）

本住居址の覆土中の土器は少量であり、また大部分が前期の土器である。挿図45の1～3は、薄手で堅緻、平行沈線による規制のあるもので、連続爪形が施されている。

同図9～11は半裁竹管による平行沈線文が施されている。うち、11は刺突文が見られる。これらは北白川下層IIbに比定される。

同図4～8は、突帶文を貼付するもので、いずれも小破片である。うち、5～8は突帶文上に斜めの刻み目を施すもの、4は棒状施文具で押圧するものなどが見られる。これらは北白川下層IIc式に比定される。

同図12～14は、薄手の縄文または羽状縄文であり、北白川下層II式に伴なうものである。

同図15～19は、諸磯式に半裁竹管による連続爪形文が施されている。うち、15は列孔浅鉢の口縁部と推定出来る。また、16～18は爪形で連続爪形文が施されている諸磯式b式土器である。そして、19は底部に近い部分の破片であり、ソウメン状浮線文が施されている諸磯式c式土器に比定される。

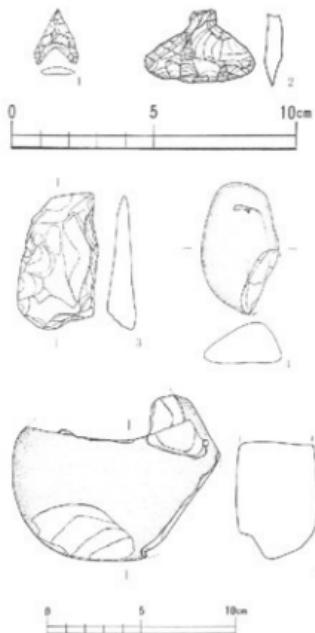
同図21～23は縄文のみの土器で前期後葉の時期である。同図20は中期の土器片である。

同図24・25は、メンコで、覆土中より2個出土している。

石器類（挿図46）

挿図46の1は打製石鎌で、凹基無茎鎌に属し、石質は下呂石である。

同図2は、横形の石匙、3は打製石斧、4・5は磨石である。



挿図46 第7号住居址出土石器

第9号住居址（挿図47）

本住居址は、第2地点調査区のI23、I24、J23、J24方区に位置しており、第8号住居址に切られている。遺構の新旧関係は、第8号住居址は歴史時代であるが、本住居址は縄文時代の遺構である。

遺構の遺存状態は、第8号住居址によって切られ、全貌を把握することは出来ないが、遺存部よりして住居址の平面形は、隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は、長軸が約450cm、短軸は400cmを測る。

壁は、残存状態はあまり良好でなく、部分によっては僅かに1~2cmの痕跡を残す程度である。炉址は、地床炉であり住居址の中央部より西側に設けられ、炉の中央部に焼土が僅かに厚さ2cm前後観察された。小窓が6個散在している。

住居址の覆土は浅くて分層することは出来なかった。住居址としては保存状態が悪くその性格を知りえる資料に欠けていた。時期は縄文前期の北白川下層式である。

土器類（挿図48）

挿図48の1は、幅広い連続爪形文が施される上器で北白川下層IIaに比定される。同図2~5と8は、連続爪形文が施され沈線による規制がすべてに見られる。北白川下層IIb式に比定される。同図6・7は、半截竹管による連続爪形文で区画を描くもので、区画文のモチーフは木の葉状、菱形状などである。その区画内に縄文が充填され磨消縄文である。文様は諸磯式に求められるが、胎土・器厚からすると北白川下層IIb式に類似するものと考えられる。

同図9~18は、半截竹管による平行沈線文によって文様構成されるもので、頭部より口縁部は開きながら内湾する。器厚は薄手である。15は刻目のある突帯文が見られるものである。北白川下層IIb式に比定・および類似するものである。

同図19~35は、貼付突带上に刻みめを持つ土器である。北白川下層IIc式に比定・類似するものである。突带上に施された文様によって細分される。19は突帶のみで文様が見られない。20~25は刻目を施すものであり、20は口縁に平行し更にその平行突帶間に継に格子状に貼付していく。21~25は口縁に平行方向に貼付する突帶を基本としそれを中心に関多種な文様構成をなしている。26は突带上に棒状工具によって压痕をつけている。25は、突帶に刻目が付けられ更に口唇部より垂下する突帶が付き、その上棒状工具による押圧痕が見られる。27~29・32~35は、突帶に縄文が見られる。30・31は突带上に波状の沈線が施されている。

同図36~39は、諸磯式土器に作なう列孔浅鉢土器である。39は器形よりして列孔浅鉢となるもので、諸磯b式土器に比定される。

同図40~42は、結節浮線文土器である。小破片であるが前期末葉に属するものと考えられる。

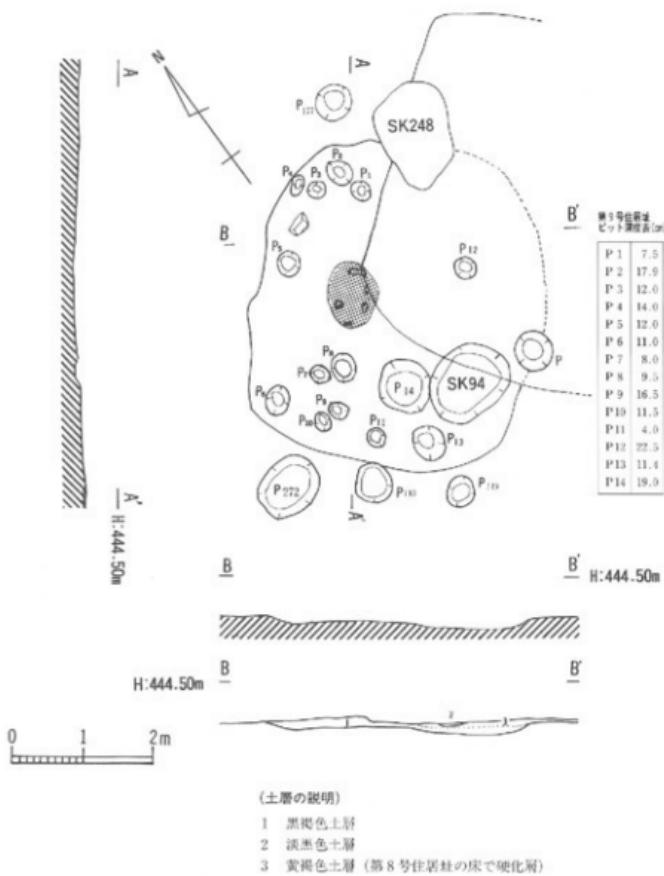
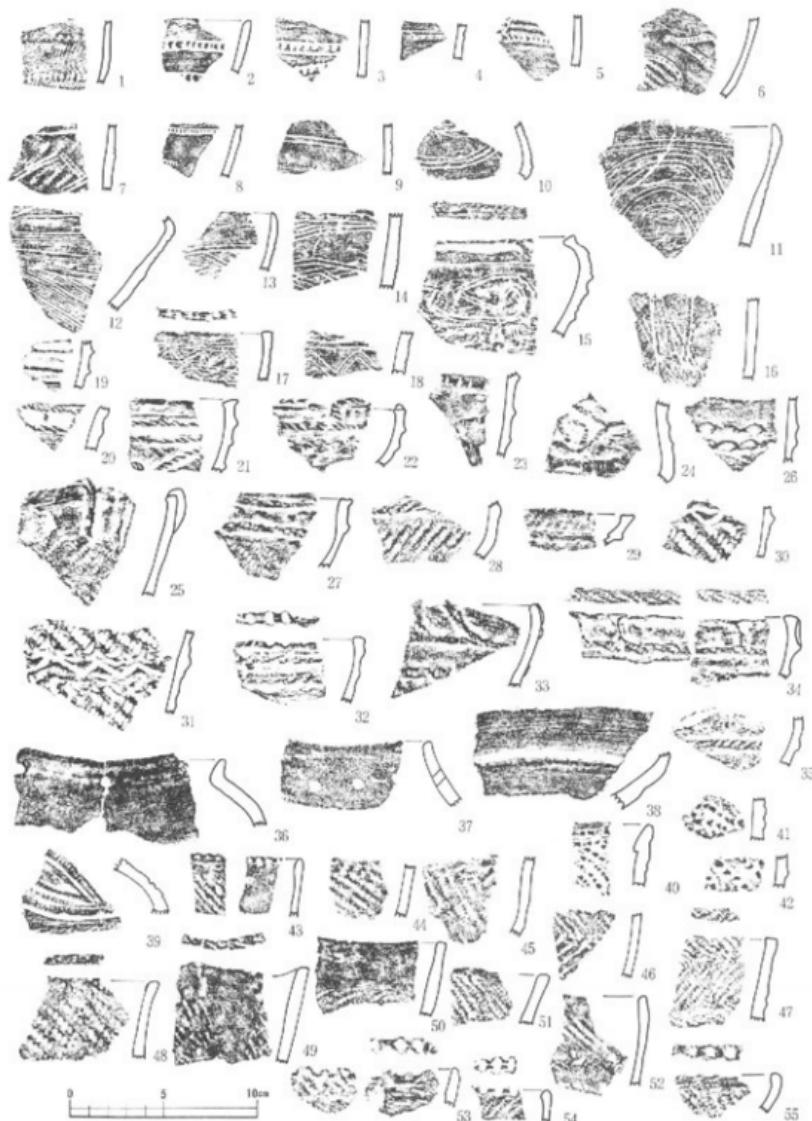
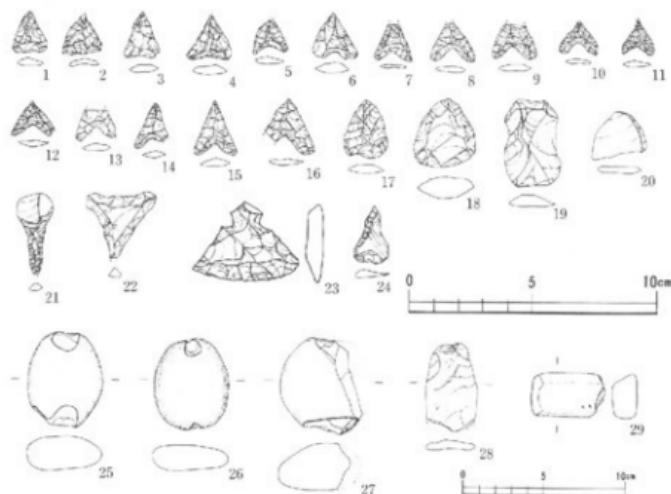


図47 第9号住居址実測図



挿図48 第9号住居址出土土器



挿図49 第9号住居址出土石器

同図44～55は、前期の後半の斜縄文・羽状縄文である。同図43は前期前半の斜縄文である。

石器類（挿図49）

挿図49の1～19は全て打製石器である。1・2は無基無茎鎌で、3・4もわずかに基部が弓なりになってはいるが同類と考えられる。

同図5～16は凹基無茎鎌・同図17・18は円基鎌である。

同図19・20は、不定形な搔器である。

同図21はつまみのある石錐である。

同図22は三角形状をなす器形であるが、先端の断面が三角形であることや、磨耗痕などからその先端は錐部と推定される。

同図23はつまみのある石匙である。

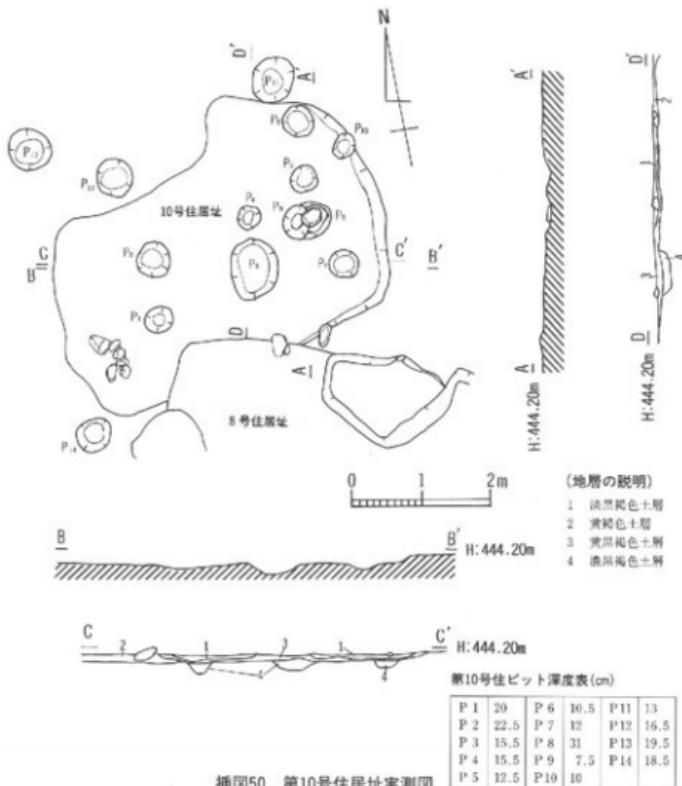
同図24は剥片を加工して錐部をもつものである。

同図25～27は蝶石錐。同図28は扁平な粘板岩を使用した石錐である。

同図29は断面台形をなす砥石である。

第10号住居址（挿図50）

本住居址は、第2地点調査区の第8号住居址の北側のJ25方区を中心とした位置に検出された。



遺構の遺存状態は極めて悪く、住居址の壁の一部分と、床面と推定される硬化面が確認された。第8号住居址の北壁によって、本住居址の南壁の部分が切られている。従って住居址の新旧関係は本10号住居址が先行する古い堅穴住居址である。

住居址のプランは、遺存部より隅丸長方形と考えられる。壁は東壁と南壁の一部が遺存している。壁は開きながら立上り、残存壁高は8~10cmを測る。

炉址は検出されなかった。床面上にビットが8基確認された。P₁・P₂・P₃・P₄・P₅・P₆・P₇・P₈は柱穴と推察される。また残存床面外に見られたP₁₂は、本住居址に関係のある柱穴と考えられる。住居床面上に検出されたP₃は、柱穴ではなく土坑と推定される長軸87cm、短軸

68cmの梢円形状の平面を呈し、深さは15cm前後の浅い土坑である。

土器類（挿図51・52）

挿図51の1は、4条の刺突文を連続して施している。同図2は、爪形文が千鳥状に施文されている。

同図3は、幅の広い連続爪形文が施される。色調は灰暗褐色を呈している。この土器は、北白川下層IIa式に比定される。

同図4～8は、口縁部の文様帯に連続爪形文が施され、平行沈線により規制を受けている。北白川下層IIb式に比定される。

同図9～13は、爪形文による刺突部分が隆帶状に凸状を示す9と、10～13の様に刺突爪形文間の無文部を調整することによって隆帶を意識的に表現しようとするものに分かれる。これらは北白川下層IIC式に類似するものである。

同図14～29は、口縁部に凸帶を貼付するもので、北白川下層IIC式に比定・類似するものである。14～24は、突帶上の文様は工具によって刻目が付けられている。16・17の様に爪形状の工具に近いもので刻まれているもの、また、18～23の斜状に刻まれているもの、25・26は棒状の工具によって押圧されるもの、また、27・28の様に刻目に繩文などの押圧を持たないものがある。29は、凸帶部に繩文が施されている。

同図30～37・40～42は、半截竹管による平行沈線文様を呈するものである。これらは、器厚、胎土より北白川下層IIb式に比定・類似するものである。

同図38・39・43・44は、前者の平行沈線と区別され、その胎土・器厚・文様構成より諸磽式に比定される。うち、38・39は繩文を地文とし弧状凸線状を組合せた文様である。また、43・44は小破片ではあるが諸磽式に比定される。

同図45・46・47は、列孔浅鉢土器であり、口縁に沿って列孔が穿がれている。胎土に雲母を含み、橙褐色の色調を呈している。諸磽式b式に類似するものである。同図48は、無文土器であるが同時期のものと考えられる。

同図49～63は、繩文が施文されている前期の土器である。49～53、56は羽状繩文である。54・55・57は小破片であるので羽状繩文との識別は出来ない。58～63は、斜繩文土器である。これ等の繩文土器はいずれも前期後半の土器である。

挿図52の64・65は、大歳山式土器に類似する土器で、緩やかな波状口縁部をなすもので、表面に斜状繩文を巡らしその上に連続爪形文を附した微凸帶をなすものである。口唇上には内外から深い刻目を施している。また、口唇内面部に帶状に繩文が施文されている。

同図66～70は無文土器である。67は薄手で表面に擦痕が見られ、内面には条痕が見られる。



挿図51 第10号住居址出土土器



挿図52 第10号住居址出土土器

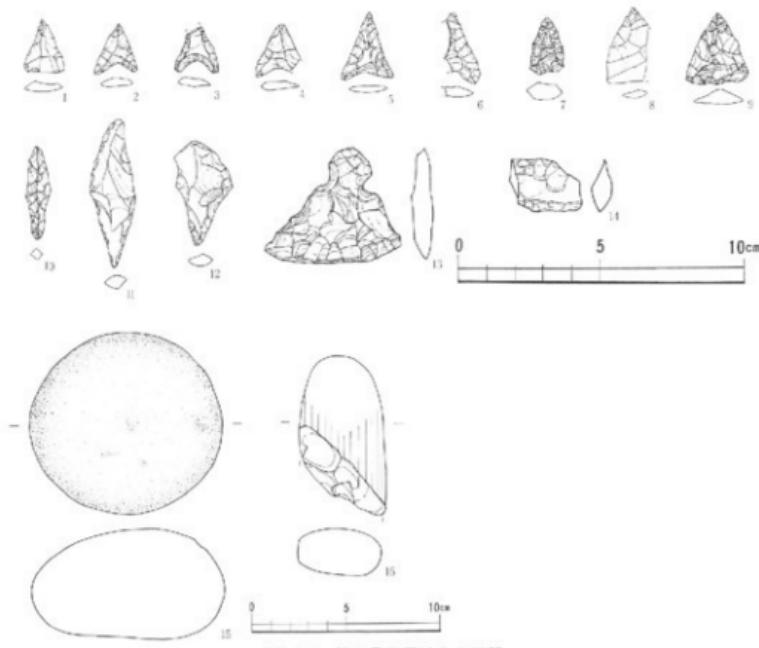
68は表面に擦痕が見られる。この土器は前期前半の土器である。69・70は無文部であり、70は列孔浅鉢の一部である。

同図71~80は底部の土器片であり、76を除いては前期後半の土器に伴なうものである。76は中期と考えられる。

同図81~85は小破片であるが中期前葉の土器である。同図86はメンコである。

石器類（挿図53）

挿図53の1~9は全て打製石錫である。1・8・9は無基無茎錫、2~6は凹基無茎錫であり、7は、円茎錫に属するものである。



挿図53 第10号住居址出土石器

同図10・11は棒状の石錐で、12は不定形な剣片の一端に両端から調整加工を施して錐部を作り出した石錐である。

同図13は北白川下層式土器に伴なう三角形状の特徴をもつ石匙である。同図14は不定形の搔器である。

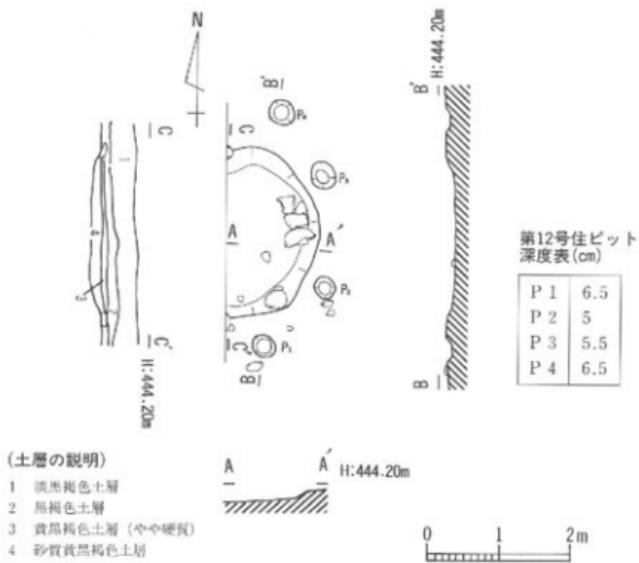
同図15は磨石、16は欠損品であるが同類である。

第12号住居址（挿図54）

本住居跡は、第2地点調査区のG27、G28方区に位置している。遺構は発掘調査区域の西端部に当る為、住居址の約半分程の検出に留まった。遺構は基盤となる黄色粘土質土層を掘り込んだ竪穴住居址である。

住居址の平面形は、楕円状をなすものと推定される。規模は長軸が南北方向で240cmである。壁は緩やかに開き立上る。壁高は6～10cm前後である。床面はほぼ水平である。

住居址の外面に、ほぼ等間隔で住居址に沿って直径30～35cm前後、深さ5～7cmのピット4



挿図54 第12号住居址

基が検出された。住居址に対して配置された状態より本住居址に伴なう柱穴と考えられる。壁面または床面に円窓・角窓が12個検出された。

覆土は2層に分けることが出来る。3層に当る黄黒褐色土層でやや硬質土である4層は砂質黄黒褐色土層で堆積の段階で基盤に含まれる砂質土が混入したと考えられる。

挿図55の1～3は、多縄文系の様式の土器と考えられる。

同図4は、半截竹管による連続爪形文でC字状のもので平行沈線を伴うものである。

同図5・6は突帯文上に縄文・刻み目を持つもので、北白川下層II C式に比定される。5は突帯上に縄文が、6は刻み目が施される。

同図7・8・10・11はいずれも破片で浮線文などは見られないが、半截竹管状施文具によって平行沈線文を集合して施すものであり、諸磯C式に類似するものと考えられる。8は、口縁部で口縁に沿って平行した集合沈線文が見られる。他の集合沈線文とは工具を異にしている。

同図9は刺突と押引文によるもので諸磯式土器である。

同図12～17は縄文が施文された前期後半期の土器である。



挿図55 第12号住居址出土土器

同図18は早期の尖底土器である。同図19は山茶碗（中世）の底部である。1～3・18・19はいずれも混入したものである。

石器類（挿図56）

挿図56の1はつまみを持つ楔形の石匙である。

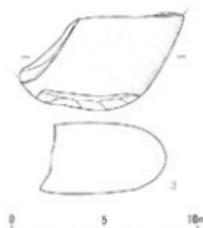
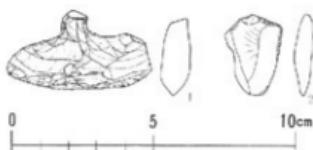
同図2は剥片の一部に加工痕が見られる搔器である。

同図3は磨石の破片である。

第13号住居址（挿図57）

本住居址は、第2調査区の第8号住居址の東側にあり、K24・L24方区に位置する。遺構は、基盤となる黄色粘土質層を掘り込んだ竪穴住居址である。

本住居址の上層部は、住居廃棄以降の搅乱等によって埋められた捨石が多く見られた。そのため遺構の保存状態も良好でない。また遺構の存在は

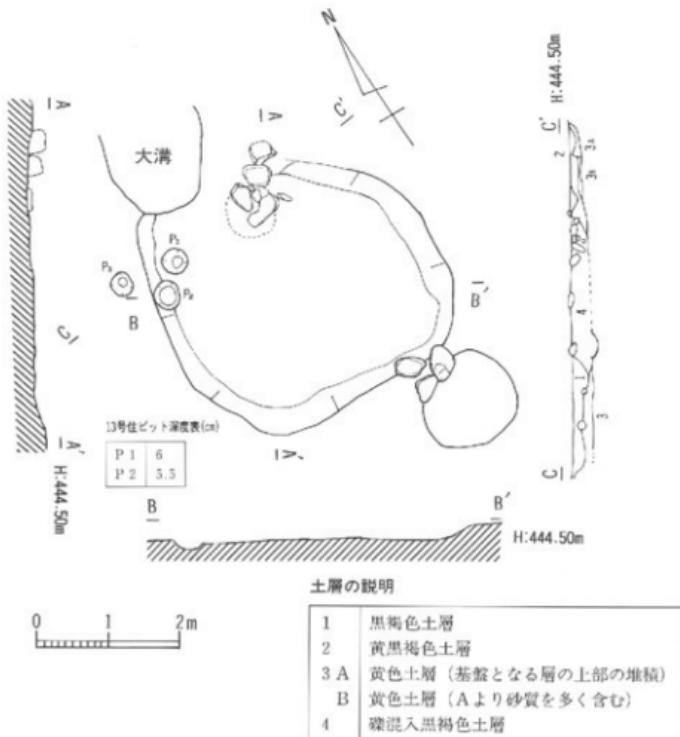


挿図56 第12号住居址出土石器

捨て石の除去によって確認された。

住居址の平面形は不定形な隅丸方形を呈している。北壁の一部が大溝によって切られ僅かに遺存している。東壁・南壁は緩やかに開きながら立ち上っている。壁高は東壁の部分で20cm前後、南壁で10cm前後であり、西壁は僅か数cmである。床面は西方に僅かに傾斜を示している。床面上にピット2基が検出された。

遺存する北壁の部分に7個の石が散在し、その下部に僅かな焼土と木炭片が見られた。先述した様に搅乱の部分である。また東南部の壁の上部に数個の石が見られ、この部分より古銭が、



挿図57 第13号住居址実測図

1個検出した。これらはいずれも当住居址に伴う時期のものではない。

土器類（挿図58）

挿図58の1は早期末の条痕文上器である。同図2は貝殻の腹縁を刺突する土器である前期初頭時期である。

同図3は半截竹管を押引状に刺突し、その下部に貝殻腹縁が刺突されている前期前葉の土器である。同図4・5は連続爪形文が刺突されたものである。同図6は平行沈線による規制を持つ連続爪形文であり、これらは北白川II b式に比定される。

同図7～10・16・17は降帯文上に刻目棒状・繩文による文様を持つものである。7は繩文による文様。8・9・16は刻目。10は隆帶のみ。17は棒状による押圧である。

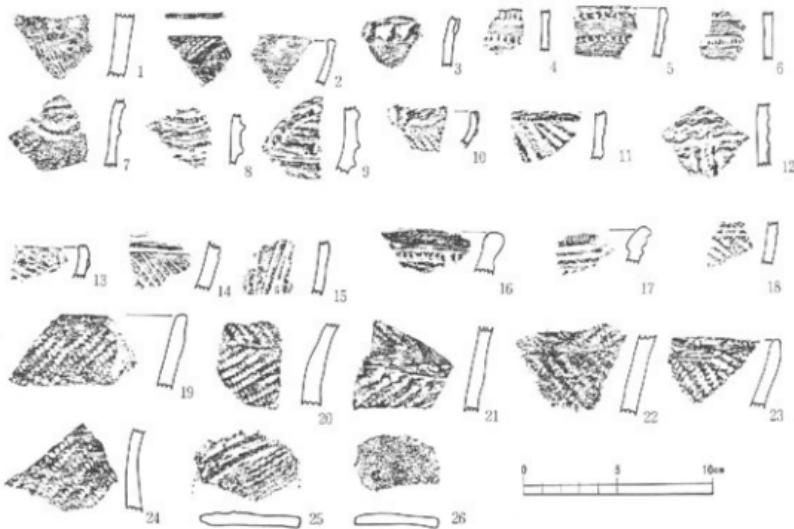
同図11・13～15・18は諸磯式土器系の土器である。

同図19～24は前期後半の羽状繩文斜繩文である。

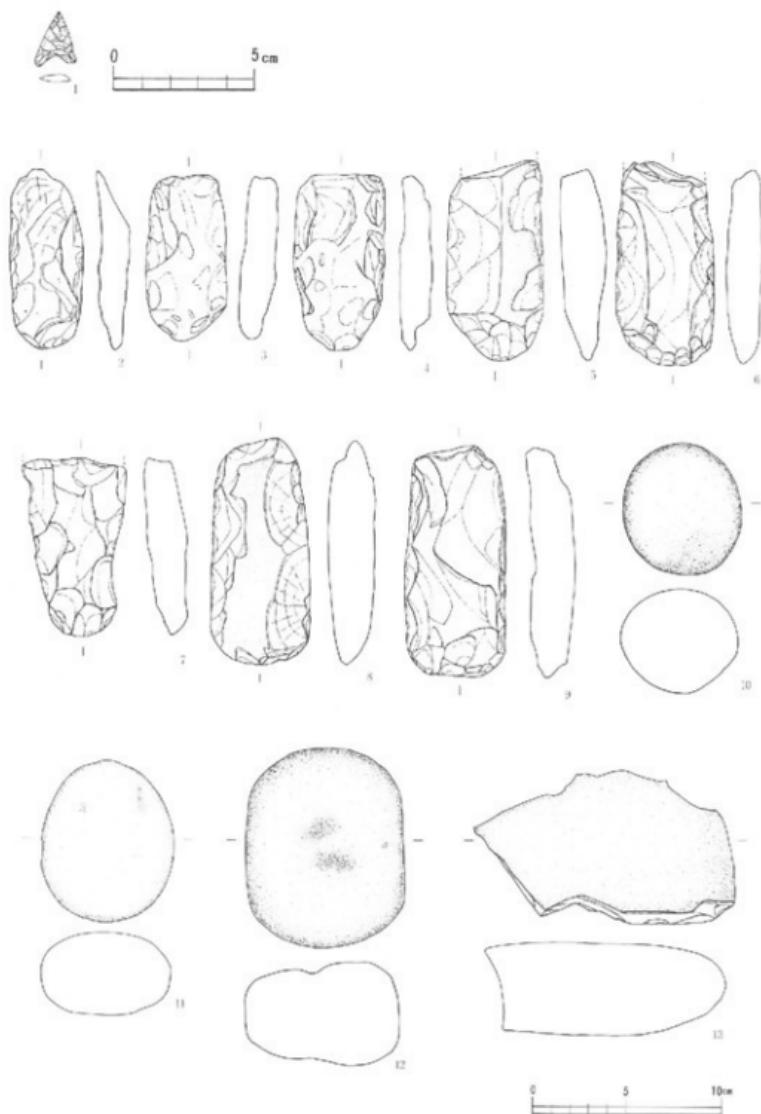
同図25～26はメンコである。同図12は北陸系中期前半の土器と考えられる。

石器類（挿図59）

挿図59の1は打製石鋤で、円基無茎鍬に属するものである。



挿図58 第13号住居址出土土器



挿図59 第13号住居址出土石器

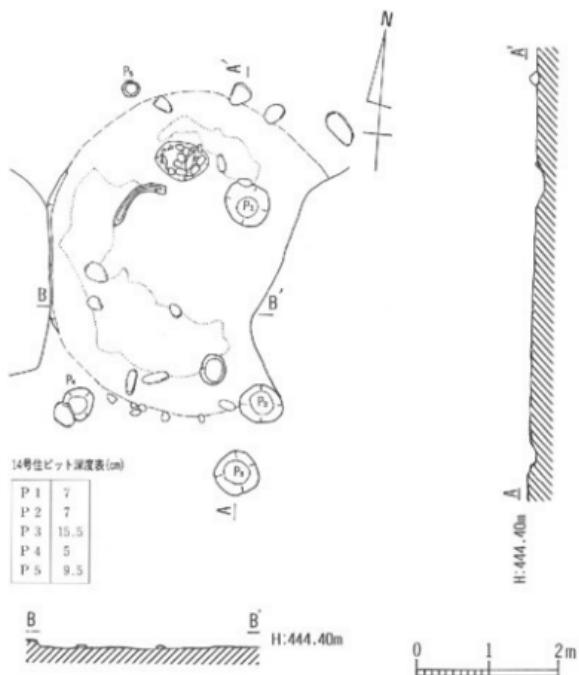
同図2～9はいずれも短円形の打製石斧で、石質は安山岩である。

同図10～12は磨石で、同図13は平板状石皿の破片と推察される。

第14号住居址（挿図60）

本住居址は、第2地点調査地点の東南部に当るL21、L22方区を中心としてK21、K22方区に亘って位置している。遺構は、黄色土混入砂礫層を基盤としている。堅穴式住居址である。

本住居址は、集石遺構に切合っている。また土坑によって重複している。住居址の平面形は明瞭に把握出来なかった。然し住居址の床面と推定される部分の周囲には礫群が存在し、住居の部分のみ礫を除去して床面を構築している。その床面は硬化度が高い部分が残存していた。



挿図60 第14号住居址実測図



挿図61 第14号住居址出土土器

38~40は5P出土

上記の様な点より住居址の平面形は、楕円状をなすものと考えられる。床面は硬化面よりは水平である。壁面の立ち上りと推定される部分が、西壁の一部に検出され、壁高は僅か7～9cm前後を測る。

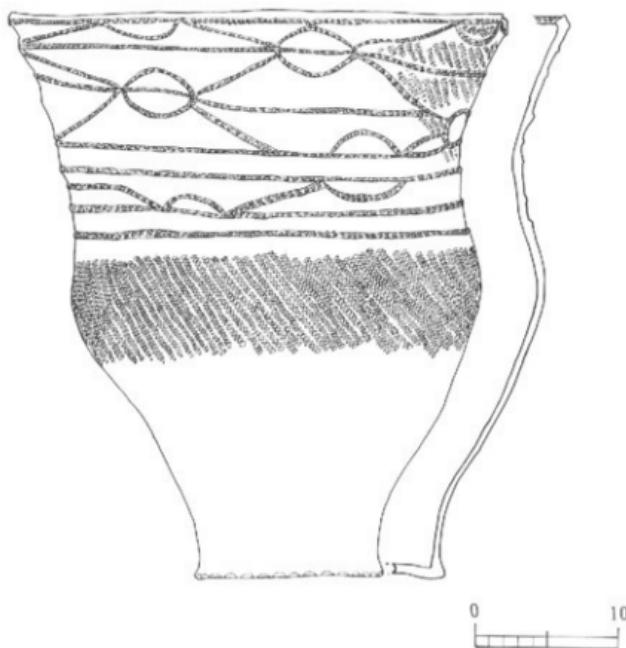
ピットは、5基検出された。

土器類（挿図61・62）

挿図61の1～7は、早期後半の土器片である。うち、1・2・3は撚糸文土器である。同図4・5は条痕文土器で纖維を含む。同図6・7は無文部でいずれも早期末の土器である。

同図8・9・11～13は、清水ノ上I式に比定するものである。同図10はアナグラ属の貝殻の腹縁を口縁に沿って横に一段、その下部に斜めに施文されている。口唇上に刻目が付けられている。上記の土器は混入したものである。

同図14～17は連続爪形文に刺突され、北白川下層II bに比定される。



挿図62 第14号住居址内出土土器

挿図62の土器は突帯文上に縄目が施文される文様を胴部上部に持ち、器形は口縁部が開き気味で胴部が丸味を持って僅かに膨らみ、その部分に縄目が施される深鉢形の土器である。文様より北白川下層II Cに比定される。

挿図61の18は結節状浮線文で浮線文は平行と波状を呈する。

同図20は突帯文上刺目と無文突帯文が知られ、その下部に半裁竹管による集合沈線が横に施文され、下部の地文に斜縄文が見られる。

同図21～23は、半裁竹管による集合沈線が見られる。

同図23～31は、前期後半に属する羽状縄文と斜縄文である。

同図32・33は、從来の船元IV式土器に当る、船元・里木式土器の第4様式に当る。同図34～36は、里木III式土器に当る船元・里木式土器の第6様式に当る。

同図37は、北陸系中期の土器である。

住居址のピット5より出土した同図38は、口縁部が肥厚し口縁部突帯文上に棒状工具による押圧が付けられ、口縁内面上部に縄文が施されている。同図39も突帯文が口縁に沿って二条めぐらしその上を棒状工具によって押圧している。同図40は突帯上を斜めに刻んでいる。

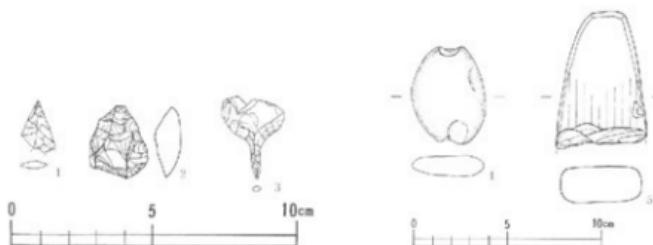
同図41、42はメンコである。

石器類（挿図63）

挿図63の1・2は打製石錐である。1は凹基無茎錐、2は円基錐に属する。

同図3はつまみを持つ石錐、同図4は砾石錐である。

同図5は刃部は欠損しているが、定角形磨製石斧である。



挿図63 第14号住居址出土石器

第15号住居址（挿図64）

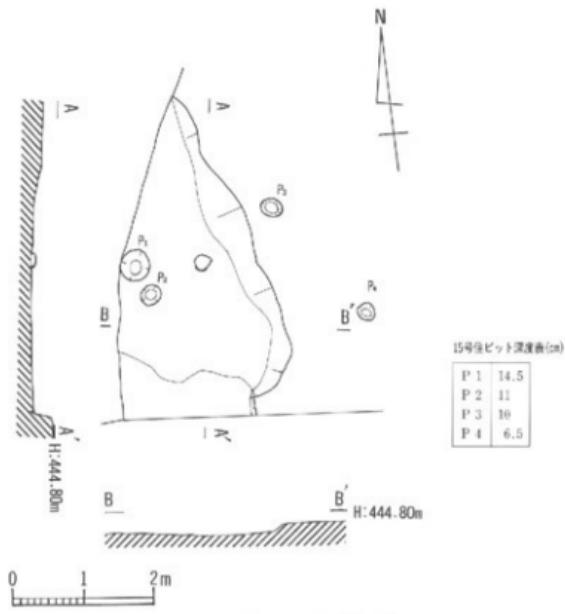
本住居址は、第2地点調査区の第16号住居址の南西部L27・M27方区に位置している。

遺構は、大溝などによって大部分が削平され、一部分の残存である。従って住居址の全貌を把握することは出来なかったが、壁の一部が検出されている点より、黄色粘土質層を掘り込んだ竪穴住居址の一部である。

壁は、東壁の一部で、開きながら立ち上っている。壁高は12cmである。床面は、扁平である。ピットは2基確認された。P₁は深さ13cm、P₂は深さ9.5cmである。

土器類（挿図65）

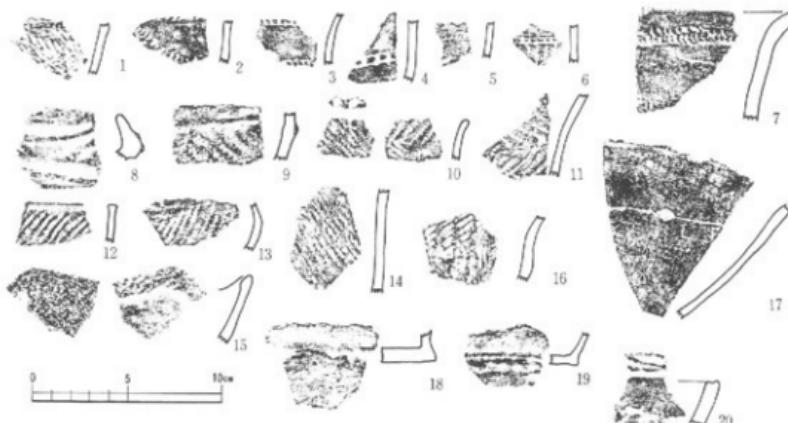
挿図65の1は器厚は0.5cmほどの薄手の土器であり、僅かに織維を含み、器面に爪形文を施したもので早期に属する。同図2～6は、連続爪形文土器が施される北白川下層II b式に比定、または類する土器である。同図7は文様は前者によく似ているが、胎土・器厚・文様の構成より諸磯a式に類似するものである。同図8・9は突帯文を貼付する土器であり、そのうち8は突带上に施文が見られない。9は、胴部以下が縄文になっている。



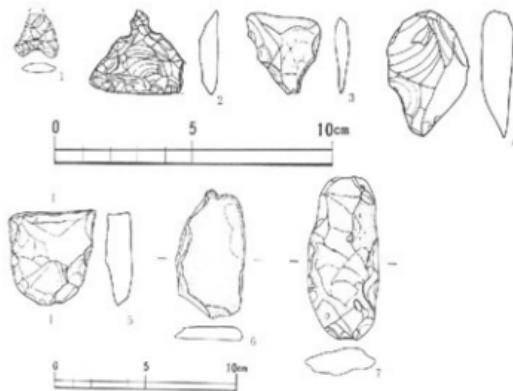
挿図64 第15号住居址実測図

同図10～15は、縄文が施されている。いずれも前後半期と考えられる。同図16は特徴のある雑な縄文の原体が施され、僅かに爪形文が施文されている。中期の鷹島式土器に類する。

同図17は前期の浅鉢の一部である。同図18・19は前期の底部である。同図20は口唇上に突帶状の隆帯を持つものである。



挿図65 第15号住居址出土土器



挿図66 第15号住居址出土石器

石器類（挿図66）

同図66の1は打製石錐であり、凹基無茎錐に属する。

同図2はつまみを持つ三角形状の石匙である。

同図3から5は剥片を一部加工した不定形な石器である。

同図6・7は石錐である。うち、6は粘板岩で出来ており、一部欠損しているが切込みが見られる。7は両端部が打ち欠いている。

第16号住居址（挿図67）

本住居址は、第2地点調査区の第15号住居址の北東部に見られる。M28方区を中心として位置している。遺構は、基盤となる黄色粘土質土層を掘り込んだ、竪穴住居址である。

住居址の平面形は、椭円形状を呈している。規模は、長軸は東西方向495cm、短軸は南北方向435cmを測る。

壁は、東壁より南壁と北壁の一部は緩やかに開きながら立ち上がっている。それ以外の部分は僅かに痕跡を留める程度である。壁高は、東壁で7cm前後、南壁で11cm前後、北壁で7cm前後である。

床面は、南方向に僅かに傾斜をなしている。床面中央よりやや東よりの位置に、僅かに凹んだ部分が見られ、熱が加わった小石が見られ、床面直上の覆土中に微量であるが焼土が混在していた。範囲を明瞭に出来る程ではなかった。この凹んだ部分が地焼炉の痕跡とも考えられる。

ピットは、上層部よりの新しい彫り込みを除いて6基検出された。そのうち1基は、土坑と推定される。

覆土は、3層に区分される。1層は上部よりの彫り込みの層、2層は黒褐色土層、3層は黄黒褐色土層である。2・3層によって観察される様に自然堆積したものである。

土器類（挿図68）

挿図68の1～5は、口縁部を中心とする部分に突帯文を貼付する土器で、北白川下層II C式に比定される。1・2は突帯上に斜めに刻目を施し、1は赤彩色を施す。3は突帯文上に縄文が施文される。4は突帯上に爪形文が、5は棒状工具によって押圧するものである。

同図6は、北白川下層II b式に見られる連続爪形文が施されているものである。

同図7～10は、諸磯b式土器に比定または類似する。同図11は、浮線より太い半截竹管状工具によって結節押引文が施されている。諸磯C式土器に比定される。

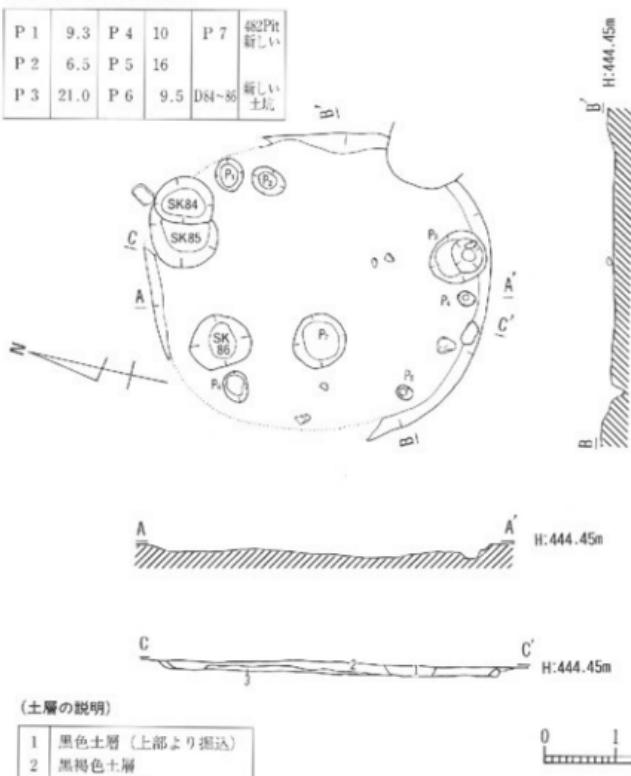
同図12・13は、浮線文が見られる前期末の十三芦提土器に類似する土器である。

同図14～21は、前期後半に属する土器で、羽状縄文・斜縄文が施された部分がある。

同図22は、縄文が施文された部分に三角状の文様になると思われる沈線が見られる。同図23

第16号住ビット深度表(cm)

P 1	9.3	P 4	10	P 7	482Pit 新しい
P 2	6.5	P 5	16		
P 3	21.0	P 6	9.5	D84~86	新しい 土坑

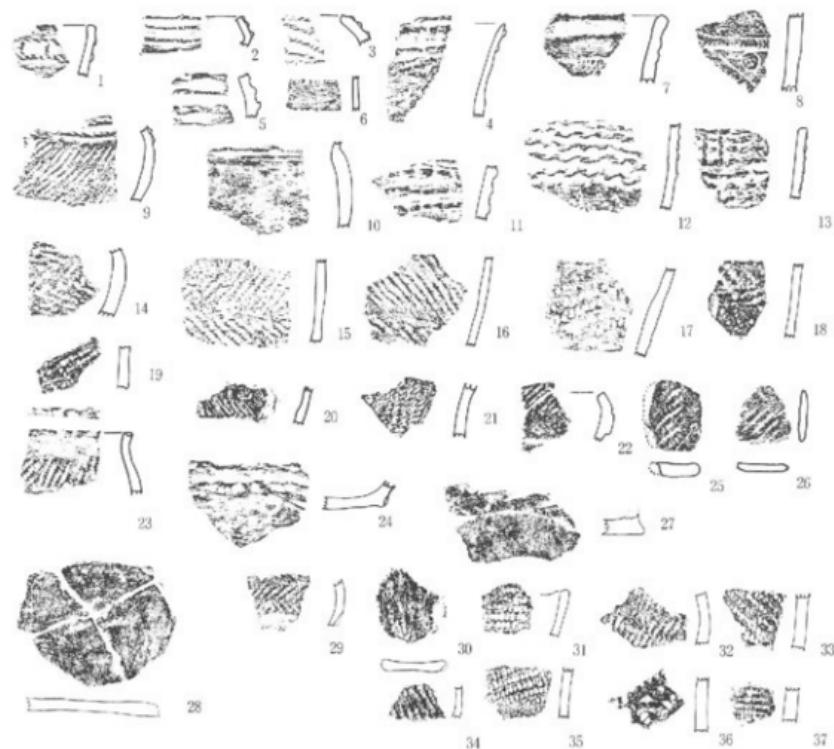


挿図67 第16号住居址実測図

は器面に縄文が施され、口唇部が押圧によって小波状をなしている。同図24は底部であり、工具の押圧による刻目文が見られる。これらはいずれも前期末葉の土器と考えられる。

同図25はメンコである。同図26は土器片を二等辺三角状に加工している。これは土器片使用による模造錫と考えられる。

同図27～37は16号住居址のビットより出土した。27はP₆出土・28・29・30はP₅出土。31～37はP₇出土。中でも36はやや古いと考えられるが全て前期の土器である。



挿図68 第16号住居址出土土器

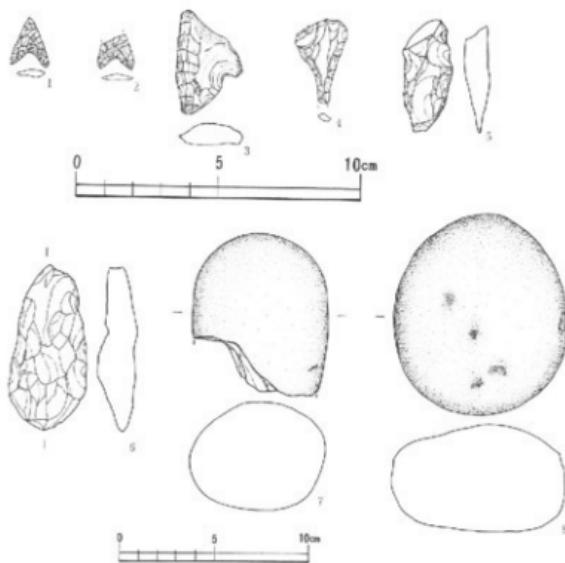
石器類（挿図69）

挿図69の1・2は打製石鎌で、凹基無茎鎌に属する。

同図3は僅かにつまみ部分の痕跡が見られる石匙である。

同図4はつまみを持つ石錐、5は棒状の石錐である。

同図6は打製石斧、7・8は磨石である。



挿図69 第16号住居址出土石器

第18号住居址（挿図70）

本住居址は、第2地点調査区のB30方区を中心として検出された。遺構は、基盤となる黄色粘質土層を掘り込んだ竪穴住居址である。

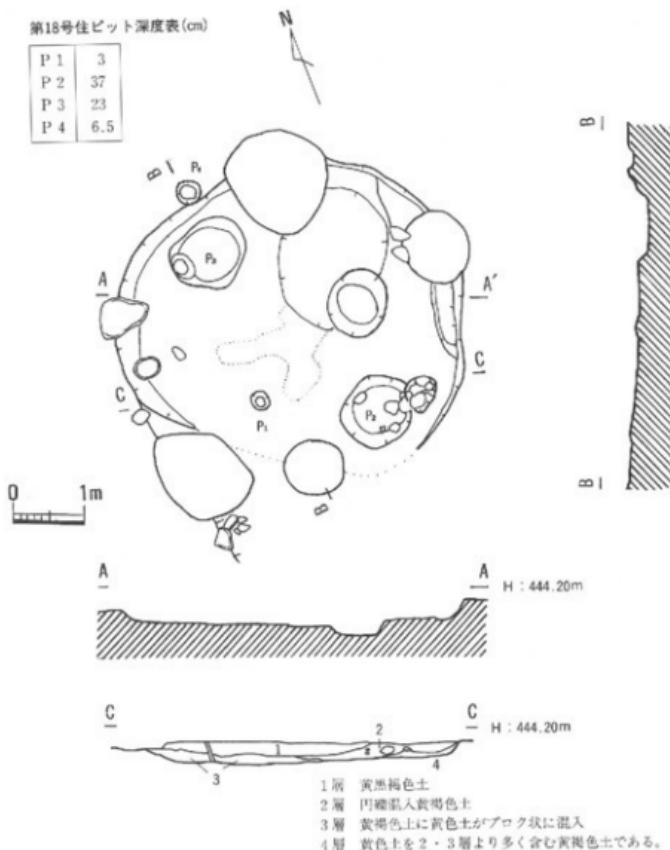
住居址の平面形は、南壁の部分は搅乱によって明瞭でないが、遺存部より不定形な楕円状を呈するものである。

壁は、南壁の部分を除いてはほぼ検出できた。壁は開きながら立ち上がっている。壁高は、東壁部で8~26cm前後、西壁部は12cm前後である。北壁は10~15cm前後である。

床面は、中央部に向かって僅かに下り気味である。東壁測って幅40cm、深さ2~4cm、長さ100cmの溝が見られる。住居址の床面中央部に黄褐色の硬化面が見られ、地焼炉と考えられる。この硬化面の北東部は、住居廃棄後に約6cm前後の楕円形状の掘込みがみられる。

ピットは8基検出された。

覆土は4層に分層される。



挿図70 第18号住居址

土器類（挿図71～72）

挿図71の1は短い貝殻復縁による工具によって刺突文が縦位に施される。

同図2は内面に条痕が見られ、表面に細い沈線が縦位に施されている。1・2は、清水上I・II式土器に類似する。

同図3～35は、縄文前期後半の西日本系の土器である。同図27～30は幅の広い連続爪形文が

施されるもので北白川下層IIa式に比定される。同図3~31は連続爪形文が口縁部に平行して施されるものである。爪形文はC字とC字が逆になるものが見られる。また、同図13~26は平行沈線による規制を持つものが見られる。これらは北白川下層IIC式に比定または類似するものと考えられる。同図32~35は突带上を貼付するもので、無文(32)・縄文(34)・棒状工具によるもの(33・35)である。北白川下層IIC式に比定される。

同図36~45は、諸磯式に比定される列孔浅鉢形土器である。36・37・40~45は無文土器である。38・39は列孔部は見られないが器形よりして列孔浅鉢となるものと考えられる。38は半截竹管状の施文具で平行沈線で文様構成をなしている。39は沈線による区画を持ちその内部縄文が見られる。

挿図72の46は1点のみであるが棒状工具による文様を持っている。第6号住居址においても同類のものが出上している。

同図47は半截竹管による工具を使っての沈線文が施文されている。

同図48~52、54~56は集合沈線文を地文とし、浮線文を貼付するもので、その上に半截竹管状施文具で刺突文が施される。同図60~62は同類土器群の底部である。

同図64~67は前期後葉に属する縄文である。同図63・68~70は前期後葉に属する底部である。

同図71~77は中期前葉の土器で、71~75は北陸系新堺式土器に比定される土器である。76・77は西日本系の鷹島式土器に比定または類似する土器である。

石器類(挿図73)

挿図73の1~20は打製石鎌である。1~3は無基無茎鎌、4~13は円基無茎鎌、14~20は円基鎌またはそれに近いものである。

同図21は棒状の石錐、22・23は不定形の剥片に錐部を作り出した石錐である。

同図24・25はつまみ部を持つ石匙である。

同図26はビ--エス・エスキューで、27~32は不定形搔器である。

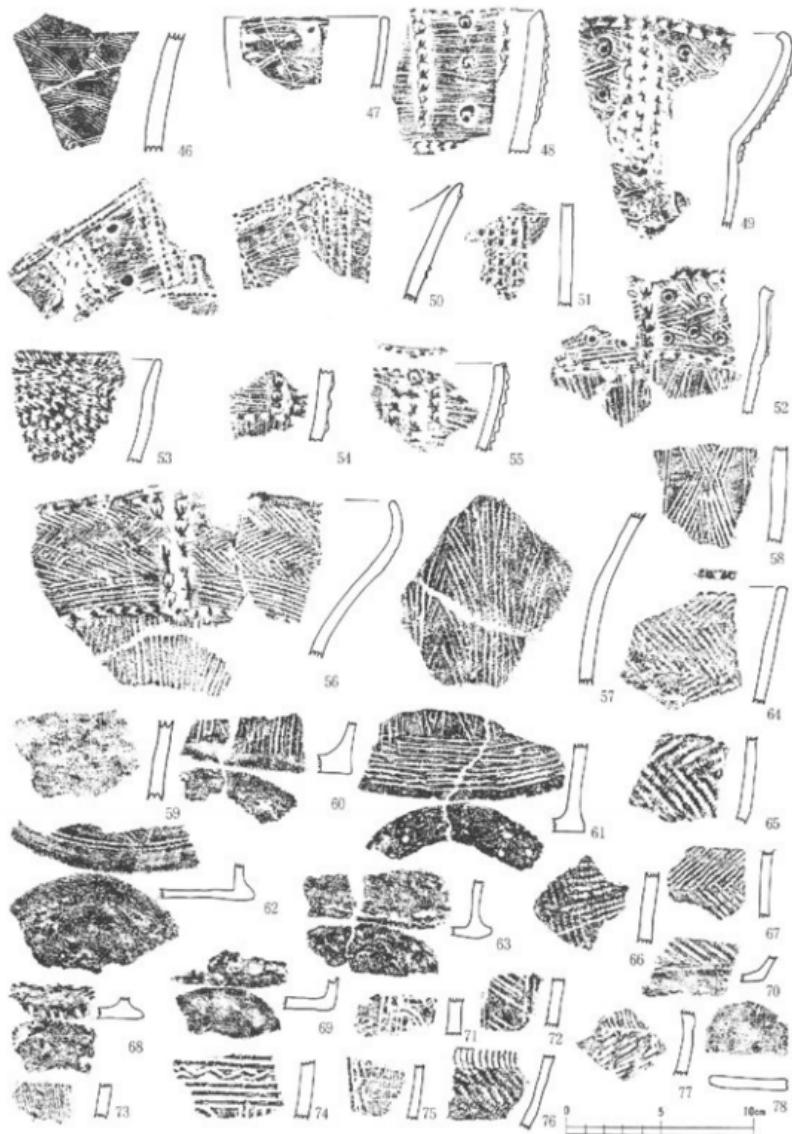
同図33・34は欠損しているが打製石斧である。

同図35~37は石錐である。

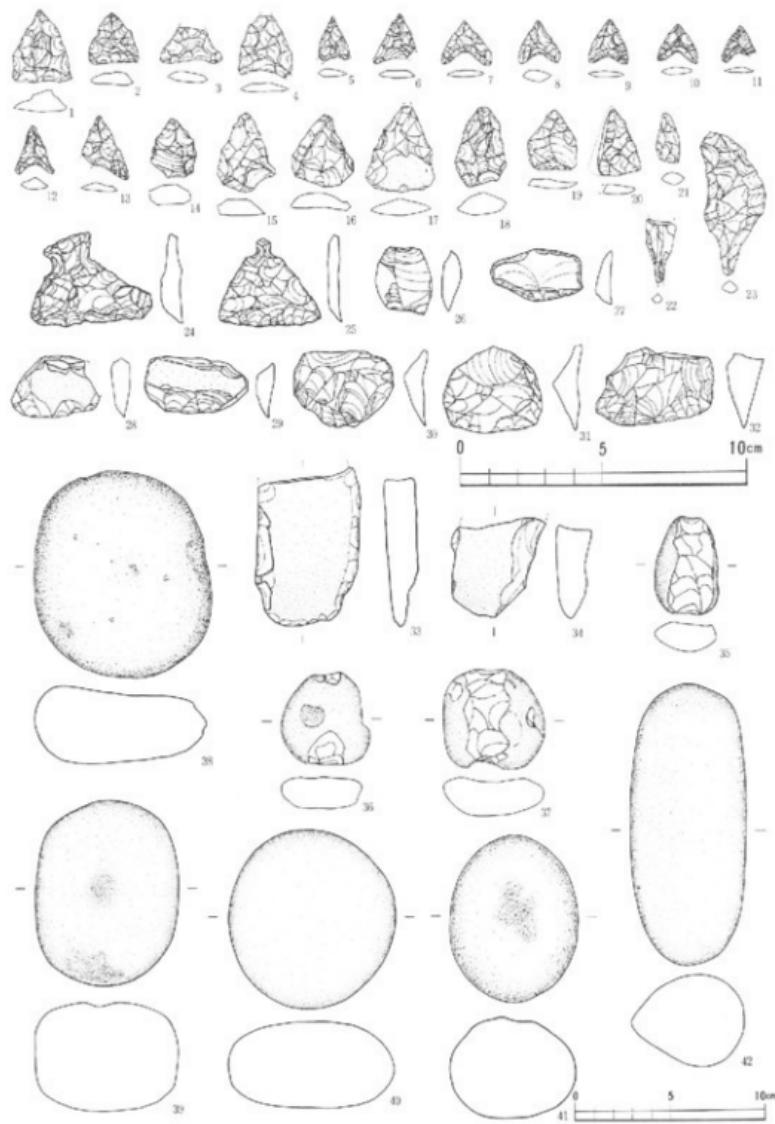
同図38~42は磨石で、39・41には敲石として使用され凹が見られる。42は棒状のものである。



插図71 第18号住居址出土土器（2-1）



挿図72 第18号住居址出土土器（2-2）



挿図73 第18号住居址出土石器

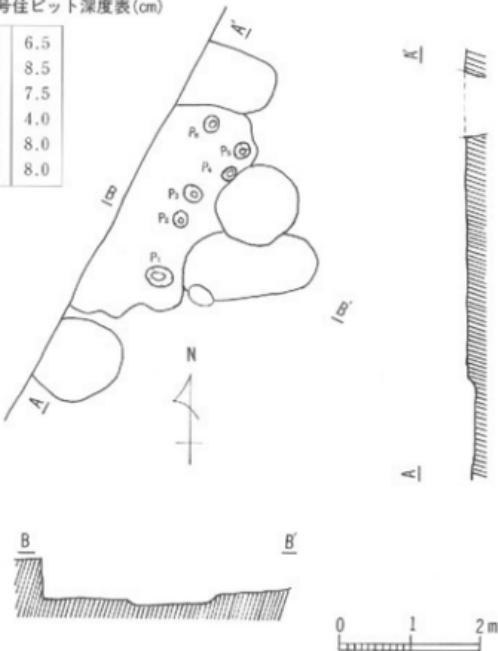
第19号住居址（挿図74）

本住居址は、第2地点調査区のB31・B32方区に位置している。遺構は電柱工事、農耕、土坑などで搅乱されているのと、西部が道路で調査区域外の為、住居址の床面のみが検出された。従って住居址のプラン等は明瞭にできなかった。

遺存する床面はほぼ水平であり、残存面に6基のピットが検出された。ピットの深さはいずれも浅く5~8cm前後である。

第19号住ビット深度表(cm)

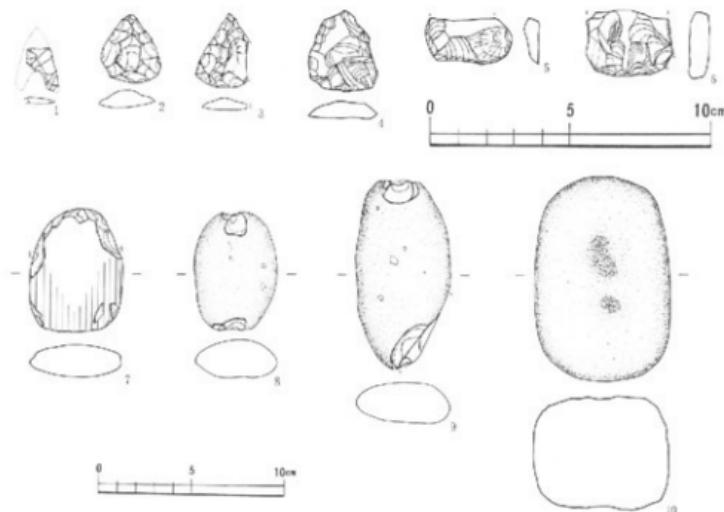
P 1	6.5
P 2	8.5
P 3	7.5
P 4	4.0
P 5	8.0
P 6	8.0



挿図74 第19号住居址実測図



挿図75 第19号住居址出土土器



挿図76 第19号住居址出土石器

土器類（挿図75）

挿図75の1・3は連続爪形文が施されるもので、器厚が薄く焼成が堅硬であり、北白川下層II b式に比定されるものである。同図2は、半截竹管による連続爪形文で区画文を持ち、区画内に縄文が見られ、磨消縄文が認められる。諸模式a式に比定されるものと思われる。

同図4～17は突帯を有する北白川II C式に比定あるいは類似する土器である。

同図23は胸部下端に刻目を有するものである。

同図18～23は前期の羽状縄文である。25は口縁部が折返し状に作られ、その部分に縄文が施されている里木I式に類似する土器である。その他に地文は縄文、口縁部に半截竹管による平行沈線をもち中期初頭と考えられるものなどが少量見られる。

石器類（挿図76）

挿図76の1～4は打製石鎌である。1は凹基無茎鎌、2～4は円基鎌である。

同図5・6は欠損品であるが搔器である。

同図7は磨製石斧、8・9は礫石錐である。

同図10は磨石と敲石を併用したものである。

第20号住居址（挿図77）

第20号住居址は、第2地点調査区の第19号住居址の北側のC33方区に位置している。遺構は、基盤となる黄色粘土質土層を掘り込んだ竪穴住居址である。

本住居址は、土坑・及び近世農耕、その他の搅乱に加えて、遺構の西部が道路で調査区域外のため全貌を把握することが出来なかった。

残存部の壁からみて隅丸方形の住居址と考えられる。残存部の壁はやや開き気味に立ち上がり、壁高は8.5cm前後である。床面はほぼ水平である。

ピットは9基検出された。壁よりのP₀・P₁・Pのピットは、この床面で深いが、他は5cm前後の浅いピットである。床面で埋甕が1個検出された。

土器類（挿図78）

挿図78の1～5は、口縁部に突帯文を貼付する土器で、北白川II C式土器に比定、または類似する土器で、1は突带上に刻目を持ち、2・3は棒状工具によって押圧痕を持つものである。4・5は突带上に文様を持たないものである。

同図6は、口縁部から胸部にかけて地文には縄文が施され、口縁部は頸部以下が凹む器形で頸部に数條の半截竹管による押引状の刻目を持つ突帯が施される。帯状をなす複合口縁となる。また口縁内面に折り曲がる部分には帶状に縄文が施されている。その下部に爪形が二段施され

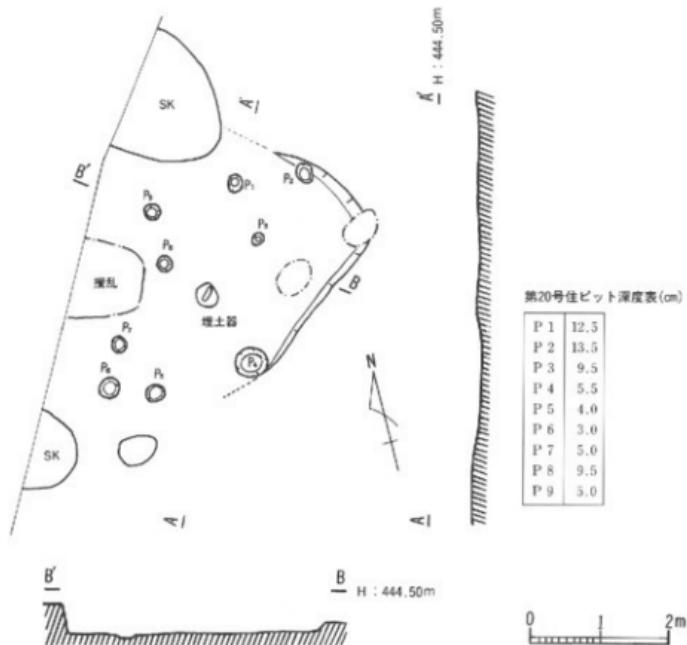
ている。

同図7～10も同類の土器と考えられる。これ等は北白川下層III式に比定または類似する土器である。

同図11は羽状縄文の部分である。

同図12は口縁部、内外面に円状の貼付文を持つものであり表面下部に結節浮線文が見られる。

同図13・14は底部の破片である。同図15はメンコである。



挿図77 第20号住居址実測図



挿図78 第20号住居址出土土器

石器類（挿図79）

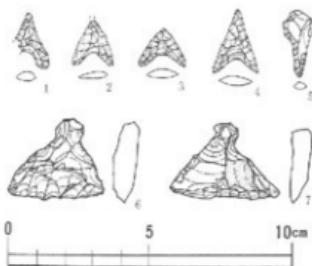
挿図79の1～4は打製石鏃で、全て無基無茎鉄である。

同図5はつまみ部分を持つ石錐である。

同図6・7はつまみ部分を持つ石匙である。

同図8は欠損品で全形は不明であるが、石槍の基部とも考えられる。

同図9は磨石・同図10は砥石である。



第21号住居址（挿図80）

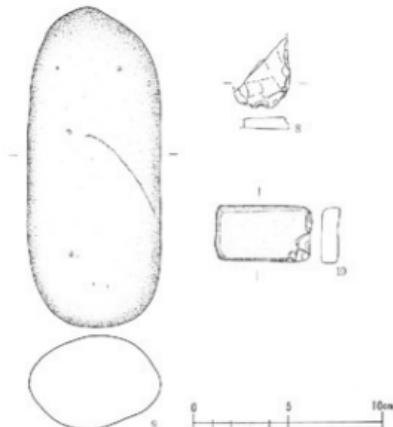
本住居址は、第2調査地区のC34・C35方区に位置している。遺構は、基盤となる黄色粘土質土層を掘り込んだ竪穴住居址である。住居址の西方の部分が搅乱していて、全貌を把握できなかった。住居址の平面形は、残存部に不定形の楕円状をなすと考えられる。東南の部分にやや突出する。この部分の壁外にピットが並んで見られるので、造出も考えられるが明瞭に捉えられなかった。

壁は、西壁以外は検出でき、壁高は北壁で11cm前後、東壁で10cm前後で、南壁で6cm前後である。床面は南西部にやや傾斜を示している。

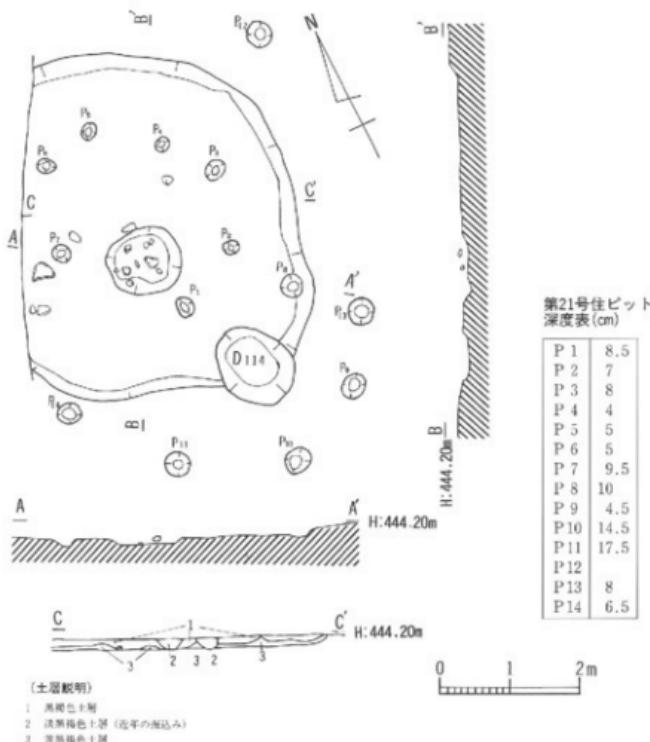
炉址は、住居址の中央部南寄りの位置に長軸約106cm、短軸90cm、深さ8cmの楕円形を呈するもので、焼石が見られた。

ピットは、床面上に8個確認された。壁面より60～90cm内側に、70～100cmの間隔で検出された。東南の隅に上部よりの掘り込みが見られる。

覆土の層序は3層みられる。第1層、黒褐色土層。第2層は黄褐色土層でその下部に床面が検出された。



挿図79 第20号住居址出土石器



挿図80 第21号住居址実測図

土器類（挿図81～82）

挿図81の1～9は、オセンペイ系の無文土器で、器形は口縁部が外反するもの（1）と、やや内湾する口縁をなすものとが見られる。器面の外面または内面に指圧痕が僅かに見られるものがある。

同図12は幅広い連続爪形が施文されている。同図13は爪形文間があまり密接していない。これらは北白川下層II a式に比定される。同図17は連続爪形文があり、また半截竹管による刺突を持つ突帯文を頭部に持っている。時期は前期初頭のものと考えられる。



挿図81 第21号住居址出土土器

同図10・11・15・16は沈線による規制を有する連続爪形文で北白川下層II b式に比定される。器厚は薄手である。同図14・18は上記の土器と共に通する文様構成もあるが胎土・器厚などより諸磯a式に類似する。

同図19～24・28は突帯文を貼付するもので、北白川下層II C式に比定・類似する。突带上に20・22・24・28は刻目、19・21・23は縄文が施されている。同図27は口縁内面部に帯状の折り曲げている部分に細い貼付突帯が付いている。北白川下層III式に近いものと考えられる。

同図25・26は列孔浅鉢土器である。諸磯式土器

同図29～40は羽状縄文・縄文の施文されている前期後半の土器である。

同図41～49は、集合沈線文が施されているもので諸磯C式に比定される。42は、ボタン状の貼付文が加えられている。

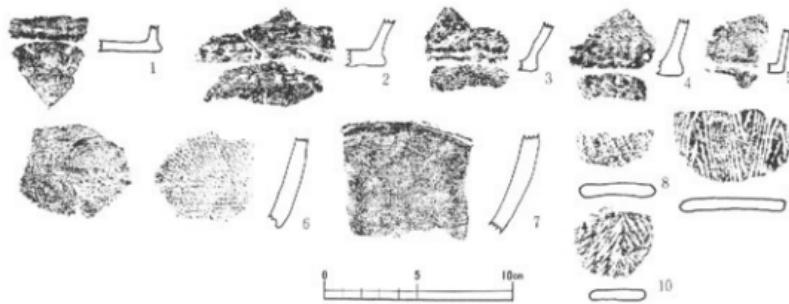
同図50は、半截竹管による連続爪形文で区画文を描出するもので押引き状の爪形文が見られる。諸磯a式土器である。

同図51～54は、結節状浮線文で地文に沈線を持たず、胸部以外の地文に縄文が見られる(51・52・54)。これらは前期末葉に属する。

挿図82の1～5は底部であり、いずれも前期後半の時期である。

同図6は土師器の破片であり混入土器である。同図7は浅鉢の無文部分である。

同図8～10はメンコの破片で、9・10は中期初頭の土器と推定され、これも混入土器である。



挿図82 第21号住居址出土土器

石器類（挿図83）

挿図83の1～15は打製石鎌である。1～3・14は無基無茎鎌。4～13・15は凹基無茎鎌である。

同図16・17はつまみ部分を持つ石鎌である。

同図18は両端にわずかに刃こぼれが認められるが、全面がよく調整されている削器である。

同図19はつまみ部を持つ石匙である。

同図20～26は搔器で、20～24は円形搔器、25・26は不定形搔器である。

同図27～31は礫石錐、32は粘板岩を加工した石錐である。

同図33～35は磨石と敲石を併用したものである。

第22号住居址（挿図84）

本住居址は、第2地点調査区のE34・E35・F34・F35方区に位置している。遺構は、基盤となる黄色砂質土層を掘り込んだ竪穴住居址である。

住居址の平面形は不定形な橢円状を呈する。長軸は東南から西北方向に約680cm、北東から西南方向に620cmである。耕作等によって削平がされ遺存状態が異なっている。東壁は遺存状態の良好な所で12cm前後である。あとは2～4cm程度で直跡を留める程度である。

床面は、西北部に向かって僅かな傾斜を示すが、全般的にはほぼ扁平である。炉址は、床面中央部南寄りに位置して、プランは長軸190cm、短軸180cm、深さ約6cmの楕円形状に掘り込み、中央部に赤褐色の加熱痕が認められる。また中に浅い溝状の掘り込みが見られた。

ピットは、床面上に、基と、壁外に壁を巻くように、ある間隔を置いて31基が検出されたが、識別不可のものも存在している。

覆土の層序は6層に分層される。

土器類（挿図85）

挿図85の1～6・8・9・11は突帯文を貼付する土器である。北白川下層II C式に比定および類似するものである。1・6は突帯状に何も施されない。2～5・10・11は突帯状に縄文が施されている。4・8・9は突帯状に刻目が付けられている。

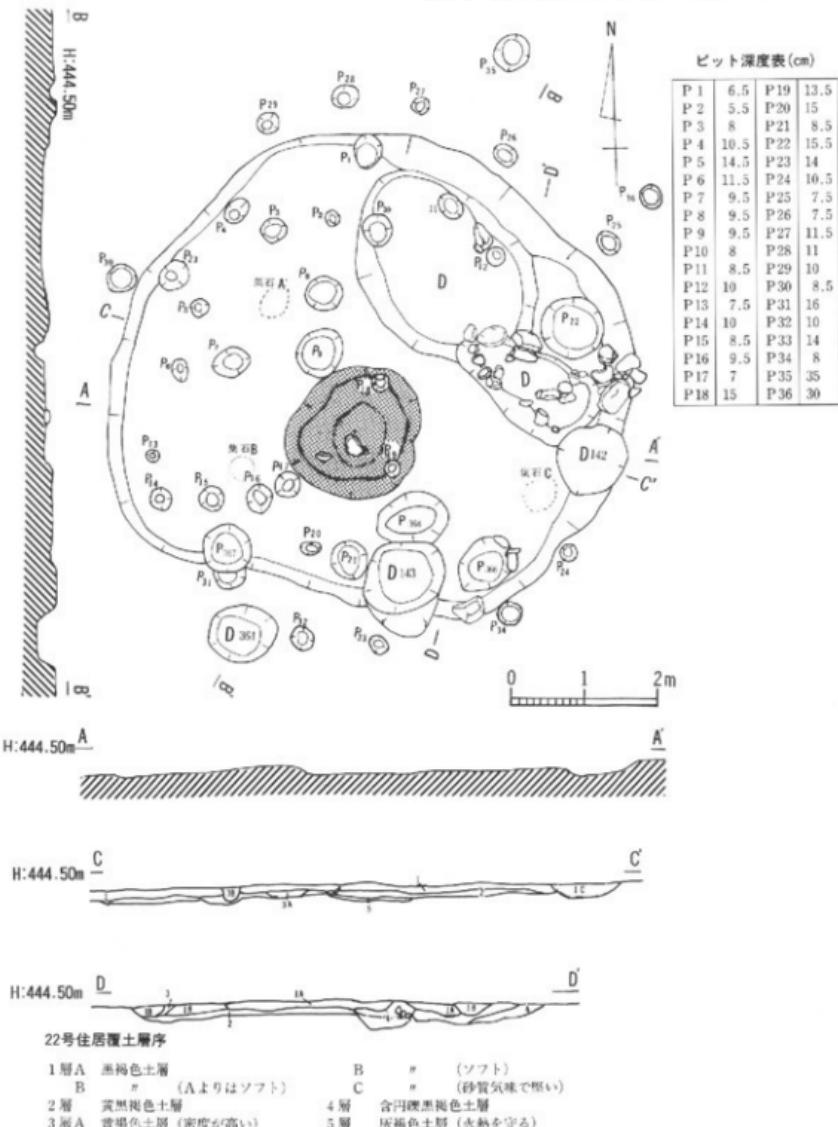
同図の7・12は、同一個体であり、前期末葉の土器であり、ソウメン状浮線文土器である。十三菩提式に類似する。

同図13・14・18は諸磯a式に比定される。14は半截竹管による連続爪形文で区画文を描出するものである。13は押引き状の爪形文である。18は半截竹管によるもので、地文に縄文を施す。

同図16・17・22・24・26・29・30は地文に集合沈線文が施され、これに、色々な浮線文が貼



挿図83 第21号住居址出土石器



挿図84 第22住居址実測図



挿図85 第22号住居址出土土器

付される土器で、諸磯C式に比定される。16・17は、ボタン状の貼付文が付けられている。諸磯C式に比定される。29・30は集合沈線文のみの部分の土器である。

同図15・19～21は列孔浅鉢形土器である。21は口縁部が外反して立上がってい。

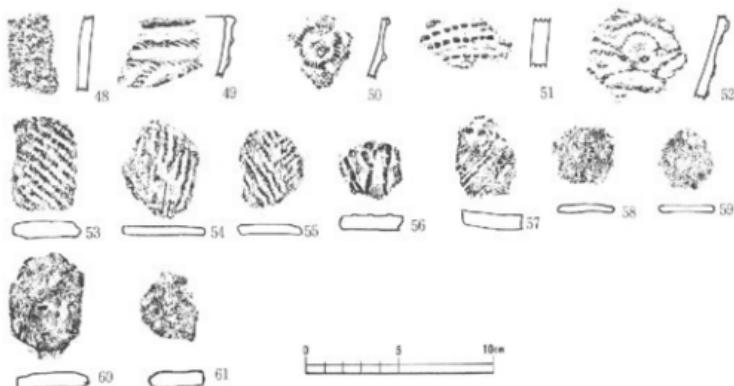
同図23・25・27・28・31～34は、結節状浮線文が施され、これらの土器は前期末葉に属すると考えられる。

同図35は結節状浮線文風の浮線が見られている。これも前期末葉に属する。

同図36～43は前期の後半期の繩文土器である。また同図44～47は同じ時期の底部である。

本22号住居址内のピットより出土した土器は挿図86の48～52である。同図48は文様は明瞭でないが前期と推定される。同図49・52は北白川下層II b式に比定される。同図50は北白川下層III式に比定される。同図51は結節浮線文が施された前期末葉の土器である。

メンコに分類されるものは同図53～61であり、53～57は次のピットより出土した。53 (P₁₁) 54 (P₁₆) 55 (P₁₉) 56・57 (P₂₅) である。これらのメンコは前期後半期の土器を使用してい



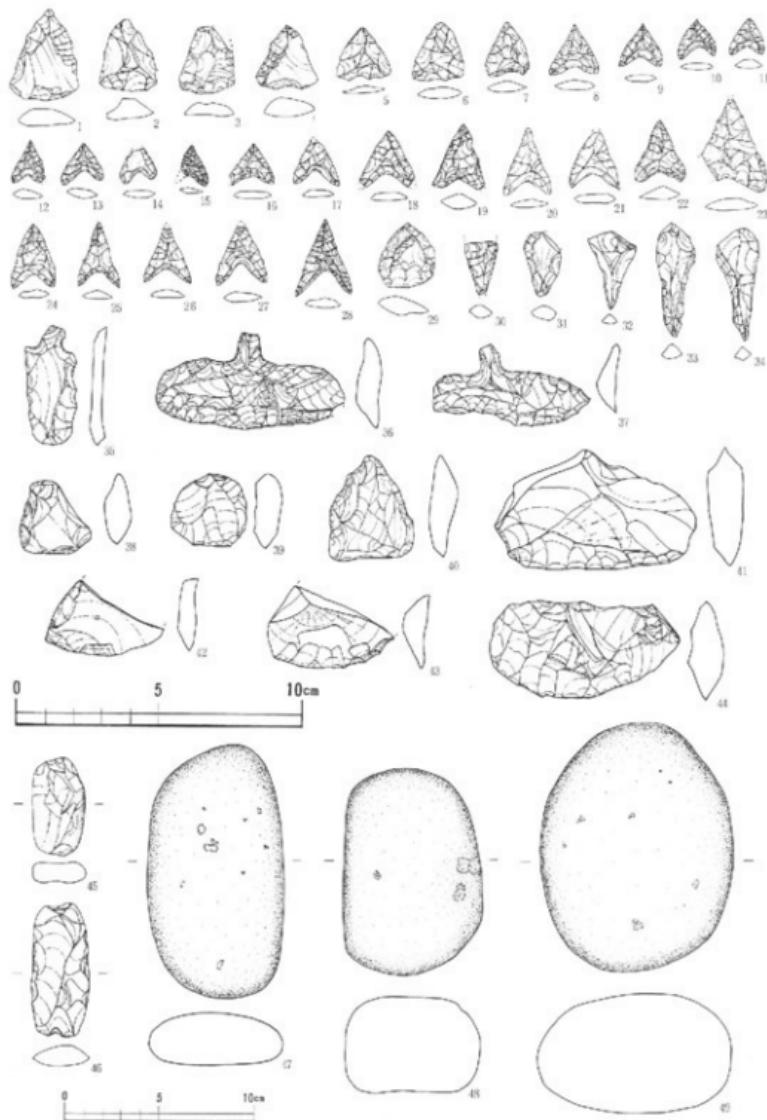
挿図86 第22号住居址内ピット内出土土器

る。

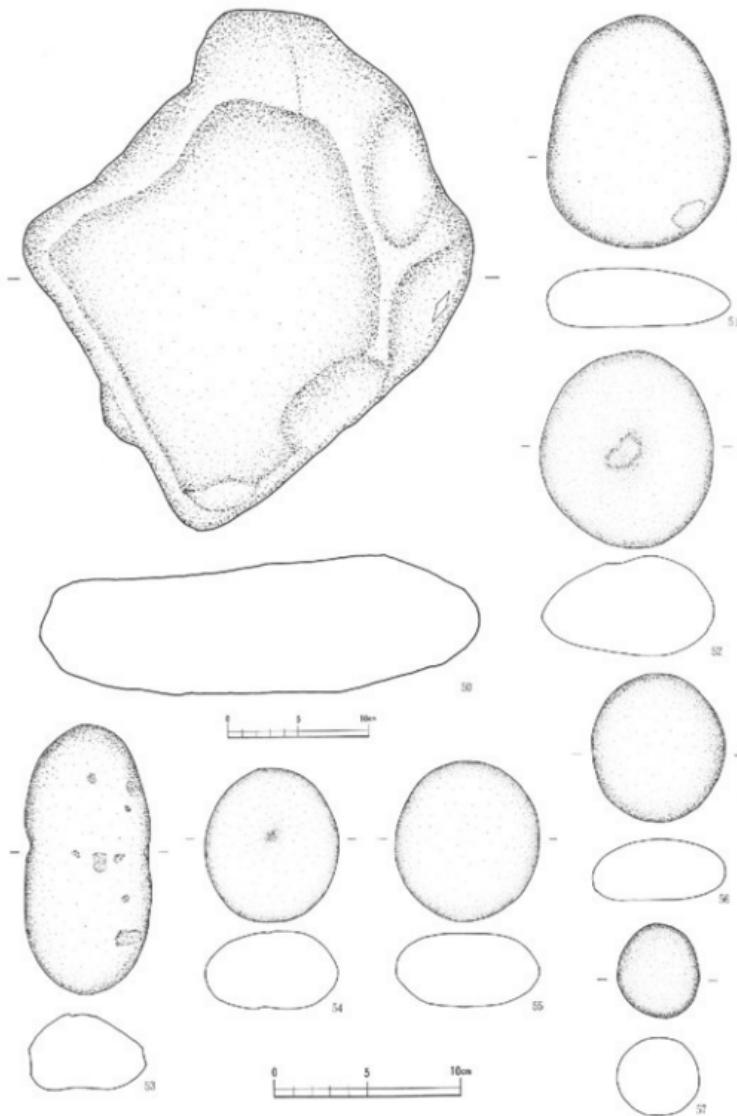
石器類（挿図87・88）

挿図86の1～29は打製石器である。1～6は平基無茎鍬、7～28は凹基無茎鍬、29は基部の両側が1とは異なり丸く加工されている円基鍬である。

同図30～34は石錐である。33・34は錐部より基部が太くなっている、またつまみ部分を意識して加工したものである。



挿図87 第22号住居址出土石器



挿図88 第22号住居址出土石器

同図35～37はつまみ部を持つ石匙で、35は縦型、36・37は横型である。

同図38・40～44は搔器、39はビーエス・エスキューである。

同図45・46は石鉤、47～49は磨石である。

挿図87の50は板状石皿である。

同図51～57は磨石と敲石を併用しており、52～54は凹部が見られる。

第23号住居址（挿図89）

本住居址は、第2地点調査区のF33・G32・G33の方区に位置している。遺構は、黄色砂質層を掘り込んだ堅穴住居址である。

本住居址の平面形は、橢円形状をなしている。規模は、長軸が南北方向で約545cm、短軸は東西方向で約450cmを測る。壁は、開きながら立ち上がる状態で、西北部の一部を除いたほかは検出された。壁高は、東壁部で5～10cm前後、南壁部で5cm前後、西壁部で9cm、北壁部は8cm前後を測る。

床面は、西に向かってやや傾斜をなしている。炉址は床面ほぼ中央部に底部を欠損した埋甕が検出された。埋甕の周囲の床面に加熱痕跡が認められた。

ピットは、床面上に8基検出された。また壁外に住居址と関係すると推定されるピットが6基検出している。

土器類（挿図90～92）

本住居址には、早期末～前期前半の土器が少量混入している。挿図90の1は、早期撚糸文土器。同図2～5は、早期末の条痕糸文土器で繊維を含む土器である。

同図6は器厚は薄く、文様は口縁に二条の押突状沈線、その下部に斜めに半截竹管による平行沈線が引かれ、その中に円形の刺突文が見られる。

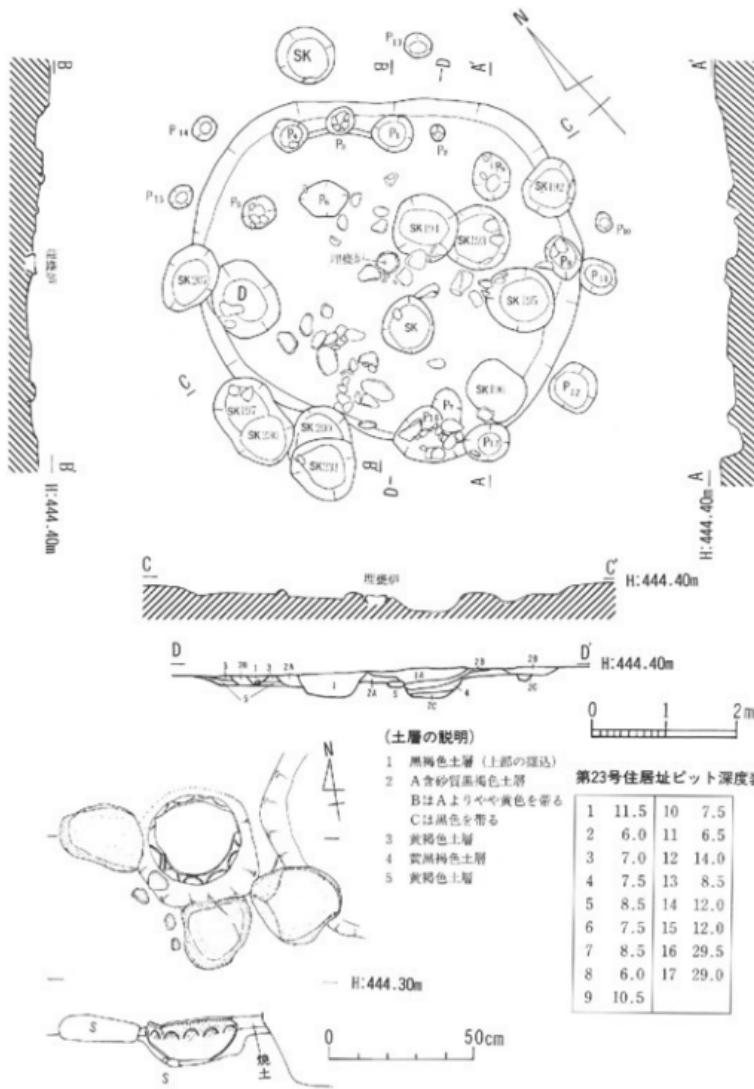
同図7は口縁部に押引き状の刺突文が見られる。その下部に数条の細線が引かれている。内面上部に刺突文が見られる、下部条痕文が見られる。前期の清水ノ上I式に類似するものと考えられる。

同図8～9は、北白川下層IIb式に比定されるものである。

同図11～23は、いわゆる特殊突帯文を特徴とする、北白川下層III式に比定または類似する土器である。口縁部は内側に折れ曲がるキャリバ状の器形をなすものが主体であり、口縁部に特殊突帯が見られる。また、口縁内面に凸帯をなすもので、その部分は繩文が施されている。

同図22はII縁内面に突帯文があるといった点では他のものと異なる。

同図24は繩文であるが、口唇部内面に削られているその面が帶状となり繩文が施されている。



插図89 第23号住居址・埋甕実測図



挿図90 23号住居址出土土器

同図40は斜めに縦縞が施されている。

同図25～27は諸磯a式に比定されるものである。25・26は押引き状の連続爪形文が施されている。27は平行沈線を伴う連続爪形文と平行沈線で菱形区画文と円形刺突文を伴うものと考えられる。

同図28は地文が縄文でボタン状の貼付が加えられたもので諸磯C式に比定される。同図37・38は同時期の胴部より底部の集合沈線文の施された土器である。

同図29は幅の広い連続爪形文であるが北白川下層II式に見られるものとは異なり、前期末時期のものである。

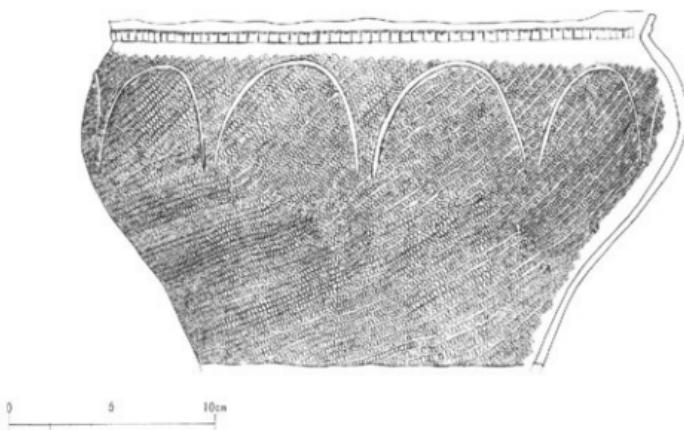
同図30～36は無文地に結節浮線文が施されるものである。30は結節浮線文とリング状浮線文とが見られる。前期末葉に属する。同図39は浮線文は結節ではないが、ソウメン貼り状の浮線文であり前期末葉時期のものである。

挿図91の41～46は底部であり、同図41～43は、底部から胴部の立上りの部分にかけて間隔を持って凹みが見られる。

同図47～49は埋甕近くより出土した。また挿図92は先述した様に周辺が焼土化していた点より、埋甕炉と推定される。口縁部と同下部より底部は欠損しているが、器形は体部の肩部が丸く張出し、頭部は僅に凹み口縁部は外反する。文様は頭部に縦に短く並列する半截竹管文が引かれる。体部は地文に斜縦縞が施され、体部の上部の丸味を持って張出している部分に、浮線文を貼付けた弧状文が見られる。時期は前期後葉である。



挿図91 第23号住居址出土土器



挿図92 第23号住居址出土埋壠炉

石器類（挿図93）

挿図92の1～24は打製石鎌である。1～6は無基無茎鎌、7～19は凹基無茎鎌、20～24は円基鎌である。

同図25～27は石錐で、26・27はつまみ部を持つものである。

同図28～31は搔器で、30は円形搔器。28・29・31は不定形搔器である。

同図32は、磨製石斧である。

同図33～36は打製石斧で、すべて短圓形である。

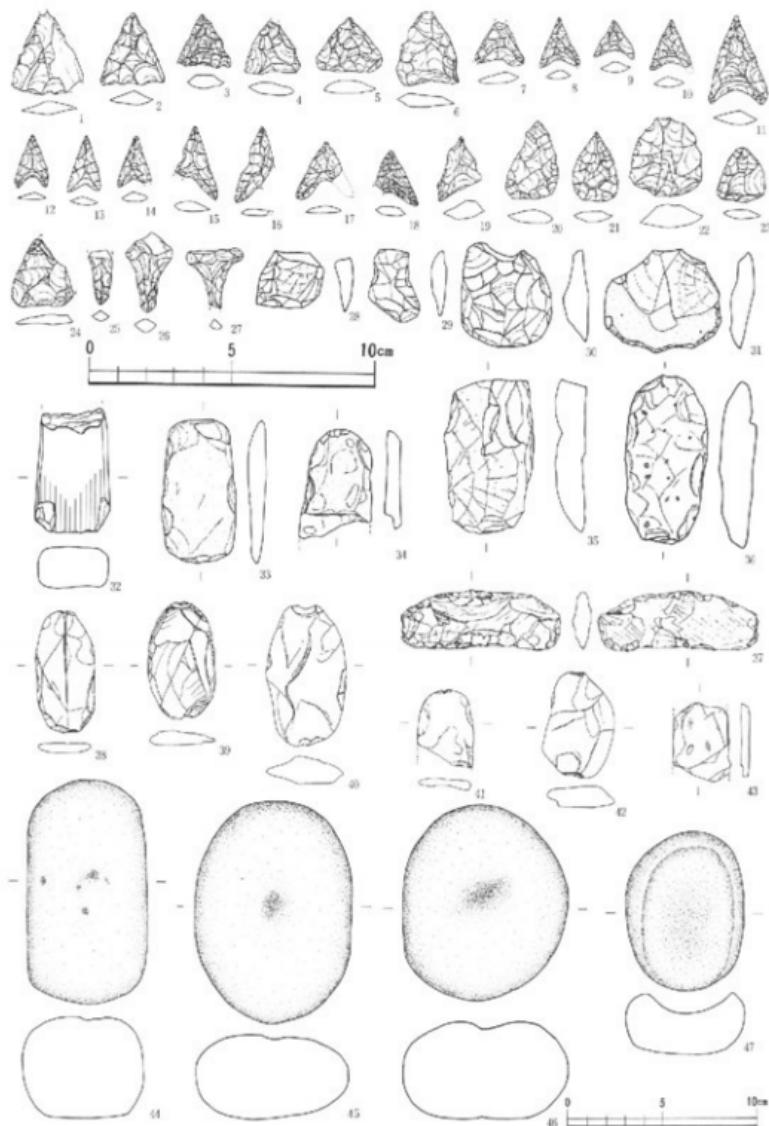
同図37は横形石器である。

同図38～42は板状の粘板岩に加工を施した石鎌で、両端に磨切目、または38の様に溝状切目を持つものである。

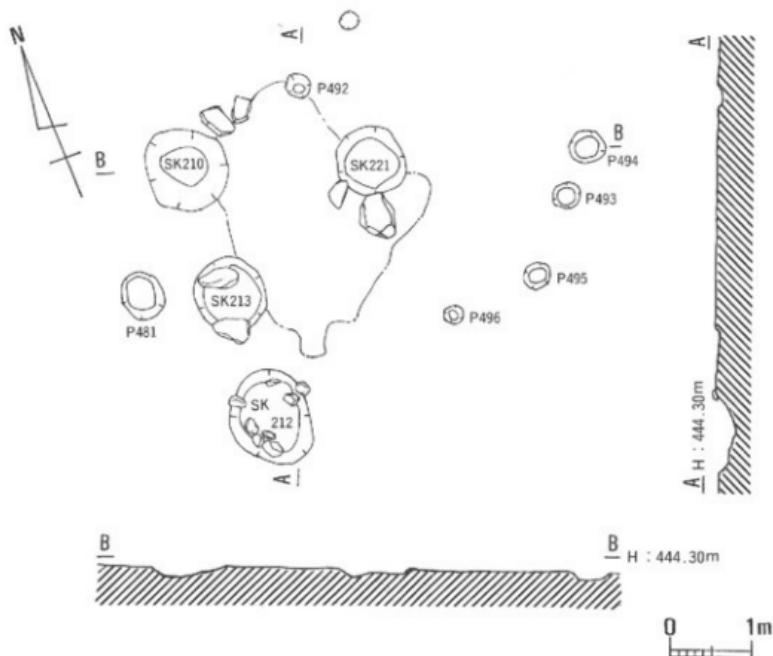
同図43は破片である。

同図44～46は磨石と敲石を併用したものである。

同図47は流し口を持つ小形の石皿である。



挿図93 第23号住居址出土石器



挿図94 第24号居址

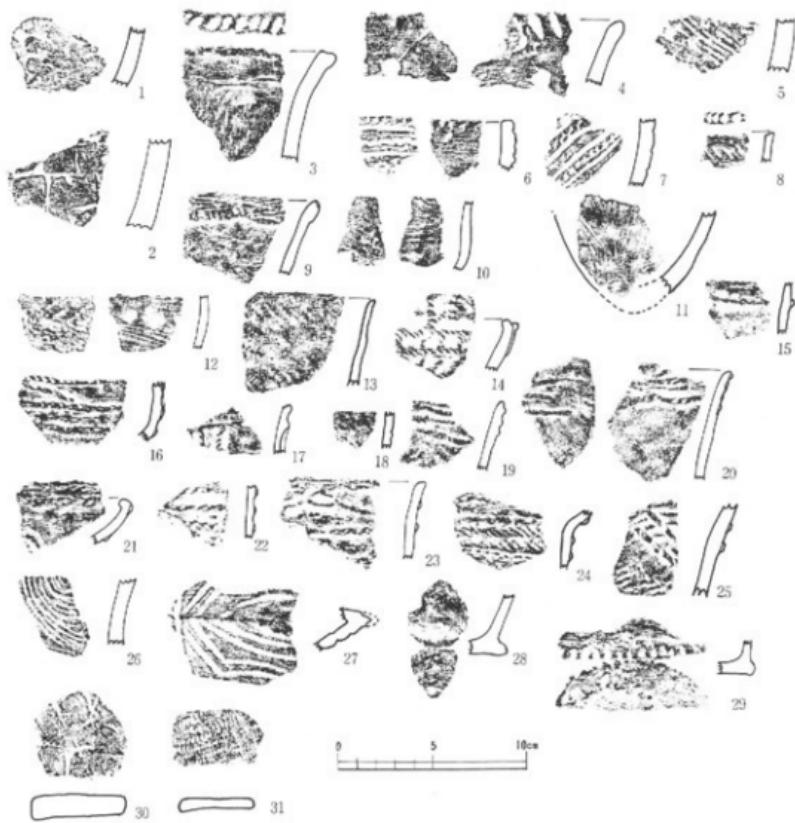
第24号居址（挿図94）

本住居址は、第2地点調査区のO22・Q23方区に位置する。遺構は、床面の残存部のみの検出であり、プラン等は不明である。

この地域は、近世墓・土坑などが多く検出した地域であり、住居址も、それら遺構によって搅乱されたり、農耕による削平等でその性格を把握できなかった。床面の上層部の覆土中の遺物は、縄文前期の遺物である。

土器類（挿図95）

挿図94の1～11は早期の土器であり、いずれも混入土器である。1・2は押型文土器である。3～5は撚糸文系上器で、3は撚糸文が見られる。4は口縁部上部の無文部分である。5は條痕文土器である。6～8は貝殻沈線文土器である。9・10は條痕文土器であり、9は口縁部が複合口縁である。11は尖底部である。



挿図95 第24号住居址出土土器

同図12～29は、前期土器である。同図12は羽状縄文で内面に條痕が見られる。13は薄手の斜縄文が施されている。14～23は北白川下層II C式に比定・類似する土器で、突帯文上を貼付するもので、その上に施される文様は異なる。14・16・17・20は刻目文である。15・19は無文である。21～23は縄文が施されている。18は小破片であるが、北白川下層II D式に比定される。半截竹管による規制を持つ連続爪形文が見られる土器である。器厚は薄手である。24は地文縄文で結節竹管文の見られる浮線文土器である。25は地文は縄文で浮線文の貼付されたものであ

り、その浮線文上に刻目が見られる。これは北白川下層II C式に見られるものとは異なる。24・25は十三井式に並行する時期と考えられる。26・27は集合沈線文土器であり前期末葉の上器である。28・29は底部の破片であり、底部の端部が横に張出すのが特徴的である。

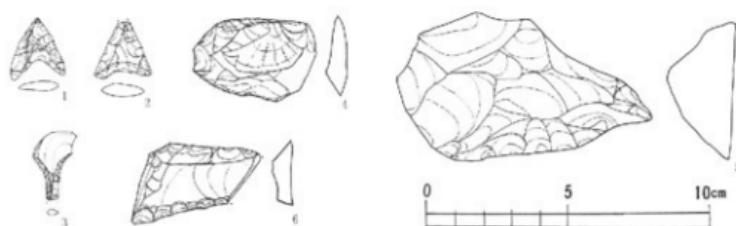
同図30・31はメンコの破片である。

石器類（挿図96）

挿図95の1・2は打製石錐で、凹器無基盤である。

同図3はつまみ部を持つ石錐である。

同図4～6は不定形の搔器である。

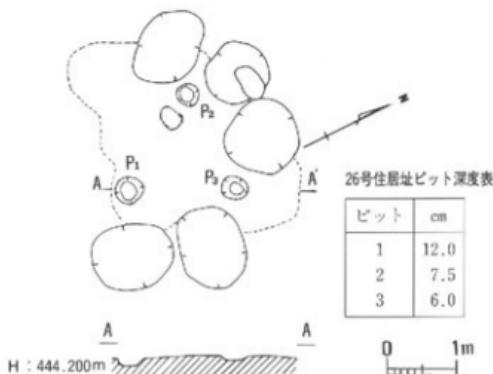


挿図96 第24号住居址出土石器

第26号住居址（挿図97）

本住居址は、第2調査区のC30・D30方区に位置し、遺構は、基盤となる黄色砂質層である。住居址は床面のみの検出である。従ってプラン、その他を推察することは出来ない。

遺物はこの26号住居址附近より前期の遺物が出土しているので前期の住居址と考えられる。



第27号住居址（挿図98）

本住居址は、第2地点の調査区のL26・27、M26・27方区に

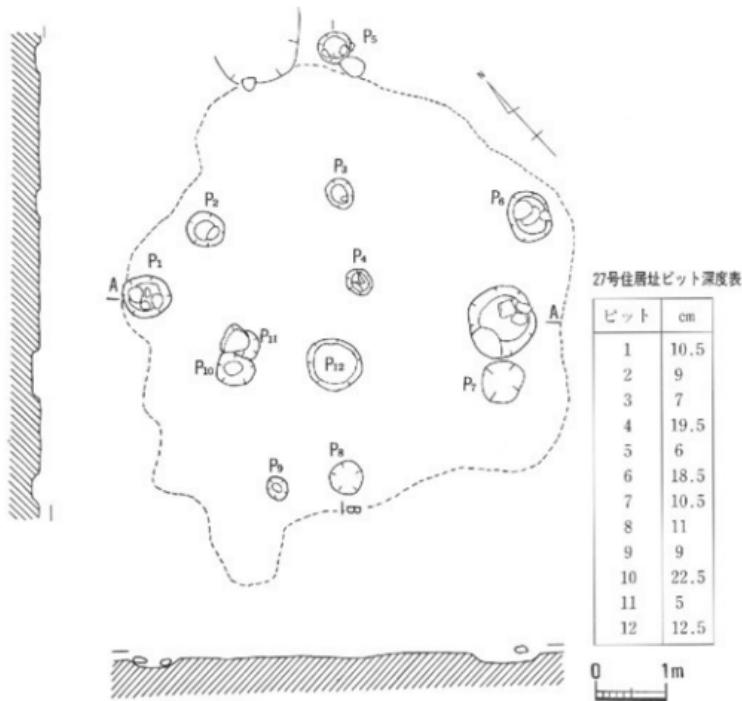
挿図97 26号住居址実測図

知られた。遺構は平面形は確認出来なかった。然し床面と推定される部分に埋甕または土器片の伴うピットが、3ヶ所知られたが、挿図99の1に見られ土器以外は、もうくまた器形を推定出来なかった。

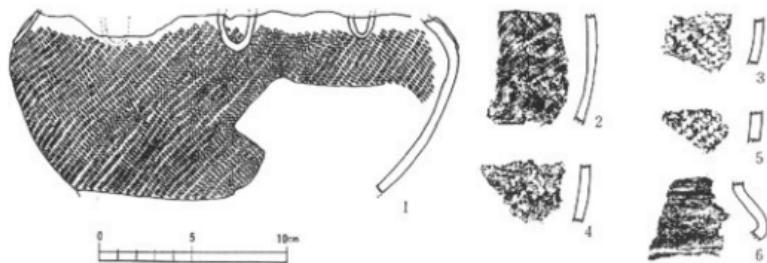
挿図99の1は口縁にU字状の隆帯による文様が見られる。

同図2～5はいずれも縄目文の土器である。同図6は爪形文が見られる。

また柱穴は10基知られた、本住居址の時期は縄文時代前期後半の時期である。



挿図98 第27号住居址実測図

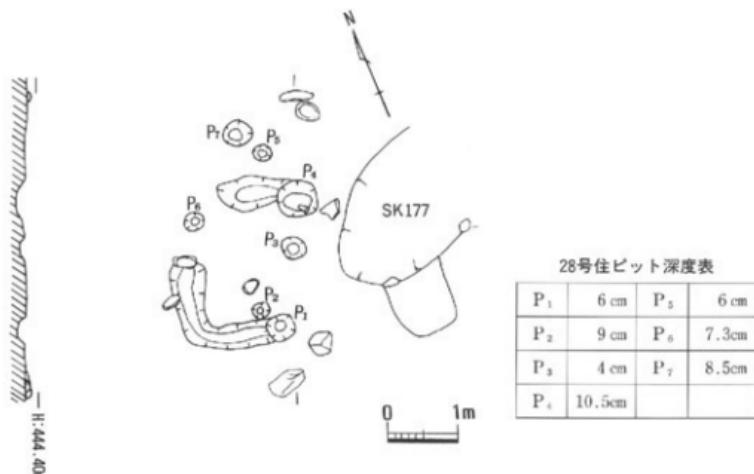


挿図99 第27号住居址出土土器

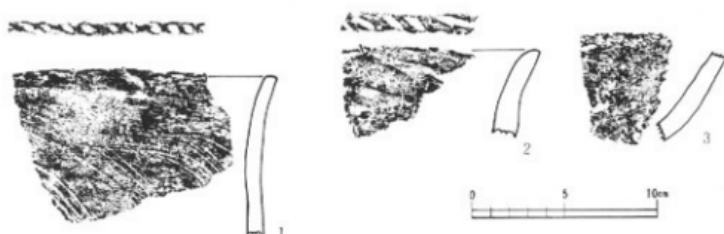
第28号住居址（挿図100）

遺構は、第2調査地点のS26方区に検出されたが、明確なプランは出来なかった。ピットの検出された部分は住居址の床面と推定された。また2ヶ所に溝が検出された。その1は、P₁を基点としてL字状に見られるもので、深5cm～11cmである。その2は、P₄より左に巾40cm前後で深さ9cm前の溝が伸びている。東部に当たる部分にSK177の土坑と攪乱によって遺構は切られている。

出土遺物として挿図101に見られる条痕文土器が見られる。色調は茶褐色で胎土に石英粒を含んでいる。縄文時代早期後葉の土器と推定される。



挿図100 第28号住居址実測図



挿図101 第28号住居址出土土器

第2節 繩文時代の遺構と遺物（中間地点）

第1地点調査区（第1地点）の北面に水田を隔てて中間地点調査地区を設定した。この地区について既に述べた様に、第2調査地区、第2地点より一段と低い地点に位置している。

この地点の層序は基本的には三層に大別される事は前述の様である。この地点の地形は西から東の段丘崖に向ってやや傾斜をなしている。遺構・遺物の検出・出土については、先づ第1層にあたる上層部にをいては南に接する水田の地点、または西北部の第2調査地区より流入したと思われる縄文時代前期・中期の遺物が見られる。

第2層下部に当る地層からは、遺構として集石状の炉址に伴なうピットやその他ピット群などが検出された。集石を伴なうピットについては○住居址として以下記述する。また同地区出土の遺物については概略を報告する。

○住居址（挿図102・103）

本遺構は、中間地点調査地区（中間地点）に当る。W23方区を中心として検出された。先づ長径約7.5cm×6.5cm、深さ15~18cmの楕円状の凹の中に6~30cm程の大小様々な石を集めている。使用された石は熱を受けている。またこの集石炉を中心として囲む様にピット群が見られるのと、そのピットが検出された面がほぼ水平である。またこの上部の覆土に当る部分より遺物の出土がみられた。以上の様な状態と、発掘時の所見によって住居址と考えられる。

出土遺物（挿図104）

挿図104の1~4は○住居址の推定された段階で検出された、覆土最下層に当る層より出土した、また同図5~8は、炉の中より出土した。同図9~11は炉内の下層部より出土した。同図12~16は床面直上に当る層より出土した。また同図17~19はピット（P34）より出土した。上記の土器は縄文時代早期に当る。同図1、2、6、7、9、10は撫糸文土器で、色調は茶褐色、黒褐色である。1は口縁内面に斜めに短かい彫目が付けられている。2は口唇上に工具による刻目が付けられ、器面内面は磨かれている。6は淡黄褐色で石英粒を含む、7は茶褐色でセンイと砂粒を含む。9、10は同一個体の小破片で炉内の石の下より出土した。11はあまり鮮明でないが楕円押形文土器で、色調は灰黒色で胎土に微砂を含み、器厚は約1.2cmである。同図13、14も同様である。ピット（P34）より出土した17、18はやや粗雑な楕円押形文土器である。

同図3、5、8、12、19は無文土器、又は無文部である。3は黒色で口唇部に楕円形状の連續圧痕文が見られる。また16は貝殻沈線文土器である。これ等の土器は縄文時代早期後半の土器である。

上記のほかに第3地点より出土した資料について一括して記述する。

撚糸文土器（挿図105の20～36）

挿図105の20～36は撚糸文土器を一括した。器形は同図20～28に見られる様に外反して開く器形をなす。文様は縦位にまた斜位に撚糸文が施されている。器厚は8～11cmである。20、22、23、25、26に見られる様に口唇部に工具による刻目が施されている。24は口唇部内面に斜位に刻目が施される。色調は、黒褐色、茶褐色などである。胎土に長石粒を含むものは20、23、24、26、29などである。また29はセンイも含んでいる。全般に少量の微砂が含まれている。

絡状撚糸文土器（挿図105の37～39・挿図106の40～47）

同図37～39は絡状撚糸文土器で網状施文が施されたものである。器厚は前者より厚いものが多い。器形の大きさに依るものと考えられるが、0.9～1.5cmと全般的に厚手である。胎土に長石粒を含むものは、同図40、44で、全体的に砂粒を含む。色調は茶褐色、黒褐色などである。また46は本群の中で扱ったが、縦位に撚糸文が施された上に横位にやや太めの縄を絡ませている。

押型文土器（挿図106の48、49、50、51）

押型文は全て回転押型文である。49、50は楕円文が施されている。48は底部に近い部分の破片であり、長径0.7～0.8cmの楕円文が施文され、49、50、51は円形または楕円形状の粗雑な押型文が施されている。器厚は0.8～1.0cm前後である。色調は淡黄褐色、茶褐色、黒褐色などである。49は長石粒を含む。

貝殻沈線文系土器（挿図106の52～58、挿図106の59～64）

沈線文と貝殻腹縁による文様を主体とした文様構成をなすもので、いわゆる貝殻沈線文土器である。52、53、54、58、59、61、63、64は横位に走る沈線間に波状沈線が横位に走るもの、52、53に見られる様に沈線間を波状沈線文と貝殻腹縁による押突文が見られる。また53は内面に擦痕が見られる。

55、56、57、60は幾何学的文様をなすものであり、波線間を55は貝殻腹縁、56は押突文を施している。56、60、63は内面に条痕による調整痕を持つ。

入海系土器（挿図106の66～75）

爪形状の車輪刺突文が施文される土器である。同図66は口縁部が波状をなす器形の深鉢と推定される。その口縁部に添って刺突文が施される。内面上端部にも刺突文が施されている。

胎土は微砂を含む、色調は褐色である。器厚は0.6cmである。67は、刺突文が見られる。胎土にセンイを僅かに含み、密度の細かい胎土である。色調は黄褐色であり、器面に指圧痕が見られる。器厚は0.5cm前後である。71も67と同様である。68は土器の保存状態はあまりよくないが、爪形の連續刺突文が見られる。胎土に砂粒を含み、色調は淡黄褐色で、器厚は0.7cmである。

69、70、73、74、75はいずれも刺突文である。長石粒を含むものは70、73、75である。

条痕文系土器 a (挿図106の76—82挿図107の83~97)

一般にオセンベ土器と呼ばれる土器群である。器厚は薄く、0.4~0.5cmである。口縁部に扁平な貼付の隆帯が付くもので、口縁部が僅かに波状を示すもの77、80また79に見られる貼付による突起が見られるものなどがある。隆帯による文様は土器の上部に見られる。その隆帯の上に工具によって条線が引かれる。91~96は条痕のみが施文されている。これは調部以下の破片である。

上部の貼付隆帯の文様は横位に数条貼られる。その下部に波状に蛇行する隆帯が付く。その上を櫛状工具によって条痕が引かれる。色調は淡茶褐色、淡赤褐色、淡灰褐色、淡黒褐色などで、胎土には微砂を含む。器面に指痕による凹が見られるものが多い。

条痕文土器 b (挿図107の98、99、100)

器面の両面に条痕文が施されているものである。前者の条痕とは少し異なっている。98は胎土に砂粒と雲母が含まれ、色調は黒色である。99は条痕が6目のある工具によって引かれている。色調は淡黄褐色で微砂を含む。器厚は0.5cmである。100は沈線と擦痕が見られるものであり、貝殻沈線文土器に含まれるものである。

押突文土器 (挿図107の101~103)

同図102、103は貝殻腹縁による押突文が見られる。口唇部にも刺突文が見られる。101は刺突文土器でありこれらはいずれも縄文前期前半の土器である。

前期後半の土器 (挿図107の104~107)

104は円状の貼付文が付くものである。105、106は結節浮線文土器で、107浮線文土器でありいずれも前期末葉に属する。

中期の土器群 (挿図108、108~127)

中間地点の上層部より出土した中期の土器を大別すると、西日本系と北陸系、東海系に大別される。108、109、113は里木田式土器である。110~112、114は従米の船元IV式土器である。118~120、122、123、126、128は北陸系の土器である。125は東海系の土器である。115、116、117、121、124、127は東日系と推定される。

第3地点出土石器類 (挿図109)

本地区出土の石器類は、石鎌、石錐、石匙、スクレーパー、石錘、磨製石斧、打製石斧、凹石、磨石などである。

石鎌 (挿図109の1~29)

同図の1~29は打製石鎌である。1~5は基部が直線で三角形をなす平基無茎鎌である。ま

た19、20、21は二等辺三角形状をなし、前者とは形態的に異なるが平基無茎鎌に近い。6、7は、片鎌と呼ばれる類のものである。8～18、22～27・29は、基部に挿入のある凹基無茎鎌である。28は尖円基鎌である。30は基部と考えられる部分は凸起している石槍の破片と推定される。石質は下呂石を主体とし僅かにチャートを使用している。

石錐（挿図109の31）

1点のみであるが石錐と推定される。

石匙（挿図109の34・挿図110の38）

つまみ部のある石匙であり、34は横長の三角形状をなす、38は正三角形状の形状をなすものである。またつまみの造り出しあは見られないが、それを意識したと考えられる形態のものが見られる。同図35、36、39などである。石質は下呂石を使用している。

スクレーパー（挿図110の32、33、37、40～45）

先述した35、36、39は本来ならばスクレーパーに分類されるものである。32、40、41～43、45は横長のフレークの両面を37、44は縦長のフレークの一面に調整加工を施している。46はピエス・エスキューである。

石錘（挿図110の47、49）

川原石の長軸の両端を敲打したものである。49は川原石の一端のみを敲打しているのみで未成品とも考えられる。

磨製石斧（挿図110の48）

定角式の小形の磨製石斧である。石質は蛇紋岩で一部に原皮面が見られる。

打製石斧（挿図111の50～56）

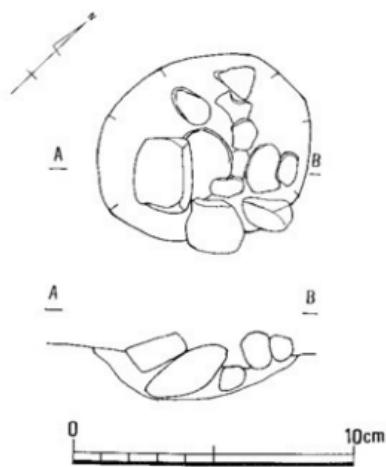
器形は短冊形であるが、50、51はやや撥形の器形の残存が見られる。50、51、52、54に見られる様に円礫の原皮面が残るものがある。

凹石と磨石（挿図112の57～63）

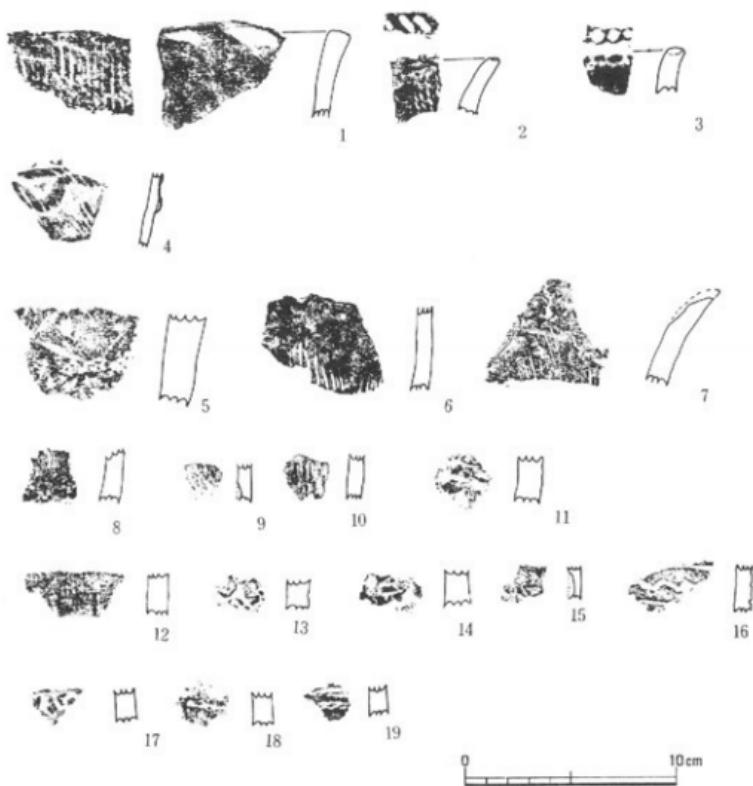
凹石の57～60は磨石と両方の機能を持つものである。磨石は62～63に見られる様に側面が丸味を持っている。石質は安山岩である。



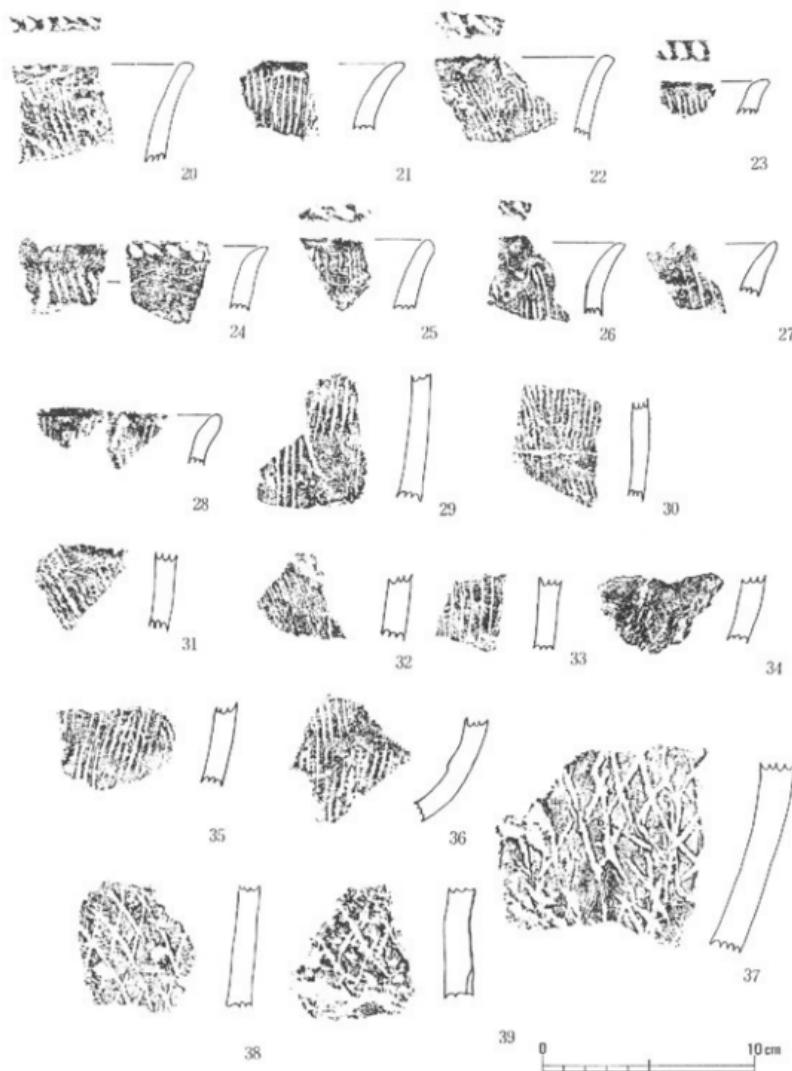
挿図102 O住居址実測図



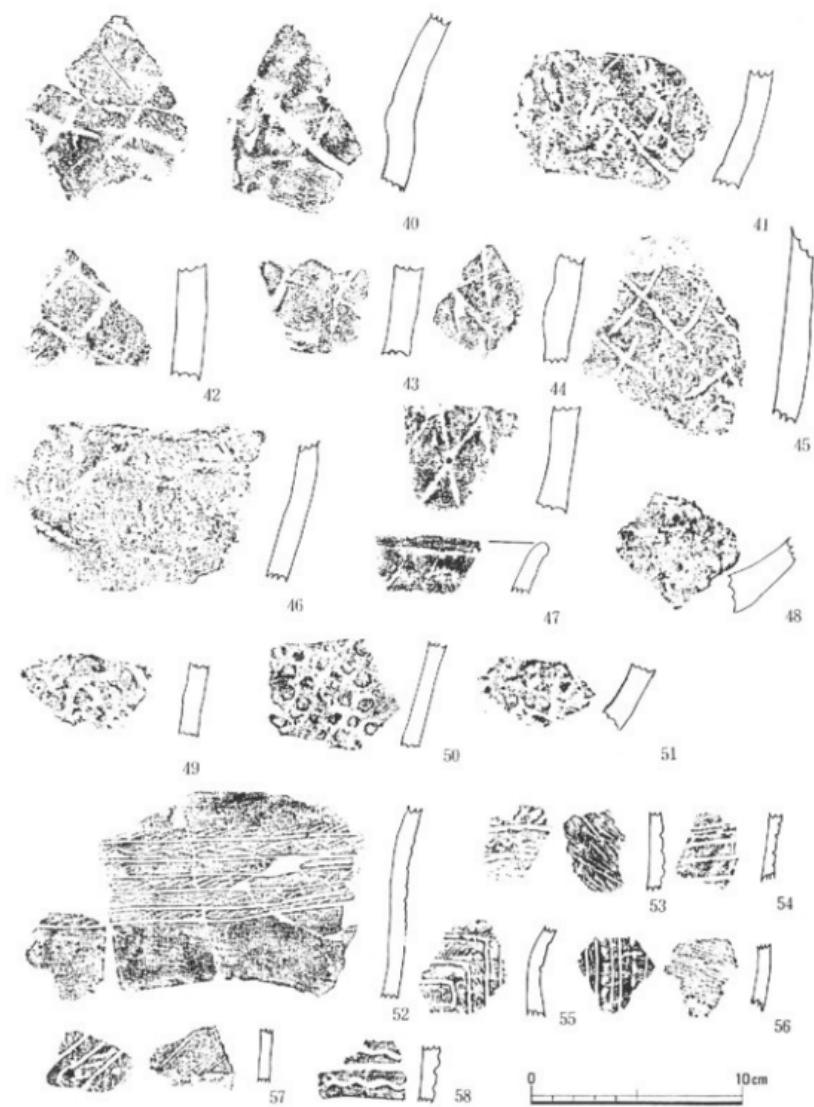
挿図103 O住居址集石炉



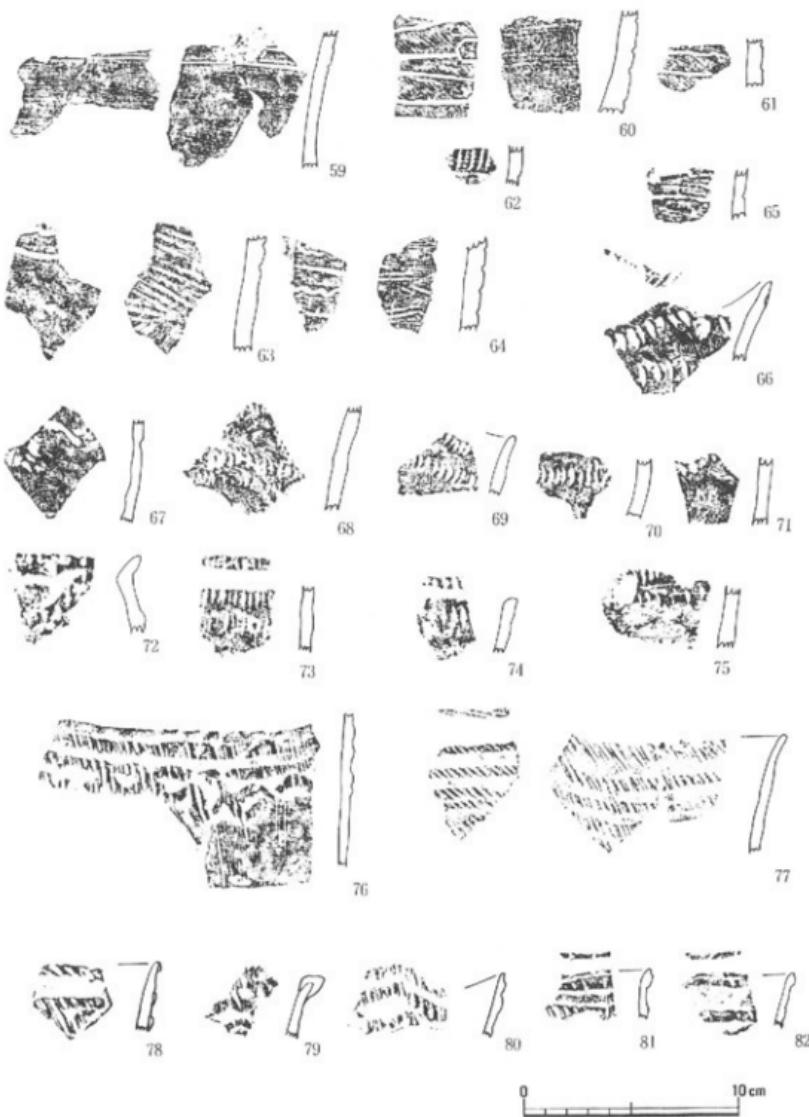
挿図104 中間調査地区O住居址覆土及び遺構出土土器



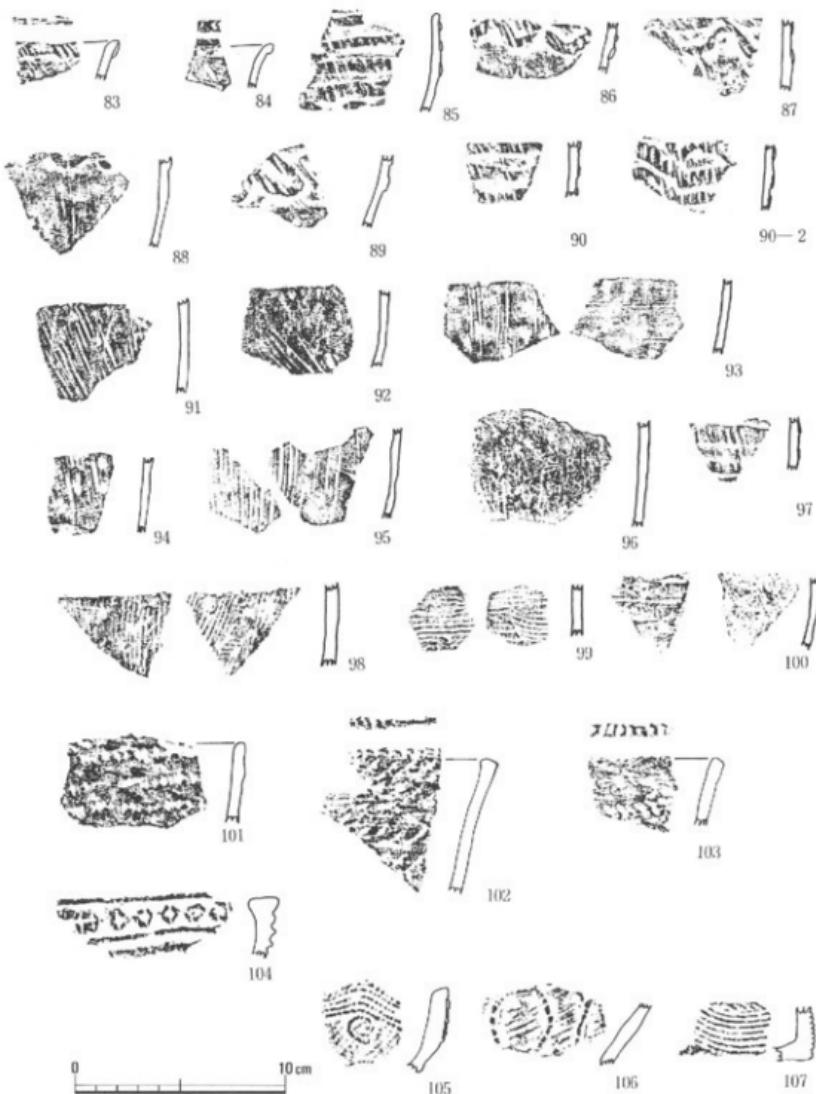
挿図105 中間地点出土土器



挿図106



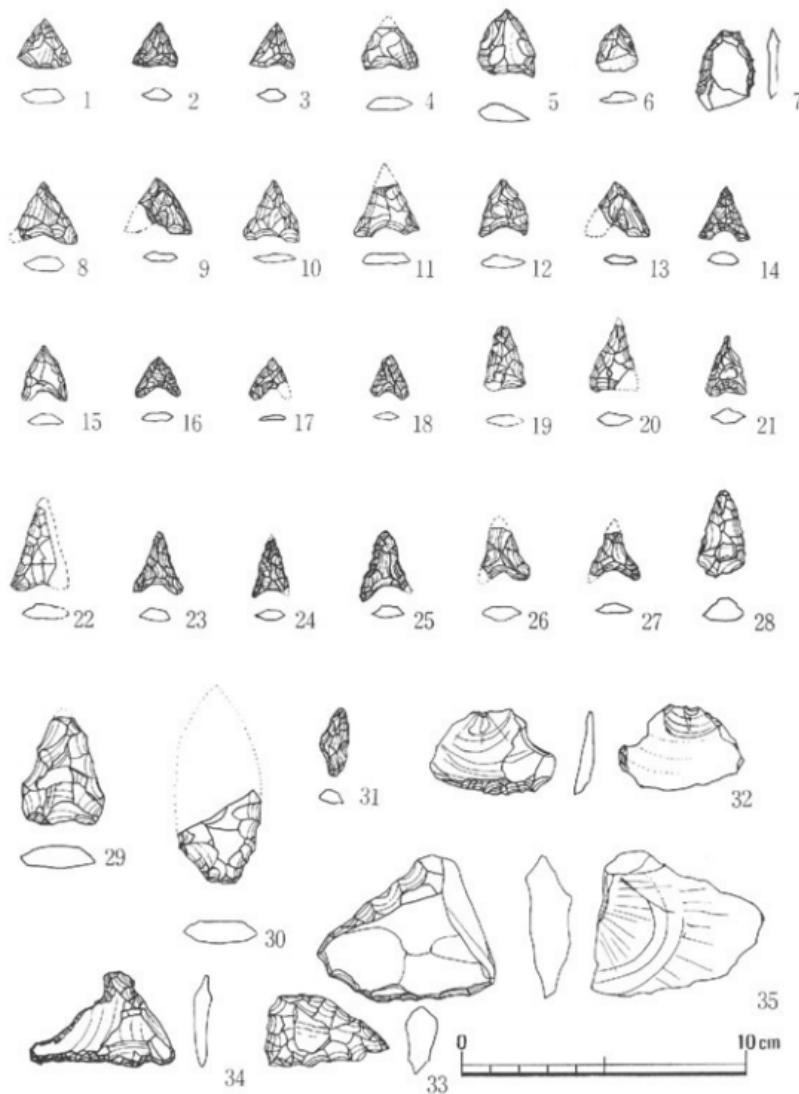
挿図106



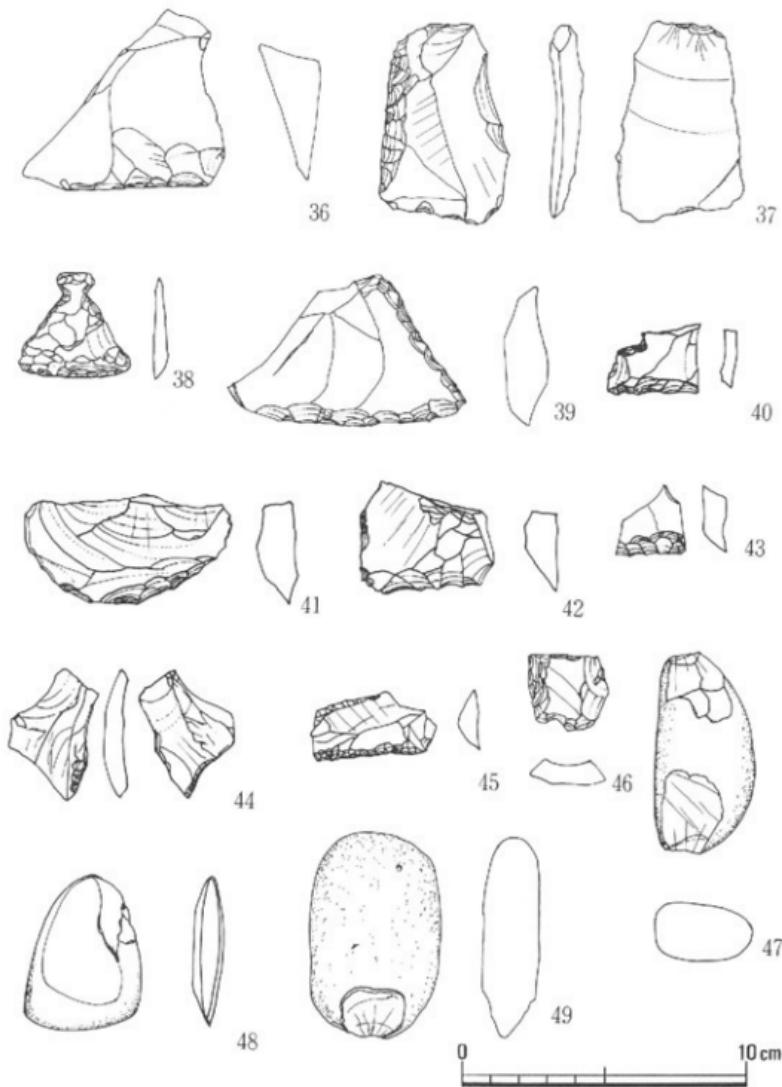
挿図107



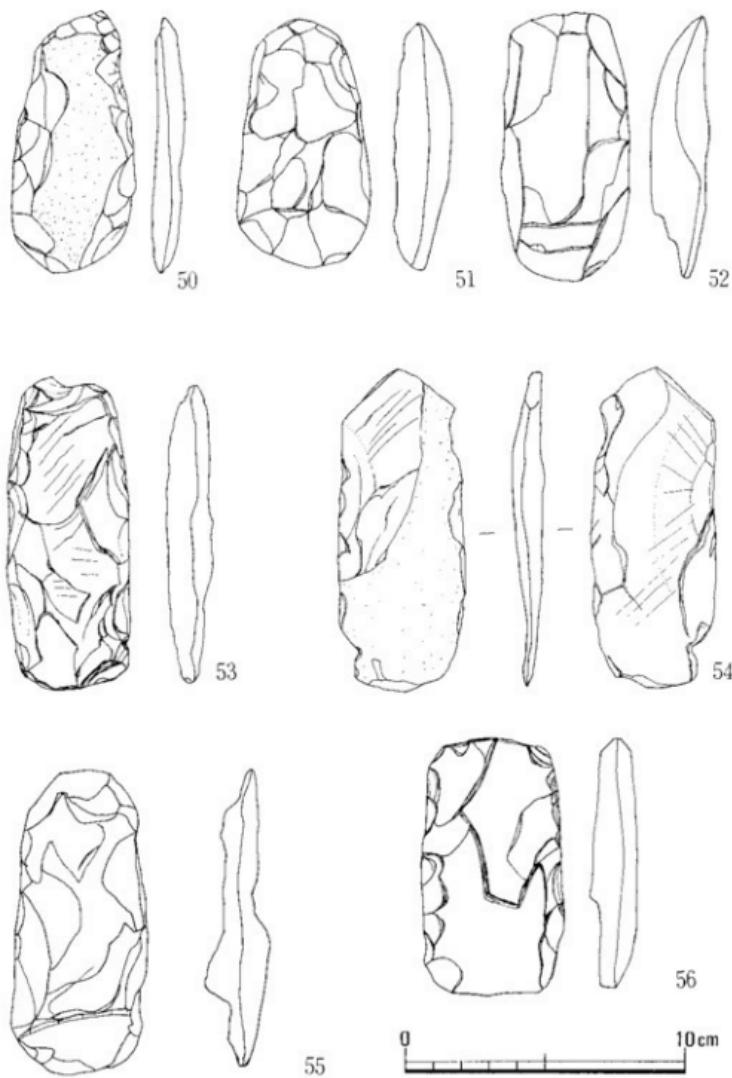
挿図108



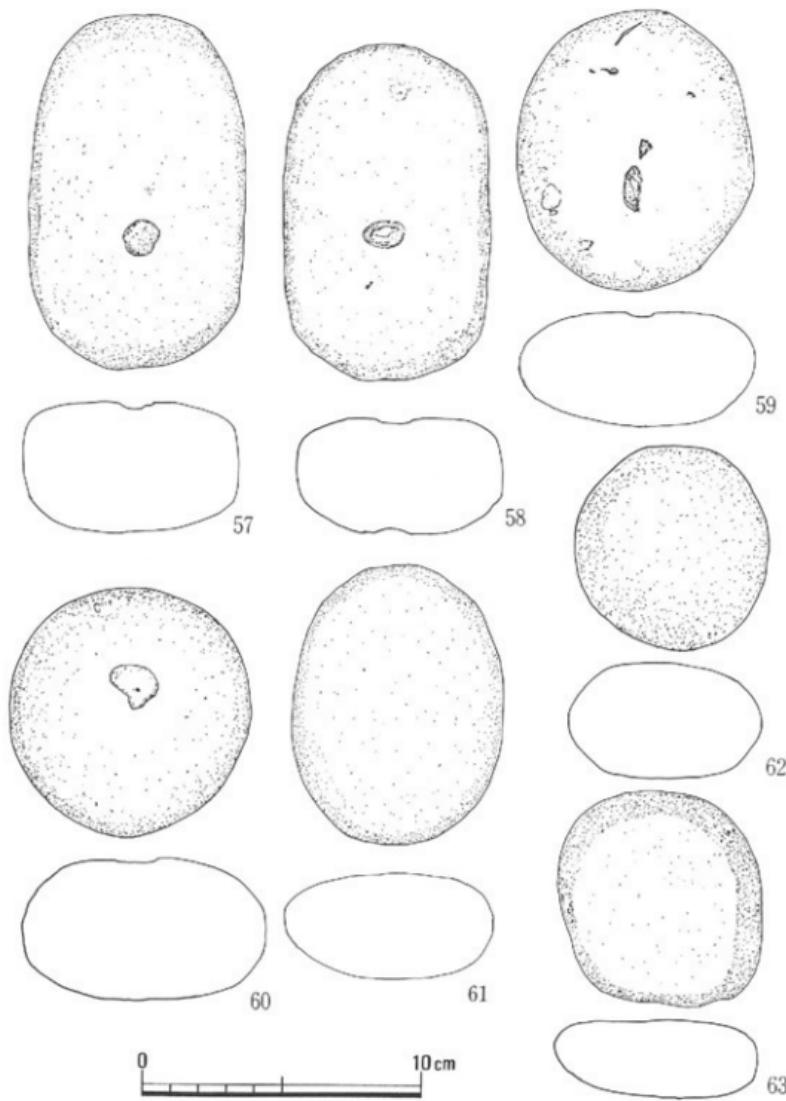
挿図109



挿図110



挿図111



挿図112

第3節 繩文時代の遺物（第3地点）

この地点の発掘調査時点の地形は、下羽根（第2段丘）より上羽根（第1段丘）に通ずる道路が通っている。この道路に向かって左側の地域を第3地点とした。

道路の開通以前は、第2地点より順次、僅かに微高していたと推定される。

この地点の土地利用の現状は畑地である。この地点の一部に一段と高い畑地が残っている、これは土地利用の際に周囲を削平したため、長方形形状の高台となった畑地が残っている。この高台の周囲に石積が施されている。東面の石積の東南の隅より南に向かって裏づめと考えられる石列が延びている。この部分だけが、近世に再度削平されたものと推定される。この台地状になった畑地の表上の下部が円礫層であった。

遺物の出土した地点は、この高台となっている畑地の東南方向にあたり、挿図の土層実測図に見られる様に、東方の辺部に向かって傾斜した上層堆積をなしている。

この地点の基本的な層序は、先述した資料に見られる様に、第1層は、黒褐色土層で腐植に富む土壤である。第2層は、黒色でこちらも腐植に富む土壤である。第3層は、やや腐植に富む土壤であり、岩片粒子と風化粒子を多く含み、その下部は円礫を含む砂礫層である。遺物は、第1層においては、近世陶器類・白系陶器・古銭などが出土した。第2層に繩文中期の土器片が検出された。主として、第3層より繩文早期後半の撚糸文土器、貝殻沈線文土器押形文土器が出土したのである。石器類の中でも打製石器類は1層より2層にかけて、その他の石器は2～3層にかけて出土した。

第3地点出土遺物

この地点からの出土遺物の土器類は、繩文時代早期に属する回転押型文土器、貝殻沈線文土器、沈線文土器、撚糸文土器、前期の貝殻文土器の他に同時期に属するものが少量と、中期中葉の北陸系の土器、東日本系の土器、関西系の土器が僅かに出土した。

石器類は、打製石鍬・石匙・スクレイバー・石錐・打製石斧・磨製石斧・石錘・凹石・磨石・砥石、フレイク・チップが出土した。

歴史時代の遺物は、小量であるが須恵器片、近世陶磁器片そのほかの金属器として古銭も8点出土した。

土器類

第1群上器

繩文時代早期の土器である。前述した様に第3層より出土したものである。

回転押型文土器（挿図113の1～9）

いずれも回転押型文土器で、第3地点より出土したもので、文様は椿円文である。文様の特徴により、a・bに分けることが出来る。

(a) 同図1～4・8は、椿円文の一単位の長径は1.5cm前後のものが横に薄く施文されている。また同図1は、口辺部が僅かに外反する器型で口唇部に工具による刻目が施されている。器厚は0.7cm前後で、胎土には微砂と僅かに長石粒が含まれている。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈している。

(b) 同図5・6・7・9は(a)と異なり、器厚が1～1.2cm前後のもので、文様は椿円文の一単位の長径は0.7cm前後であり、全般に粗雑である。色調は黒褐色で、焼成は普通で、胎土に長石粒を含んでいる。

貝殻沈線文系土器（挿図113の10～12、挿図114の13～39）

沈線文と貝殻腹縁による文様を主体として文様構成をなすものいわゆる貝殻沈線文系土器である。挿図2は同一個体の破片であり、器形は胴部下半部が不明であるが、口辺部が僅かに内湾して立上がる深鉢と推定される。挿図114の13・14・15・19は接合は出来ないが、前者と同一個体と推定され、胴部で僅かに屈曲する部分の一部と思われる。

挿図113の10に見られるように文様は、口線に沿って貝殻腹縁による押突文がめぐらし、その下部に2条の沈線が横位に引かれ、その下部に波状沈線が横位に走る巾約1cm程の帯状の帶部が見られる。さらに2条沈線、波状沈線をもつ帶状帶部と、2条沈線が見られる。その沈線下部に巾約3.5cmの文様帶が見られる。その文様帶は、幾何学的に沈線による三角形状の文様が相対的に引かれ、その沈線間に貝殻腹縁が施されたものと、器面調整時における擦痕がかすかに認められるものが交互に見られる。この文様帶の下部に横位に沈線が引かれ、無文帶（擦痕の見られる）と波状沈線を有する帶状帶部が交互に見られる。

口縁部内上面部に工具による刻目が施されている。内面は全面に殻貝条痕が見られる。胎土は白色混りの微砂が混入されている。色調は黒褐色の部分と淡黄褐色の部分が見られる。焼成は良好である。挿図114の13～15・18・19は同様なものであり、先にも述べた様に同一個体と思われる。同図17は小破片であるが、沈線間の波状の部分が点引状である。以上は、内面にいずれも条痕による調整痕を持つものである。同図の26は、かすかに条痕が見られるが前者ほど鮮明ではない。胎土に砂粒を含み、沈線文間に押突による点列が見られる。色調は茶褐色である。同図の20～25、27～39は、いずれも内面はなめらかに調整されている。条痕は見られない。同図31は、口縁部の内外面に貝殻腹縁の押突による刻目が見られる。同図の22は、口縁部に鋭い工具によって刻目が付けられ、内面の僅かに残っている部分に刻目が1ヶ所認められる点より、

口縁内面にも表面同様な刻目が施されたと考えられる。また沈線による幾何学的文様が見られる。胎土に砂粒を含み、色調は黒褐色である。同図の21は、鋭い工具により刻目が、口縁部内外面にみられる。沈線間に波状の沈線が見られるものである。色調は淡赤褐色である。同図20は、沈線間に貝殻腹縁による文様が見られ、器面の内面はよく調整され、胎土に微砂を含んでいる。色調は茶褐色である。同図の23は、口縁部はやや内反し、端面は平坦である。文様は口唇部に貝殻腹縁による沈線の刻目が見られ、また、沈線間に点列が見られる。胎土に砂粒を含み、色調は淡赤褐色である。

同図24は沈線間に貝殻腹縁の見られる。その他小砂片であるが本類に属する土器片である。

撚糸文土器（挿図115の40～59）

撚糸土器を一括した。挿図115の40は口縁部で僅かに外反し、縦位に撚糸文が施文され、口唇部に刻目が見られる。器面に内外両面よりの補修穴が穿がれている。胎土には白色の砂粒と纖維が含まれている。色調は黒褐色である。器厚は0.8cm前後である。同図41と42は同一個体であり、縦位に撚糸文が施されている。器形は口縁部で器厚が薄くなり僅かに外反するもので、口唇上に刻目が見られる。器厚は厚い處で1.2cmで、胎土には多量の白色砂粒を含んでいる。同図43は、斜位に細かい撚糸文が施されている。口唇部に工具による刻目が施されて、強く押されたためか、小波状を呈している。補修穴が穿がれている。胎土に白色砂粒と纖維を僅かに含んでいる。器厚は、0.4cm前後である。同図44は斜位に撚糸文が施されて、口唇上に工具による刻目が付けられていて、その刻目が強いために小波状を示している。胎土に纖維と白色の砂粒を含んでいる。焼成は良好で色調は赤褐色を呈している。同図45は、撚糸文が縦位に施され、口唇部に凹状に削られた様な刻目が付けられ、胎土に砂粒を含んでいる。色調は黒褐色で、器厚は0.5cm前後である。

同図47は、撚糸文が斜位に施文され、口唇上に横に刺突状に刻文が見られる。胎土には白色混りの砂粒を含む。色調は黒褐色で、器厚は0.8cmである。同図54は、密接した撚糸文が縦位に施文され、一部は重複している。口唇に刻目が見られ、内面に沈線が斜めに引かれている。胎土に長石粒が含まれている。器厚は0.7cm前後である。同図も54同様である。同図52は、器厚1.2cm前後の厚手のものであり、胎土に長石粒を含み、色調は黒褐色を呈する。同図56は無造作な撚糸文の施文が見られる。胎土には長石粒を含み色調は黒褐色であり、器厚は0.7cm前後である。同図52、57、58は、胎土に白砂を含むもので、同図49は長石粒を含む。そのほか挿図115に見られるものはいずれも同類のものと考えられる。

絡状撚糸文土器（挿図116の60～67・挿図117の68～77）

絡状撚糸文土器で、網状施文が見られるものである。挿図116の60～67は同一個体であり、網

状施文が見られる。器形は口縁部は欠失しているが器形深鉢状をなし、内面に繊維痕が見られる。胎土に長石粒を含む。色調は赤褐色である。網状施文が見られるものを一括したものである。挿図117の69は器面に網状の文様が施されている。口縁部は外反するものであり、口縁内面に籠状工具によって斜めに浅く削り取った刻みが付けられ、内面に繊維痕が見られる。胎土に白砂を含んでいる。器厚は1cm、色調は黒褐色である。同図72も器面の文様は鮮明ではないが、網状施文が施されている、口縁内面に69に見られた様な刻み痕がかすかに見られる。内外両面とも繊維痕が顕著に見られる、器厚は0.8cm前後である、色調は茶褐色である。同図76も、網状施文が見られる、口縁内面に69・72同様な刻みが付けられている。胎土に白色砂粒と繊維痕が見られる。焼成は良好であり、0.7cmで、色調は黒褐色を呈している。同図70・71・73・74・77は同一個体である。器面に細い縄文原体によって網目状に施文されている。74に見られる様に口唇上に刻目が見られる。胎土は白色砂粒を多量に含んでいる。色調は黒褐色で、器厚は0.6~1.0cmである。

沈線による網目状文土器（挿図117の68）

文様の構成より、前項の格状捺糸文に共通しているが、施文方法が異なる。半裁した竹管を使用して網目状の文様構成をなすものである。挿図117の68は同一個体である。器形は胴部下半部は不明であるが、口縁部は僅かに外反する深鉢のものと推定される。

細い竹管状の工具によって網状をなす様に文様が引かれている。竹管の半裁したものを使用したため沈線が平行している部分も認められる。文様は胴部上部より口縁部に顕著に見られる。口縁内部に工具による刻目が付けられている。胎土に白色の砂粒と繊維を含んでいる。器厚は1cm前後である。色調は黄褐色と黒褐色の部分が見られる。

貝殻腹縁文土器（挿図118の78~84）

貝殻腹縁のみを併列して文様構成をなすもの。78~84は同一個体の破片を推定される文様の精・雑のばらつきが見られる。文様は巾1.5cm~2.5cm前後の貝殻腹縁部を縦位に横列して施文している。内面に条痕調節痕が見られる。

胎土に白色砂粒と僅かに繊維を含んでいる。器厚は0.9cm前後で、色調は部分によって異なるが、茶褐色と黒褐色を呈している。

条痕文土器（挿図118の85~90、96）

内外両面に条痕の見られるものと、外面上のみ条痕の見られるものを一括した。同図85~90の器厚は0.4~0.6cmのもので、両面上に条痕が見られる。胎土に白色の砂粒を含んでいる。

同図の87は、器面は剥落の部分もあるが表面のみに条痕が見られる。焼成は良好で、色調淡褐色である。

隆帯が見られる土器（挿図119の90）

1点のみであるが、早期に属する低い隆帯の上に刻目を持つ土器で、胎土に石英粒と鐵維を含んでいる。色調は黒褐色で、焼成は普通である。

第2群土器（挿図118の92～96）

繩文時代前期に属する土器が数点であるが出土している。同図92は1点のみであるが、器厚が0.3cmと薄手の土器であり、貝殻腹縁による押突文が見られる。口縁端部は平坦である。

器面の内面に指圧痕が見られ、胎土は雲母を含み胎土は良質の粘土を使用している。色調は灰褐色で、焼成は良好である。同図93～96はいずれも前期後半の時期土器である。これ等は第2地点などに出土する土器と流入と考えられる。

第3群土器（挿図119の97～119）

繩文中期に属する土器である。同図97～100は同一個体である。97は口縁部に蓮華文を有する。それに半隆起線が横に三条引かれる。地文には繩文が施される。また98に見られる様に蓮華文帶は二段あったことが推定される。

また102は、半隆起線文の区割内に格子目文、楔形刻目文が見られる。このほか103、104も同時期と考えられる土器片である。以上の土器は、北陸系の新崎II式土器に比定または類似するものである。

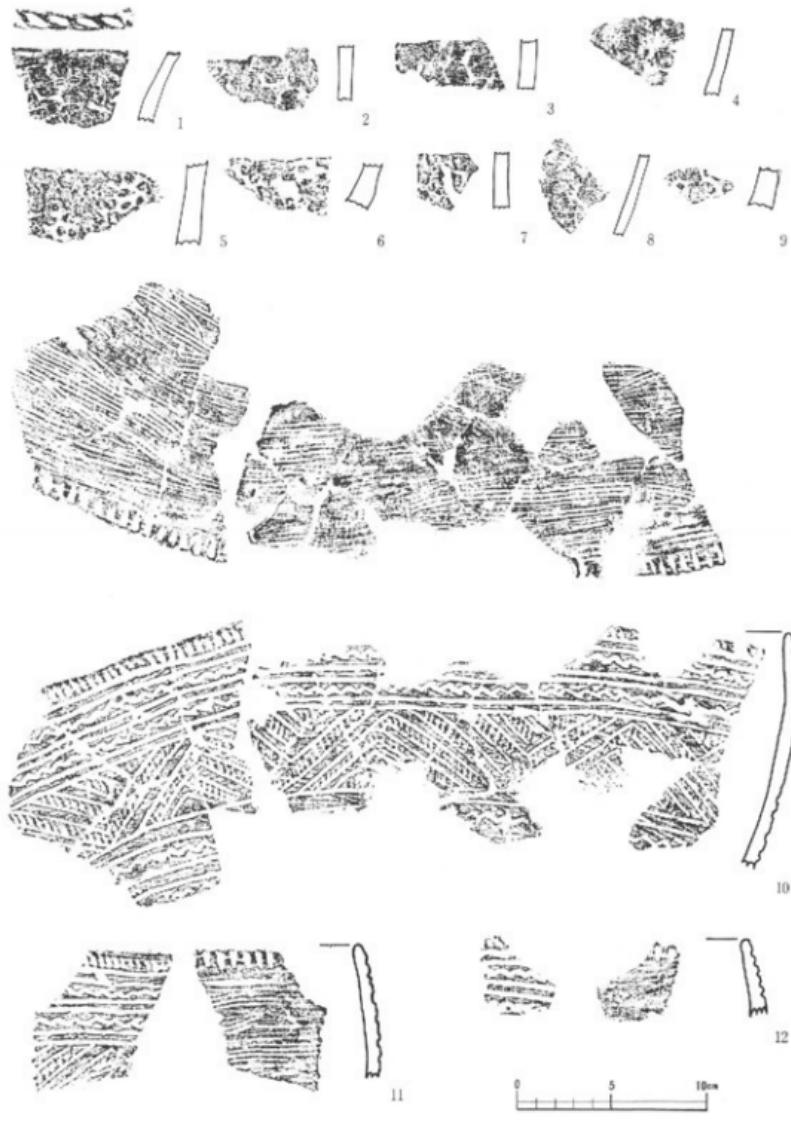
105～111は、多段横位区割帶の見られる土器片と推定される。様式は猪沢式に類似する。115は口縁内面である。

112～114は、隆帯上に密接する爪形文が施されており、114は肥厚する口縁部上に文様が見られた。これ等は中期前業の時期である。

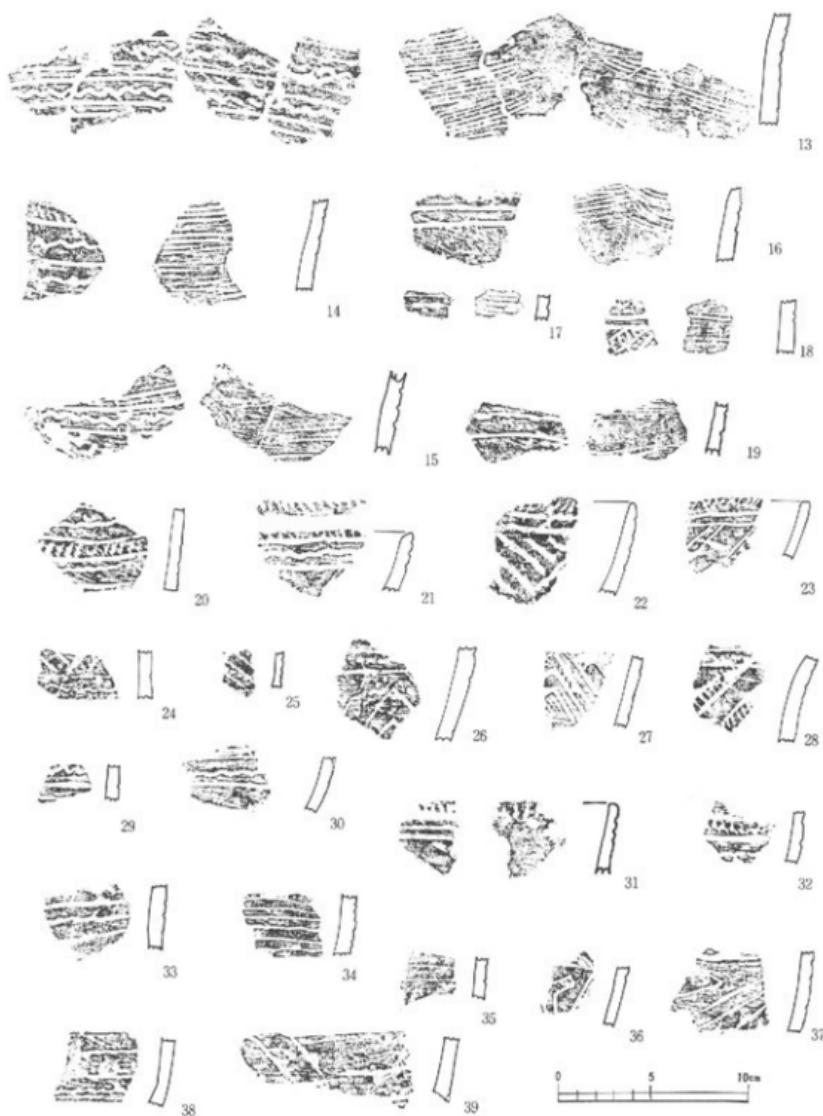
116は、比較的薄手の土器である。文様は地文に繩文が施文されて、口縁部に半裁竹箇による押引による一条の沈線がめぐらされ、その下部に同様の工具による押引の弧状沈繩文が見られ、更に同様工具による一条の沈線が引かれている。口唇部に繩文が施文されている。この土器に類似するものが、益田川の上流の小牧町の南垣内遺跡より出土している。³¹西日本系の土器である。

117、118は小破片であり、文様は明瞭でないが、前記の116同様西日本系の土器と考えられる。119は、1点のみであるが中期の土器の底部である。

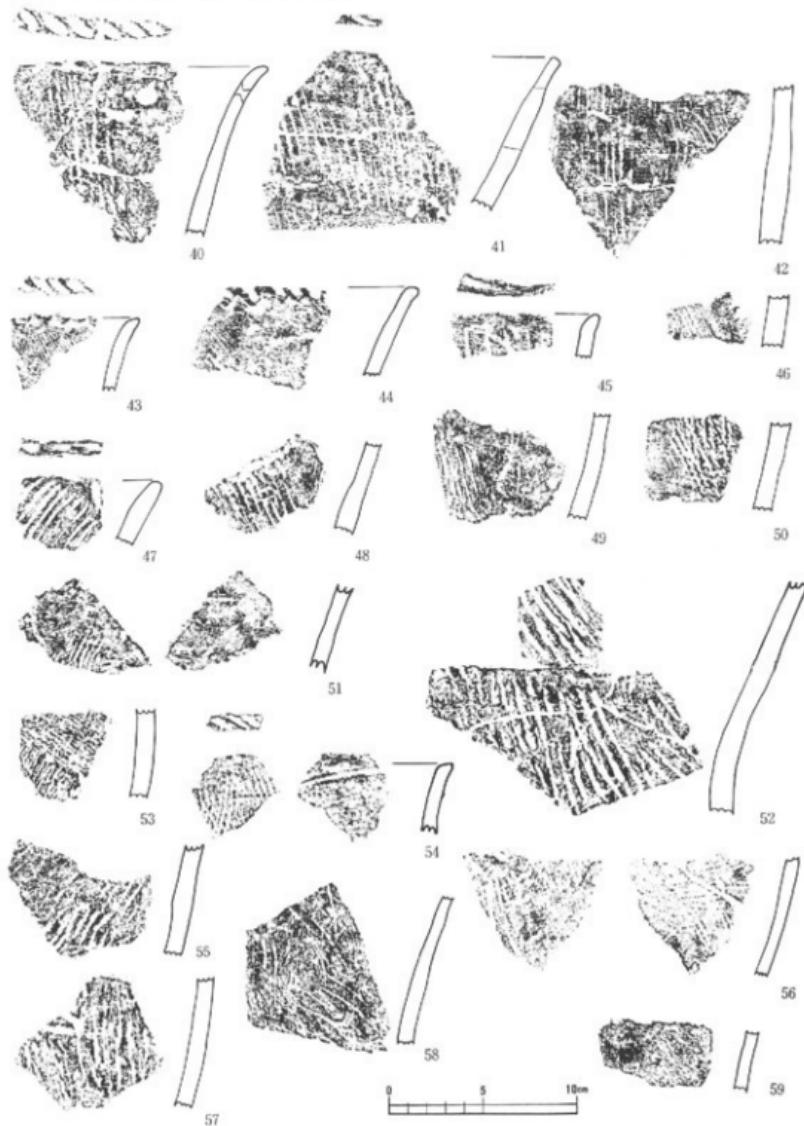
注1 大江 命「南垣内遺跡」I町道拡工事に伴う埋蔵文化財発掘報告書



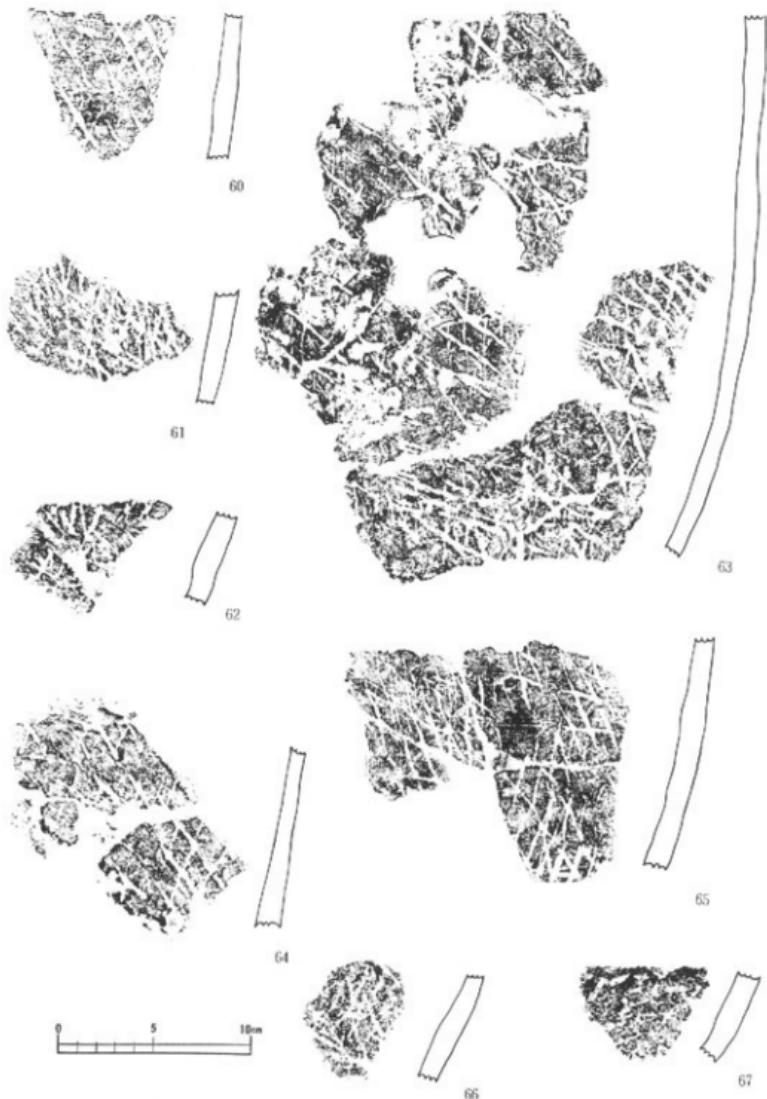
挿図113



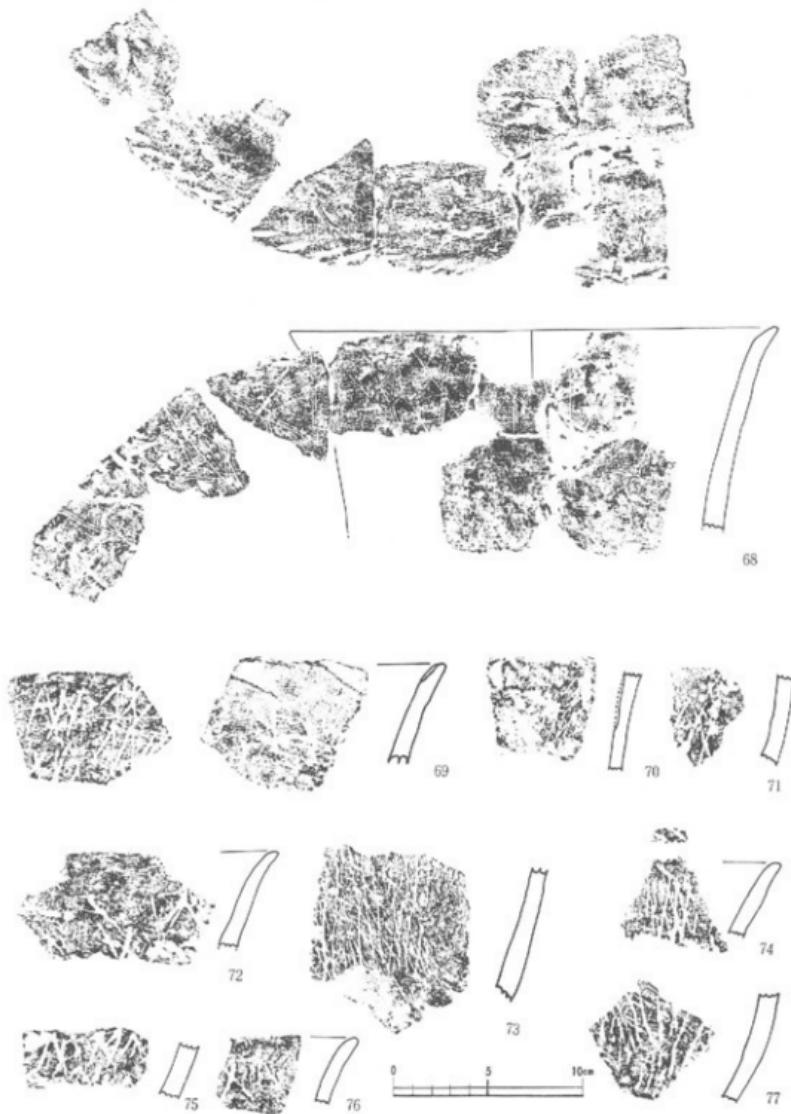
挿図114 第3地点出土土器



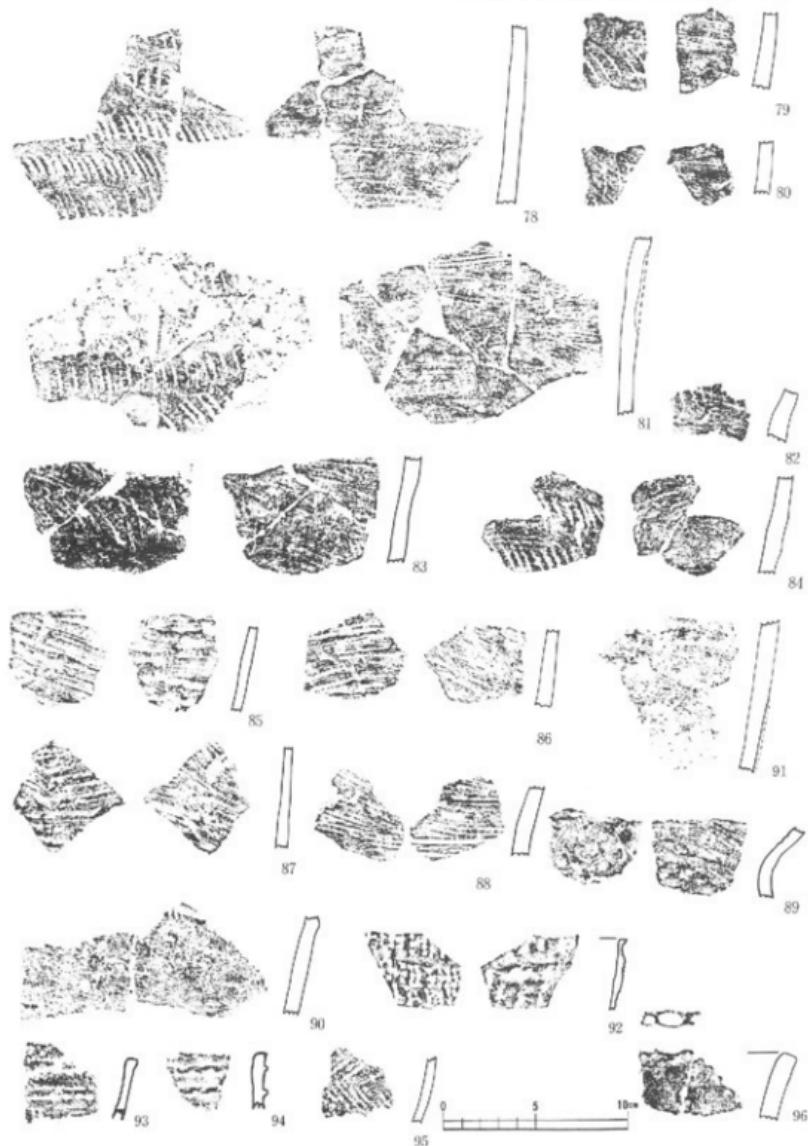
挿図115



挿図116



挿図117



挿図118



挿図119

石器類（挿図120～123）

第3地点出土の石器は、先述した様な器種が出土している。その出土石器の中で器形の残存の良好なものについて述べる。

石鎌（挿図120の120～133）

石鎌は、全て打製石鎌である。120～124は基部が直線的で三角形状をなす無茎鎌。同図225～233は基部に抉入のある円基無茎鎌に細分される。石質は225は黒曜石である以外は下呂石である。

石匙（挿図120の134、136～138）

4点はいずれもつまみを持つ石匙である。134、136は横形、137、138は縱形の石匙であり、刃部はいずれも削片の一部に付けられている。石質は下呂石である。全體の特長としてつまみ部が大きく、複雑な調整である。

スクレーパーは、挿図121の139～149の11点が知られる。これ等は横長、縱長不定形なフレークの一一面～二面に調整加工を施したものである。石質は下呂石がほとんどで、僅かにチャートが見られる。また149はノツチ状に使用された面が見られる。

石錘（挿図121の150）

第3地点に於ては1点のみ出土している。川原石の長軸の両端を敲打したものである。

打製石斧（挿図123の151～158）

ここではほぼ完形に近いもののみに留めたが他にも欠損品が見られる。器形はいずれも短冊形であり、152、156、158に見られる様に円礎の原皮面が残るもののが見られる。

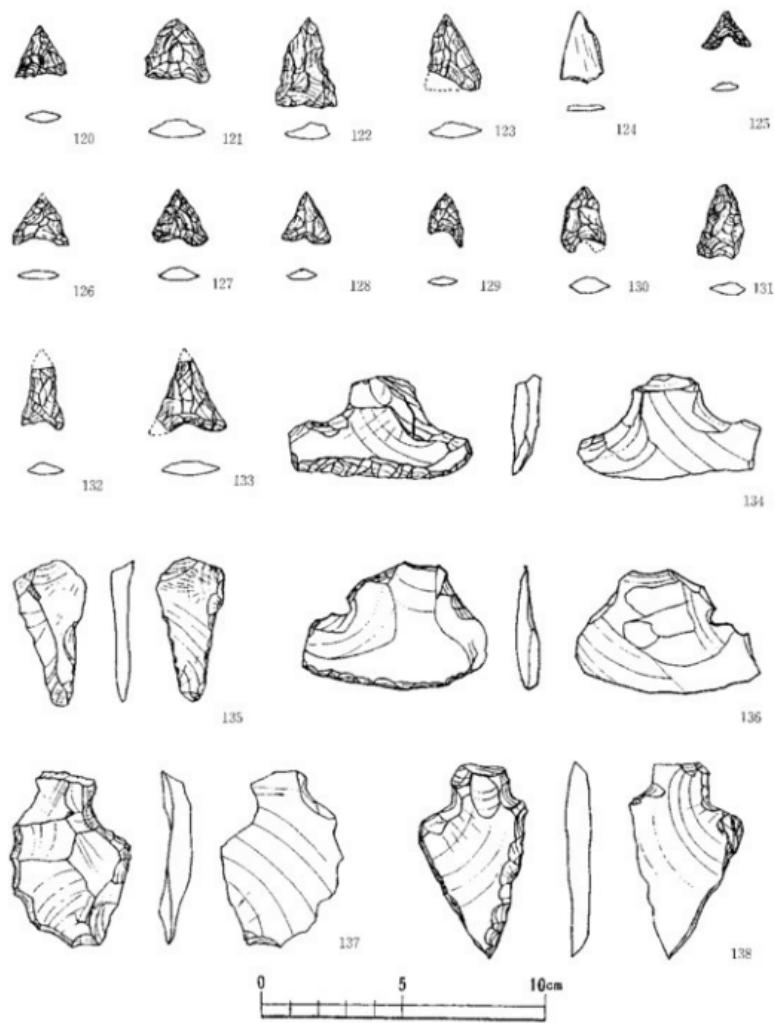
凹石・磨石（挿図123の159～165）

159～162は、凹石と磨石との形態を備えるものである。162は凹石として両面を使用している。163、164は磨石として円礎が使用されている。

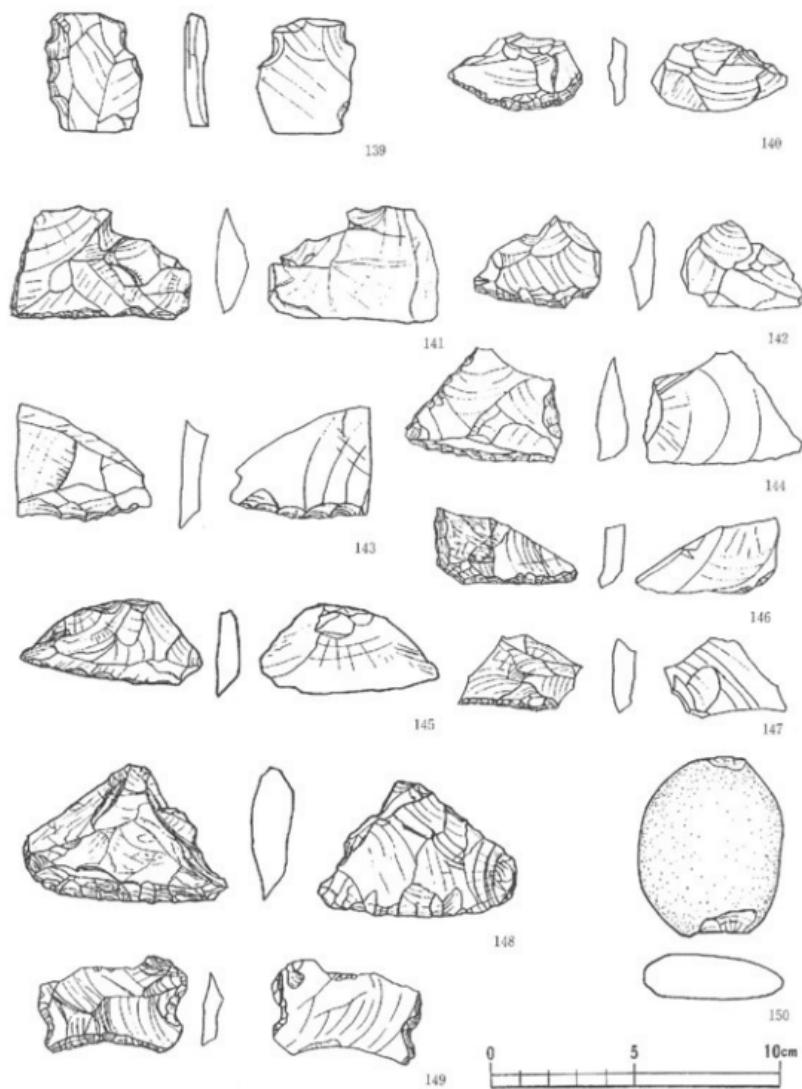
165は断面が長方形をなす細長い棒状の石器を使用して、全面が磨石として使用されている。

この種の遺物は、同郡内の湯屋遺跡でも出土している。また南垣内遺跡のプリズム状石器（注1）として指摘されているものと同類の機能を持つものと考えられる。

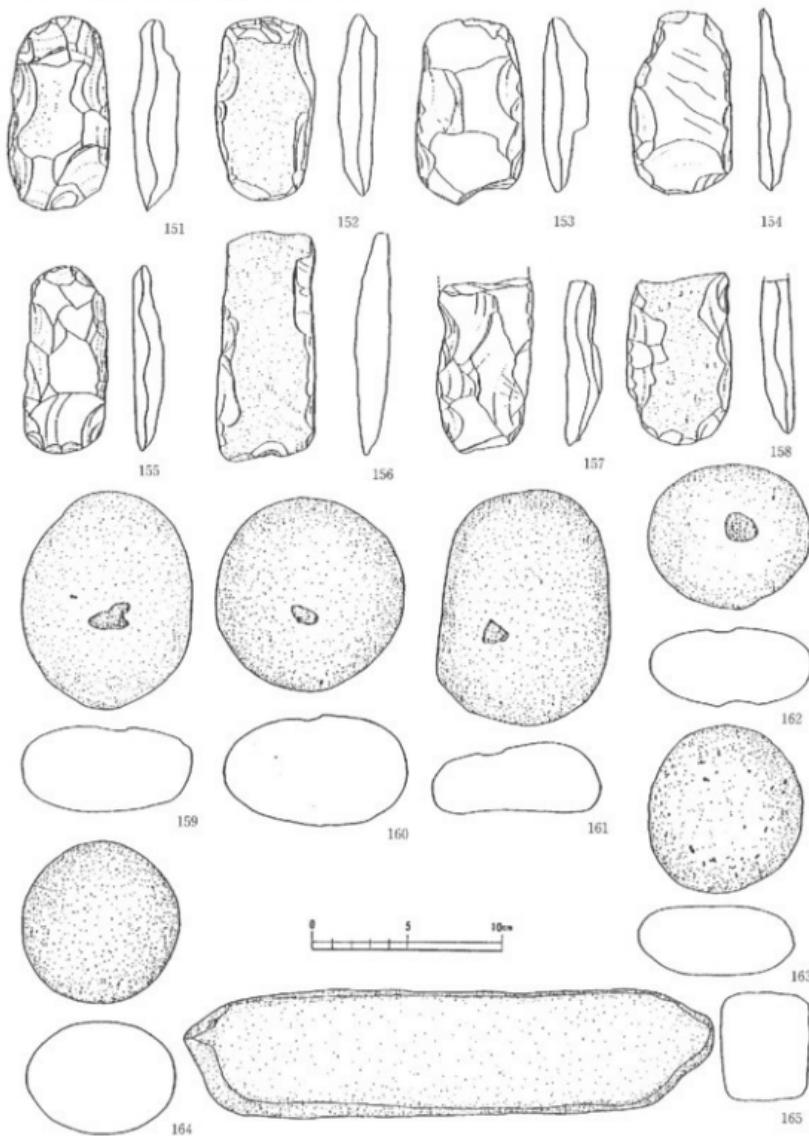
注1 大江 命「飛驒の考古学」 I 福應寺文庫 昭和40年



挿図120



挿図121



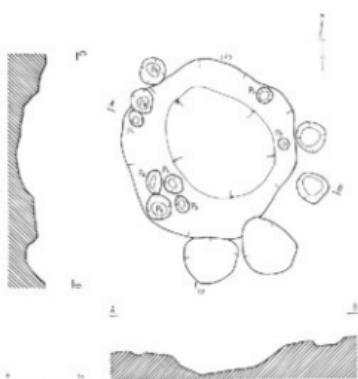
挿図123

第4節 繩文時代の竪穴状遺構

本調査において、土坑とも異なり、また住居址として性格を異にするものと考えられるものについて、ここでは竪穴遺構として扱った。

第1号竪穴状遺構（挿図124）

第1地点のR6の方区に検出された。遺構は黄色土層を掘込んでいる。平面プランは不定形な円形をなし、僅かにゆるやかに掘込まれた後、平面プランが玉子形を示し、深さ約30cm程の深さに掘込まれている。底面は西北部に傾斜している。ピットは僅かにゆるやかに掘込み部分に8ヶ所見られる。いずれも4~9cmの浅いものである。

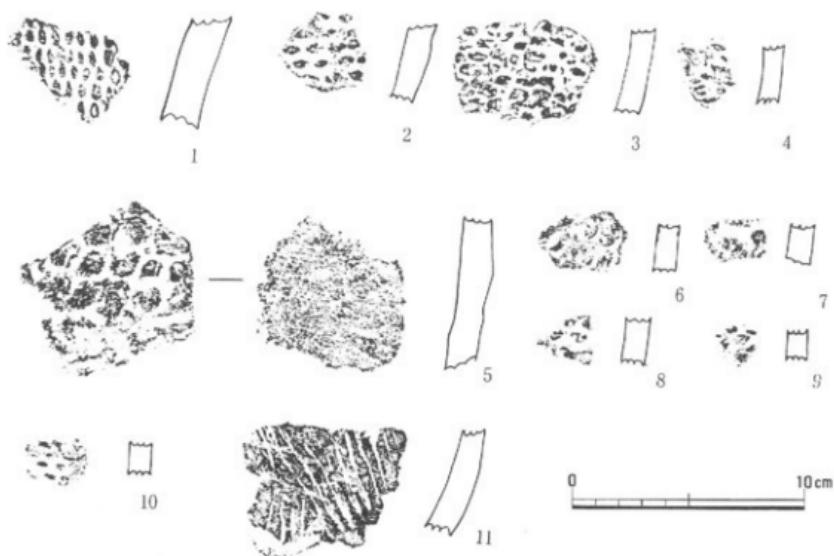


挿図124 第1号竪穴状遺構実測図

出土土器（挿図125）

本遺構における出土遺物は押型文土

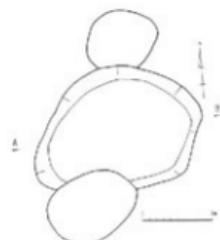
器が主体であり、粗雑な楕円形のものである。同図1~10はいずれも楕円文である。1、6は縦状に施文がある。また2~5、7~10は横位に施文されている。1は色調は黒褐色、胎土に砂粒と石英の雜砂粒を含む。器厚は1.5cmである。2は色調は黒褐色で僅かに砂粒を含む。3は器厚は1.1cm。3の色調は黄褐色で砂粒を含む。4は床直の出土であり色調は黒褐色で砂粒を含む。5~7は前記の押型文より原体の粒子が大きく1cm前後の大粒である。色調は5は淡茶褐色、長石粒を含む。器厚1.2cm前後。6は淡黒褐色で砂粒を含む。7は淡褐色、砂粒を含む。8、9、10は小破片である。押型文は楕円で0.5cm、小粒である。色調は8、10は黒褐色、9は淡黒褐色で砂粒を含む。また8は僅かに石英粒と雲母砂を含む。11は撲条文土器で、色調は赤褐色で雲母砂粒と長石粒を含む。長石粒は0.2cm前後である。



挿図125 第1号竪穴状遺構出土遺物

第2号竪穴状遺構（挿図126）

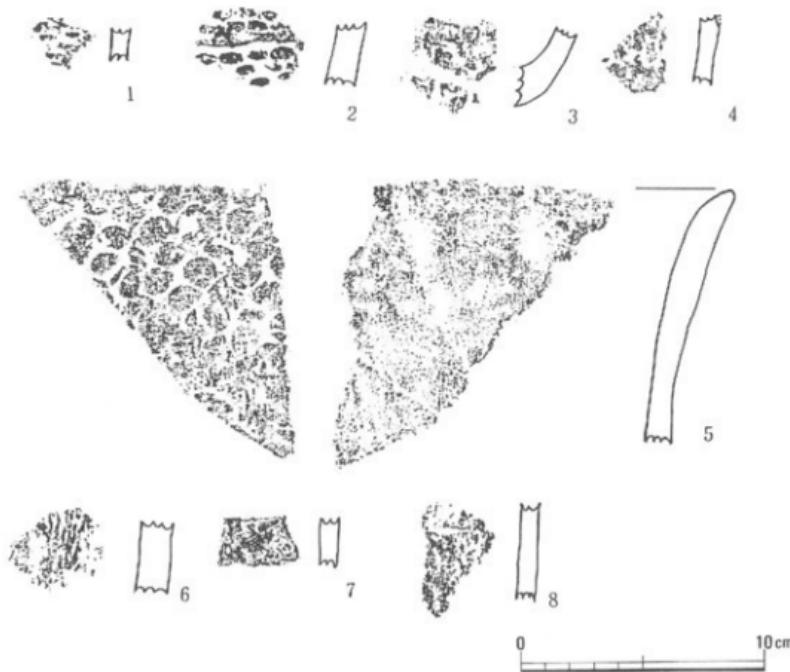
遺構は、第1地点のQ4・R4・R5に亘って検出された。平面形は不定形椭円状をなす。この竪穴状遺構の覆土中には山石の角礫が散在していた。石の大きさは10~15cm前後のものである。



挿図126 第2号竪穴状遺構実測図

出土土器（挿図127）

同図の1～3、5は橢円押形文土器である。4は橢円状粒子の原体が明瞭に彫られず、長方状になったものと考えられる。1は淡黄褐色で微砂を含む、器厚は0.7cm。2、淡赤褐色微砂を含む、器厚は1.0cm。3、黄褐色で微砂を含む、器厚は1.0cm底部である。4、黒褐色、胎土は堅緻、器厚0.7cm。5は褐色で石英粒を含む、器面外面は大粒の橢円文、押型文が施文され、口縁内面に斜めに凹が引かれている。器厚は10～13cm。6は撚糸文土器であり、色調は黒褐色で微砂を含む。器厚は1.2cm。7、無文で黒褐色で胎土に砂粒（長石）を含む。8、無文で淡黄褐色で砂粒を含む。器厚は0.7cm。



挿図127 第2号竪穴状遺構出土土器

第3号竪穴状遺構

本遺構は、第1地点のS4、T4方区に検出された。基盤となる黄褐色土層を掘り込んだ竪穴状の遺構である。平面形は、長軸約2m30cm、短軸1m90cmの不定形の橢円形を呈する。

出土土器（挿図128）

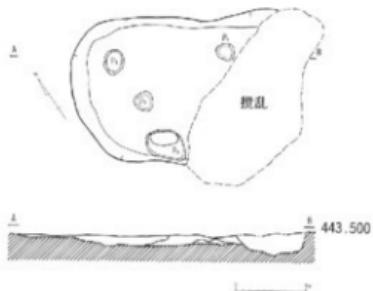
同1～4は全て橢円押型文土器である。1、4の橢円文は2、3より横長である。1は色調は灰褐色で胎土には砂粒を含み、器厚は0.7cmである。2は色調は灰褐色で胎土に砂粒を含み、器厚は約0.7cm前後である。3は色調は黒褐色で、胎土に砂粒を含み、器厚は0.5cm前後である。4は色調は黄褐色で、比較的堅敏である。5は扁平な貼付隆帯が口縁部に見られるもので、その隆帯の上に繩文が見られる。色調は黒褐色で少量の砂質を含む、器厚は0.4cm前後である。



挿図128 第3号竪穴状遺構出土土器

第4号竪穴状遺構（挿図129）

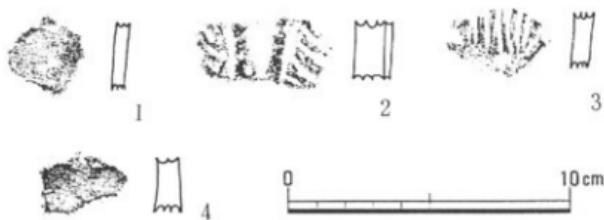
本遺構は、第1地点のU5方区に検出された。遺構の基盤となる黄褐色土層を掘り込んだ、横長の橢円形をなすものと推定される。一部分が搅乱されている。床面は履平であり、その面に4cm前後のピットが四ヶ所検出された。本遺構の深さ12～15cm程である。



挿図129 第4号竪穴状遺構実測図

出土土器（挿図130）

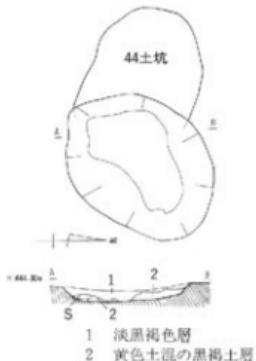
同図1は無文で、器厚が0.5cmである。2、3は縄文中期の土器である。4は無文であるが中期のものと推定される。いずれも覆土上器であり、本遺構の時期を決める資料とはならない。



挿図130 第4号竪穴状遺構出土土器

第5号竪穴状遺構（挿図131）

第1地点のS 6方区に検出された。遺構は黄色土層を約20cm程掘り込み、その床面は南に傾斜している。平面プランは、不定形な橢円形を呈する。44土坑は浅く、本遺構の上部に位置した新しい土坑と推定される。本竪穴遺構の遺物は2層より出土した。



挿図131 第5号竪穴状遺構実測図

出土遺物（挿図132）

同図1～4は押型文土器であり、文様は楕円文をなす。同図4はあまり文様は鮮明ではないが粗雑な楕円押形文。1は色調は淡黄褐色で、胎土に微砂を含む。器厚は1.1cm。2は黒褐色で胎土に砂粒を含む。器厚は1.0cm。3は黒褐色で僅かに砂粒を含む。4は文様はあまり解明できないが、押型文がかすかに見られ、色調は褐色。器厚は0.8cm。5は撚糸文を地文とし、沈線が引かれている。色調は褐色で胎土に砂粒を含む。器厚は1.2cm。6は網目状撚糸文である。色調は黄黒褐色で、胎土砂粒を含む。器厚は1.1cmである。

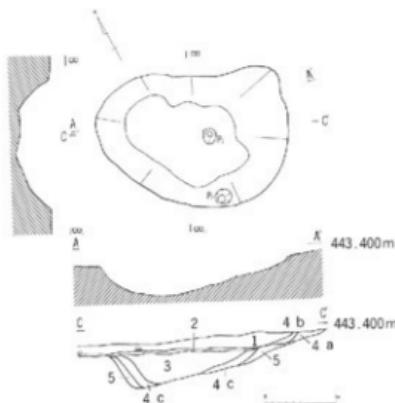


挿図132 第5号竪穴状遺構出土土器

第6号竪穴状遺構（挿図133）

本遺構はSの9・10方区に検出された第3号住居址の床面下部より検出されたものである。遺構のプランの平面形は不定形な楕円形をなすものである。長軸約2m70cm短軸は約1m90cmで、東から西に向って傾斜をなしている。深い所で約50cmである。

第3号住居址の覆土及び第6号竪穴遺構の土層図に見られる様に、第6号竪穴は2層の貼床によって第3号住居址と区別される。本遺構の遺物は後述する様に縄文早期のものであり、本住居址の遺構の時期は早期後葉の時期と推定される。

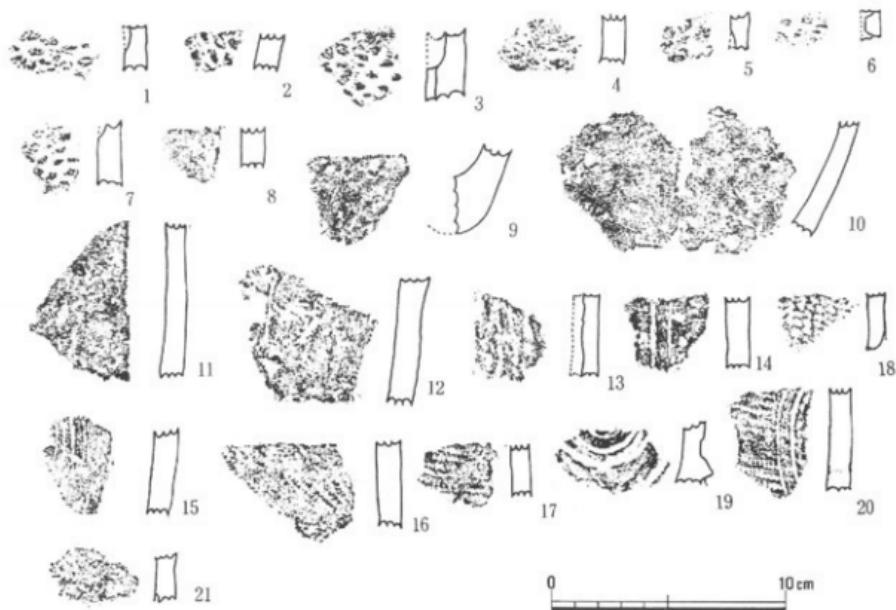


挿図133 第6号竪穴状遺構実測図

出土遺物（挿図134）

同図1～7は押型文土器で粗雑な楕円文が施されている。1は第3層出土であり横位に楕円形文が施され、淡赤褐色で胎土に砂粒を少々含む。器厚は約0.9cmである。同2は第3層出土で斜位に楕円文が施され、色調は淡赤褐色で砂粒を含む。器厚は1cmである。4、5は3層出土で淡赤褐色であり、明瞭ではないが楕円形の押形文が施されている。器厚は4が1cm、5は0.7cmである。7は1、2、3、6などに見られる様な0.4～0.5cmの楕円押形文が施されている。8、12は無文である。9は尖底部で赤褐色で砂粒を含む。8は尖底部に近い破片で、3層出土で赤褐色で、微砂を含み焼成は良好で堅敏である。10は3層出土、色調は表面は灰褐色、内面は黒褐色で胎土に砂粒を含む。11は3層出土で、色調は赤褐色、胎土に白色砂粒を含む。12は1層出土、色調は赤褐色で長石粒を含む。13、14、15は撚糸文土器で、13は3層出土、黒

褐色である。14は1層赤褐色、長石粒を含む。15は1層出土、赤褐色、長石粒を含む。16~18、21はいずれも縄文である。16は黒褐色、砂粒は白砂混入、17は黒褐色、砂粒を含む。21は第1層黒褐色（スス付着）砂粒を含む。19は隆帯、円状の凹を持つ、黒褐色砂粒を含む。20は地文に縄文と沈線による文様を持ち、色調は黒褐色、胎土に雲母砂粒を含む。19、20はいずれも第1層出土であり、前期の土器である。



挿図134 第6号竪穴状遺構出土土器

第7号竪穴状遺構

本遺構は、第1地点のS11、T11方区に検出された。遺構は基盤となる黄褐色土を掘り込んでいる。平面形は、南北に約3.00m、東西に2.70mの不定型な円形を呈する。

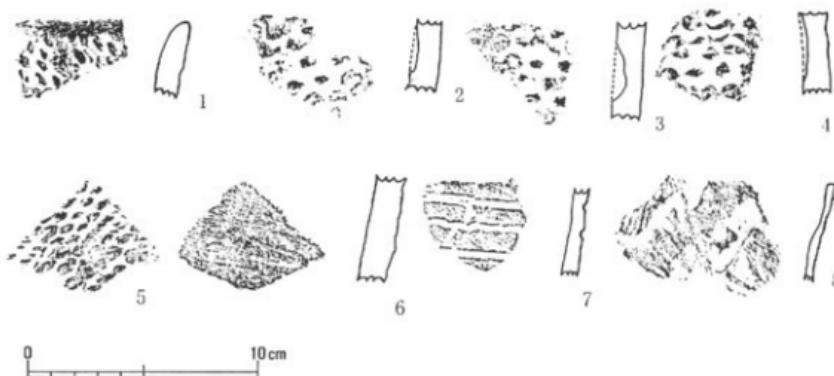
第7号竪穴遺構出土遺物（挿図135）

挿図135の1～6は、7号竪穴遺構の覆土より出土した遺物であり、また同図7、8は竪穴遺構に周囲に見られた2つのピットより検出された。

同図1は、楕円押彫形文が施され、色調は淡明褐色で、器厚は1.1cmである。胎土に微砂を僅かに含む、口縁部に補修孔が見られる。2は楕円押彫形文が施され、器面内面に擦痕が見られる。

色調は淡暗褐色で、胎土に微砂を含む、器厚は1.2cm前後である。3～5は楕円押彫形文であるが前者とはやや異なり丸味をもつていて。3は色調は淡黄褐色で、微砂を含む、器厚は1.2cmである。4は赤褐色で、繊維を僅か微砂を含む。5は淡赤褐色で破片を含む。6は貝殻沈線文土器であり、色調は黒褐色で、胎土に白色砂粒を含む、器厚は0.6cmである。

同図7、8は薄手のオセンペイ系の土器である。口縁部に偏平な貼付隆帯による文様がみられるもので、その隆帯の上にも条痕文が施されている。器面にも条痕文が施されている。器厚は0.3～0.4cm程度である。色調は赤褐色であり、胎土は堅緻な土を使用している。この7、8は先述した様にピットより検出した。



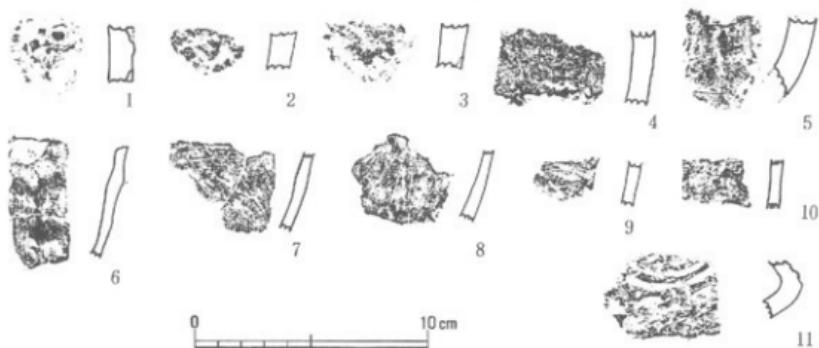
挿図135 第7号竪穴状遺構出土土器

第9号竪穴遺物

本遺構覆土出土の土器は、挿図136の1～4は押型文土器である。1～4は粗雑な楕円押形文土器である。4は僅かに楕円文の痕跡が見られる。色調は1は淡茶褐色で胎土に微砂を含む。

2は淡茶褐色で胎土長石粒を含む、3は淡褐色である。4は黒褐色で、長石粒と砂粒を含む。

同図5は、尖底土器の底部に近い部分の破片である。同図6～10は同一固体の破片であり、色調は褐色で、器面に指圧痕が見られる薄手で、胎土に雲母を含んだ微砂が見られる。同図11は淡褐色の中期の土器で、胎土に砂粒を含むものであり、混入土器と考えられる。



挿図136 第9号竪穴状遺構出土土器

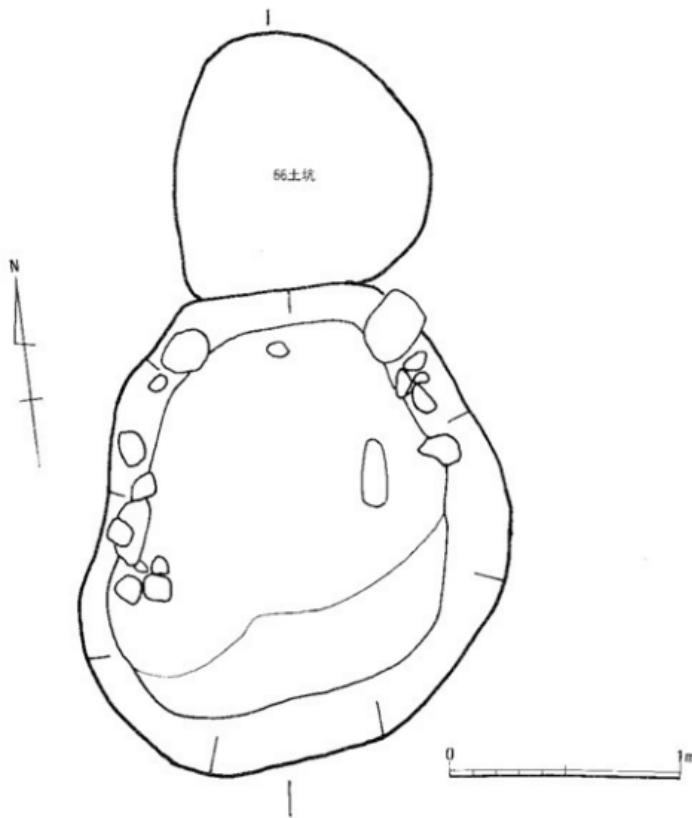
第10号竪穴遺構（挿図137）

本遺構は、W9方区を中心として一部Wに伴びて検出された。平面形は不定型の楕円状をなす。長軸方向は南北に約210cmである。短軸は東西方向に約180cmである。66土坑と接している。先後関係は切合部分が明瞭でないが、発掘時の所見によると前者が先行するものと考えられる。基盤となる黄褐色土には円礫混じりの部分を掘込んでいる。床面は偏平であり、その床面上より図版第47図に見られ様な石鉄3点出土している。

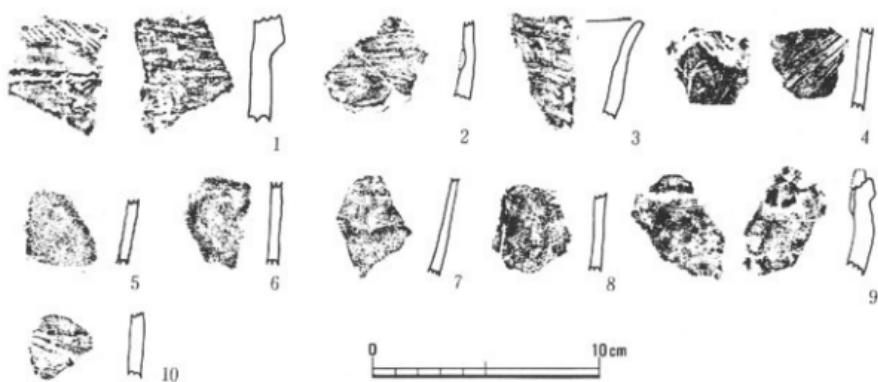
出土遺物は、図版第47図に見られる石鉄のほかに覆土中より、石鉄1点と土器が出土している。土器は挿図138の1は、條痕文土器で口辺部に当たる部分に肥厚する段をなすものと推定される。内面に雜い擦痕が見られる。胎土に纖維と砂粒を含んでいる。器厚は0.9cm前後である。

同図2～4、10は条痕文土器である。3は外反する口縁部で、條痕文が器面に見られ、胎土は密度の高い雲母、微砂を含む、色調は淡黄褐色である。器厚は0.6cm前後である。同図2、黒褐色、4は、褐色で微砂を含む、10は、黒褐色で微砂を含む。上記の2～4、10の條痕文土器は0.6～0.4cm器厚の薄手の堅緻な土器である。同図9は遺存状態は良好ではないが、口縁部が

肥厚して段をなすものと推定される。口縁内面の一部に貼付隆帯が見られる。色調は淡灰褐色で胎土に微砂を含む。この他に磨耗している土器片が出土している。



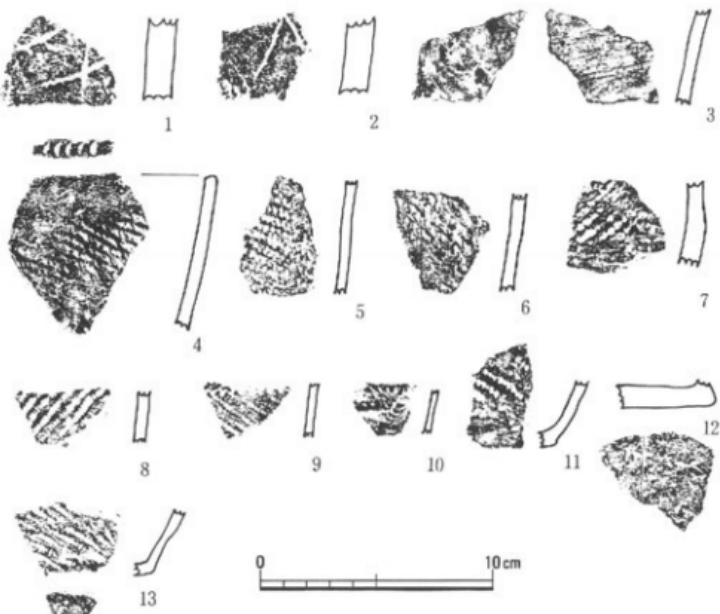
挿図137 第10号竪穴状遺構実測図



挿図138 第10号竪穴状遺構出土土器

第11号竪穴遺構出土物（挿図139）

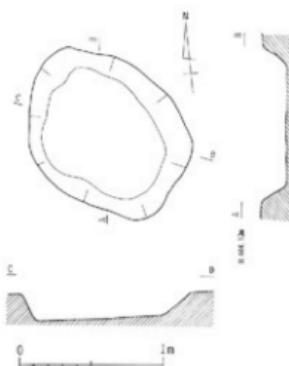
同図1、2は網状施文による撻紋土器である。1は色調は赤褐色、胎土に長石粒を多く含む器厚は1.1cmである。2は黒褐色で同図1同様長石を多く含む。3は無文土器で色調は黒褐色で胎土に砂粒を含む内面に擦痕が見られる。4～9、11、13は斜縄文が施文されている。4は口唇部に竹管状の刺尖が見られる。胎土に砂粒が含まれる。4、6は縄文の原体が角ばった粗いものが使用された丸味を持たない。5は色調は茶褐色、胎土に雲母混入の砂粒を含む。6は色調は褐色、胎土に砂粒を含む。7は色調黒褐色。8、黒色～黄褐色、砂粒わずかに含む。9、黒褐色で竹管による刺尖文が見られる。11、淡赤褐色。13は淡黄褐色で砂粒を含む。10は半裁竹管による瓜形文が見られる。本遺構は早期の上器が混入しているが、縄文前期の土器が見られる点より遺構は前期を推察される。



挿図139 第11号竪穴状遺構出土土器

第12号竪穴状遺構

本遺構は、第2地点のD31、E31方区に検出された。平面プランは不定形な橢円状をなす、長軸は約140cm 短軸100cm 深さ20cm



挿図140 第12号竪穴状遺構実測図

出土遺物

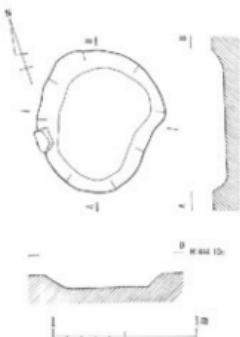
挿図141の1、2、4は、器面の表面に繩文が施されている。同図2は口縁部の口唇に橢円状に連続した凹文が見られる。色調は黒褐色で、胎土に微砂を含む。器厚は0.5cm。同図1は繩文が施され、色調は淡黄褐色で、胎土に砂粒を含む、器厚は0.9cmである。同図3は、キャリバ状の口縁部の部分に隆帶上に工具による刻み目が付けられた隆帶が貼付されている。色調は灰黒色で、胎土に砂粒を含む、器厚は0.7cm前後である。



挿図141 第12号竪穴状遺構出土土器

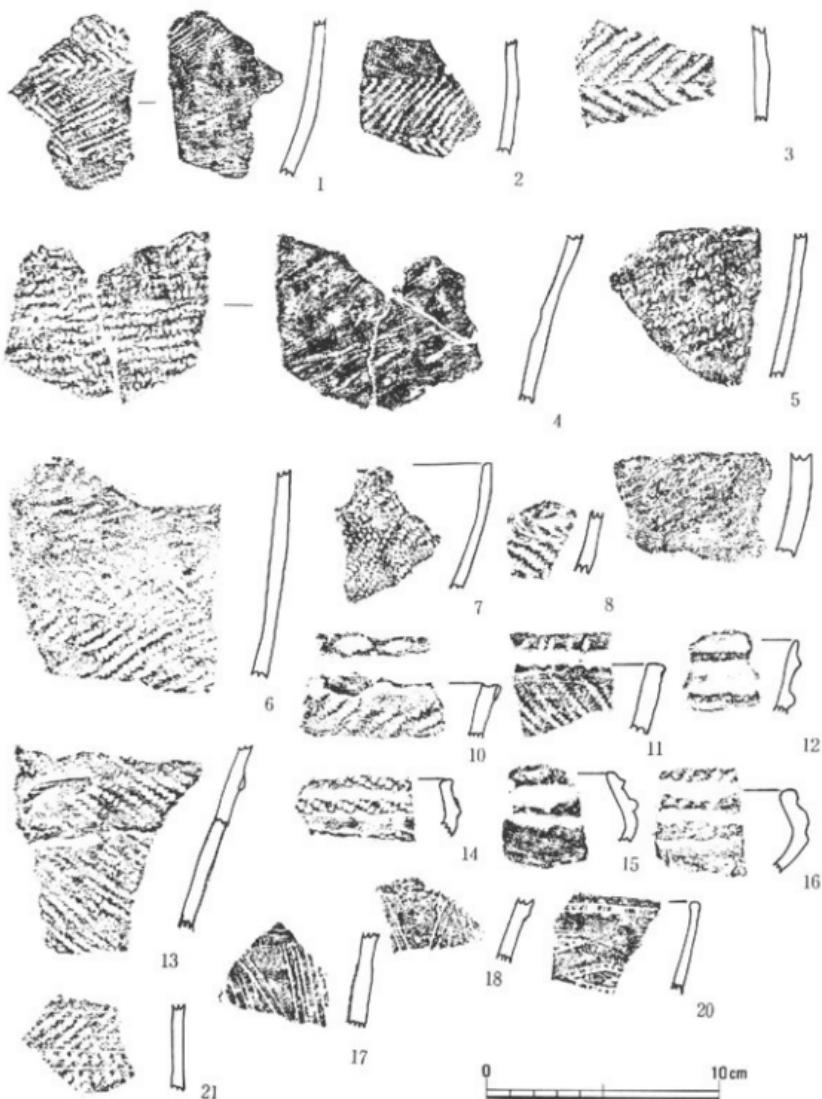
第13号竪穴状遺構

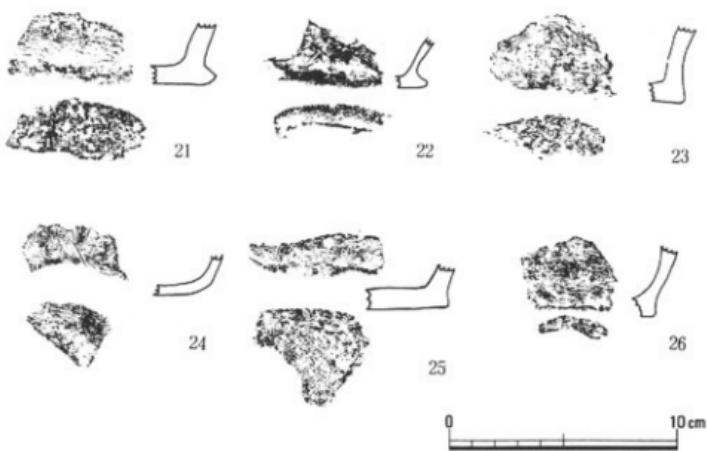
遺構は第2地点のD32、E32方区に検出された。平面形は不定形の楕円を呈する。長軸方向は南北に約100cm、短軸は東西に約90cm、深さ約25cmである。底面は偏平であり、壁部は暖やかに開きながら立ち上がっている。



挿図142 第13号竪穴状遺構実測図

13竪穴遺構出土の土器は縄文前期の上器であり、挿図143の1は文様は羽状縄文で、色調は黒褐色であり、胎土に雲母を含む砂粒を含む、同図2は羽状縄文で黒灰褐色で胎土に砂粒を含む。同図3は淡黄褐色で微砂を含む。4～12は縄文を継ぎ、斜位に施文されているものである。4は褐色で砂粒を含み、口唇部扁平であり工具によって刻み目が付けられる。5は口唇上に楕円状の凹みが押圧状に付けられ、その部分が肥厚する。5は淡黄褐色で、雲母混じりの微砂を含む。6～9、11、12は斜めに縄目が施文されている。色調は11、黄褐色、7～9、12は黒褐色で8、11、12は微砂を含む。1は地文の縄文の上に細い沈線が引かれる。その沈線間に刺突文が見られ部分がある。色調は淡褐色で胎土に微砂を含む。13は撚糸文が施され、茶褐色で雲母砂を含む。8～12の器厚は0.5～0.6cmである。13はやや厚め0.8cmである。挿図の14～17は口縁部に横位に隆帶を持ち、その隆帶の上に縄文を施したもの、または工具による切り目の付くものがある。16の二段目は竹管が付けられている。色調、胎土は14、15は淡褐色で砂粒を僅か含む。16は赤褐色、17は淡黄褐色、18、19は器厚は部分によって異なるが、同一個体で集合沈線による文様が見られる。色調は淡黄褐色である。20は幾何学的文様を持つもので、淡灰褐色で赤色彩色土器である。24～26は、底部である。前期の後半に属する。





挿図143 第13号堅穴状遺構出土土器

第5節 土坑・ピット

土坑

地点	番号	遺物	時期	地點	番号	遺物	時期
Q-4	1	(78)×83		S-9	51	130×80×11.0	チップ
Q-4,5	2	105×83	チップ、コア	T-8,9	52	98×95×5.5	チップ、フレーク
Q-5	3	112×115	チップ、フレーク	T-9	53	125×92×12.0	押型紋(小片)
Q-5	4	97×83	チップ、フレーク	T-9,10	54	155×108	
T-4,5	5	125×124×48.5		W-6	55	130×(50)	
R-5	6	110×86×7.5	鋸型紋、フレーク	S-10,11	56	105×90×(10-9 大-10.5)	押型紋
QR-4	7	117×900×44.5	焼鉢、チップ、フレーク	T-11	57	(66)×97	早期
R-4	8	165×(98)×15.0	焼鉢、チップ、フレーク	V-11	58	162×(110)	チップ
R-4	9	167×124×16.5	フレーク	V-10,11	59	253×145	オヤシベイ、チップ、 フレーク、巣石もあり
S-4	10	180×150×23.0	チップ、フレーク	V-10,11	60	103×88	
ST-3	11	110×65		W-10,11	61	(100)×100	チップ
Q-6	12	105×()×8.0	炭	W-X-E,I	62	(105)×100	チップ、フレーク
S-4	13	105×90×29.0	チップ	X-10	63	108×100	チップ
S-4	14	127×115×41.0	平、西斜	X-10	64	(110)×116	中居?
S-4,5	15	102×82×32.5	浮型紋(西斜かも)	W-10	65	203×(70)	中、居、中
S-5	16	152×150×40.5	フレーク	W-X-I,10	66	(115)×115×49.5	チップ
S-4,5	17	130×120×37.0	チップ	W-X-I,10	67	182×(136)×57	早、中、中居らかくのあり
ST-5	18	140×117×49.0		W-X-I,10	68	108×90×43.5	早期
ST-5	19	110×85×38.0	チップ	X-9,10	69	(165)×132×49.5	中、中期
T-5	20	135×122×48.5		X-Y-10	70	155×120×52	
RS-5	21	170×135×47.5		X-9	71	110×86×34	
S-5	22	136×106×25.0		X-W-9	72	137×92×42	チップ、フレーク
S-5	23	(165)×127×33.0		X-8,9	73	180×168×35	早期
S-5,6	24	187×170×53.0	チップ、フレーク、コア	W-9	74	113×100	中期
RS-6	25	170×140×45.5			75		
T-6	26	(125)×133×34.6	チップ		76		
TU-U-6	27	103×88×13.0	チップ		77	130×(100)	
X-9	28	(60)×100			78	104×75×7	
U-6	29	120×104			79		
U-5,6	30	107×75×12.5		T-4	80	172×135	
T-5	31	(123)×118×32.0		L-20	81	150×140	須恵器
V-5	32	106×85×15.5		LM-20	82	128×105	
V-5	33	(130)×95×26.5	チップ	M-20	83	173×135	
V-5	34	(145)×(57)×11		M-28,29	84	100×67×27.0	
U-6	35	102×82	チップ、フレーク	M-28,29	85	110×(65)×23.5	
W-10	36	105×88		M-28	86	103×72×16.0	
UV-6	37	107×66			87		
V-6,7	38	100×88	鉄くず		88		
V,W-7	39	110×100			89		
V-7	40	118×90		K-21	90	202×170	
V-7	41	108×92		I-23	91	(93×117)×12.0	
X-9	42	170×(140)×34		I-23	92	115×105×24.6	
T-6,7	43	116×100×10.5		I-23	93	100×83×10.0	
S-6	44	(126)×153	チップ、フレーク	J-23	94	87×96	
R-6,7	45	170×128×30.5	チップ、フレーク	J-22	95	258×175×33.5	チップ
R-5	46	107×96×10.5	チップ、フレーク	J-23	96	105×90×18.0	前期
RS-7,8	47	100×100	チップ、フレーク	H-24	97	247×177	チップ、フレーク
R-7,8	48	200×160×18		H-27	98	138×(70)×28.0	中、前期
P-7	49	(178)×48		H-27	99	172×148×40.0	
OP-7,8	50	250×200	泥瓦、チップ、フレーク				

地 点	番 号	遺 物	時 期	地 点	番 号	遺 物	時 期
H-25,26	100	112×107×33.5		M-29	151	100×85×39.5	チップ、フレーク、陶器
G-26,27	101	165×(93)×17.5	打抜き石、磨石、石皿 1つは鉄ナット、ベー ル、セラミック	M,N-29	152	101×(52)×27.5	チップ、フレーク、陶器
G-27	102	163×115×24.5	石皿 (1/2欠損)	N-29	153	105×36×(4.5-15.5) (大さ8.0)	
G-26,27	103	130×(65)×15.0		N-28,29	154	103×83×13.0	(尖ていちかく) 早、前期
Q-33	104	100×87		N-29	155	110×93×43.0	チップ
K-28,29	105	105×86		N-28	156		前期
	106			N-28	157	(112)×106×17.5	分界
	107			D-33	159	107×105	早期
F,G-30	108	105×90×30.0		W-27	160	112×97	
E,F-30,31	109	145×103×42.5		V,W-27	161	114×66	チップ
I-26	110	105×97	チップ、フレーク、山形	U-27	162	133×118	前期
C-34	112	98×80	チップ	V-27	163	163×100	フレーク
I-29	113	155×125×36.0		U-25,26	164	140×123×43	中期
D-30	114	110×90×32.0	チップ、フレーク	U-26	165	(120×138)	早、中期
D-30	115	123×88×20.5	チップ、フレーク	U-26,27	166	(104)×143	前期
D-31	116	100×97×47.5	チップ、フレーク	U-26	167	90×85	チップ
C-30	117	95×82×15.5		S-28	168	122×80 P-1-10.5 P-2-8.0	
C,D-30	118	105×100×18.0	フレーク、陶器	S,T-29	169	107×107×12.5	
C-31	119	130×117×8	チップ、フレーク	R-27,28	170	(82)×95×16.0	前期
C-30	120	120×83×32.0	フレーク、陶器、鉄(?)	R-27,28	171	100×88×26.0	
C-30	121	101×96×32.5		S-27	172	120×115×10.0	チップ、フレーク
A,B-31	122	(136)×118×115.5	チップ、フレーク	S-27	173	145×130×22.5	チップ、フレーク
B-31	123	110×105×31		R-29	174	133×103×32.0	
B-31	124	185×(75)×8.5		R-29	175	130×115×45.5	チップ、フレーク
B-31,32	125	115×104×24.0		R-25	176	22	朱石土坑
	126			R,S-26	177	310×165×49.5	瓦、チップ、フレーク
C-32	127	101×85×35.0		I-24	180	34	瓦、初期
B-32,33	128	(85×80)×17.0	チップ、須恵器	W-27	181	135×113	チップ
D-31	129	100×83	陶器	I-26	182	103×78×47	チップ(須恵器出上)
D-31	130	113×90×14.0	打抜き、チップ、フレーク	I-28	183		早、中期
D-32	131	102×90×19.5		IU-28	184	195×140	早期
J-26	132	95×72×16.5		U-27	185	155×112	チップ、フレーク
J-27,28	133	90×75×11.0		U-27	186	100×90	早、中期
J,K-26	134	(75×80)×11.5		T-27	187	113×90	
J,K-26	135	105×87×27.5		T-26,27	188	160×120	
C,D-33	136	(75)×80×26.5	チップ	D-35	189	×16.0	チップ
C-33	137	100×82×20.0	チップ、フレーク 砂、中期	D-35	190	105×80×29.5	チップ、フレーク 瓦、中期
A,B-30	138	145×110	チップ、須恵器、陶器	D-35	191	100×85×39.0	瓦、中期
B-31	139			G,H-33	192	82×64×36.0	
B,C-30	140	100×93	チップ	G-33	193	(78)×89×22.0	前期
D-33,34	141	123×95×31.0		G-33	194	90×88×24.0	
D-34	142	103×73×16.5	チップ、フレーク	G-32	195	97×88×30.5	チップ
E,F-33,35	143	130×112×51.0	チップ、フレーク	G-32	196	82×73×11.5	チップ
D-32	144	150×133×13.5	チップ、フレーク	F-33	197	(47)×79×12.5	チップ、フレーク
D-32	145	103×90×35.5		H-33	198	120×113	チップ
D-32,33	146	105×108×25.0		I-33	199	120×100	チップ、須恵器、陶器
D,E-33	147	135×105×24.5		F-32,33	200	(44×80)×9.0	
O-29	148	120×98×13.0		H-32	201	120×107	フレーク、陶器
M,N-32	150	100×80×34.5	チップ、フレーク	J,I-32	202	(65)×95	後期

地點	番号	遺物	時期
I-32	203	102×75	陶器
H-24	204	(75)×83	
I-32	205	105×100	
I-31,32	206	(148×150)	
F,G-33	207	96×70×35.5	チップ、フレーク
O-10	208	102×85	チップ
O-21	209	100×85	チップ
O-23	210	110×101×12.5	チップ
OJ-2,23	211	100×85	チップ
O-10	212	120×98×24.0	チップ
O-22	213	100×85×17.0	チップ
Q-26	216	153×127	チップ
P,Q-26	217	101×87	チップ、フレーク
Q-26,27	218	110×97	チップ
PQ-26,27	219	125×115	チップ
24任内	221	87×82×55	
LM-24	222	133×130	
LM-24	223	(115)×123	チップ
K-20,21	224	183×(50)	チップ
Q-6	226	110×65×12.0	チップ
O-21	228		チップ
M-21	229	100×81	チップ
F-32,33	230	83×77×46.0	チップ、フレーク、陶器
F-32	231	86×86×25.0	チップ
I-26,27	232	154×145	石器、コア
W-9	233	(95)×117	石器
W-9	234	(90)×95	石器
P-25	237	112×75	石器
P-24,25	238	117×112	石器
P-23,24	239	100×89	石器
V-27,28	240	187×85	石器
V-28	241	114×100	石器
V-28	242	95×77	石器
V-28	243	98×55	石器
DE-30	244	117×90	石器
F-31	245	102×77	石器
C-33,34	246	(115×70)	石器
H-26	247	103×90×20.5	石器
J-24	248	120×67	石器
C-31	249	100×98×26.0	石器
CD-32	250	108×66	石器
T-26	251	100×72	石器
F-31,32	252	110×109×36.5	石器
QJ-26,27	253	275×220	石器
F-32	254	(105)×93×15.5	石器
FG-32	255	142×90×45.5	石器
I,J-25,27	256	118×90×18.0	石器
II-25	258	110×100×17.5	石器
GH-25	259	130×120×34.0	石器
	260		石器

ピット			
地點	番号	遺物	時期
Q-4	1	40×33	
Q-4	2	65×35	(無文でわからない上部)、チップ
Q-5	3	60×52	横円押型紋
Q-5	4	40×40	早期
R-5	5	88×70	
S-3	6	75×60×28.5	早期
W-6	7	67×63×11.5	チップ、フレーク
R-5	8	78×66	早期
R-6	9	58×34	
V-5	10	55×43×11	
UV-5	11	40×35×13.5	
UV-5	12	53×51×6	チップ、フレーク
U-5	13	55×52×10.5	早期
U-6,7	14	47×42×18	
TU-6	15	80×75×小=6.5	
U-6	16	95×70×16	
V-7	17	70×58	(無文でわからない上部)
V-6	18	46×45	
VW-6	19	55×50	
S-6	20	53×47	
S-7	21	40×35×9	保
T-7	22	30×30×9	
T-7	23	20×20×15	
T-7	24	33×30×20	
T-7	25	45×38×10	
V-5,6	26	45×40	
V-7	27	60×53×9.5	
UV-7	28	85×70×28.5	スクレーパー、チップ
U-8,9	29	50×35	
UV-7	30	83×70	チップ
V-8	31	80×65	(無文でわからない上部)チップ
V-7,8	32	50×48	
V-8	33	40×33	
V-8	34	52×50	
V-8	35	53×43	
V-8	36	72×66	
V-9	37	40×38	
U-5	38	95×75	
T-8	39	32×30	
V-11	40	42×38×11	
V-11	41	33×30×2	
V-10	42	30×26×4	
V-10,11	43	95×70×26.5	
V-10	44	72×64×22	
V-10	45	65×60×10.5	
V-10	46	46×44×8	
V-10	47	47×38×8.5	
U-10	48	83×80×17	

地點	番号	遺物	時期	地點	番号	遺物	時期
U-10	49	45×35×10		Q-7	98	20×20	
U-10	50	43×43×8.5	(小片でわからない土器2コ)	Q-7	99	25×22	
U-10	51	28×26×4.5		Q-7	100	25×23	
T,U-10	52	40×40×4		Q-7	101	43×35	
U-10	53	35×30×14.5		S-9	102	65×58	
U-10	54	67×55×8.5		S-11	103	19×17	
RS-10	55	30×25×12		S-11	104	23×20	チップ
T-11	56	54×50	チップ、フレーク	S,T-11	105	30×26	コア
T-11	57	30×28	無文土器	T-10,11	106	35×30	
T-11	58	38×32×19	無文でわからない土器	T-10	107	26×25	
U-11	59	22×15×6		T-10	108	20×18	
U-11	60	21×20×5		T-10	109	15×14	早期?
U-11	61	35×24×8		T-10	110	17×17	
WX-10	62	53×50×9.5		T-10	111	20×15	
X-10	63	60×50×9		T-10	112	26×26	前期
S-11,12	64	45×40	柄円押型紋	T-10	113	30×26	チップ
S-11	65	58×50	チップ	T-10	114	31×32	(無文で疑わしい土器)
S-11	66	34×36		T-10	115	27×23	
S-11	67	27×26		T-10	116	31×28	
S-10,11	68	35×28×20	小片の土器、チップ	X-8	117	82×70	
S-10	69	55×50×12.5		T-11	118	40×35	
T-10	70	25×25		T-11	119	48×45	(小片でわからない)
T-10	71	48×43×4		T-11	120	45×40	塊石2コ
T-9	72	55×55×10	無文でわからない土器	X-9	121	83×75	チップ
U-6	73	85×85×14.5		E,F-32	122	36×76×9.5	
T-11	74	70×65		I-22	123	72×53×15	石塊1コ、石器、チップ
S,T-10	75	62×53×15.5		I-22	124	60×55×8.5	チップ
S-10	76	25×23×6.5		I-22	125	25×20×13.5	チップ
S-10	77	50×43×21		I-22,23	126	35×30×4	
S-10	78	53×45×14		I-23	127	60×50×13.5	
S-11	79	30×33	チップ	I-23	128	55×50×14	
T-11	80	30×25		J-22	129	33×30×2	前期
S-10	81	65×65×33.5		I-23	130	25×20×8	
R-10	82	70×55×30		I-23	131	20×15	砂6、磁6、石器3コ、石器 1コ、石器1コ、石器1コ、 チップ、ブンク
R-9	83	35×30		I-22	132	25×23×8.5	前期
R-9	84	61×69	(小片でわからない土器)チップ、フレーク	I-22	133	38×30	
R-8,9	85	45×37		I-23	134	43×43×9	
R-9	86	30×27	保	J-23	135	25×23×7.5	
R-8	87	93×75		I,J-23	136	33×25×6	チップ
R-8	88	30×27		I-23	137	48×33×15.5	保
R-8	89	35×28		I-23	138	28×25	
R-8	90	46×44		I-22	139	23×23×8.5	
R-8	91	50×48		I-23	140	50×45×9	
R-8	92	35×23		E-32	141	28×26×17.5	
R-8	93	82×60		E-32	142	22×18×10.5	石器、チップ
R-7	94	45×44		I-23	143	45×35×8	前期
R-7	95	38×35	(小片でわからない土器)チップ	I-23	144	25×20×7.5	
R-7	96	60×50		H-26	145	30×25×9	前期
R-7	97	30×25		I-22	146	45×40×13	前期

地 点	番 号	遺 物	時 期
I-32,33	147	70×65×41.5	前期
H-32	148	80×72×29	前期
J-23	149	45×38×18	
J-23	150	28×25×11	
J-22	151	60×55×8.5	前期
J-22	152	43×35×1.5	
J-23	153	34×25×7.5	打製石斧
J-22	154	45×38×8	チップ
J-22	155	40×37×10	
J-23	156	30×24×11	前期
I-32	157	33×55×18	
D-33	158	22×32×12.5	チップ
E-32	159	26×24×8	チップ
G-24	160	38×30×8.5	前期
G-24	161	33×25×6	前期
GJ-24	162	45×35×9	チップ
G-24	163	45×40×9	
G-24	164	50×45×8.5	
G-24	165	75×68×21	チップ
H-23	166	48×42×30	前期
H-23	167	40×35×26	前期
H-23	168	35×39×13	
F-33	169	72×52×11.5	貝殻灰(1コ)、チップ、フン・ク
G-23	170	25×20×8.5	
H-23	171	27×25×65	
G-23	172	35×30×10.5	無文で時期わから ない玉器
H-23,24	173	40×40×70.5	前期
E-32	174	40×40×7	
I-25	175	60×60×10.5	
J-25	176	55×52×16.5	
I-24	177	50×48×18	前期
J-25	178	70×60×13	前期
J-25	179	35×30×10	
D-31	180	83×80×43.5	石頭(1コ)
K-32	181	44×40	石頭(1コ)
H-25	182	47×30×6.5	前期
I-27	183	40×35×5	石頭、チップ、フレーク
H-25	184	75×70×5.5	
I-25	185	45×43×8.5	石頭(1コ)、チップ
I-25	186	85×76×16.5	前期
I-25	187	68×55×7.5	
G-30	188	85×80×14	前期
HJ-25	189	37×35×6.5	
H-25	190	50×45×6.5	前期
I-25	191	48×36×6.5	前期
I-25	192	45×40×10.5	チップ
H-25	193	40×35×5.5	
H-25,26	194	65×55×11.5	彩色土器
J-26	195	35×30×5	前期

地 点	番 号	遺 物	時 期
I-25	196	83×70×45.5	フレーク
H-24,25	197	80×65×12	前期
H-24	198	65×55×13	チップ
J-26	199	40×37×10.5	前期
I-25	200	87×70×15	
G-25	201	55×32×6.5	チップ、石錐
G-25,26	202	60×55	前期
H-26	203	30×28×93	
H-26	204	32×30×11	
I-27	205	43×40×15.5	貝殻灰(1コ)、石錐
H-27	206	28×25	石錐(1コ)、チップ、フレーク
J-27,28	207	90×65×11	前期
J-27	208	43×35×6.5	チップ
J-27	209	30×30	
JK-27	210	41×35×6	
G-26	211	60×50×14	前期
G-26	212	40×40×4	前期
H-26	213	30×27×6	
G-26	214	35×35×10.5	
G-26	215	38×35×10.5	チップ
G-26	216	55×45×8	万葉・スクリーパー
G-26	217	78×53×13	チップ
H-26	218	35×28×9	前期
G-25	219	98×83×32	チップ
G-26	220	42×35×12	チップ
H-28	221	40×37×6.5	前期
G-25	222	28×25×9	チップ
H-26	223	25×23×8.5	前期
H-26	224	22×18×8	前期
H-26	225	30×25×9	前期
H-26	226	30×26×5.5	土製やしり
G-27	227	40×30×4	前期
G-28	228	32×28×10.5	前期
H-26	229	28×28×7	
G-26	230	35×32×4.5	
G-26	231	33×30×10	チップ
G-26	232	30×27×6.5	前期
G-26	233	36×32×5.5	
G-25	234	28×25×11.5	前期
G-26	235	30×28×8.5	
H-27	236	40×35	
G-25	237	25×40×13.5	
G-25	238	31×25×7	チップ
G-25	239	48×20×9.5	
C-32	240	58×30×3	前期
H-26	241	50×45×8.5	石錐
GJ-26	242	35×32×4.5	前期
H-26	243	40×38×8	
G-29	244	64×58×12.5	
G-30	245	70×65×13	前期

地點	番号	遺物	時期	地點	番号	遺物	時期
G-30	246	38×37×9		H-29	295	30×30×7.5	
G-30	247	55×50×1.5		H-29	296	50×45×9	
G-25	248	73×58×15	早期	C-31	297	85×78×18	前期
I-27	249	58×53×17	前期	C,D-31	298	50×40×13.5	前期
H-28	250	50×47×11.5	時期不明土器(1 つ)、チップ	H-29	299	40×37×3.5	前期
H-28	251	54×55×8.5	前期	B-32	300	40×35×15.5	
II-28	252	48×48×6		B-32	301	40×35×11	
H-28	253	40×40×10.5	チップ	B,C-32	302	38×32×6.0	
I-28	254	50×50×7.5	前期	B-32	303	37×31×2.5	
I-28	255	55×52×7.5		C-31	304	30×23×14	
II-28	256	70×62×13		C-32	305	40×38×7.5	
H-27	257	30×27×7.5		B-32	306	36×30×6.5	
H-27	258	28×26		B-32	307	35×30×9	
D,E-31	259	90×80×9	チップ	C-31	308	36×25×7.5	
H-27	260	35×32×14.5	前期	C-31	309	20×17×7.5	
H-27	261	41×40×8.5	前期	C-31	310	20×18×7	
I-28	262	40×35×10.5		C-31	311	45×35×9.5	チップ
I-28	263	30×26×8		C-32	312	45×38	前期
I-28	264	32×30×12.5		C-31	313	20×15×7.5	
I-28	265	50×45×12.5		F-31	314	45×40×16.5	
I-27	266	24×22×7	チップ	D-31	315	30×25×3.5	前期
I-27	267	27×23×4	前期	D-32	316	82×52×12.5	
I-28	268	33×30×12.5		D,E-32	317	50×48×8.5	
I-27	269	63×53×18.9	前期	D-32	318	32×26×8	
I-27	270	47×40×10		D-31	319	50×42×10.5	
I-27	271	40×40×10	チップ、フレーク	D-32	320	36×28×6.5	
I-23	272	50×45×3	チップ	I,J-27	321	51×50×10	
H-28	273	38×34	チップ	J-27	322	72×53×16	チップ
H-28	274	40×45		J-26	323	40×35×12.5	前期
I-27	275	55×44×8.5	彩色土器	J-26	324	38×32×6	前期
H-27	276	47×40×9.5	(早期から→)	J-26	325	40×25×10	
H-28	277	37×33×8.5	前期?	K-26	326	36×32	
I-27	278	40×30×5		J-27,28	327	65×58×10	
I-27	279	35×28×14	チップ	J-27	328	38×28×7.5	チップ、フレーク
H-27	280	30×20×10.5	前期	I,K-27	329	46×43×11	前期
H-28	281	50×40×8.5		K-27	330	40×40×12.5	
I-28	282	40×40×7		K-26,27	331	40×35×74.5	
E-32	283	30×30×17	チップ、フレーク、 早期土器(1つ)	K-26	332	35×30×9	
E,F-31	284	95×85×26.5	保	J-27	333	40×35×10	
D-30	285	64×55×11.5	前期	E-31	334	40×37×8	
G-25	286	55×46		K-26	335	24×23×6	
D-30	287	80×63×53.5		K-26	336	28×26×8.5	
D-31	288	38×35×6	チップ	K-27	337	25×17×7	
B-30	289	46×44	前期	K-27	338	28×21×13	
C-30	290	75×40×15.5	チップ	J-27	339	30×25×7.5	
F-31	291	32×31×14	前期	C-32	340	41×35×7	保
D-31	292	35×33×7		C-32	341	35×28×8	
E,F-31,32	293	62×60×11		C-32	342	40×35×10.5	
G-25,26	294	50×35×16		C-32	343	35×67×7.5	
				E-31	344	40×38×6	
				G-25	345	40×35×3.5	前期

地 点	番 号	遺 物	時 期	地 点	番 号	遺 物	時 期
G - 26	346	30×30×12		U - 28	394	80×70	
G - 31	347	50×45×21.5		U - 26	395	60×35	
G - 31	348	60×55×32.5 石錠(1コ)、石器、 スクレーパー	前期	U - 26	396	45×13	前期
G - 26	349	35×33×8.5		T.U - 26	397	45×35 スクレーパー	前期
G - 25	350	45×40×7.5		S - 28	398	55×55×6.5	
G - 25	351	60×50		S - 28	399	40×40×6.5	
G - 25	352	68×68×3.5 チップ	前期	S - 28	400	50×47×17.5 瓦錠(1コ)、チップ	早、中期
H - 24,25	353	65×50×7.5 石錠、スクレーパー、 チップ、フレーク	前期	S - 28	401	45×35×4	
F - 33	354	45×40		S - 29	402	50×45×4	
H - 25	355	65×65		S - 28	403	75×70×10.5	
G - 25	356	45×43×6.5		S - 28,29	404	75×74×6.5	中期
G - 26	357	90×73×11 巻68.1コ、巻71コ	前期	R - 28	405	63×60×5	
G - 26,27	358	43×38×4 チップ	前期	R - 27	406	77×75×30.5	
H - 26	359	50×40×4		S - 27	407	75×70×13	チップ、フレーク
G - 26	360	35×31×3.5		R - 28	408	55×50×42.5 巻状上器(1コ)、7 シート	早期
H - 26	361	56×45×15.5 彩色土器	前期	S - 29	409	70×69×5.5 保	
H - 26	362	55×55×15 チップ		R - 25	410	80×73×18.5 フレーク	
B - 30	363	80×73×3.5 364		R - 25	411	90×60×14.5	
E - 33	365	95×80×20.5 須恵器、チップ	前期	R - 25	412	50×40×9.5	
F - 34	366	85×65×13.5 チップ、フン・ク	前期	R - 25	413	54×50×23	
E - 34	367	68×65×11.5 チップ、フン・ク	前期	RS - 25	414	45×40×18.5 フレーク	
	368	97×65×16		R - 25	415	40×35×8	
E - 32	369	88×88×38 チップ、フン・ク、山基 乳頭網器?		R - 25	416	73×64×9 瓦蓋不明土器(1 3)、フン・ク	?
E - 33	370	72×62×18.5 石錠(1コ)	前期	S - 26,27	417	85×85	
E - 32	371	38×36×6.5		S - 26	418	72×62	
E - 32	372	43×36×7		S - 26	419	70×60 石錠、石器、チップ	
F - 33	373	70×68		S - 26	420	37×35	
E - 32	374	30×28×6.5		S - 26	421	26×24	灰
E - 32	375	78×50×10.5		S - 26	422	30×30	
D - 32	376	32×30×4		F - 32	423	26×24×13.5	
E - 32	377	32×22×8.5		F - 32	424	24×22×11.5	
E - 33	378	32×30×9		F - 32	425	50×46×24.5 チップ	前期
E - 32	379	26×20×8.5			426		
E - 33	380	46×40×11			427		
E - 33	381	38×38×7.5 磨石	中期	M - 33	428		
K - 31	382	40×40×11 鐵くず	前期	M - 33	429	55×55×3 保	
K - 31	383	65×55×13.5 陶器、ガラスの かけら、チップ			430		
K - 29,30	384	65×55×16 フレーク	前期	T - 26	431	43×41×39	
N - 29	385	85×75×19.5 フレーク	前期	T - 27	432	86×56	
N - 28	386	70×70×13.5 保		T - 27	433	94×75 石錠	
N - 28	387	80×75×13.5 チップ、フレーク		T - 27	434	45×38	
N - 29	388	50×45×13		T - 27	435	85×58	
N,0-28	389	100×90×33.5 石錠(2コ)、チップ	前期	T - 28,29	436	65×60	
N - 28	390	80×70×18 チップ、フレーク	早、中期	T - 29	437	67×54	
N - 28	391	73×70×8.5 チップ	前期	T - 28	438	85×75	
U - 27	392	80×60	前期	T - 28	439	90×80	
U - 27	393	60×55	前期	U - 28	440	60×53 保	
				U - 27	441	78×70	
				U - 27	442	58×50	前期

地點	番号	遺物	時期	地點	番号	遺物	時期	
G-32	443			O-23	492	30×28×6	早期	
G-33,34	444	65×50		P-22	493	35×30×10.5		
	445	85×75	石錐、チップ	P-22	494	45×40×10		
	446			P-22	495	35×31×7		
	447			P-22	496	25×20×3		
	448	石錐、チップ		O-21,22	497	80×70		
	449			O-21	498	35×33		
J-26	450	チップ、フレーク(へんな上部1コあり)		K-21	499	43×35	前期	
J-26	451	40×38×7.5		K-21	500	70×67	石器(1コ)	
J-26	452	早期(1コ)	早、前期	P-25	501	40×38	初期	
J-26	453		前期	I-22	502	37×30×12.5		
J-27	454	×7.5	チップ	V-28	503	50×45		
J-27	455	34×33×12.0		U-28	504	70×55		
I-31	456			T-6	505	88×73×21.5		
I-31	457	55×48×11		S-5	506	90×82		
I-31	458	47×43×9		U-6	507	95×68×14.5		
H-33	459			U-6,7	508	30×60		
H-33	460	47×40×6.5		S-7	509	103×73×32		
H,I-33	461	62×60×13		S-7	510	97×60×29		
H-33	462	50×45×35		V-6	511	95×60×13.5		
H-32	463	35×30×10.5	鳥居原一帯発見1点ある り、あんこ1コ、石錐 (チップ)、チップ	前期	V-6	512	25×35	
H-32	464	30×24×5.5		U-8	513	99×58		
	465			W-8	514	85×65		
	466			W-8	515	60×50		
	467			X-8,9	516	24×52		
	468			V-8,9	517	94×92	チップ	
	469			W-9	518	80×65		
L-22,23	470	78×73		WX-9	519	70×55		
L-23	471	35×25		Q-25,26	520	46×40		
K,L-23	472	95×75		Q-25	521	58×57		
L-23	473	63×55		Q-25	522	40×40		
L-23	474	35×33	チップ	Q-25	523	36×30		
L-23	475	38×36	早期(1コ)	QR-25	524	88×55		
L-23	476	37×33		Q-25	525	101×65		
L-23	477	103×90		Q-24	526	58×50		
L-24	478	40×40	須恵器	Q-24	527	67×50		
L-23	479	70×70		Q-24	528	34×30		
L-24	480	54×48	チップ	Q-24	529	35×30		
O-22	481	60×52×7	石錐	Q-24	530	85×75		
M-28	482	80×75×11.5	鳥居、チップ、フレーク	Q-24	531	45×40		
N-22	483	67×60	無文	Q-23	532	70×55		
	484			Q-23	533	65×60		
O-21	485	30×23		Q-23	534	50×48		
O-21	486	40×37		Q-22	535	55×49		
O-21	487	40×37	チップ	B-7	536	85×70		
O-21	488	35×30		H,I-23	537	55×37×10.5		
O-21	489	40×30			538			
P-21	490	39×30		J-22	539	40×35×8.5		
O-22	491	35×33	チップ	I-23	540	27×25		
				W-28	541	95×63		

地 点	番 号	遺 物	時 期
D-35	542	58×53×13	
Q-27	543	80×70	
Q.R-27	544	53×42	
R-27	545	73×53	
S-28	546	75×55×6.5	
T-29	547	53×43×16	
S.T-29	548	65×52×5	
J-29	549	80×75×20	
J.K-29	550	80×65×15	
K-28,29	551	83×78×27	
Q-5,6	552	85×73	
Q-5,6	553	93×86	
O-21	554	55×40	
I-26	555	50×50×11	
I-26	556	37×32×13.5	
L.II-26	557	40×38×9	
	558		
	559		
	560		

中間地点 ピット

地 点	番 号	遺 物	時 期
V-22	1	18×15×4.5	
V,W-22	2	17×15×4.5	
W-22	3	33×25×5	
W-22	4	25×24×5	
W-22	5	47×40×9.5	
W-22	6	20×20×4.5	
W-22	7	16×11×5.5	
W-22	8	47×39×5.5	
W-22	9	20×18×3.5	
W-22	10	17×15×3.5	
V-20	11	56×45×4.5	
W-22	12	35×31×6	
W-22	13	18×15×7.5	
W-22	14	45×45×7.5	
W-22	15	42×35×5	
W-22	16	15×14×3	
W-22	17	20×15×4.5	
W-22	18	55×30×7.5	
V-20,21	19	43×40×6.5	
W-22	20	17×15×2.5	
W-22	21	48×42×12	
W-23	22	22×19×5	
X-23	23	25×20×8.5	
W-22	24	33×30×10.5	
W-22,23	25	30×26×10.5	
W-23	26	15×11×4	
W-23	27	43×42×12	
W-23	28	35×30×15.5	
W-23	29	23×21×8.1	
W-21	30	23×20×17	
W-23	31	28×25×14.5	
W-23	32	35×26×6.5	
W-23	33	23×22×10	
W,X-23	34	43×36×7.5	
X-23	35	15×14×8.5	
W-22	36	15×13×3.5	
X-22,23	37	35×35×7.5	
W-23	38	25×25×4.5	
W-22,23	39	25×23×12.5	
W-21	40	28×27×6	
W-23	41	32×28×10.5	
W-23	42	25×25×16	
W-23	43	28×28×11	
W-23	44	14×13×8	
W,X-23	45	45×40×6	
W-23	46	39×37×19.5	
W-23	47	19×16×8	
W-23,24	48	13×12×7.5	
W-23	49	26×20×9.5	

地點	番号	遺物	時期
W-24	50	28×17×12	
X-23	51	25×17×5	
X-23	52	22×20×6.5	
X-23	53	18×13×7.5	
W-23	54	20×18×14	
W-23	55	40×36×10.5	
W-23	56	19×17×7	
W-23	57	20×19×9.5	
W-23	58	17×13×6.5	
V-22	59	72×64×5	
V-22	60	33×25×5	
W-23	61	38×32×4.5	
V,W-22	62	28×22×10	
V-21	63	26×21×11.5	
V-21	64	24×21×10.5	
W-21,22	65	21×20×12	
W-21	66	20×18×8	
W-21	67	18×17×6.5	
W-22	68	30×29×14	
V-22	69	30×30×10.5	
W-21	70	23×21×11	
V-21	71	36×33×5.5	
V-21	72	20×19×11.5	
V-21	73	30×27×10	
V,W-21	74	20×18×10	
W-21	75	29×16×6	
W-21	76	21×19×10.5	
W-22	77	22×18×10	
W-21,22	78	26×23×5.5	
W-21	79	25×33×9	
W-21	80	24×22×8	
V-21	81	21×21×4	
W-21	82	33×30×7.5	
V-22	83	30×28×6.5	
V-21	84	26×24×9.5	
V-22	85	26×23×13.5	
V-22	86	26×26×8	
V-22	87	33×27×8	
V-22	88	27×25×9.5	
V-22	89	36×33×5	
V-22	90	33×29×5	
V-23	91	35×31×8.5	
V-22,23	92	60×54×14	
V-22	93	35×32×6	
V-21	94	30×25×11.5	
W-23	95	36×30×14.5	
W-22	96	27×25×4.5	
W-23	97	32×30×7	
V,W-21,22	98	37×35×12	
W-21	99	24×20×8	
W-22	100	30×27×4	

地點	番号	遺物	時期
W-22	101	28×27×6	
W-22	102	(20)×20×7	
W-22	103	40×16×5.5	
	104		
	105		
	106		
	107		
	108		
	109		
	110		

中間地点土坑

地點	番号	遺物	時期
V-21	1	95×87×12.5	

第5章 古墳時代より歴史時代にかける遺構と遺物

第1節 古代の遺構

今回の発掘によって検出された古墳時代より、歴史時代8世紀代にかけてこの遺構は、第8住居址、第11号住居址、第17号住居址、第25号住居址4軒であるが、第25号住居址は竈の床面の一部のみである。

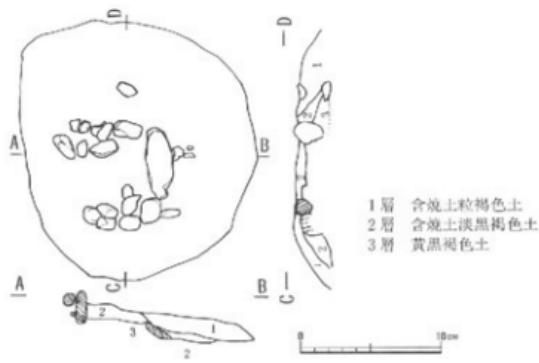
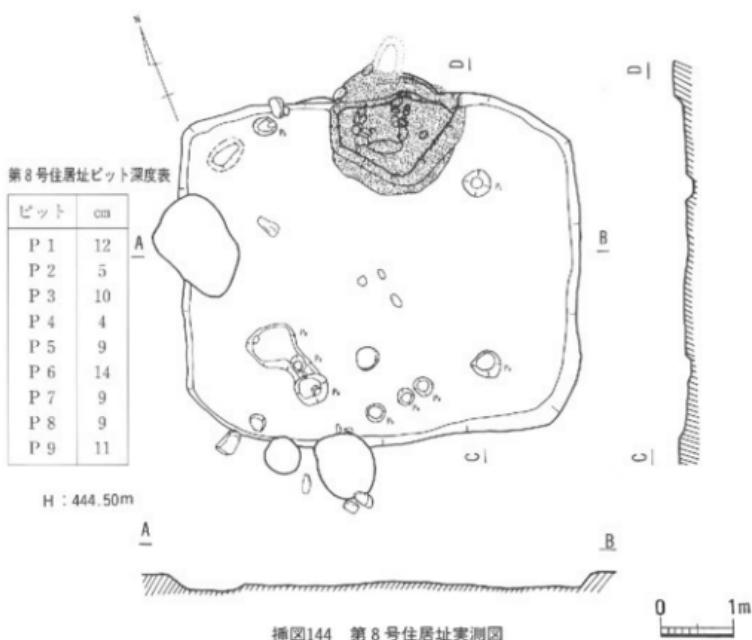
第8住居跡（挿図144）

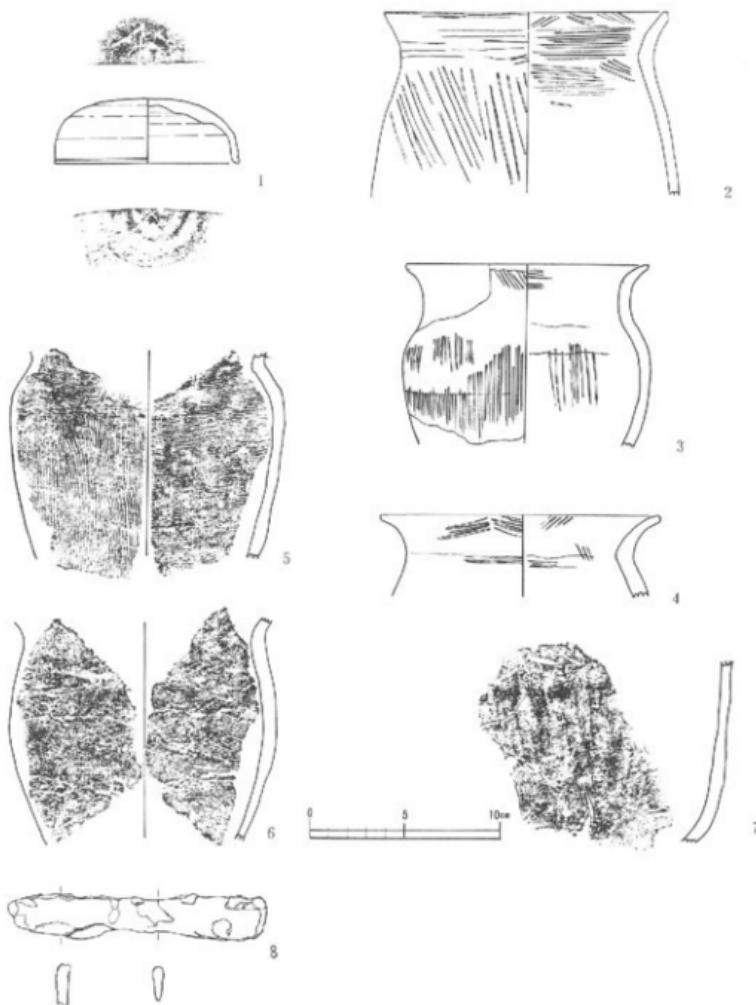
本住居跡は、第2調査区のJ23、J24、K23、K24の方区に位置している。遺構の基盤となる黄色粘土質土層を掘込んだ古墳時代末より歴史時代に帰属する竪穴住居跡である。住居跡の平面形は、東西方向に長軸を示す長方形を呈している。規模は主軸方向の南北で約5m00cm、長軸方向の東西で約5m60cmである。主軸方向はN-20°Eである。壁は、北壁部でやや開き気味に立ち上がり、壁高は13cm前後である。東壁も開き気味に立ち上がり、壁高は17cm前後である。南壁は緩やかに開きながら立ち上がり、壁高は7cm前後である。西壁は僅かに見られる。

床面は竈の位置する東面より中央部分にかけて硬化面が見られた。ほぼ平坦である。竈は北壁部の中央より僅か南よりの位置に設けられ、北壁面を僅か15cmほど掘込んだ部分より住居内に検出された。天井部は遺存していない。袖部は両袖とともに僅か16cmほど遺存している。竈の芯材は川原石を使用している。竈の残存部の覆土は挿図145に見られる様に3層に分けられる。

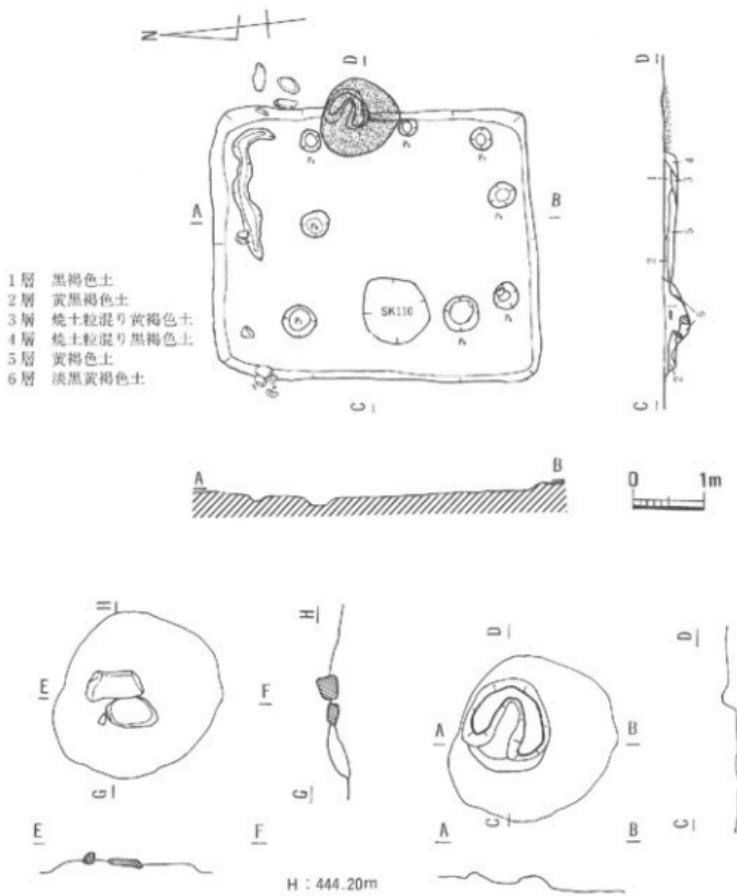
遺物は、本遺構に関係のある遺物として、土師器が竈の残存部を中心としたその周囲より出土した。また須恵器は1点のみであるが杯蓋部の破片が出土している。蓋部の残存は半分であり、天井部の表面、内面に記号が見られる。天井部は扁平でゆるやか丸味を持って下り、口縁部の端部で僅かに短かく外に折れて開く、口径は約9.9cm器高3.4cmである。

挿図に見られる刀子1点が竈の東よりの部分より出土している。本住居址はあまり好資料と言えないが当地区出土の遺物よりして7C後半～8C初頭の時期の遺構と推定される。

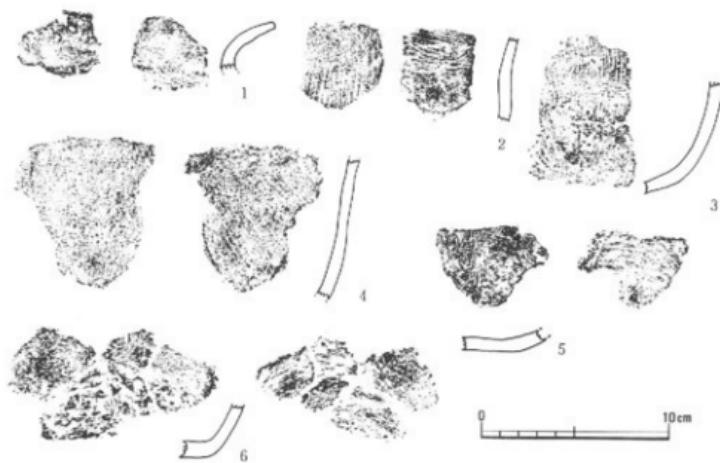




挿図146 第8号住居址



挿図147 第11号住居址実測図



挿図148 第11号住居址出土土器

第11号住居跡

本住居跡は、第2調査区の第10号住居跡の西北部に当たるI26、I27方区に検出された。遺構の基盤となる黄色粘土質土層を掘込んだ竪穴式住居跡である。

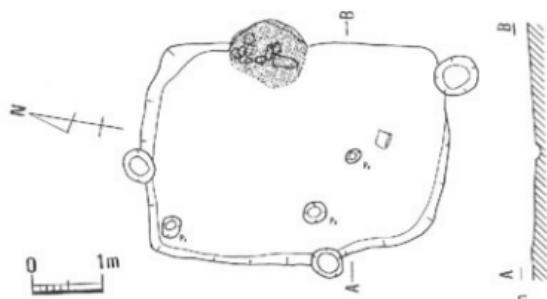
住居跡の平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸4m50cm、短軸3m85cmを測る。壁は緩やかに開きながら立ち上がる。壁高は8cm前後である。東壁の中央よりや北よりの部分にカマドの痕跡が見られる。

床面はほぼ水平である。北東部の壁沿いの床面に、幅20cm前後、深さ5cm前後の溝が検出された。また住居跡の中央部の南の位置に上層部より掘込まれた新しい土坑(SK110)が見られた。覆土は6層に分層される。出土遺物としては、混入したものとして縄文時代遺物が見られる他に、第11号住居跡に伴なう遺物は量的に少なく、挿図148に見られる土師器である。この住居跡の時期は7C後半～8C初頭頃と推定される。

第17号住居跡

本住居跡は、第2調査地点のH27、H28、I28、I29の方区に位置している。遺構は、基盤となる黄色粘土質土層を掘込んだ歴史時代の竪穴住居跡である。

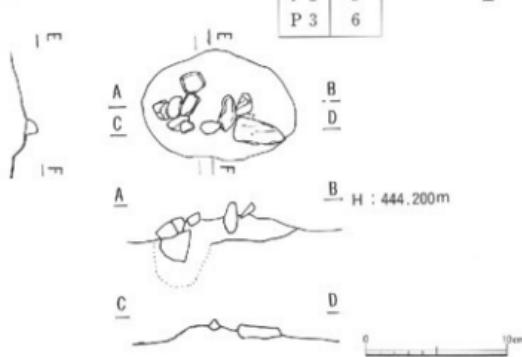
本住居跡の上部に9号集石が検出され、大部分がその集石遺構によって覆われ、上部寄りは、住居跡の存在は観察出来なかった。集石遺構を除去した段階で遺構の存在が確認された。



第17号住居址ピット深度表(cm)

P 1	13
P 2	9
P 3	6

挿図149 第17号住居址実測図



挿図150

住居跡の平面形は長方形を呈している。主軸方向は東西で310cmを測る。それに直交する南北方向は420cmである。主軸方向はN-78°-Eを指示する。

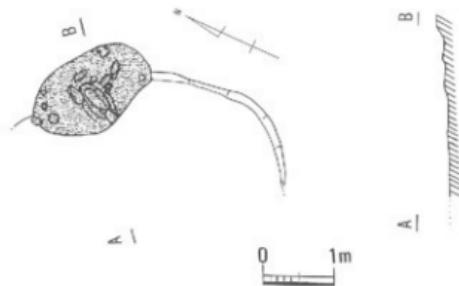
壁は、北壁の一部を除く以外は壁高は低いが検出された。壁高は東壁竈の部分で約5cm、北壁、南壁で7cm前後西壁で4cm前後を測る。

床面は、東西方向で西に南北方向では南に何れもやや傾斜している。

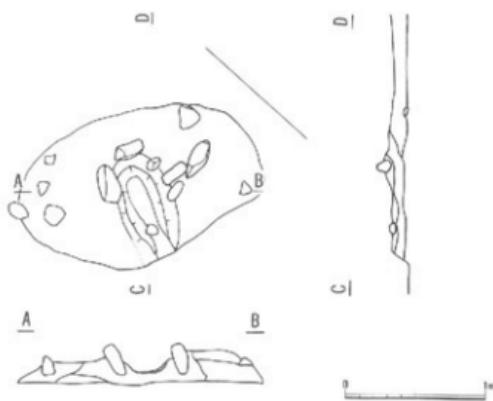
竈は東壁の中央北寄の壁を約40cm程東部より構築している。天井部は崩落している。袖部の造存状態は良好とは言えないが残存している。袖部の芯材に角礫を使用している。両袖間の覆土は焼土混入黄褐色土層である。北側の袖部の基礎石の部分にピットが置かれその部分に比較的大きめの石を使用している。

第25号住居跡

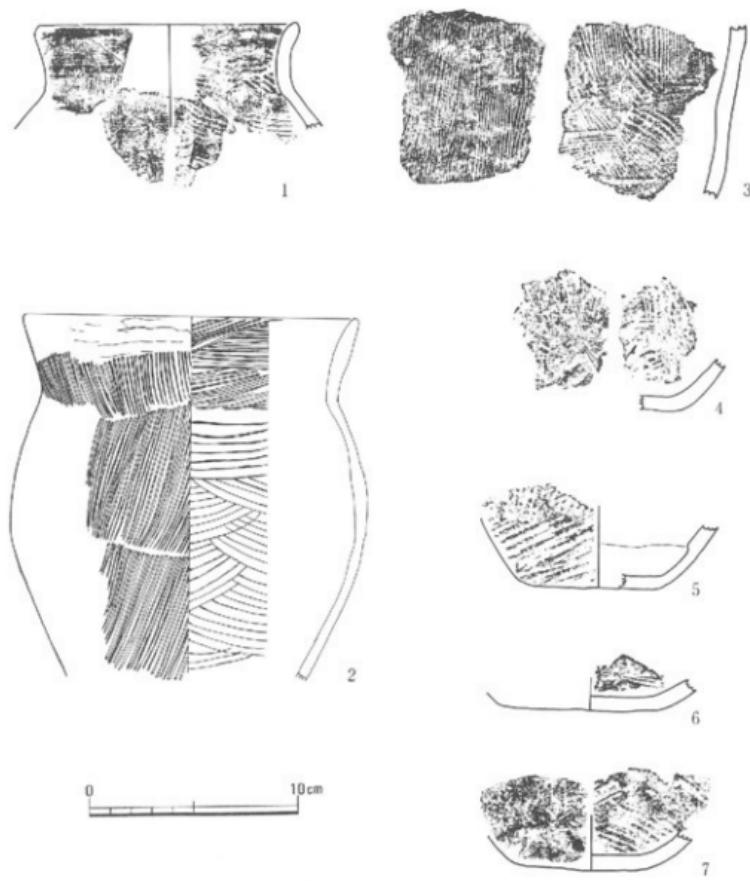
本住居跡は、第2調査地区のJ26、J27に位置している。遺構は基盤となる黄色砂質層を掘込んだ竈を持つ竪穴住居跡である。住居跡は竈と床面の一部が検出された。従って住居跡のプランは明瞭ではない。竈は壁の部分に検出された。



挿図151



挿図152



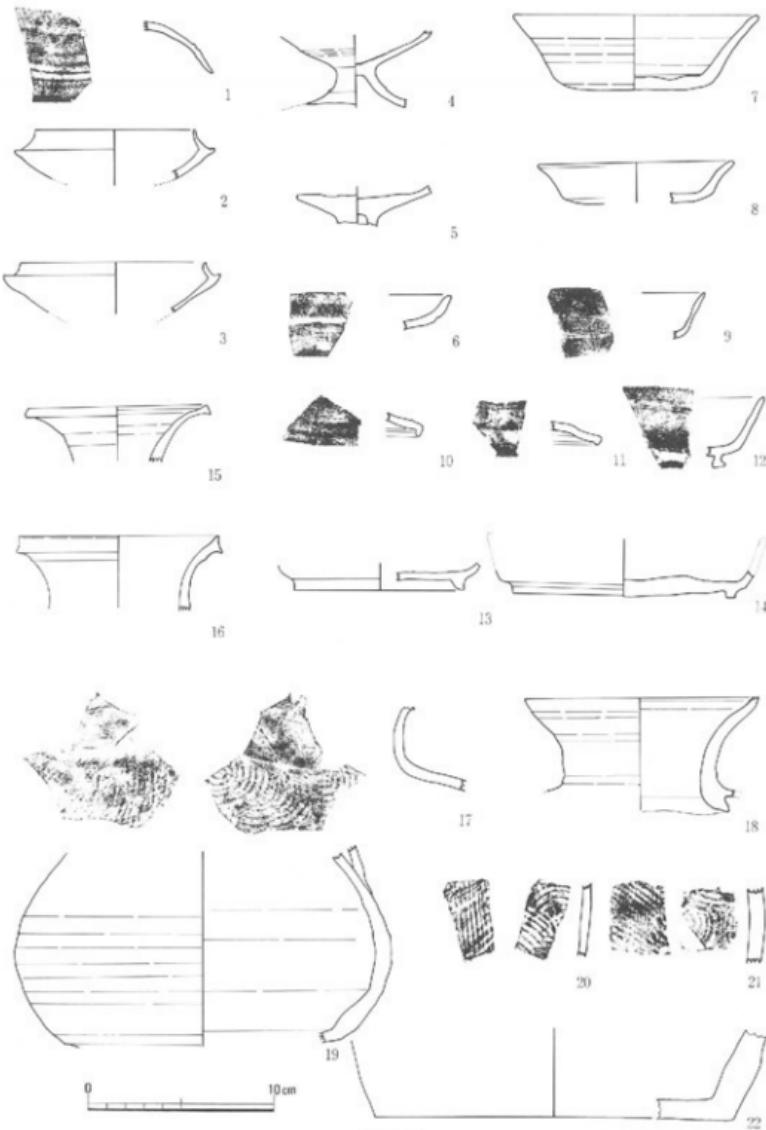
挿図153 第25号住居址出土遺物

第2節 その他の地点出土遺物

古代

特図番号	遺物番号と出土位置	種類	造作度	法量	器形・技法等の特長	色調・胎土	備考
特図154 の1	まI-26-12290	須恵器 环底	小破片		なだらかな口縁を なし、口縁部と大 舟部の境に2条の 低い棱が見られ る。	灰色。 胎土、堅緻	
特図154 の2	仮9号集石	須恵器 环身	約1/4	口径8.4 受部径10.9	受部を持つ环身 で、受部が口縁部 より弓なり状を示 す。	灰色。 堅緻。 自然積付着。	
特図154 の3	まI-26-12099	須恵器 环身	約1/4	口径10.1	受部を持つ环身 で、受部が口縁部 より、短かく弓な り状を示す。	灰白色(1部 黒色を帯びる) 胎土はソフト (生焼)	
特図154 の4 5 6	4. まQ 25-8797 5. まG-27-4443 6. まI 24-11416	須恵器 高环			4は体部と脚部の 一部である。 5も高环の一部で ある。 6は高环の体部の 破片で口縁部と脚 部の境に沈線が一 条めぐらす。	4. 黒灰色、 堅緻 5. 灰色 6. 灰色、 堅緻	
特図154 の7 8 9	7. まI-27-9893 8. まJ 25-13646 まJ-24-8259	須恵器 环身		7. 口径 7.約1/4 8. 約1/5 9. 小破片	7 底部は平であ り、底部と体部の 境は僅かに丸味を 持ち、外上方に開 きながら外反気味 に立上る口縁面は 丸味を持つ。 8は破片で一見し て蓋の様にみられ るが、环身と推定 される。 9は、底部と体部 との境は丸味を持 つが僅かに開きな がら立ち上がる。	7. 灰色 8. 灰白色 9. 黑灰色	

挿図154 の10 11	10. ま2J-26-8168 11. ま2H 23 8290	須恵器 环蓋	小破片	天井部の中央を欠くがに宝珠状のツマミを持つものと推定される。天井部よりなだらかに下り、短い口縁部が、内傾して下る。	10. 灰色 11. 灰白色		
挿図154 の12 13 14	12. ま2II-23-14522 13. 14. 14. ま2II-12131	須恵器 环身	12. 小破片 13, 14は 底部と 高台部	12. 器高 3.7 13. 底径 9.2 14. 底径 11.9	12短い高台が底部につき、高台筋より僅に伸びたのち、開きながら立ち、口端部は親くおさめる。 13, 14は偏平な底部に短かい高台が付く。		
挿図154 の15 16 17 18	まI-26-12432 ま2F-31-14975 ま2G-27-6018 外2点 ま2-640	須恵器 壺	15. 口縁 部1/5 16. 口縁 部1/4 小破片	15. 底径 9.6 16. 口径 10.8 18. 口径 12.6	16~19は破片であり、器形の全形を知ることが出来ないが、長頸瓶または広口壺の頸部及び体部の破片である。 18は口頸部と体部の接合部が知られる。	15. 灰色 16. 灰色 17. 淡灰黄色 18. 黒灰色	17の表面に自然釉 内面に自然釉
挿図154 の19	ま2-G-24-15520 25号住 -33 -160] 接合 その他 655 659] 接合	須恵器		体部の上部が欠損しているので全形は不明である。肩部に耳が付く。耳は何個つか不明である。		内外面に 自然釉の 付着 18の遺物 と同一と 考えられ る	
挿図154 の20 の21	20 まH-23-11561 21 まI-24-8405	須恵器 鉢	小破片	体部の破片であり、器部内面に印文の痕が見られる。	表面の文様は 格子目文内面 は青海波文		
挿図154 の22	まI-26-8170	須恵器 鉢		鉢の底部と推定される。			



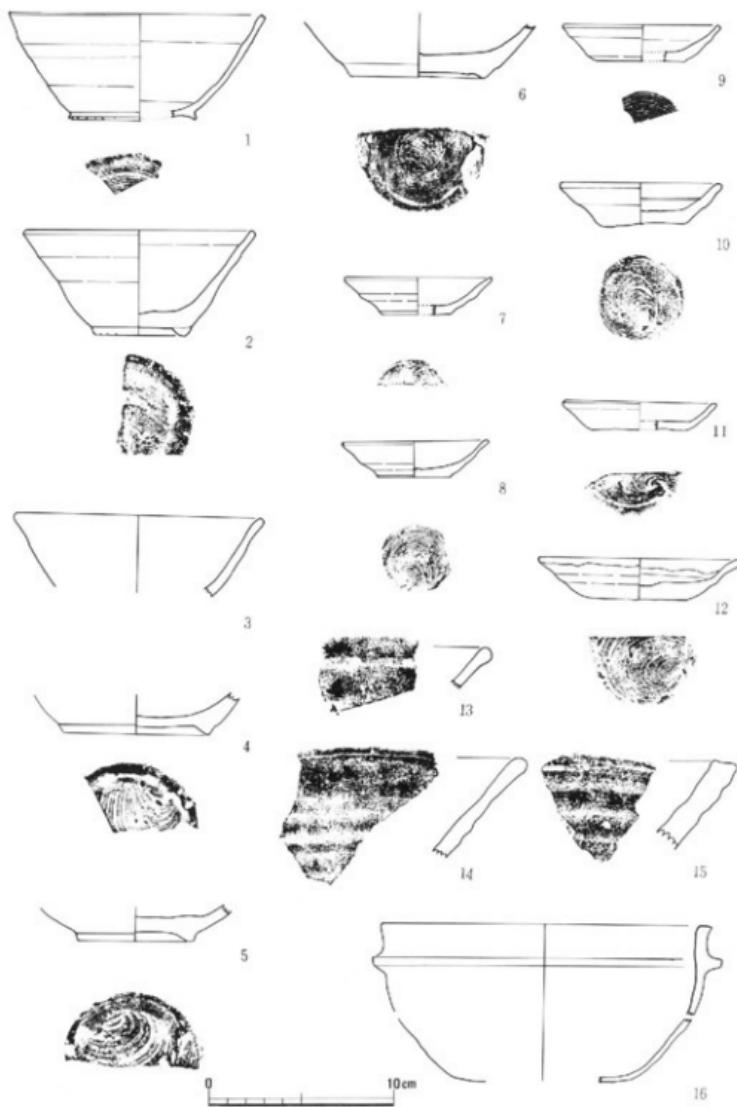
挿図154

第3節 中世以降の遺構及び遺物

中世

掲図番号	遺物番号と出土位置	器種	遺有度	法量(cm)	器形・技法等の特長	色調・胎土・焼成	備考
掲図155 の1	主2 G-24-11635	山茶碗 碗	約1/6	器高5.7	高台脇より斜めに聞きながら立上る。端面に僅かに凹が見られる。付高台で底に小さな高台が付く。モミガラ压痕が見られる。器厚は薄手。	灰白色 胎土は緻密 焼成は良好	
掲図155 の2	主2Q-24-14484	山茶碗	約1/4		高台脇より、やや直線的に斜めに立上る。高台は三角形断面を呈するモミガラ压痕が付く。底裏面に痕跡がある。	灰色 胎土はソフト 焼成は良好	
掲図155 の3 4 5 6	3. まII-23-11562 4. まJ-23-843 5. まH-23-11564 6. まJ-23-11434	山茶碗 いすれも破片 である。 底部の 破片 約1/5		底径7.0	3は体部の口縁部と胸部の破片で削部はやや丸味を持つて聞き、口縁部は僅かに外反気味である。 4、5、6は底部と腰部の破片である。高台は付高台で、断面三角形をなす。底部はいすれも糾切底である。6は底部を調整している。	3は灰白色 4は灰白色 5は灰白色 6は淡灰褐色	

挿図155 の7 8 9 10	7. まI-6166 8. まI-6125 9. 10. まI-24-8403		約1/3 約1/3 約7/10	7. 8. 9. 10は口徑8. 2器高1.5	口径 縁部に逆八字状に 立上る、腹部をへ こませ、口端部は 丸味をもつてい る。底部は糸切底 である。10は内面 底部の中央にスリ 消し痕がある。器 形は、前者と異な り底部の径が大き く体部の立上りが 短かく器高が低 い。	7. 灰白色 8. 灰白色 9. 灰色 10. 灰白色
挿図155 の11	ま2-15684-1	古瀬戸系 皿 (灰釉皿)			口徑は11cmで、器 高2.2cm、底部は糸 切底である。器形 は大きく開きなが ら立上る。口縁端 部は丸くおさめ る。口縁内外面に 古瀬戸系施釉が見 られる。	胎土は淡褐色 を呈し、灰釉 を施す。
挿図155 の12 13 14	まI-26-644 まH-23-11807	山茶碗 鉢			12、13、14は全て 破片である。鉢類 に分類される。12、 13は口縁部は玉縁 状をなしている。 14は口縁端面は扁 平である。	12、13、灰色 胎土に砂粒を 含む。 14、青灰色で 砂粒を含む。
挿図155 の15		瓦質釜			器形は、底部より 丸味を持って立上 り、口縁部と肩部 の間にツバ状の陂 を持つ。	口縁部と体部 に黒色を帯び ている。



挿図155

結語

今回発掘調査を実施した的場遺跡は、飛驒川の上流の益田川の右岸に見られる羽根段丘の、高位段丘に当たる通称「的場」に所在する。

発掘調査の動機は、岐阜県が行う県営中山間地域農村活性化総合整備事業の羽根地区圃場整備工事に伴う事前調査である。萩原町教育委員会が平成3年10月15日より開始し、平成4年度、平成5年度に亘って実施した。

調査に当たっては、地権者との工期及び対象地域、その他の取り決めなどがあり、その上圃場整備対象地域にあっても安全上を始め諸般の制約があり、全面調査をすることは不可能であった。

調査地域の地質は、飛驒川の堆積による円礫・砂礫による沖積世堆積層である。調査地点によってその堆積の状態は異なる。基本的には、表土層、腐植に富む土壤で全般的に黒味が強い土層、腐植に富む土壤で全般的に砂質土層、上記の三層である。

その下部は砂疊層であり、多くの遺構の基盤である。

今回の調査によって検出された遺構は、縄文時代より歴史時代に亘るものである。先づ縄文時代に属する住居址は20軒である。中間調査地区（中間地点）によって検出された住居は、集石炉柱穴状の掘込みが検出され、その配置による明瞭なプランは確認されないが居住址と推定される。時期は縄文時代早期の終末期と考えられる。

第1地点に於いては、縄文時代に属する4軒の住居址が確認された。第1号住居址は縄文時代中期中葉期の住居である。住居が破棄された後に、比較的早い時期に土器が捨てられたと考えられる状態で遺物が出土した。土器を見ると東海地方特に三河・美濃を中心として分布している龍脣、呪煙様式系の土器、北陸地方を中心として分布している上山田式土器の北陸系の土器が伴出している。この両系統の伴出は、南飛驒地方の土器文化の交流と土器編年を知る上で好資料を提起した。住居の面積は比較的大型であり、北陸地方に見られる大型住居との関連も考えられる。

第2住居址は、本住居址の特徴は坪堀を持つ住居址である。住居址のプランは第1号住居址とは異なり、隅円方形をなすものである。本住居址の時期は出土土器よりして、同じ縄文中期中葉でも第1号住居址よりやや新しい時期である。第3号住居址のプランの全容を推定することは出来ない。覆土も浅く、当住居の時期は縄文中期前葉の時期と推定される。

第4号住居址は遺構の残存状態は良好ではなく、出土器物も量的には少量であるが、縄文中

期中葉の遺物であり、その時期の住居址と推定される。

第2地点（第2調査区域）よりは縄文時代、歴史時代の住居址を始め、その他の遺構が、同一基盤上に位置している。従って遺構の残存状態は全般的にあまり良くない。この様な状態の中で縄文時代に帰属する住居址は24軒検出された。

第5号住居址は覆土中より多量の遺物が出土した。混入した古い時期の遺物を除くと縄文時代前期後半の土器が主体である。これ等の土器は北白川下層式土器が主体で、それに諸磯系の土器が含まれている。石器類の中で石匙はつまみを持つもので北白川下層式土器群に伴うものが多い。第6号住居址は覆土遺物も少なく、この住居が長期に亘って使用されたかは不明である。既に述べた様に住居址の西北部に散石が見られ、同一個体の土器がその散石の上部および下部より出土している。住居が破壊された後に土器片が捨てられたと思われる。覆土中の土器と合わせて前期後半の住居址と推定された。

第7号住居址は、住居址の半分が調査区域外のため、遺跡の全容を知ることが出来なかったが、石組炉が確認された。出土遺物も少なく、また中期の土器が見られる点などを考慮すると時期を積極的に決定する資料を得ない。第9号住居址は縄文前期後半期の住居址である。第8号住居址（歴史時代）によって切り合関係を持つ。

第10号住居址は、縄文前期後半の時期と推定されるが、プランについて一部は第8号住居址（歴史時代）に切られたり、確認出来ない部分もあり、全容を知ることは出来なかった。

第12号住居址は小型の住居址であり、その時期は前期後半である。第13号住居址はあまり保存状態は良くないが、出土遺物よりして前期後半の時期と推定される。第14号住居址は、黄色砂礫層を基盤とし、中でも礫が多く見られる地点のため、プランの全容を把握することは出来ず床面の硬化面の残存によって住居址と推定された。出土土器は種々見られるが本遺構に伴う土器（北白川下層II b）が出土していて、本住址はこの時期と推定される。第15号住居址は一部のみ確認されなかった。時期は出土遺物よりして前期後半期と考えられる。第16号住居址のプランは不定形な楕円状をなし、覆土中の遺物よりして縄文前期後半の末の時期である。

第18号住居址は、不定形な楕円状プランをなし、覆土中の土器は僅かに混入した新しい土器があるが、大部分は縄文前期の後葉に属するものであり、この住居址の時期も同じ時期と推定される。第19号住居址は、床面の一部のみが残存している。時期覆土中の遺物より、縄文前期後葉から中期初頭の時期と考えられる。

第20号住居址は床面と壁面の一部のみの検出であり、床面に口縁部の一部の堆疊が見られ、磨石1個が出土した本住居の時期は前期後葉の時期である。第21号住居址は、プランは不定形の楕円形をなし、炉跡は楕円形状の浅い凹をなし、住居址の時期は縄文前期後葉と推定される。

第22号住居址は、不定形な楕円状をなすもので、床面上の楕円状に凹んだ炉跡と伴う縄文前期後半期の住居址と推定される。第23号住居址のプランは、不定形な楕円状をなし埋甕炉を持つもので、時期は炉に使用された土器と覆土出土のものを総合的に推察すると縄文前期末葉の時期と推定出来る。第24、26号住居址は床面の一部のみの検出であり、覆土・付近の遺物の出土状態よりして縄文時代と考えられるが、積極的に時期を推定することは出来ない。

第27号住居址は、床面と柱穴などが検出されたのと、埋甕よりして、縄文前期末葉である。

第28号住居址は、床面と推定される部分に、溝とピットが検出された。全体のプランは把握出来なかった。時期は縄文早期後葉である。

以上の様に縄文時代に歸属すると推定されるものは、中間地点の住居を含めて第1～7、9、10、12～16、18～24、26、28号の24軒が確認された。この中で、24、26、27、28号住は、プラン及び竪穴の掘込が確認されなかった。從って20軒は竪穴住居址である。

歴史時代の住居址として、第8、11、17、25号の4軒が確認された。第8号址は長方形のプランを呈し竈は北壁に設けられている。第11号住は隅丸方形のプランをなし、東壁部に竈の痕跡が見られる。第17号住はプランは長方形をなし、東壁部に竈を設けている。

第9号住居址は、竈土のみである。

第25号住居址は竈と住居址の一部が検出されたのである。竈は東壁に設けられている。

竪穴式遺構として報告書の中で取り扱ったものは、土坑とも、住居址として性格を異なるものを本遺構とした。この分類に対して異論があると思われるのと、遺構の性格について分類をすべきである。

土坑について表に示した様に多く検出されたが、表土層より確認された新しい掘り込みと識別出来るものを別とし、その新旧識別の困難なものも多く存在している。

ピットに付いても同様である。集石遺構も多く見られたが、表土層下に見られるもので遺構として時期性格を明瞭に出来ないものが多くある。中近世墓と考えられる石函室を持つもので、上部に集石状に積石を持つものが見られる。これに付いては今後の研究課題とする。その他に石疊石列、立岩などが検出された。自然遺物として栗の炭化物が出土している。

次に遺構以外の地点における遺物を概察すると次の様である。第1地点に於いては、縄文早期の押形文土器、撫糸文土器がみられる。

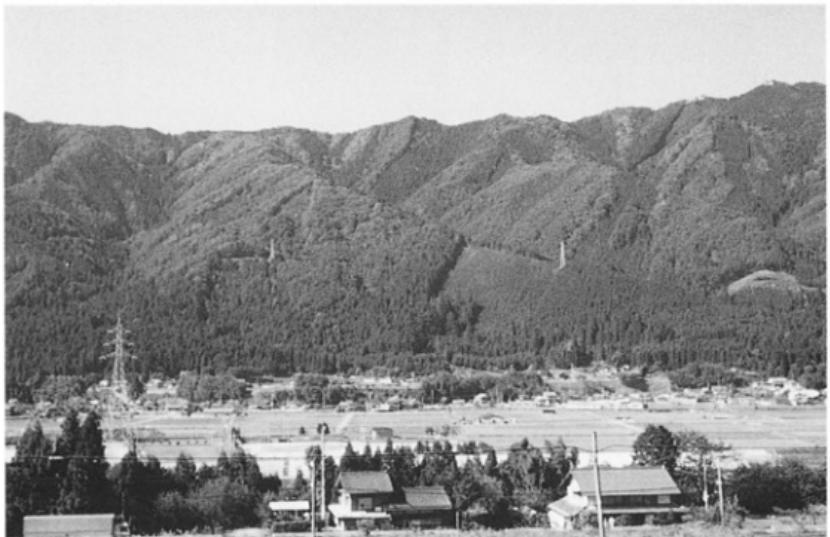
第2地点では、早期末から中期にかけての土器、石器が出土している。2、3については、前記したのである。

第3地点については前述した様なものである。中間地点に於いては、前記した以外に縄文中期の土器が出土している。

この他に須恵器及び、陶磁器が出土している。

今回の調査によって、多くの資料が出土したが、その全容を報告することは紙面を始め諸般の事情で、今回は遺構を中心として記述するにとどめた。

図版



対岸の遺跡位置する段丘を眺む



第1図

発掘調査以前近景



第1地点 発掘全影



第2図

発掘状態（第1住居址発掘終了）



第3図

第2地点発掘調査全影



中間地点 発掘状態



第3地点発掘状態（西より）

第4図



第1地点



第2地点



第3地点

第5図

地層の一部

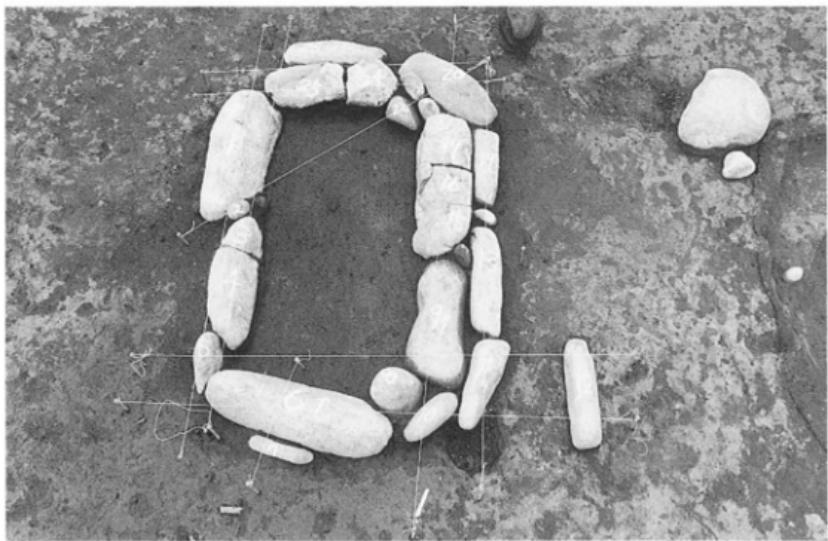


第1号住居址 南がわ

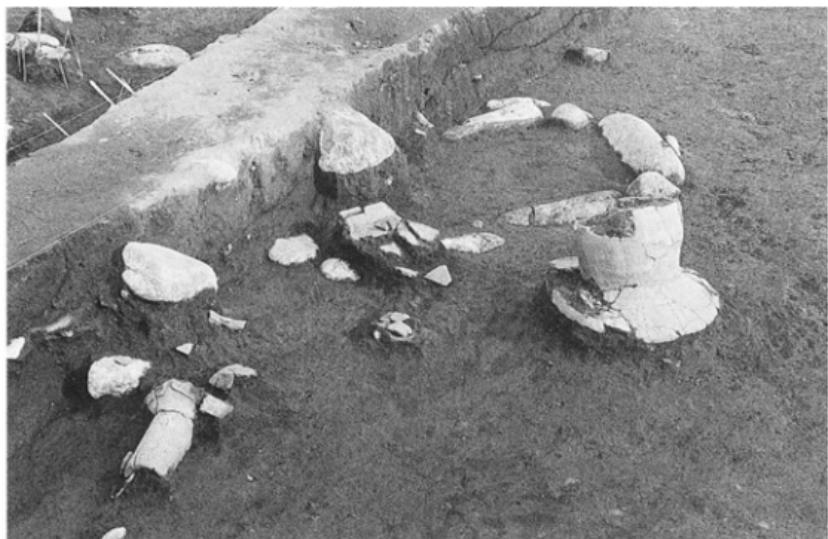


第6図

第1地点 第1号住居址



第1号住居址 炉址

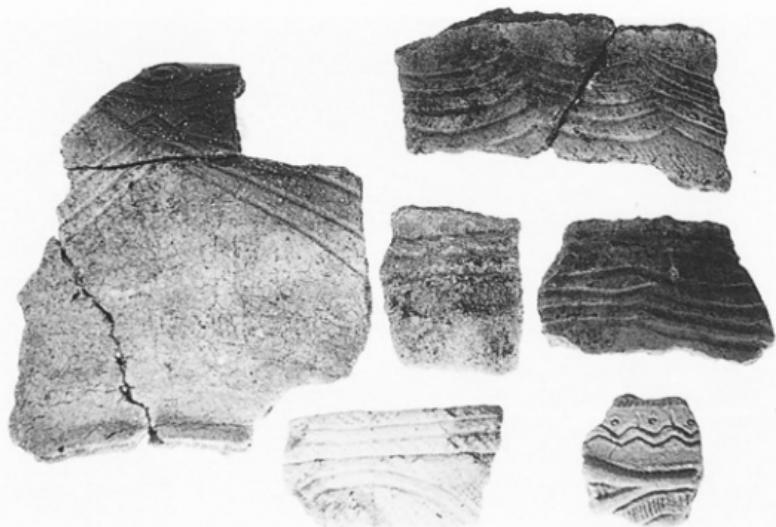


第7図

第1地点 第1号住居址 土器出土状態



第1号住居址 出土土器

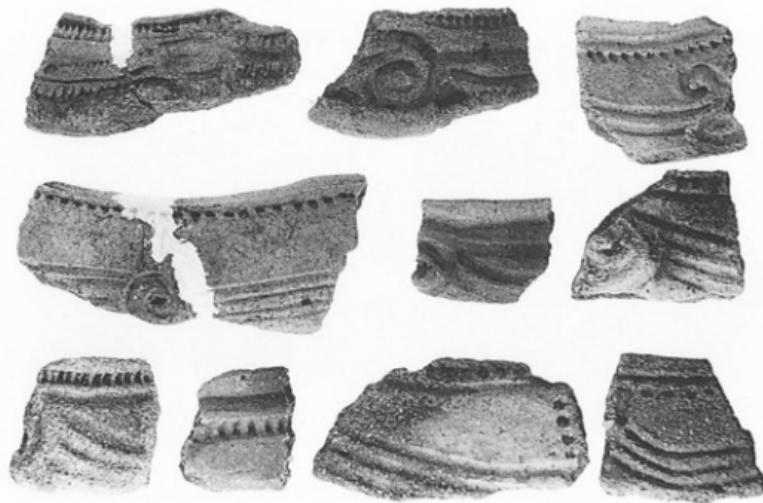


第8図

第1号住居址 出土土器

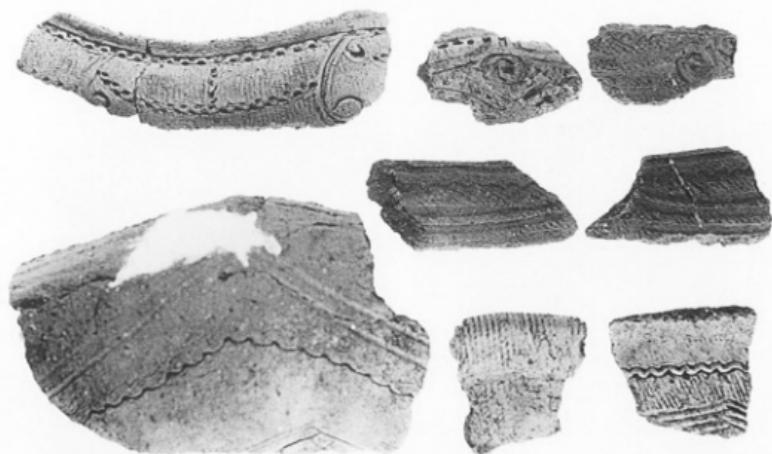


第1号住居址 出土土器



第9図

第1号住居址 出土土器



第1号住居址 出土土器



第10图

第1号住居址 出土土器



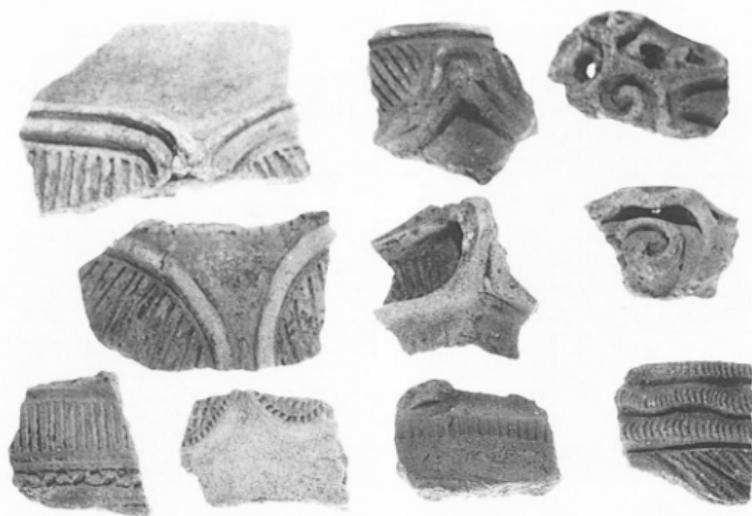
第1号住居址 出土土器



第11图



第1号住居址 出土土器



第12図

第1号住居址 出土土器



第13圖

第1號住居址 出土土器



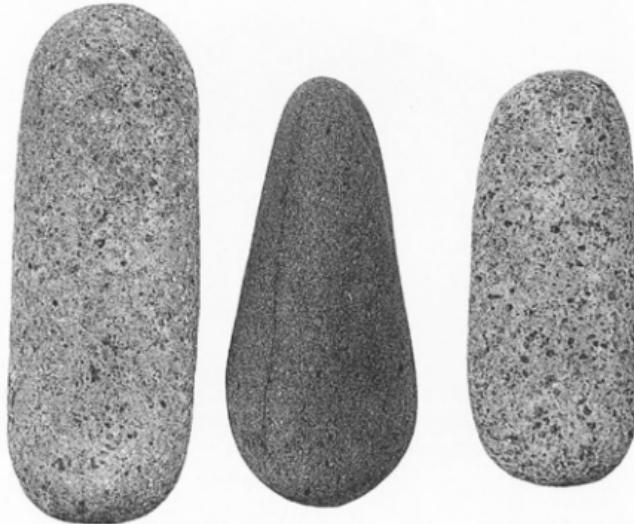
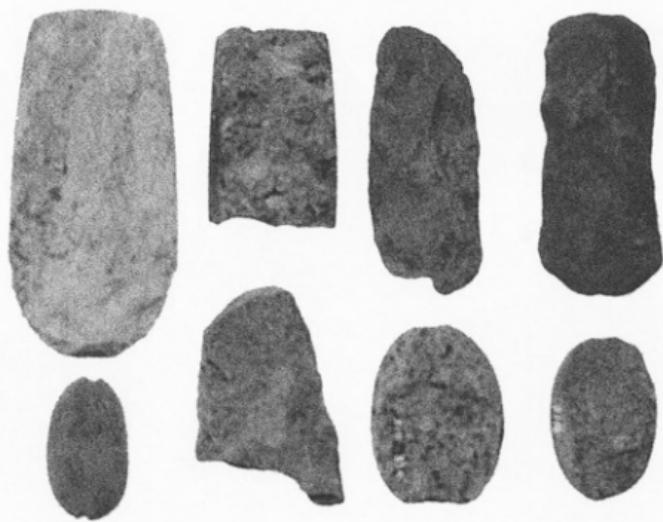
第14图

第1号住居址 出土石器類



第15図

第1号住居址 出土石器類



第16図

第1号住居址 出土石器類



第2号住居址



第17図

第2号住居址内埋甕



第2号住居址 埋甕



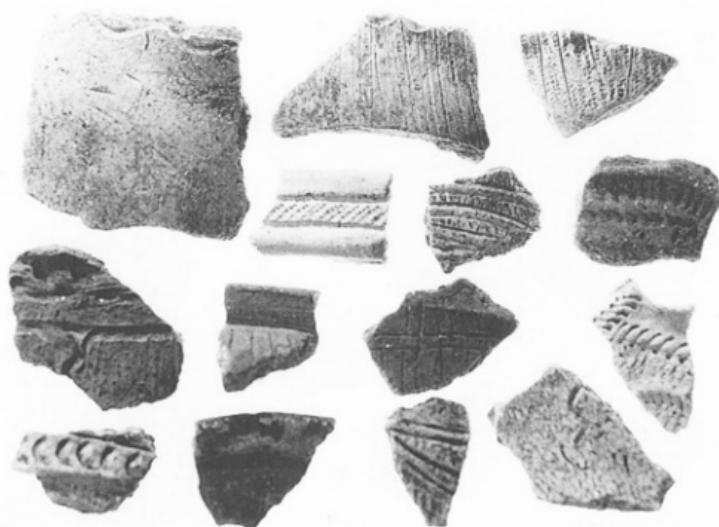
第18图

第2号住居址 出土土器

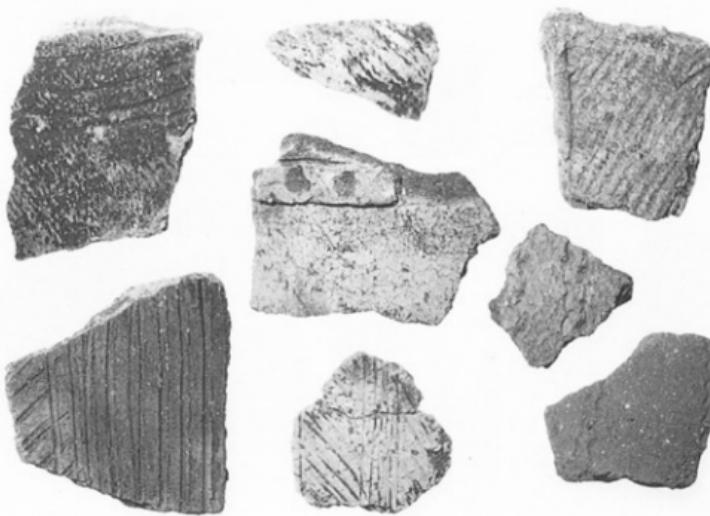


第19圖

第2号住居址 出土土器

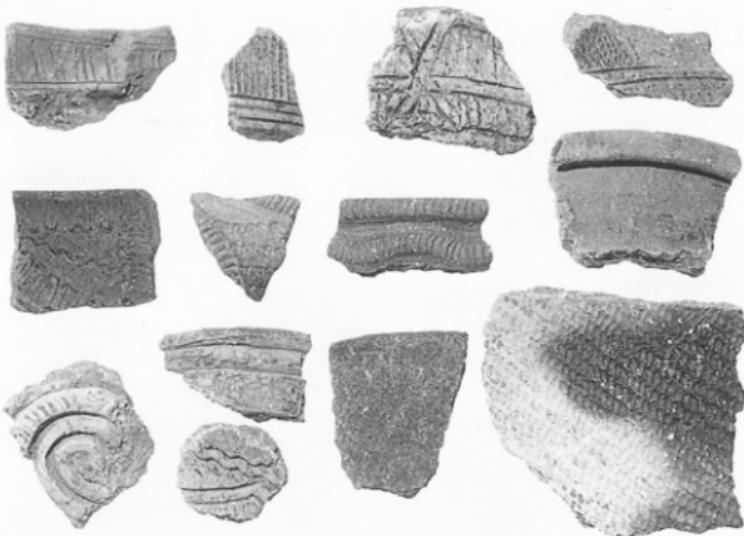


第2号住居址 出土土器

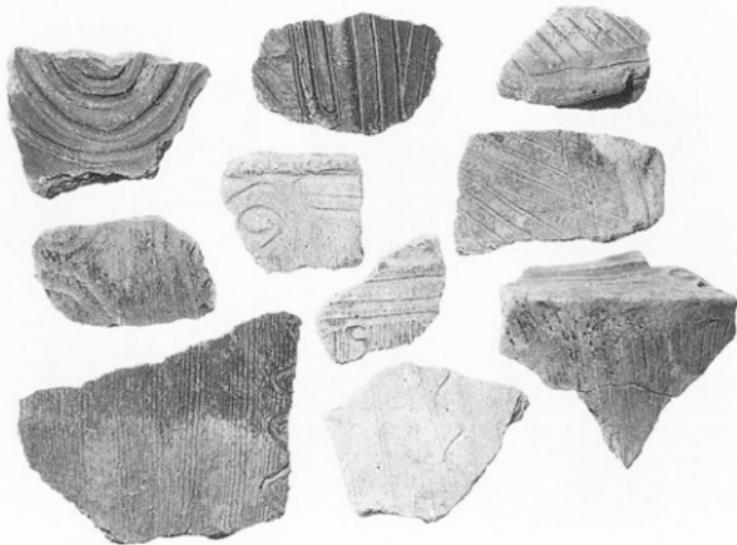


第20図

第2号住居址 出土土器

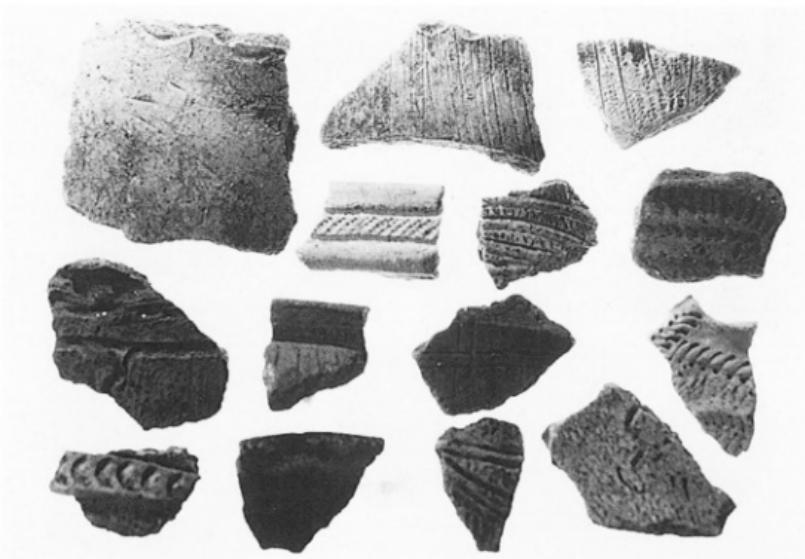


第2号住居址 出土土器

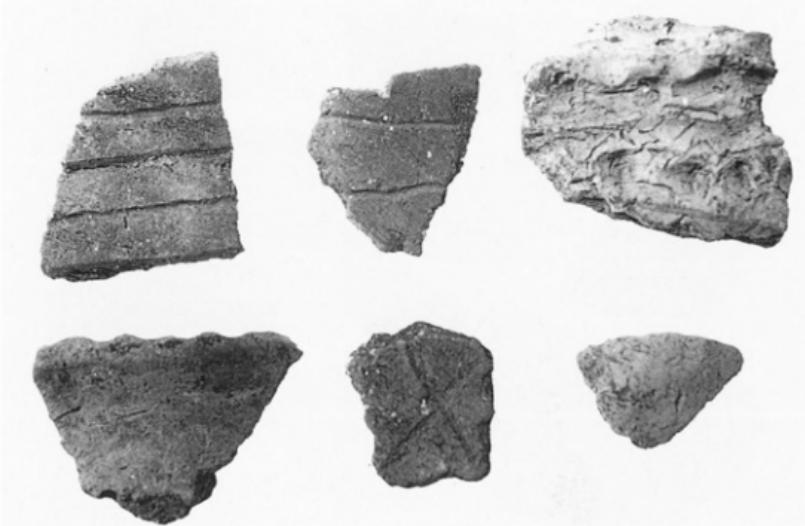


第21图

第2号住居址 出土土器



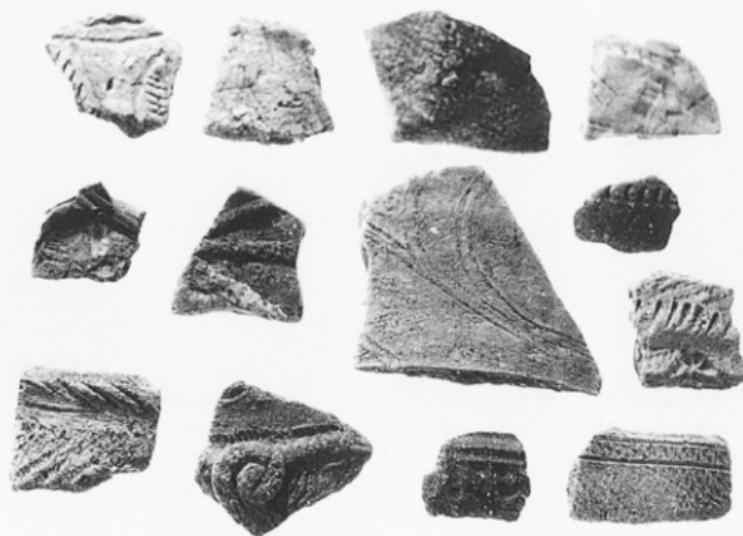
第2号住居址 出土土器



第2号住居址 出土土器



第2号住居址 出土土器



第23图

第2号住居址 出土土器

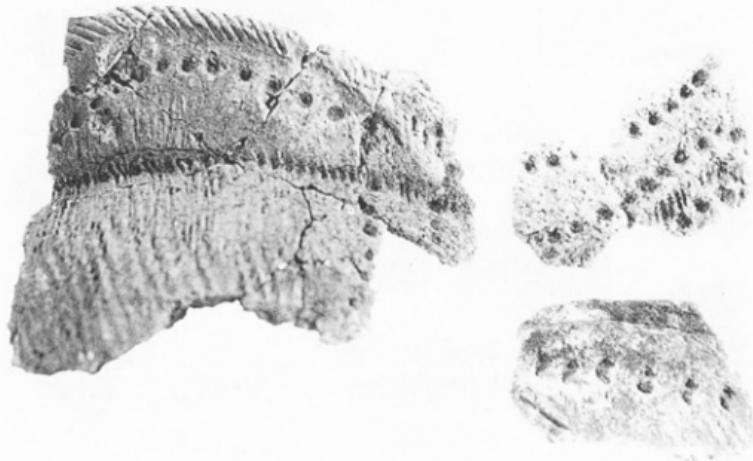


第24図

第2号住居址 出土石器



第3号住居址

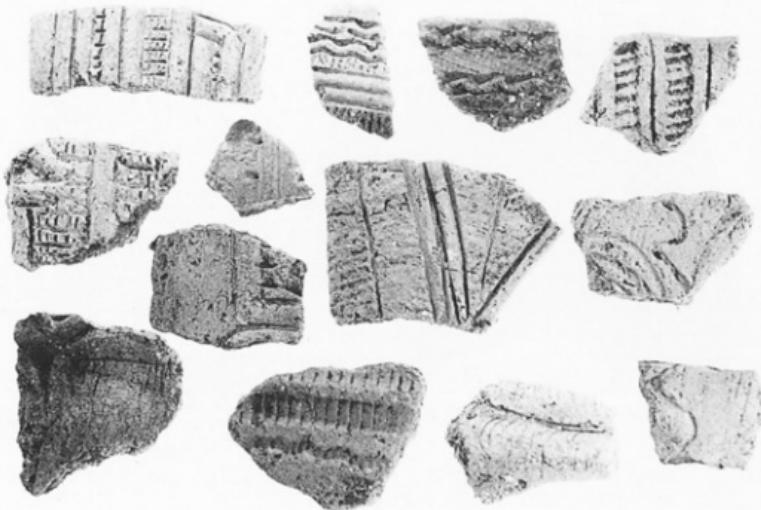


第25回

第3号住居址 出土土器

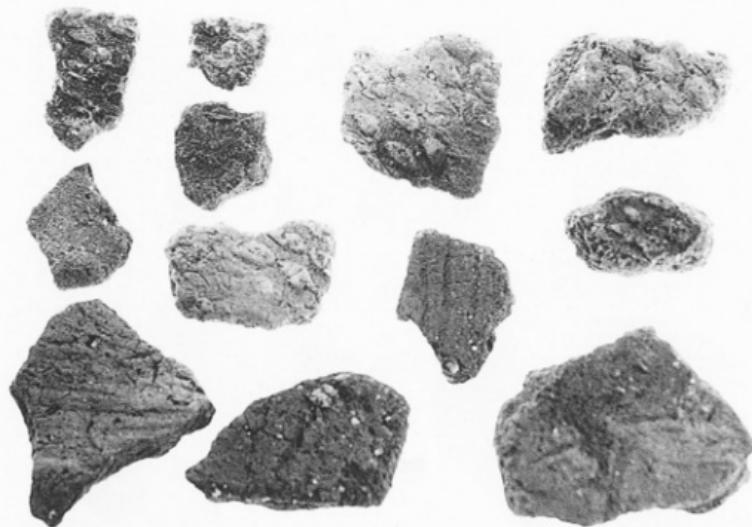


第3号住居址 出土土器



第26図

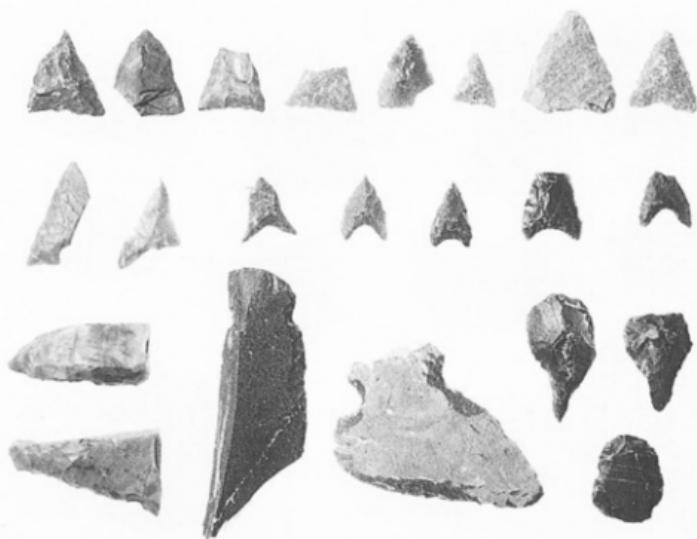
第3号住居址 出土土器



第3号住居址 出土土器



第3号住居址 出土土器

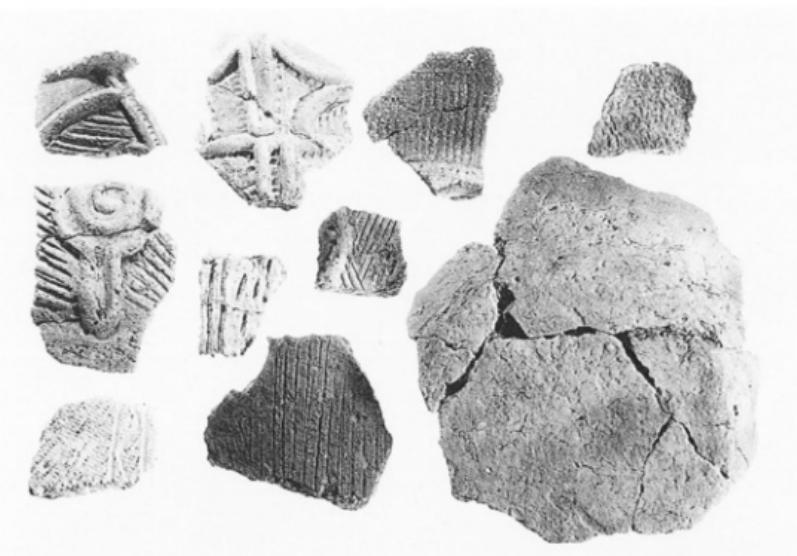


第3号住居址 出土石器



第4号住居址

第28图

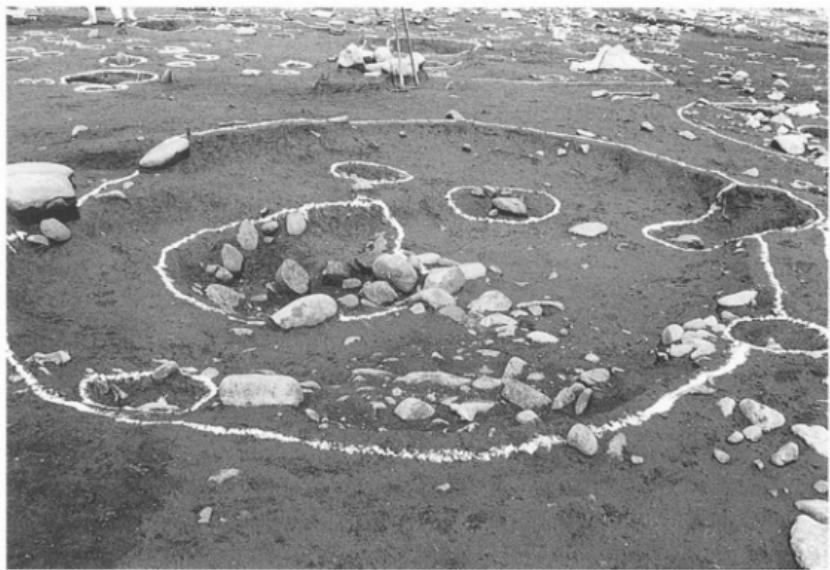


第4号住居址



第29図

第4号住居址 出土土器

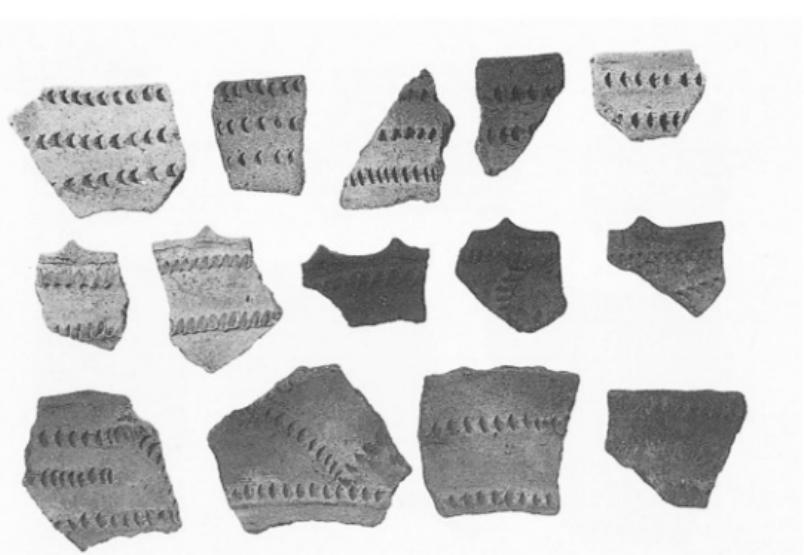


第5号住居址

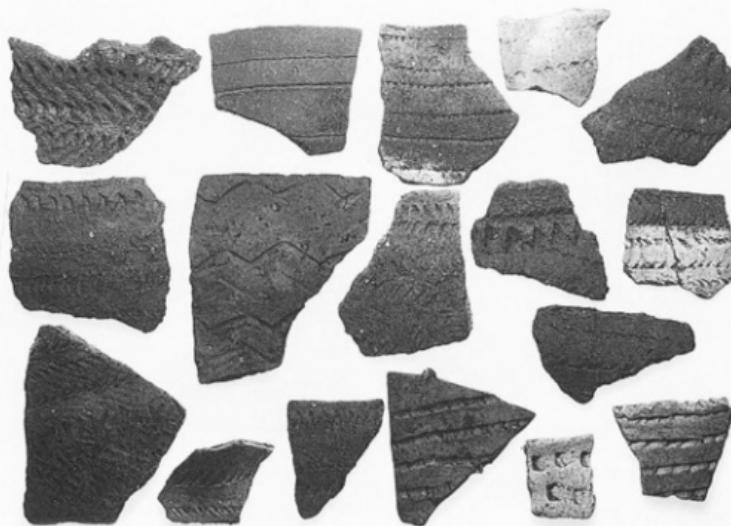


第30图

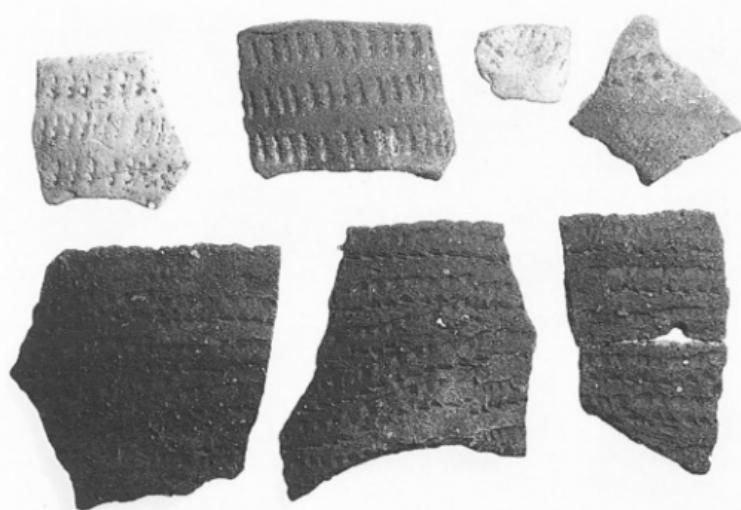
第5号住居址 出土土器



第5号住居址 出土土器



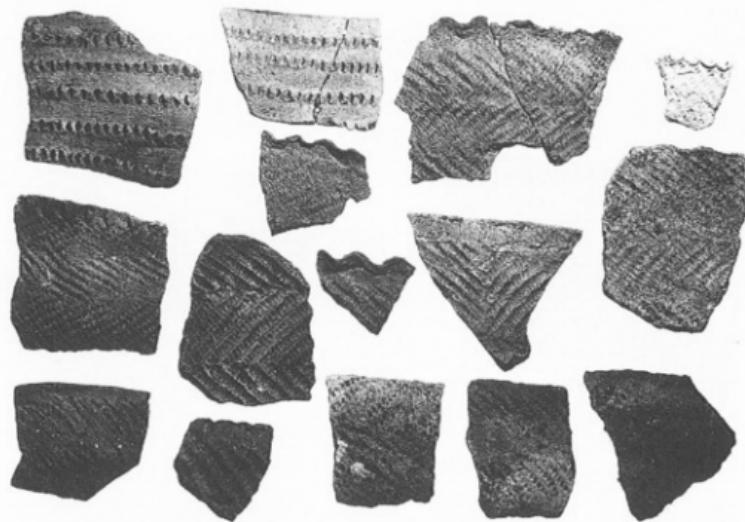
第5号住居址 出土土器



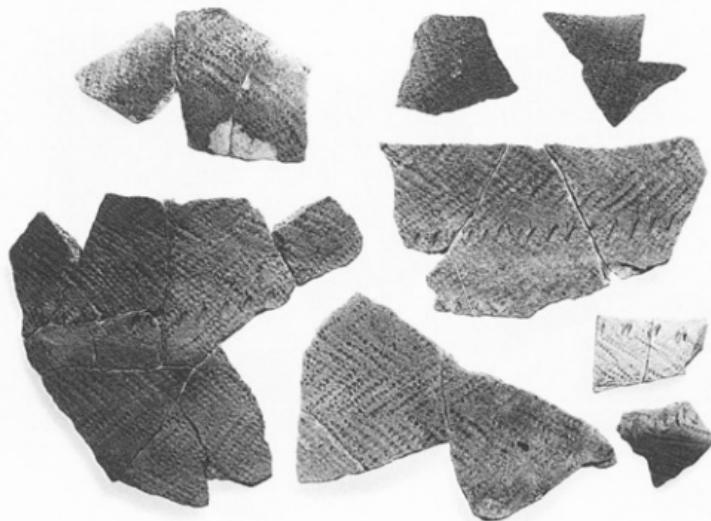
第5号住居址 出土土器



第5号住居址 出土土器



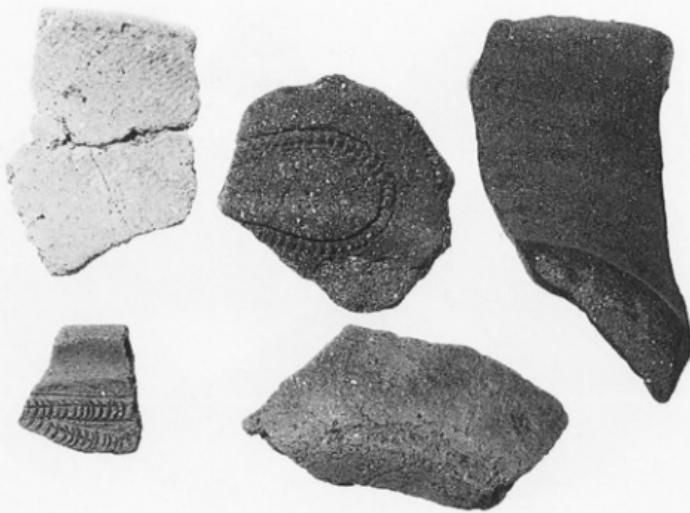
第5号住居址 出土土器



第5号住居址 出土土器



第5号住居址 出土土器

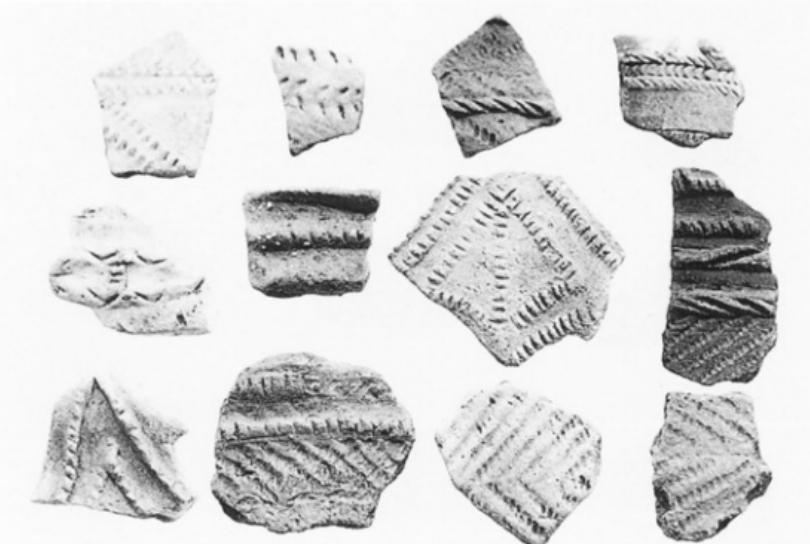


第34图

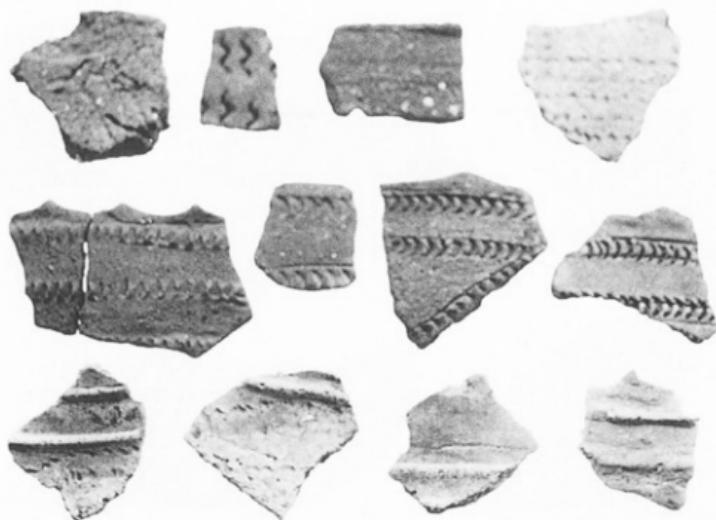
第5号住居址 出土土器



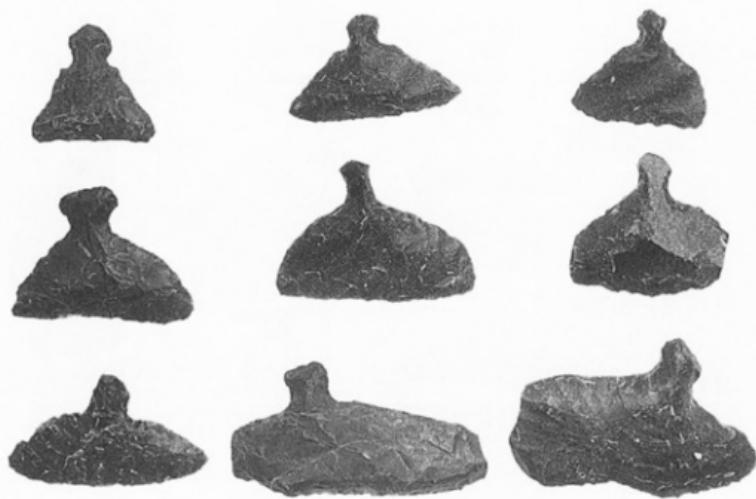
第5号住居址 出土土器



第5号住居址 出土土器



第5号住居址 出土土器



第36图

第5号住居址 出土土器

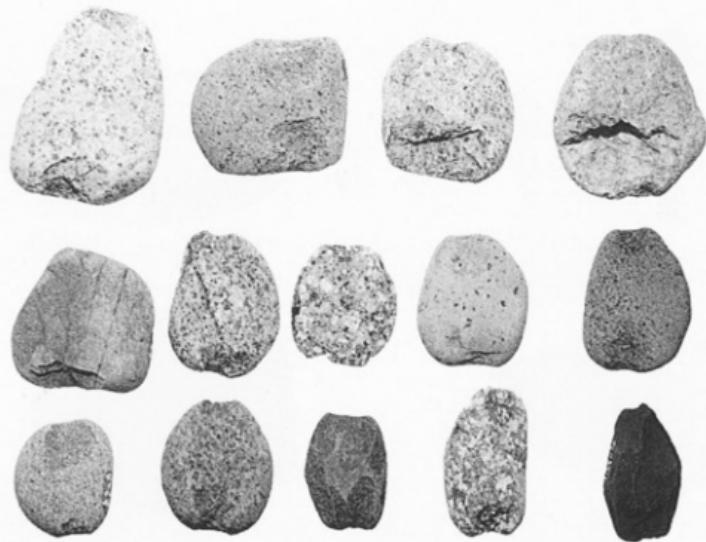


第5号住居址 出土石器類



第37図

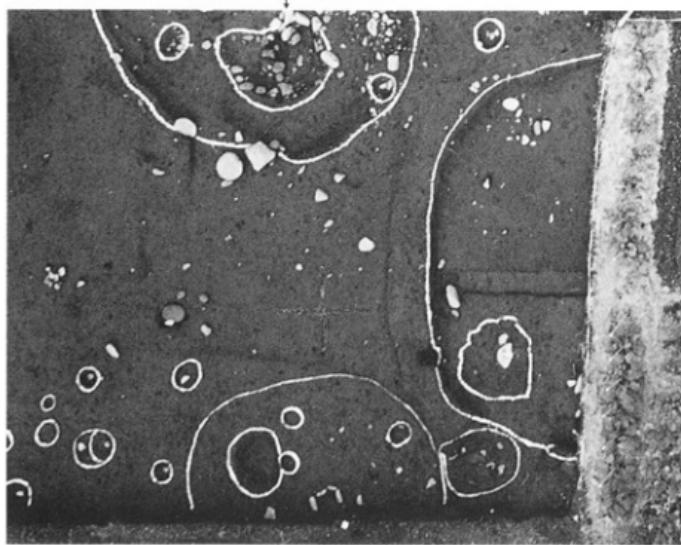
第5号住居址 出土石器類



第5号住居址

→第6号住居址

↓第7号住居址



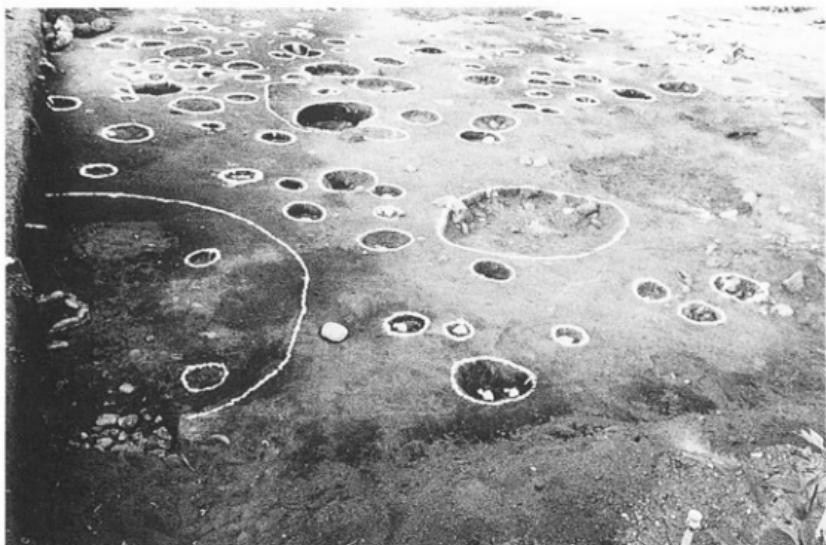
第38圖

第5号住居址 出土石器類

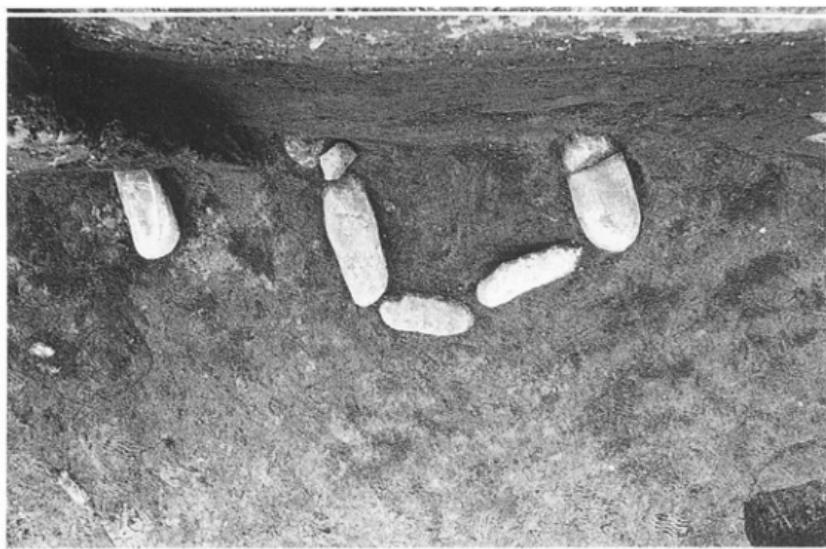


第39図

第6号住居址 出土土器



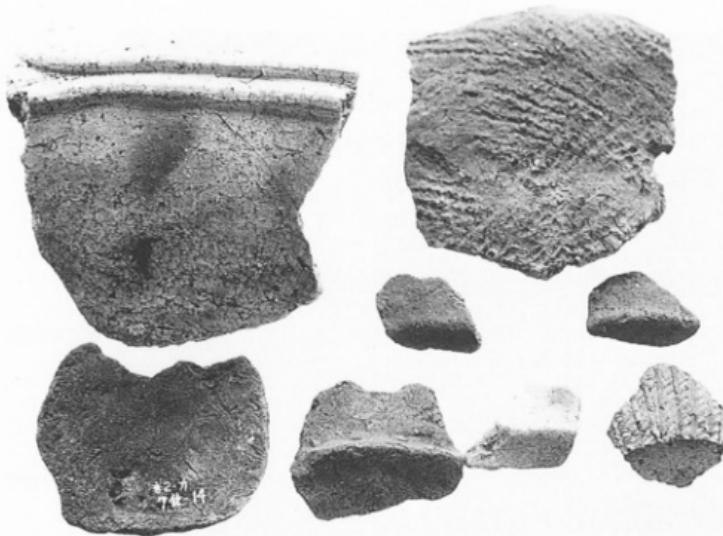
第7号住居址



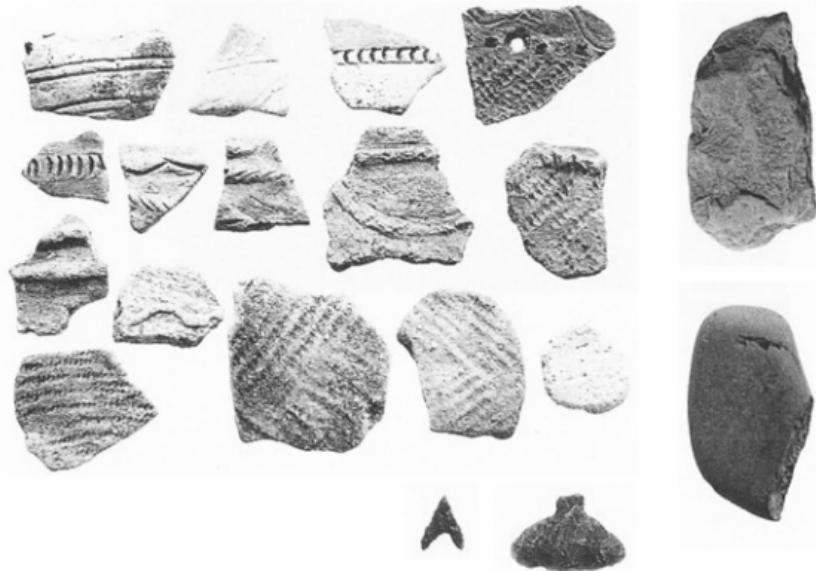
炉址

第40图

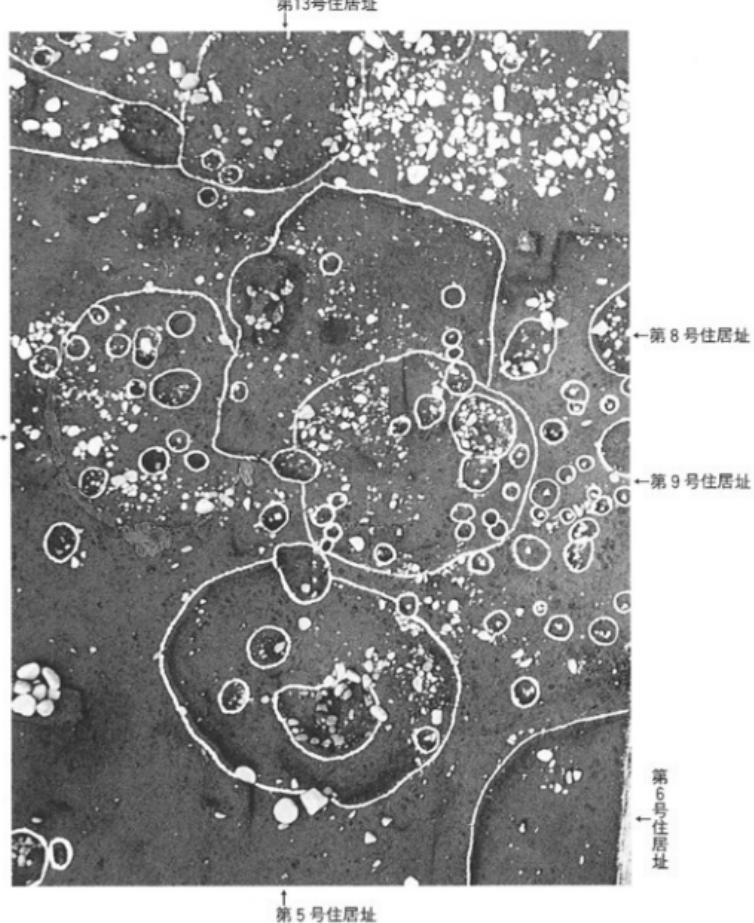
第7号住居址

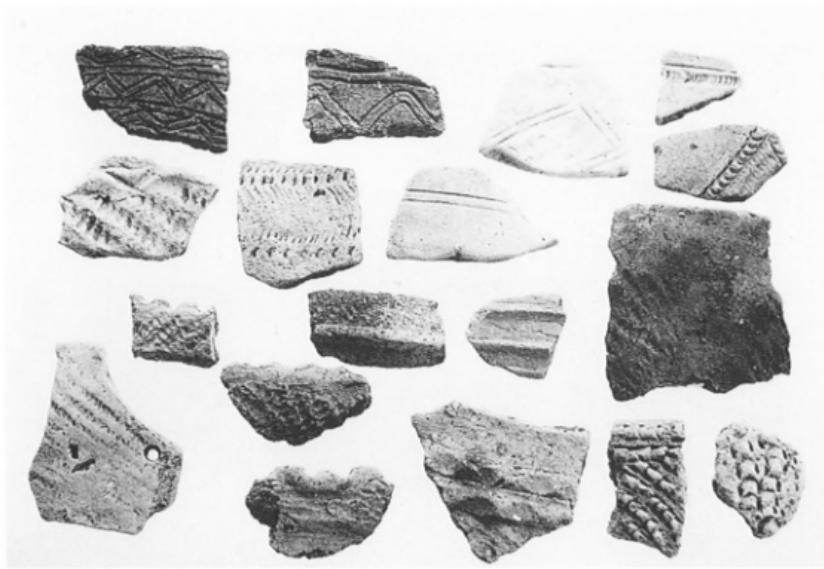


第7号住居址 出土土器



第7号住居址 出土土器





第9号住居址 出土土器

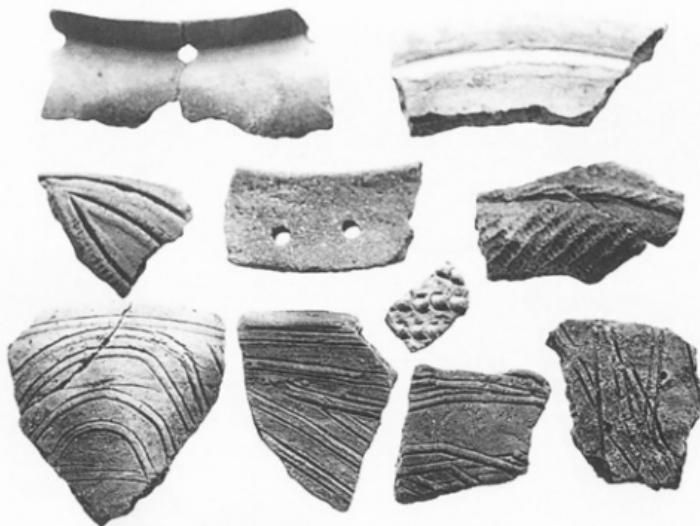


第43図

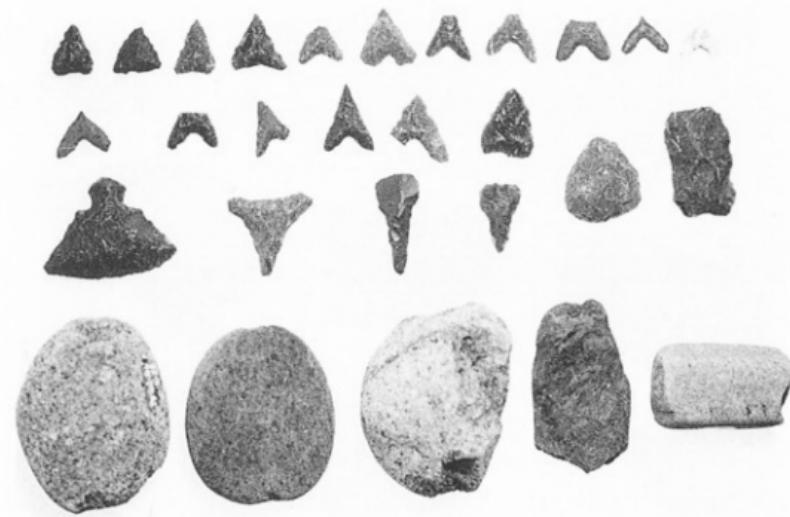
第9号住居址 出土土器



第9号住居址 出土土器



第9号住居址 出土土器



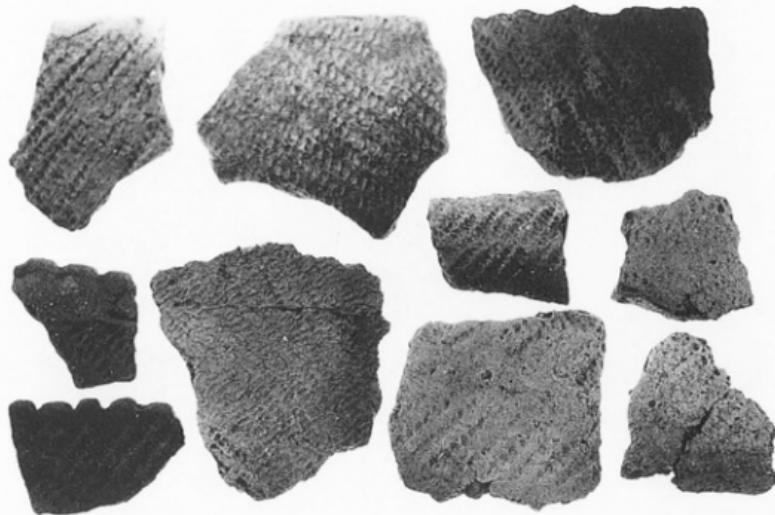
第9号住出土石器



第10号住居 出土土器

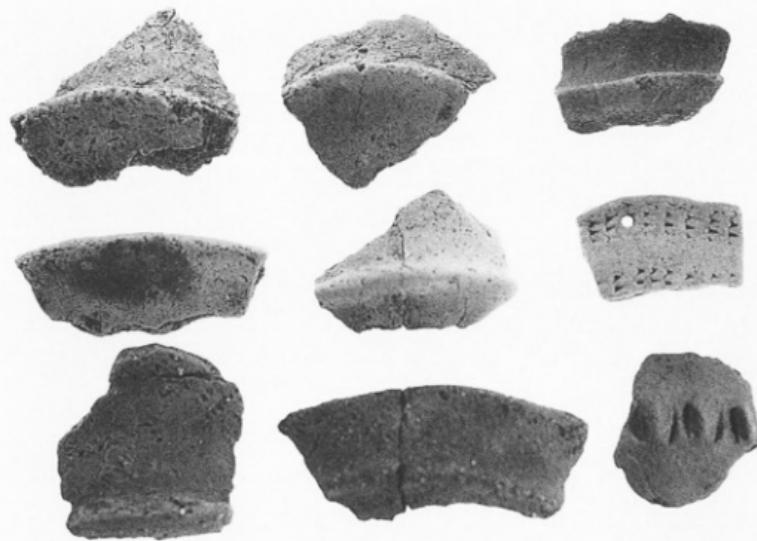


第10号住居址出土土器

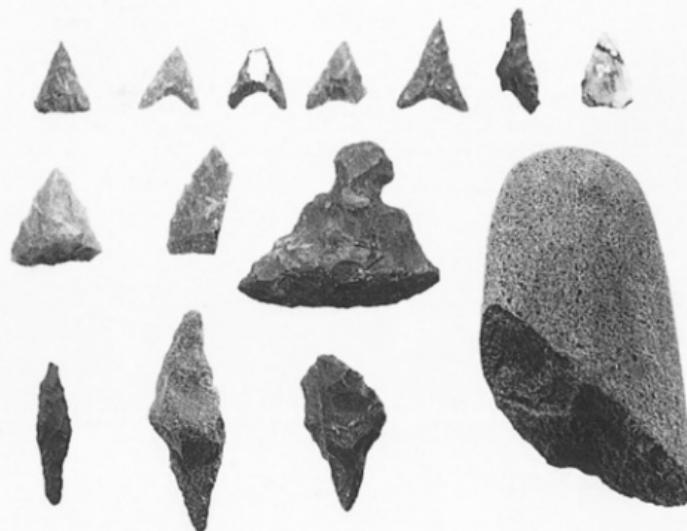


第46圖

第10号住居址 出土土器

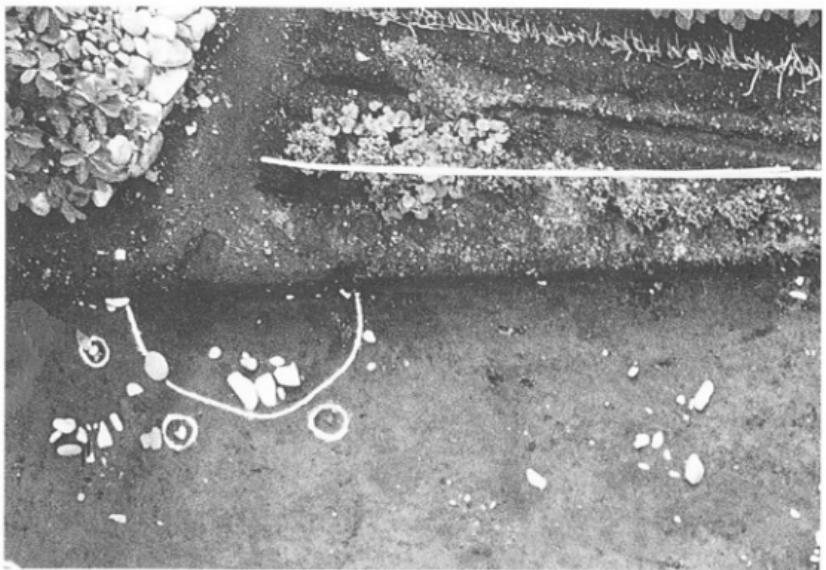


第10号住居址出土土器

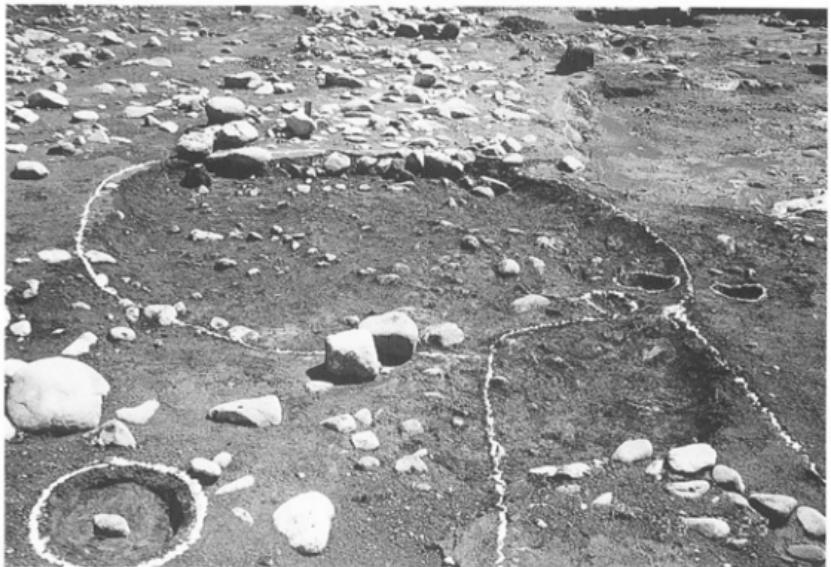


第47图

第10号住居址 出土石器

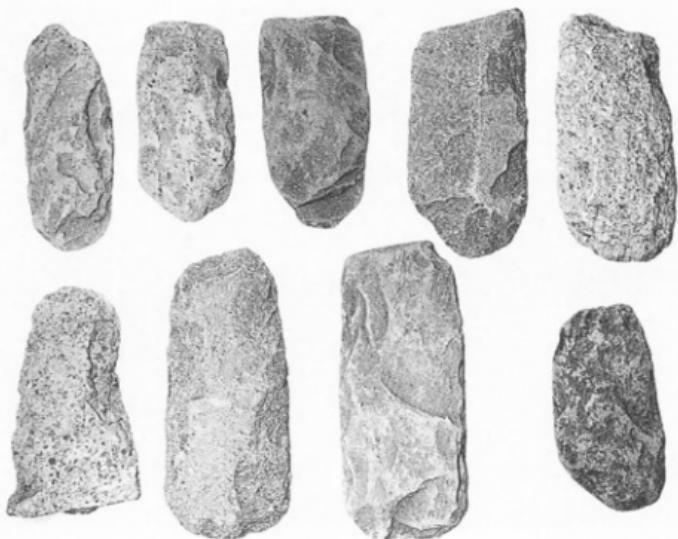


第12住居址



第48図

13号住居址（北より）



第13号住居址 出土石器



第49图

第13号住居址 出土石器

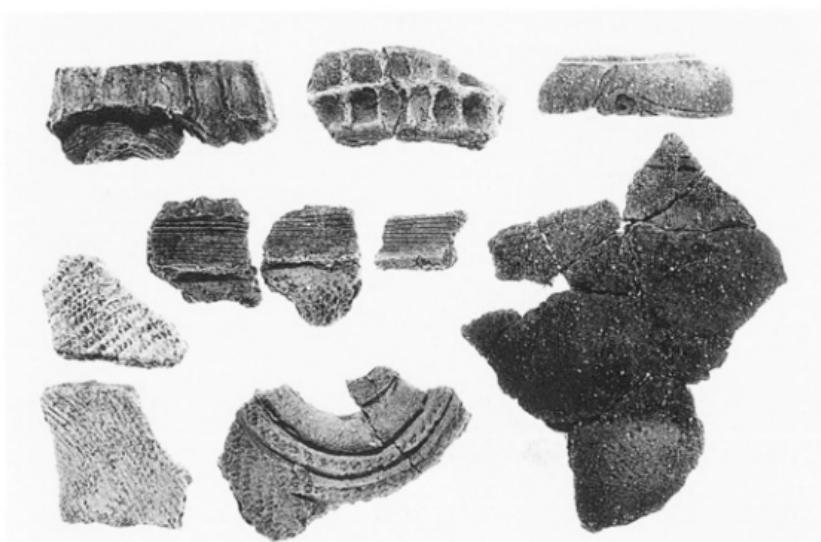
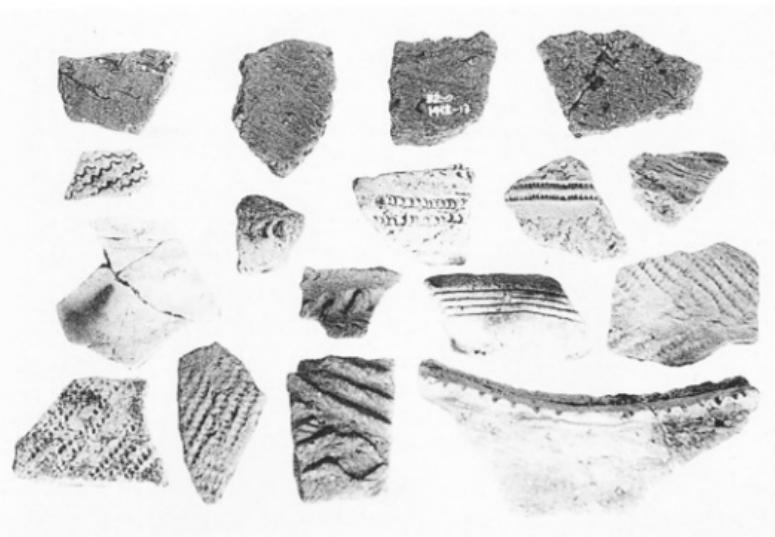


第14号住居址



第14号住居址

第50図



第51図

第14号住居址 出土土器

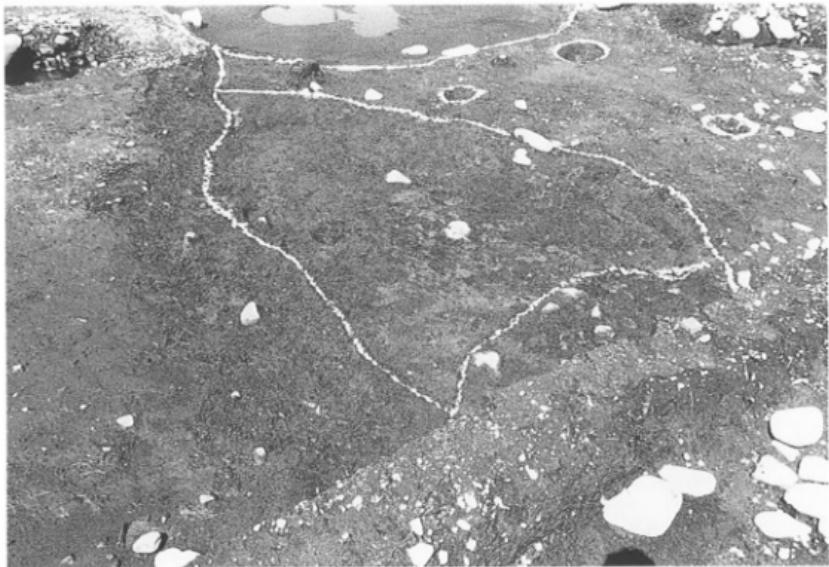


第14号住居址 出土石器

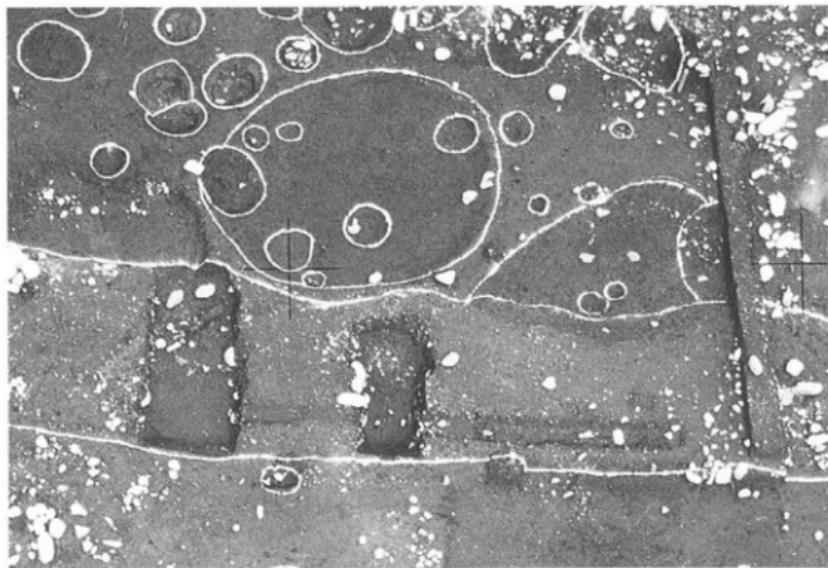


第52图

第15号住居址

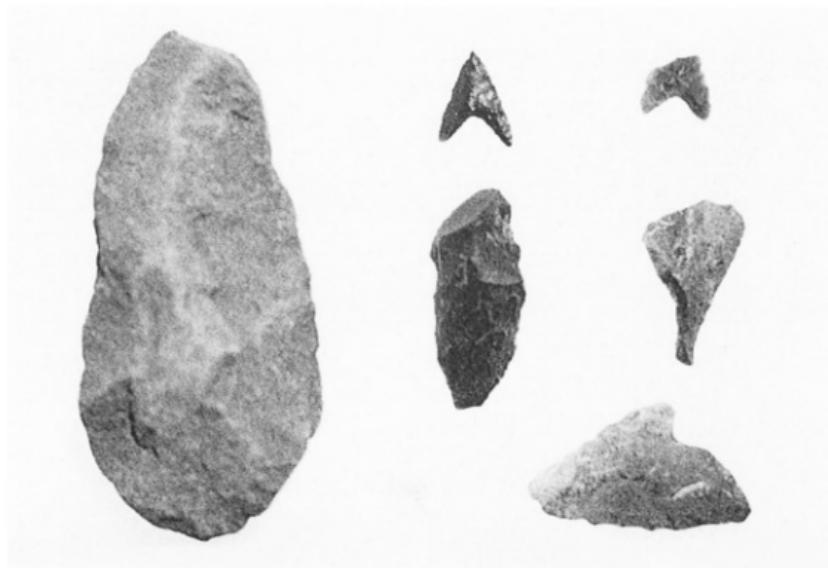


第16号住居址



第16号住居址・第15号住居大溝開発

第53図



第16号出土石器

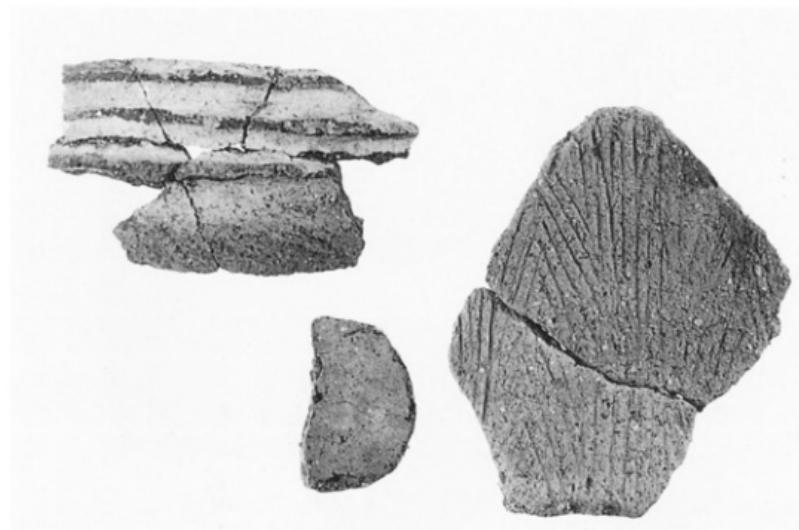


第54図

第18号住居址



第18号住居址



第55図

第18号住居址 出土土器



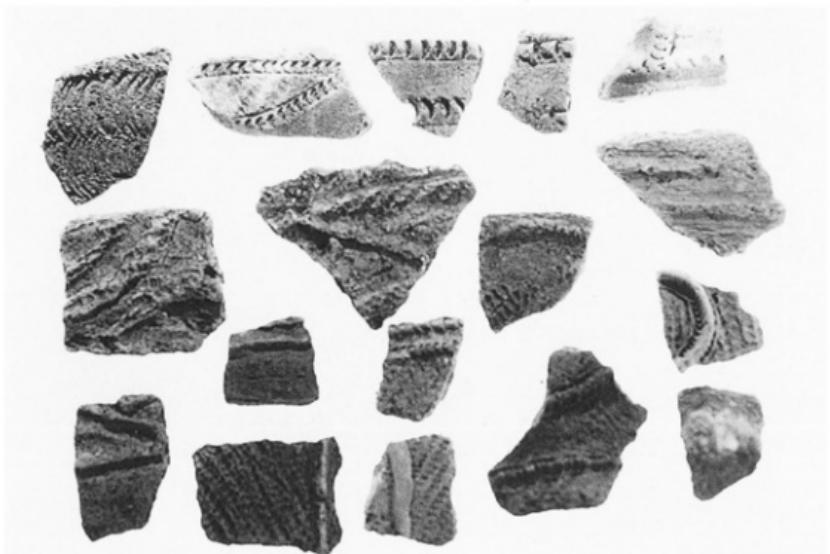
第18号住居址 出土石器



第18号住居址 出土石器

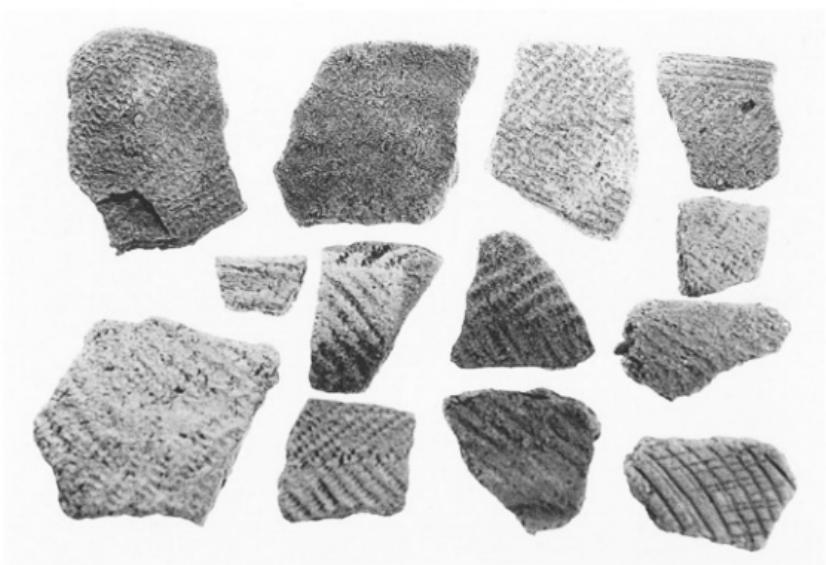


第19号住居址



第57図

第19号住居址 出土土器



第19号住居址 出土土器



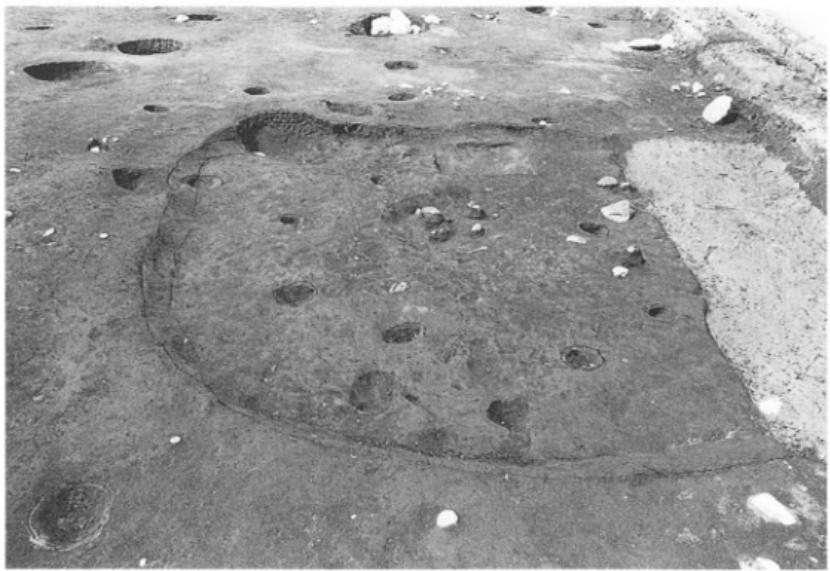
第56图

第20号住居址



第59圖

第20號住居址 出土石器

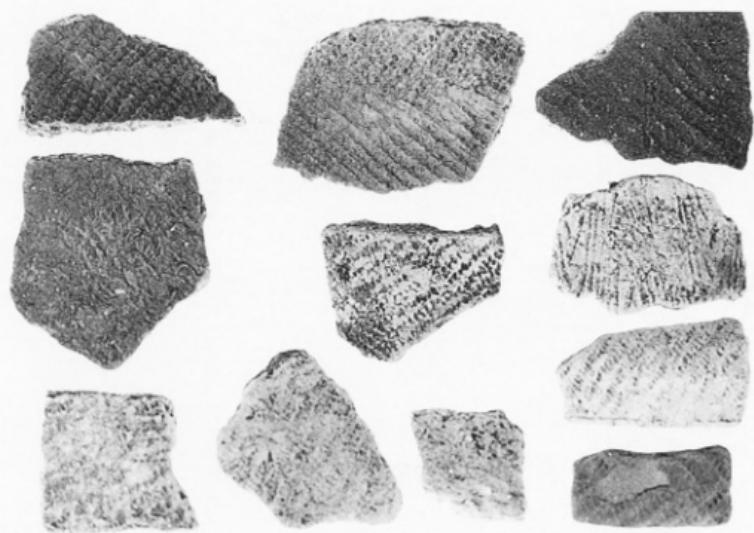


第21号住居址



第60図

第21号住居址 出土土器



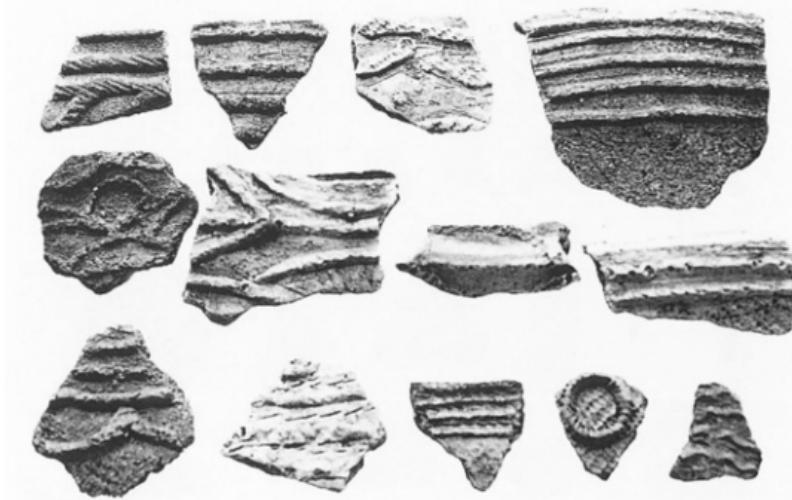
第21号住居址 出土土器



第21号住居址 出土石器

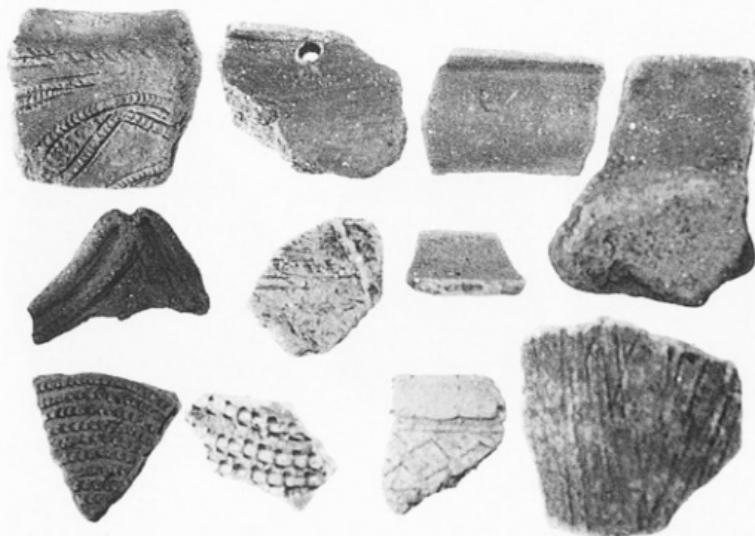


第22号住居址



第62図

第22号住居址 出土土器



第22号住居址 出土土器



第63図

第22号住居址 出土土器（メンコ）



第22号住居址 出土石器



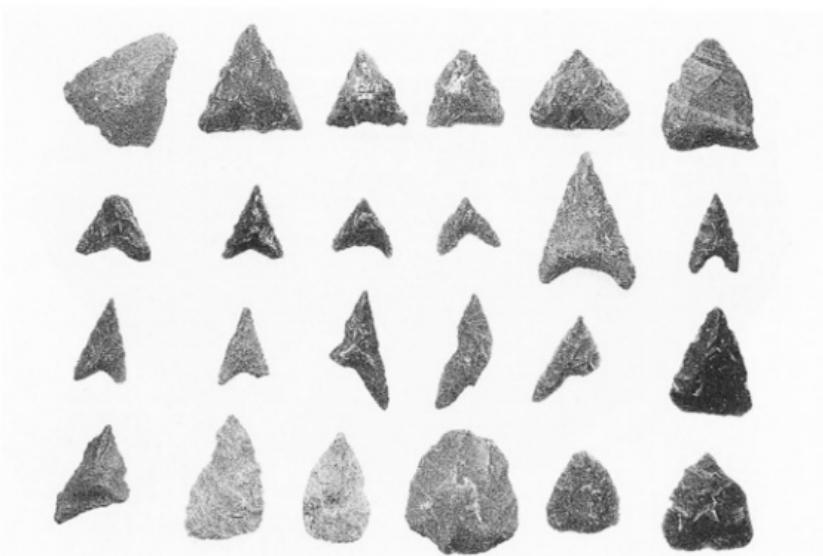
第64図

第23号住居址（北より）

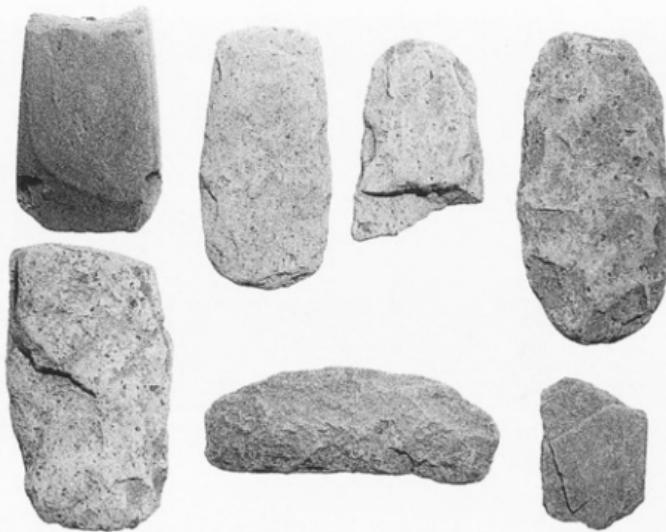


第65圖

第23號住居址內埋甕



第22号住居址 出土石器



第66图

第23号住居址 出土石器



第23号住居址 出土石器



第67図

第23号住居址 出土石器

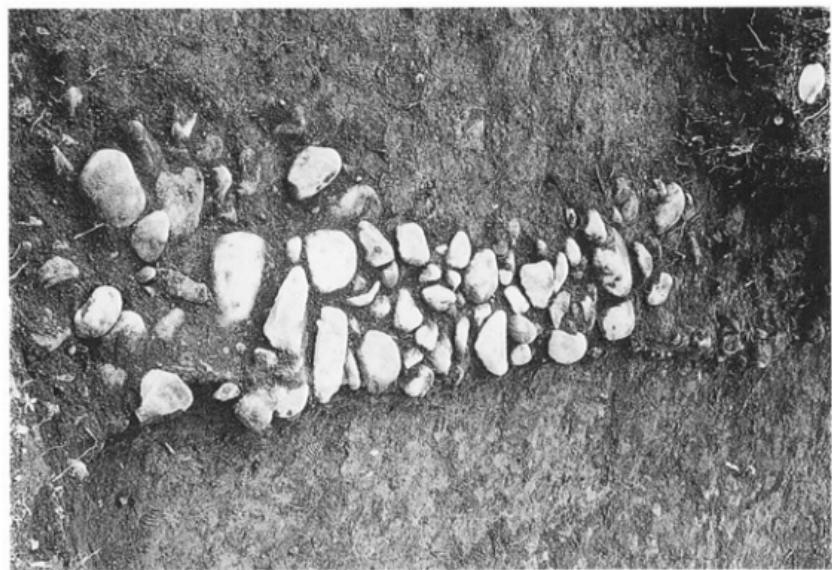


第68図

第27住埋甕出土状態

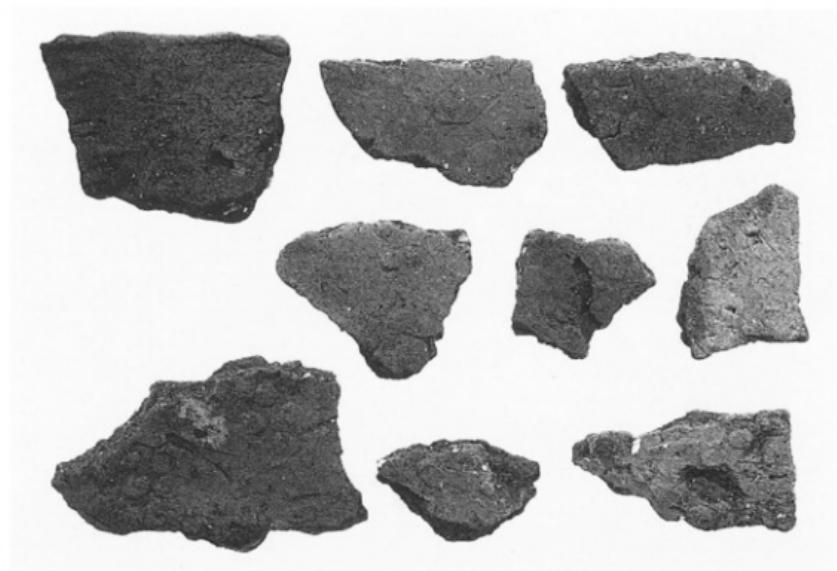


第3地点



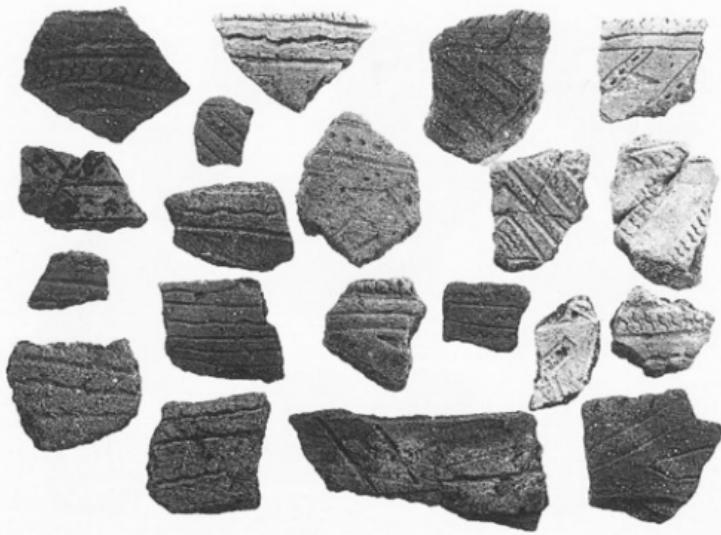
第69図

第3地点 畑地の石積の裏積痕



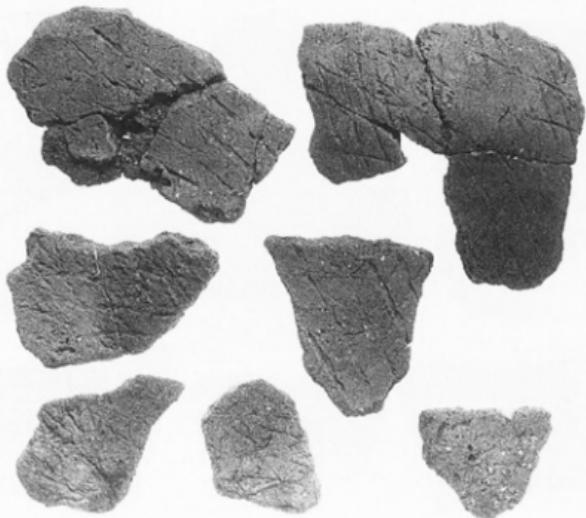
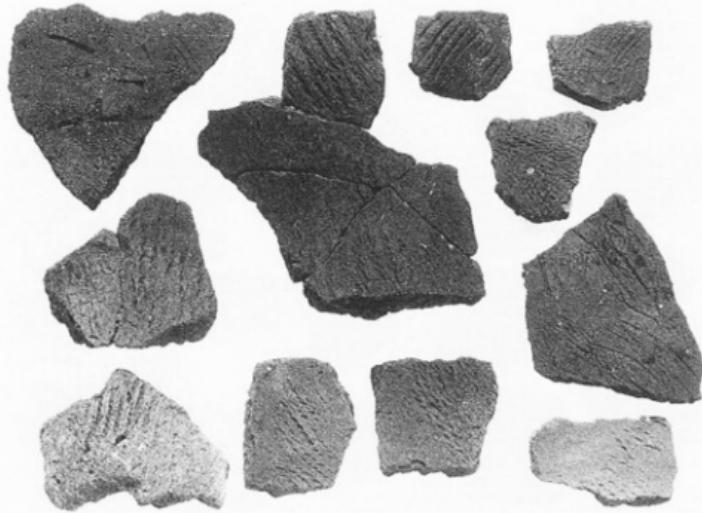
第70図

第3地点 出土遺物



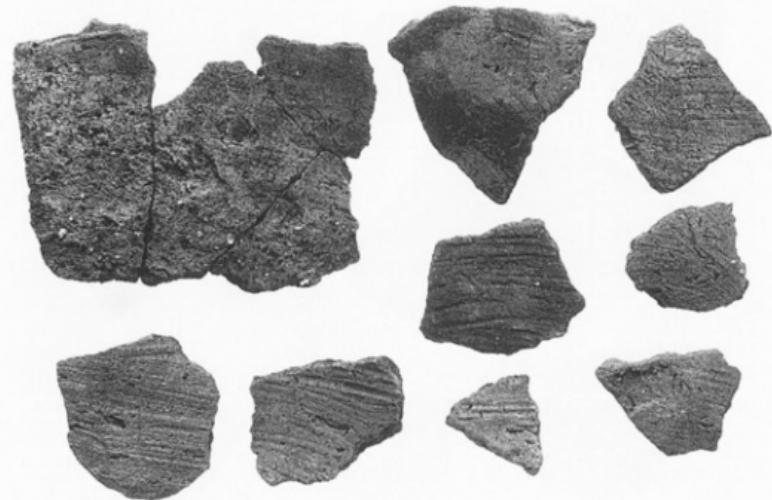
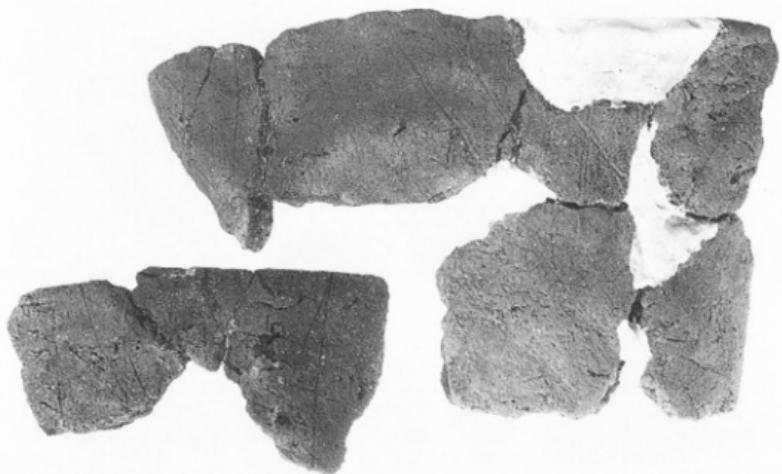
第71図

第3地点 出土遺物



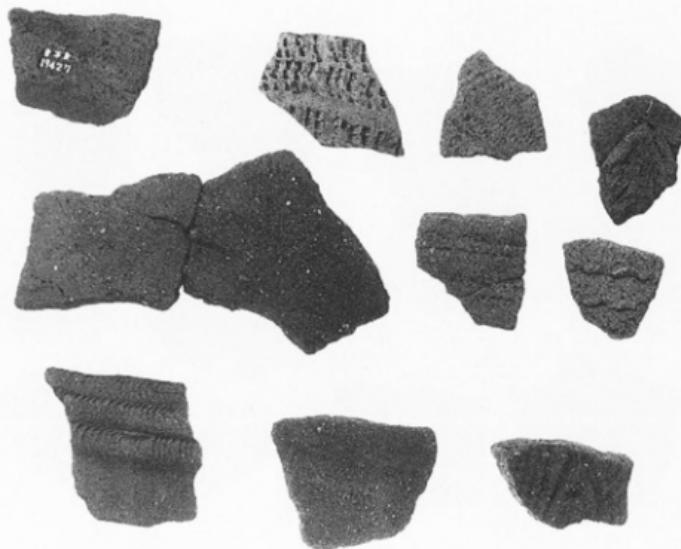
第72図

第3地点 出土遺物



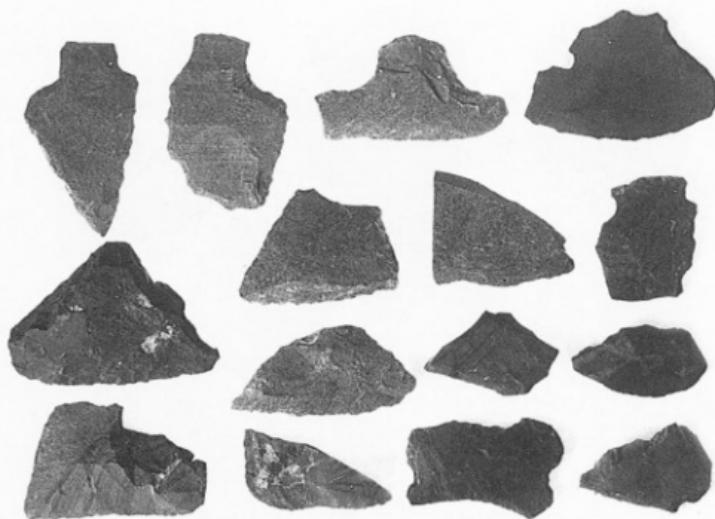
第73圖

第3地點 出土遺物

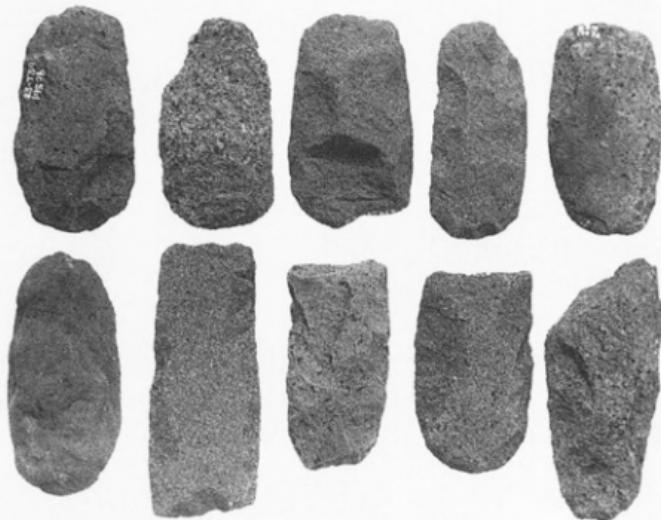


第74図

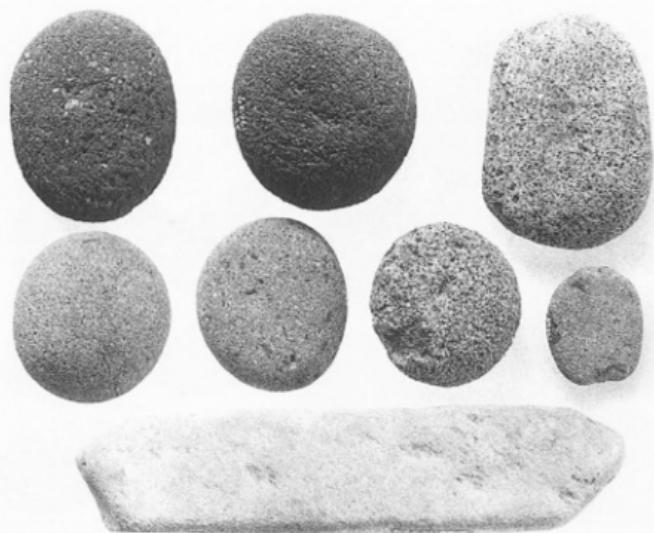
第3地点 出土遺物



第3地点 出土石器



第3地点 出土遗物



第3地点 出土遺物



第76図

第3地区 近代井戸



中間地点ピット群



第77図

中間地区炉址

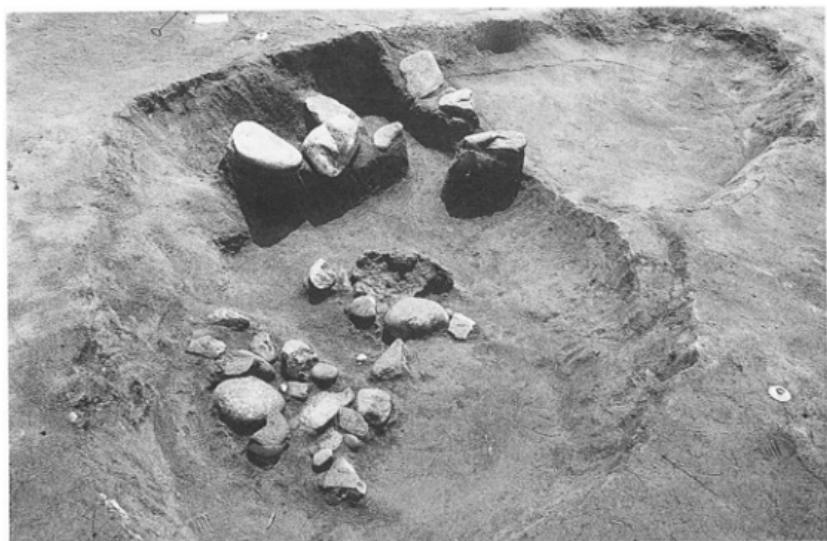


中間地点



第78図

中間地点最下層出土



5号竖穴遺構

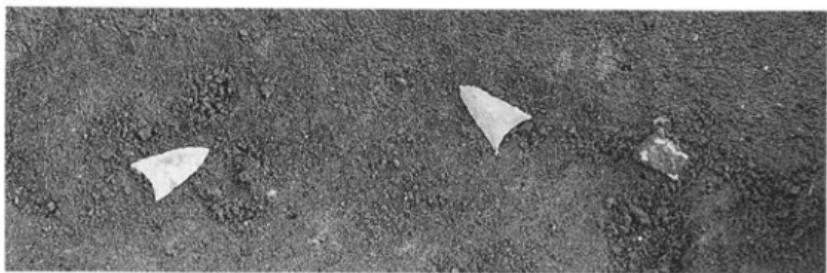


第79圖

7号竖穴遺構



9号竖穴遺構



10号竖穴遺構



10号竖穴遺構出石鏃



第2地区立石



第81図

第2地区 栗出土状態（土坑）

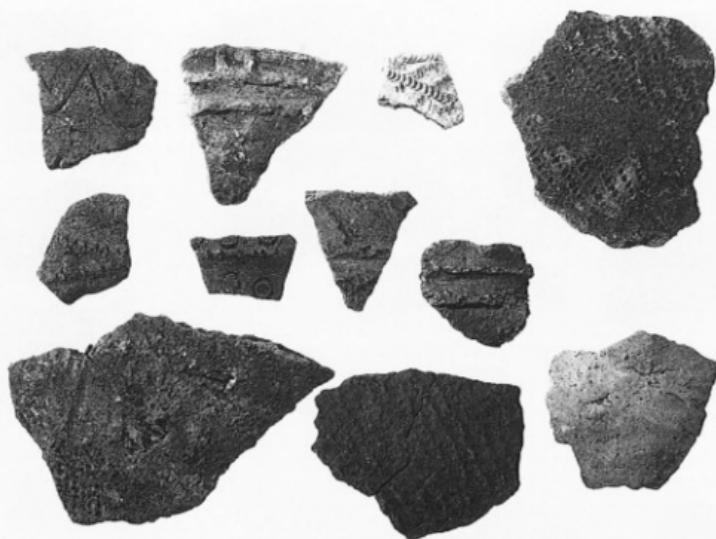


第2地点出土土器

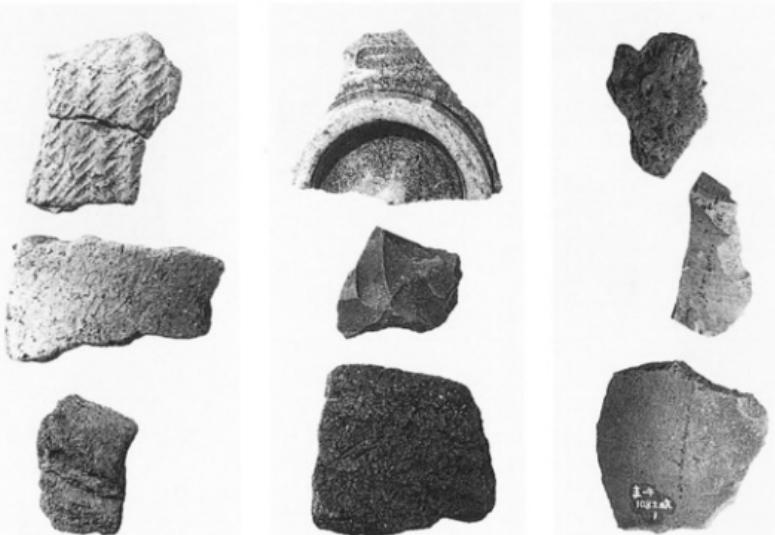


第82図

第2地点出土飾、その他



P-101



第83図

P-104

P-107

P-108



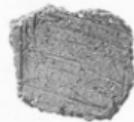
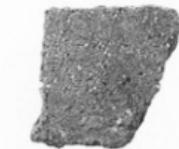
P-163



P-164



P-165

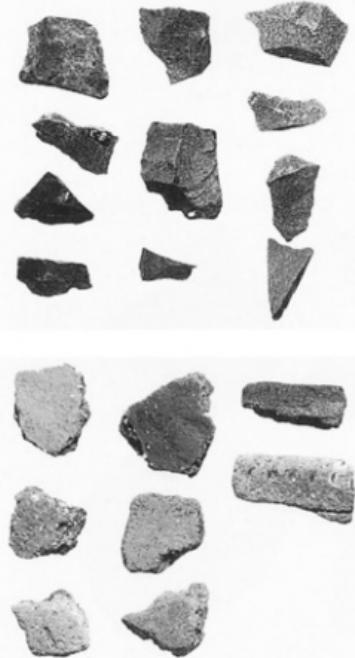


P-167

第84図



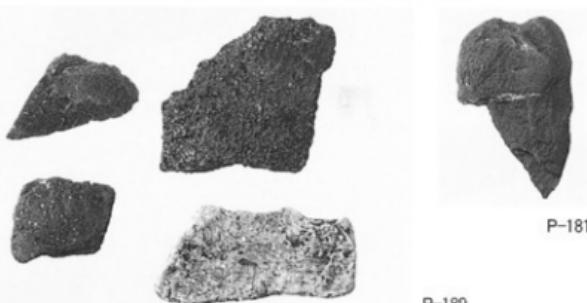
P-173



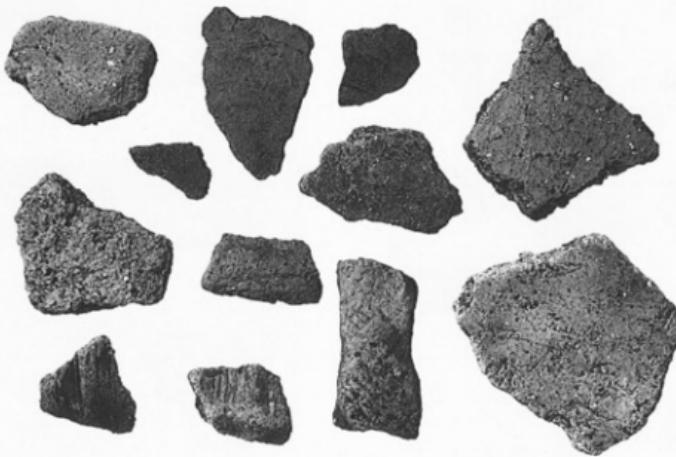
P-175

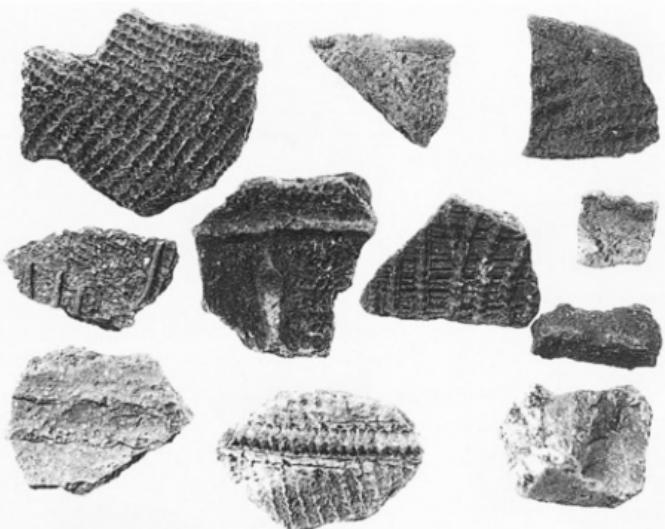


P-170

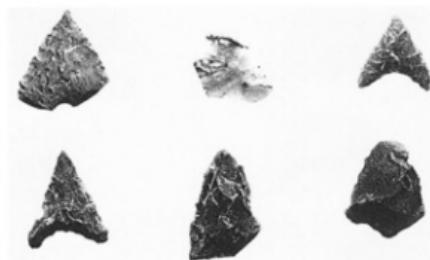


P-189

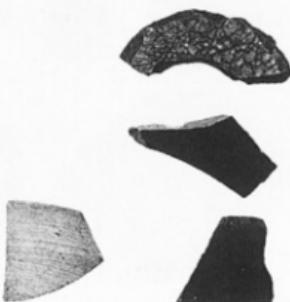
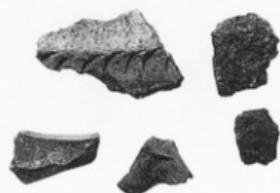




P-190



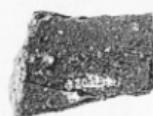
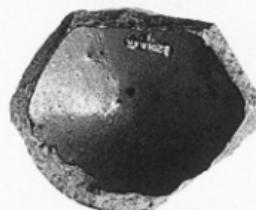
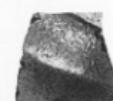
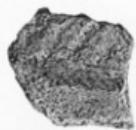
P-197



第87図

P-197

P-199



P-203

P-201



P-207



P-207

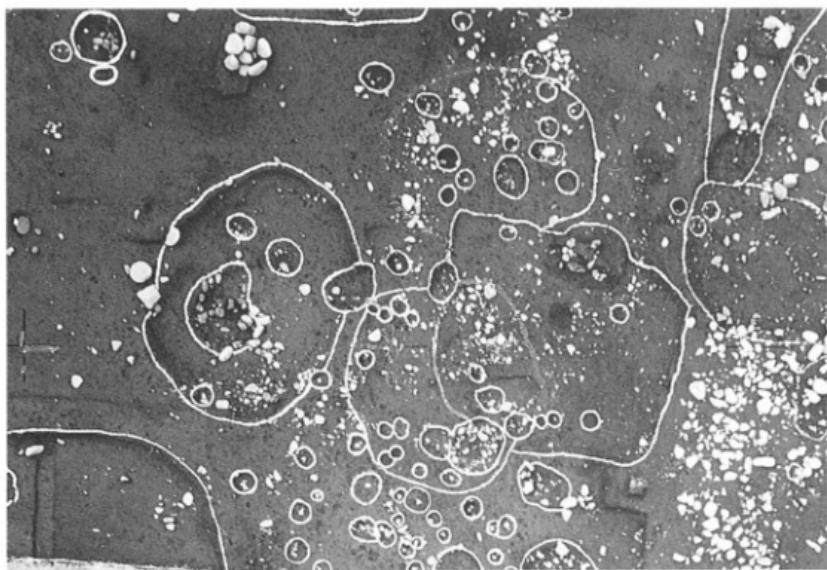
P-209



P-216

第88図

P-208



第8号住居址



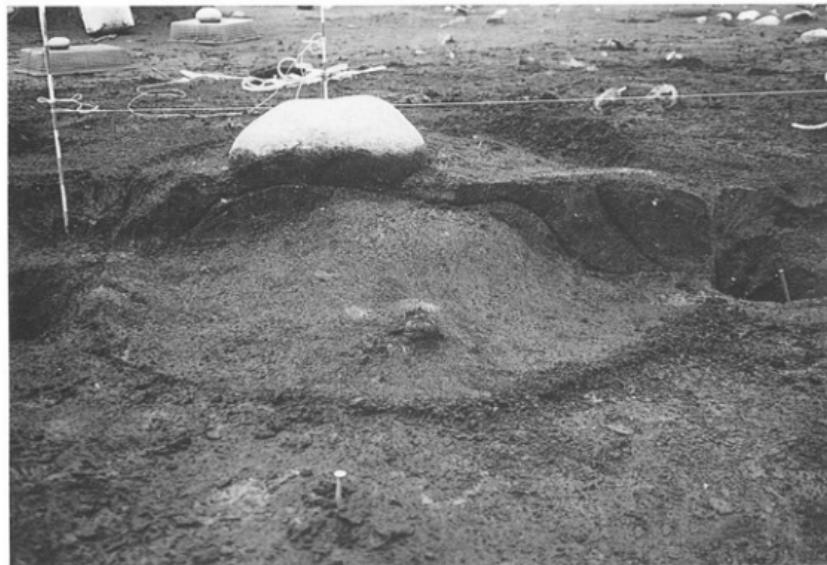
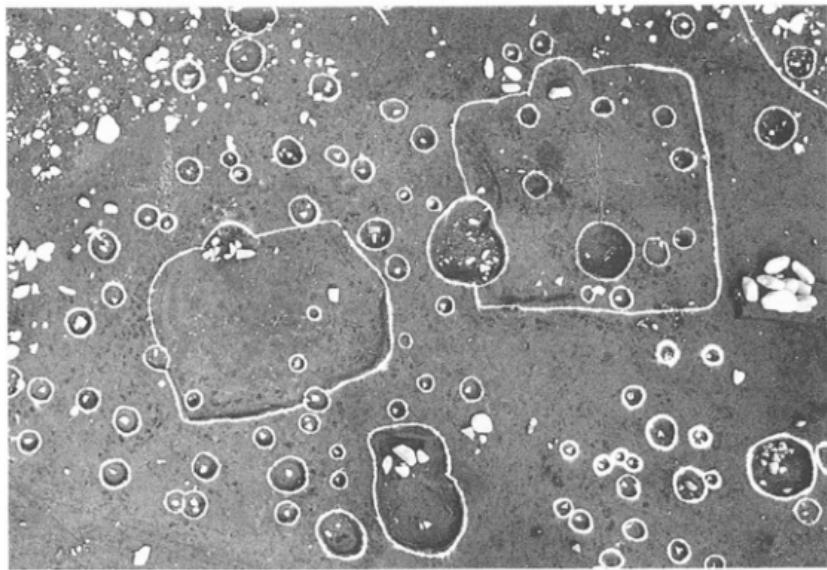
第8号住居址

第89図



第90圖

第 8 号住居址 刀子出土



第91図

第11号住居址 室



第11号住處

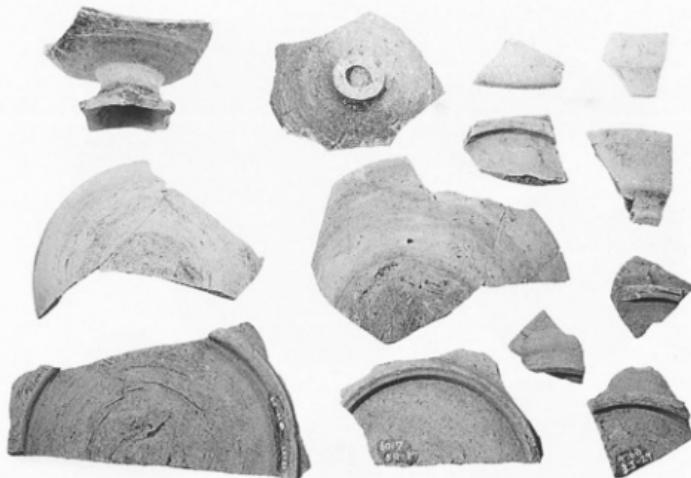


第92図

第25号住處



第93圖



第2地点出土須恵器



第94図

第2地点 出土矢先



石列遺構



第95図

第2地点 大溝



石組墓



石組墓

第96圖

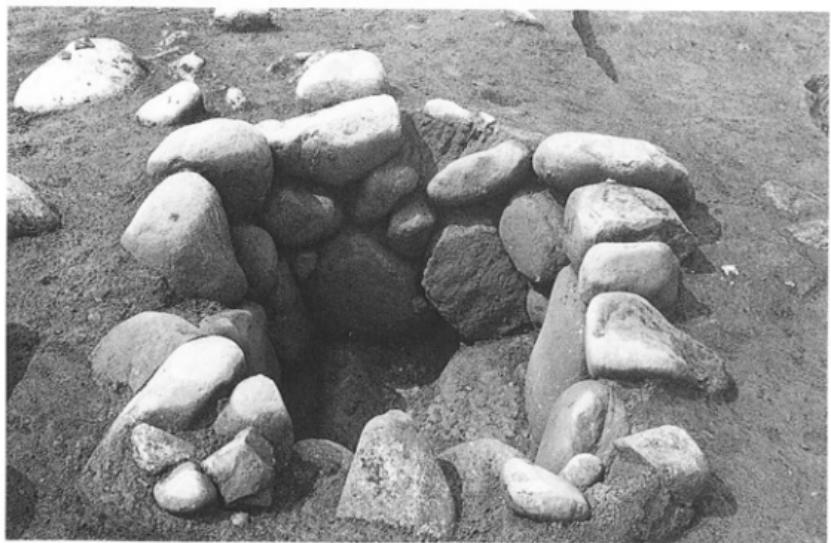
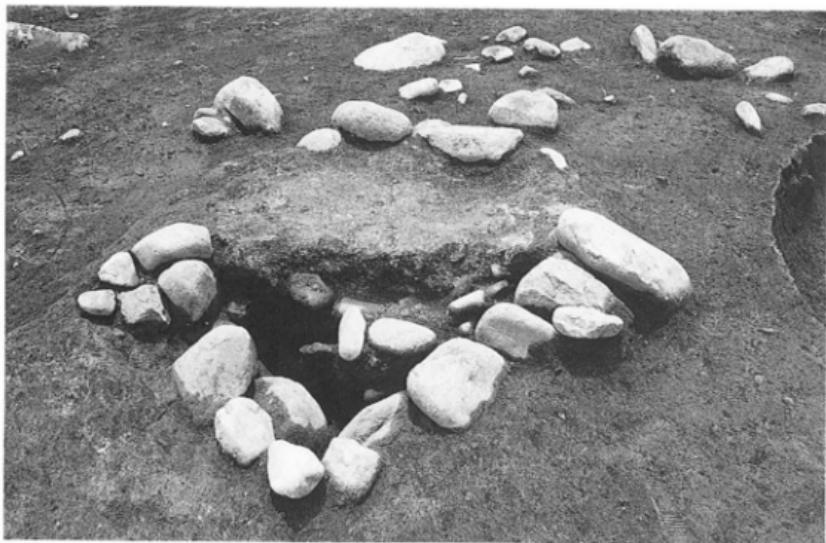


近世墓



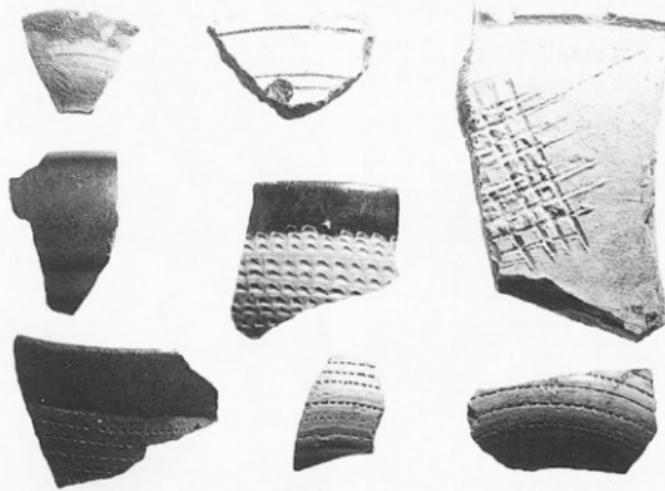
第97圖

第2地点 近世墓



第98図

第2地点 近世墓



第99图

第2地点出土陶器 中近世遗物



第17住上部に見られ集石



第100図



第2地点 集石土坑



第2地点の近世遺構



第101図

同上

的 場 遺 跡

平成5年3月 発行

発 行 岐 阜 県 益 田 郡
萩 原 町 教 育 委 員 会

印 刷 西 澄 印 刷 株 式 会 社
(岐 阜 市 七 軒 町 15 番 地)

